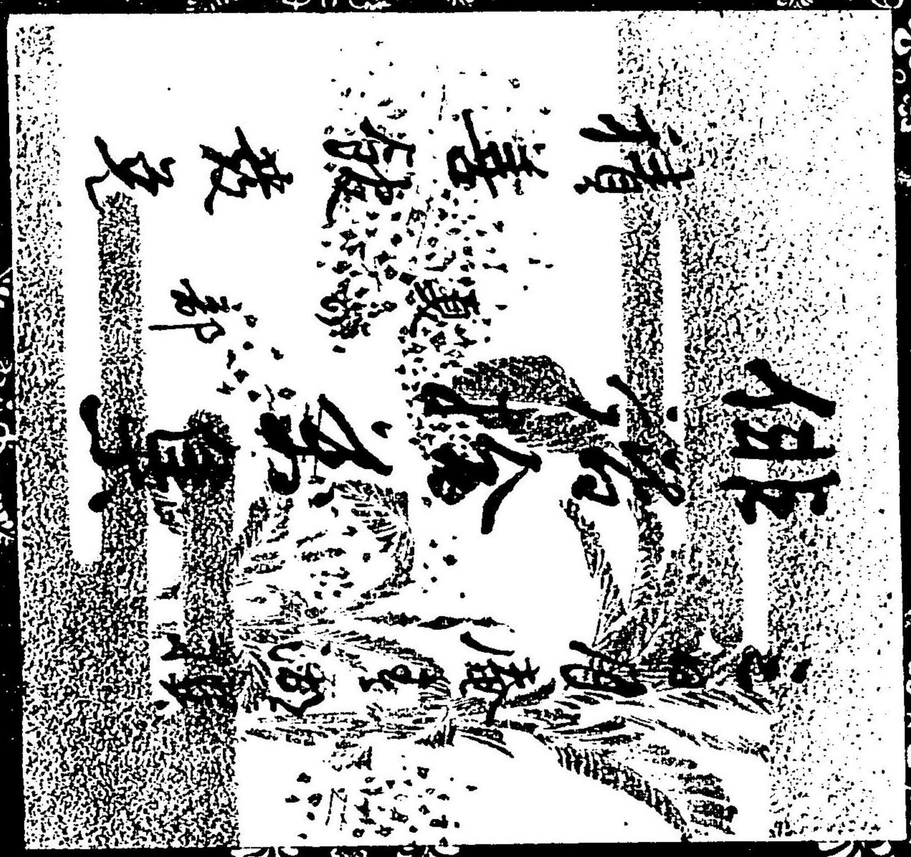

特22
487

非詩拾集

三百篇原始

一夏之部一

積善館發兌

にくひ蚊も叩かれぬ子の寐顏哉
涼しさや木の間の奥の瀧のはた
涼風にうしろ見せけり洗ひ髪
寶珠も涼しそうなり夏氷
同し葉て同し名でなき新茶哉
蜑狩かこつけて出る娘かな
こいしさの增しき夜なり蜑狩
只貸して圍扇に禮の厚さかな
あつさりと洗ひす、きで一ト畑子
さかる程其名の高し藤の花
蚊の聲に動かされけり角力取
朝おきの果報なりけりほと、きす
前だれの紐の儘かや更衣
孫は子の杖となりけり初幟
手に取て見れは冷き螢かな
雲透に都見る日や富士詣
竹の子や親にすはなき垣の外
蠅も來てもみ手をするや納涼臺
蜑飛ぶ方に傾く夜の渡し哉
淀川や舟にゆられて夢涼し
葉櫻や此青空も蜑り癖
蝶の立つ羽風に散るか花子の風
暗き夜を明るく照らす蜑かな
六月も氣の衰いや四步行
鐘聞て消き寐覺や竹縁人
伊達に著た重着てなし筑紫錦
夢の下通ふ風あり籠まくら
叩き起されても寢し夏の雨
渚のすゞ山も都か時鳥
短夜の軒にふるや釣燈
五月雨や鼠狩りする舟の中
一りんて事足る庵の牡丹かな
醫者にさへあけぬ枕や時鳥
小流れも一ヒは床しかきつはた
日盛りもかわらぬ富士の高さ哉
昼寐にも心置きせぬ蟬の聲
尻火にて暗を錯ひ行く蛍哉
一世界出來た心地や五月晴
卵の花や雨夜なからの蜑明り
崩されし夢に念なし時鳥
低ふても眉く聽や竿の花
朝寐して人の蚤にも曙けり
親の許子を美くしう育てけり
虫干や去年よります竿の數
なき風に向て吹る、競馬哉
水に月殘してかへる田植哉
日は落ちて入相の鐘涼し哉
水なやみしてぬらしけり辻か花
麥刈の氣耀りや明日は雨模樣
病薬や薬降る日の有りなから
咲はしめ散り初め鬼灯菜の花
雨や何處たい武蔵野に留の音
つく〳〵鉦一里を八重のはれ渡かな
耳て見るやうに覗くや時鳥
拂ふ眼をやしなうて亦はたにかな
日にぬれてよその雨見る暑かな
五月雨や鼠狩りする舟の中
戻りには飛れぬ川よ蜑狩
馬士歌の心憎さよ郭公
逗越の願し浮雲し芥子の花
淺香沼涙の袂をる杜若
炎天に眼玉ひき出す鬼瓦
立ては燕立ねは同し牡丹哉
若竹や筆に月の新しき
知りかたき花の心や桐一ト木
夢かともおもふ惠みや初茄子
磯の香をはこぶ夜風や不知火
牽牛花や眠りさましの器也
濁る乳に一手おくる、田植かな
筍や傘さして見る雨の朝
火を借るも涼しき家へ這入けり
風追ふてそゝろ步行や夏の月
葉櫻や千々に思はす朝日かな
岩しはるはとのしつ〳〵そ苔清水
清水くみ風も荷ふて戻りけり
時鳥月にかくれて仕舞けり
鳴かぬ日は心にさむし行々子

夏痩の脊中合する柱哉
たのもしき淀の夜舟や郭公
能い夢を振はて曇ひ蛎哉
卯の花や四日さし込む尼が庵
余念なく夜は明にけり竹婦人
業平も跡を參河の杜若
蝉の音に逐はれて急く脊賈り
一群に幾夜更しつ郭公
鶯の群埋もれし夏野哉
一輪に曙た、ひ牡丹かな
明安き夜は世の中の夢路哉
歯を染ぬ群に錆なし田植唄
夏の氣も忘る、ばかり水浴り
納日傘や雨の戸口もさして出る
抱た子の意地るや高ふ飛ふ螢
涼しさや我荷にぬる、植木賣
竹も皮脫き初めたる暑かな
葉櫻に暑さ任して晝寢かな
うつくしう朝日をぬらす青田哉
日和まて暮て着かへる裕かな
風も湧く所かと思ふ清水哉
みたれ髪ふかれて涼しかられけり
朝の間や葉もりんと立杜若
二ッ來てとちらもとれぬ蜜蜡
葉の力花にかしたし杜若
その奥に流れの音や木下闇

這入らんと角ふる牛や御祓川
蛍追ふ子を氣遣ふや親心
夕立や肌觸れ合ひし想ひ人
行き過た友呼ひ戻す清水哉
卯の花や四日さし込む尼が庵
噂して聞く一群や杜鵑
貧人の方からおしむ牡丹かな
明殘る月にほありはとゝきす
乳の喫の除かぬ涙や土用干
一群に幾夜更しつ郭公
笛の音も川を流れて夏の月
夏痩の肌に目出度し乳の黒み
宿曳の世辞に持たせる日傘かな
世の業のつるは得かたし藥掘り
一群は何思ひけり夜のせみ
氷室守田面にも遅れ御所の秋
蛍飛て咄の腰を折られけり
涼しさや筧ふる●水の音
年號のあるは紀念そ涼圓扇
底迄も心の届く清水のな
若竹や月新らしき窓の影
露も暗いた山家そ時鳥
移し來る戸籍はのさのつばくらめ
けひり立方からくる、門田哉
四月烏冠り着けて几
燃付ひて咽しの消ゆる蚊遣哉
昔はとは藥にも溜らす蓮の雨
日の惠み神のなさけや湧く清水
歸なすものとは見へぬ夏木立
樹の俣にやさしき草や五月雨
煙らしてかまい人もなき蚊遣哉
千歳經る松の上なり時鳥
泣ひて殺ひみ共しらす火取むし
乳母は子に螢か鴨と語りけり
遠く見る山も卯月のけしき哉
涼や扇にさなきたに
低ふ來て人にそれるや蚊喰鳥
泣ひて殺ひみ共しらす火取むし
貧ある程低ふうつむく穂麥哉
入梅晴やむけかへたかとかもう宅
行遠ふ人にも語る清水かな
白蓮の香に盛かなき夜明哉

夏の夜や牢睡おさなふ蚊帳の中
灯にまさる蚤や窓の夕
夕立やけろり飛たす枝蛙
蚤顔や日陰またせてかへす客
一蚊越せは茶やおり蝉の花
鶏の支度せよとは撞かせ夕の鐘
乳崩す連もなし譽の峯
又六か杉葉黄はみて蚤の峯
雪折れの松迄押せよ納涼船
湯上りに團扇もいらす夏の月
除る中に蠅は蚤らす郭公
一ト様か幾俵の田植哉
蚤も聞もせぬくたひれや時鳥
此儘に寐たし月夜の涼み蚤
涼しさや座敷を走る鮑屑
トンチルをはつれてかざし日盛哉
黄昏は我かものらしや蚊喰鳥
涼しさや酒に染み入瀧の音
線香くく手元を風の煎うけり
雷のあしもと暗き夕立哉
桃杷の戸やはとこし水は垣の外
仲す手の濡乳に遠き團扇哉
若竹や涼しき影を水の上
蝉はけし願ふた雨の跡戻り
門に客待してはくや麥のごみ
明安き夜のありさまや須广明石

笛の音の奥床しさや肯すたれ
暁う迚かたき風の吹くか命か竹の露
門風呂や植仕舞たる田の畔
荷車の休み處や夏木立
六月や人の氣配の直る雨
野鼠や蚤も働らく本下闇
青田吹く風の屋くや枕もと
松風の外は音なし閨古鳥
飛蛍廻られぬ舌に呼かれ鳧
身の割に過きた蚤なる蚊のうなり
さみたれや翌日はとおもふ暮の空
氷賣なから汗ふく男哉
一りんの朝臭やまた星明り
灰吹も叩かて待つやはとゝきす
雨はつか力も若し今年竹
玉汗も間ひの内か初鰹
蚊の跡をいたわりなから添乳かな
月瀬に船の出るとも見へぬ團扇哉
雨の日も野は賑はしき田植かな
橋までの船までのとて涼みかな
汗出して僅かにげんこやみにせん
よい風の出ては元の水なす蓮のつゆ
月に飛ふ蝙蝠見るや蚊屋の内
こはれては一ッつゝ花に日のたつ葵かな
水〳〵と照す新樹の月夜かな
暑さ日や我身ひとつの置どころ
姫百合のおもひに暮る、風情哉
竹に風吹てす、しき庵哉
田を植へて世の翁なりとの家も
秋近さ夜の明やうや草の露
夏痩をうれしかりけり夕化粧
日盛や水にとらる、物の味
氷賣り褒めらるゝ石碑や苔の花
忠と義にくちぬ石碑や苔の花
塵一ッ置かぬ清水の山口かな
うつ雨を飛はす勇あり蓮葉哉
梶よりも深き匂ひや百合の花
貝勝の料理出けり夏座敷
むき蚤をたく昔暑し夏の暮
人込みの中や扇の貰ひ風
氣の塞うかとてから登るこゝちや富士詣
夜に入りてあつさを忘る涼みかな
かとてから登るこゝちや富士詣
欄かんに露おくまてや橋納涼
明安き夜のありさまや須广明石
青麥の果や日小家の持芝居
門に客待してはくや麥のごみ
門に客待してはくや麥のごみ
蝉はけし願ふた雨の跡戻り
蝉はけし願ふた雨の跡戻り
明安き夜のありさまや須广明石
明安き夜のありさまや須广明石
桃杷の戸やはとこし水は垣の外
桃杷の戸やはとこし水は垣の外
雷のあしもと暗き夕立哉
雷のあしもと暗き夕立哉
線香くく手元を風の煎うけり
線香くく手元を風の煎うけり
涼しさや酒に染み入瀧の音
涼しさや酒に染み入瀧の音
トンチルをはつれてかざし日盛哉
トンチルをはつれてかざし日盛哉
涼しさや座敷を走る鮑屑
涼しさや座敷を走る鮑屑
此儘に寐たし月夜の涼み蚤
此儘に寐たし月夜の涼み蚤
蚤も聞もせぬくたひれや時鳥
蚤も聞もせぬくたひれや時鳥
一ト様か幾俵の田植哉
一ト様か幾俵の田植哉
除る中に蠅は蚤らす郭公
除る中に蠅は蚤らす郭公
雪折れの松迄押せよ納涼船
雪折れの松迄押せよ納涼船
又六か杉葉黄はみて蚤の峯
又六か杉葉黄はみて蚤の峯
乳崩す連もなし譽の峯
乳崩す連もなし譽の峯
鶏の支度せよとは撞かせ夕の鐘
鶏の支度せよとは撞かせ夕の鐘
一蚊越せは茶やおり蝉の花
一蚊越せは茶やおり蝉の花
蚤顔や日陰またせてかへす客
蚤顔や日陰またせてかへす客
夕立やけろり飛たす枝蛙
夕立やけろり飛たす枝蛙
灯にまさる蚤や窓の夕
灯にまさる蚤や窓の夕
夏の夜や牢睡おさなふ蚊帳の中
夏の夜や牢睡おさなふ蚊帳の中

蜘蛛の曲がりてへるや夏座敷
水無月やこゝらてはしき一しめり
地か蜂の兒に狂ひ出す菜畑哉
餘の鳥は閉口してか行々子
蟲子や膳につく間も眼の及ぶ
湿れた儘草の影より鵜舟哉
晝寢して夢にも見たし富士の雪
涼しさわふいに出たる月の風
日くらしの鳴て傾く夕日哉
雨近き日なり岩間のねらいがり
雨露に石も育つか木下闇
寐た人を寐よと起すや涼み臺
水は眼にみなから暑し磯の道
雨をきて座敷へ通ふ乙鳥哉
入梅晴や重荷おろした空の色
夕立や祝融やすみの隣ふれ
あはつはか工夫のつかぬ暑さ哉
晝寐をと癖付き易きものはなし
虫干の袖から出たり花の塵
峯つくる雲や汐待つかゝり舟
袖道に足の止まりや岩つゝし
針止めて添乳の儘の晝寐かな
若葉みて寐足らぬきけんなほし鬼
寐る外に思案のつかぬ暑さかな
ふうりんの鳴る音せすに蝉の聲
簡の香や風に向ふて來る胡蝶
五月雨に知るや茶日の挽重み
蝉の羽にすれ落つ松の二葉三葉
地か蜂の兒に狂ひ出す菜畑哉
餘の鳥は閉口してか行々子
蟲子や膳につく間も眼の及ぶ
湿れた儘草の影より鵜舟哉
晝寐して夢にも見たし富士の雪
涼しさわふいに出たる月の風
日くらしの鳴て傾く夕日哉
雨近き日なり岩間のねらいがり
雨露に石も育つか木下闇
寐た人を寐よと起すや涼み臺
水は眼にみなから暑し磯の道
雨をきて座敷へ通ふ乙鳥哉
入梅晴や重荷おろした空の色
夕立や祝融やすみの隣ふれ
あはつはか工夫のつかぬ暑さ哉
晝寐をと癖付き易きものはなし
虫干の袖から出たり花の塵
峯つくる雲や汐待つかゝり舟
袖道に足の止まりや岩つゝし
針止めて添乳の儘の晝寐かな
若葉みて寐足らぬきけんなほし鬼
寐る外に思案のつかぬ暑さかな
ふうりんの鳴る音せすに蝉の聲
簡の香や風に向ふて來る胡蝶

五月雨に知るや茶日の挽重み
蝉の羽にすれ落つ松の二葉三葉
夕立や一度に上る田植笠
蝉啼や火種の盡る鍛冶かな
炎天や是にも鍛冶の槌の音
高い木を見上けて居るや羽抜鳥
かれみ子に袖ぬらしけり土用干
山と海夕立のあとに虹の橋
近ふても夜に入る花の戻り哉
一醉に二人まけ、りはと、きす
寐るよりは舟は用なし五月雨
蓮の香や落ちつく先は風まかせ
日和にも濡た色あり枝蛙
六月や實に返されぬ水の恩
來る客をまつて封きる新茶哉
汗たしてをつと棹さす舟稼き
もき椿を二人かゝりや花戻り
時鳥ふまへだかへの後山
川向まて來て晴る夕立かな
青簾潜りて涼し新座敷
はと、きす鳴て月夜は明に鬼
板の間にべた〳〵暑し下女の尻
血を分けて居なから蚤の智さ哉
口に冬身に夏荷なふ氷うり
蚊の聲のかすかへて寐る戸口哉
不二は今朝くまなく晴れて更衣
日にかへて歩行人あり夏の月
夕立や一度に上る田植笠
蝉啼や火種の盡る鍛冶かな
炎天や是にも鍛冶の槌の音
高い木を見上けて居るや羽抜鳥
かれみ子に袖ぬらしけり土用干
山と海夕立のあとに虹の橋
近ふても夜に入る花の戻り哉
一醉に二人まけ、りはと、きす
寐るよりは舟は用なし五月雨
蓮の香や落ちつく先は風まかせ
日和にも濡た色あり枝蛙
六月や實に返されぬ水の恩
來る客をまつて封きる新茶哉
汗たしてをつと棹さす舟稼き
もき椿を二人かゝりや花戻り
時鳥ふまへだかへの後山
川向まて來て晴る夕立かな
青簾潜りて涼し新座敷
はと、きす鳴て月夜は明に鬼
板の間にべた〳〵暑し下女の尻
血を分けて居なから蚤の智さ哉
口に冬身に夏荷なふ氷うり
蚊の聲のかすかへて寐る戸口哉
不二は今朝くまなく晴れて更衣
日にかへて歩行人あり夏の月
夕立や一度に上る田植笠
蝉啼や火種の盡る鍛冶かな
炎天や是にも鍛冶の槌の音
高い木を見上けて居るや羽抜鳥
かれみ子に袖ぬらしけり土用干
山と海夕立のあとに虹の橋
近ふても夜に入る花の戻り哉
一醉に二人まけ、りはと、きす
寐るよりは舟は用なし五月雨
蓮の香や落ちつく先は風まかせ
日和にも濡た色あり枝蛙
六月や實に返されぬ水の恩
來る客をまつて封きる新茶哉
汗たしてをつと棹さす舟稼き
もき椿を二人かゝりや花戻り
時鳥ふまへだかへの後山
川向まて來て晴る夕立かな
青簾潜りて涼し新座敷
はと、きす鳴て月夜は明に鬼
板の間にべた〳〵暑し下女の尻
血を分けて居なから蚤の智さ哉
口に冬身に夏荷なふ氷うり

訪ふ人の靡も床しき蚊遣越
寐るな涼し兒に思ひ寢の牡丹
人の脊をかりて手折るや藤の花
行直をいわて親にすゝめつ初松魚
蒸なきは餌につく時かはと、きす
潜る蝉雪の袖はとふるい鬼
汐の來てた、む涼の蔭かな
歸る道やつともとめて閑古鳥
子を呼てよもき見せけり麻畑ク
雪ふりを夢にも見たし夏の夜
露ちるや窓に涼しき竹の風
とめるにも袖は引かれす薄羽織
朝露に涼しき艶や初茄子
手を合はひとからくらふ夏の蠅
此天氣何を見てなく枝蛙
すゝしさや月をもてなす松の琴
虫干や武具に付ての物かたり
柳にも糸引く虫や雲の峯
風筋に枕をなをす晝寐哉
緑の來て浮雲なき芥子の一重哉
川添や見ても涼しき住居ふり
子寶や両親にまて初袷
扇に氣のうつれは遠し行々子
琴の音や調子にさわる梅の雨
寄り掛る柱もけふの暑さ哉
けし提て居るに小猫の狂ひけり
訪ふ人の靡も床しき蚊遣越
寐るな涼し兒に思ひ寢の牡丹
人の脊をかりて手折るや藤の花
行直をいわて親にすゝめつ初松魚
蒸なきは餌につく時かはと、きす
潜る蝉雪の袖はとふるい鬼
汐の來てた、む涼の蔭かな
歸る道やつともとめて閑古鳥
子を呼てよもき見せけり麻畑ク
雪ふりを夢にも見たし夏の夜
露ちるや窓に涼しき竹の風
とめるにも袖は引かれす薄羽織
朝露に涼しき艶や初茄子
手を合はひとからくらふ夏の蠅
此天氣何を見てなく枝蛙
すゝしさや月をもてなす松の琴
虫干や武具に付ての物かたり
柳にも糸引く虫や雲の峯
風筋に枕をなをす晝寐哉
緑の來て浮雲なき芥子の一重哉
川添や見ても涼しき住居ふり
子寶や両親にまて初袷
扇に氣のうつれは遠し行々子
琴の音や調子にさわる梅の雨
寄り掛る柱もけふの暑さ哉
けし提て居るに小猫の狂ひけり

一口は拾目となりにきりすし
苔から約束のある牡丹かな
風吹かねは庭かと思ふ牡丹哉
忘れたら枝に二度呑む清水哉
柳ふく風は涼しき夕月夜
缺から出たかと思ふ熱かな
忘れたる文字に顔あて晝寐哉
善ひなかのはなれて座る涼哉
出た山へ又戻りけり夏の雨
初蝉は耳の花なり時鳥
釣初めし蜷に朝寐を覺ねけり
月を友水の枕や夏座敷
白蓮や葉の上に置花の影
松風をうしろに負ひぬ薄羽織
松の雫やはと、きす
火にいかな味のありてや夏の虫
笠をうつ松の清水に惠ひ君の恩
賤が屋の濟水哉
一さめに色ましにけり白牡丹
何とやら昔しそなわる牡丹哉
三日月を疊みて宿る日傘かな
文珊田植唄うたうやうたう田植唄
葉かくれの梅に嬉さ余りけり
孝行の手に味のあり一夜酒
夏菊や白を好む人こゝろ
來る迄の名は別にあり火取虫
夏の月晝の暑さを忘れけり
人目には見へぬ暑さや隱し帶
一口は拾目となりにきりすし
苔から約束のある牡丹かな
風吹かねは庭かと思ふ牡丹哉
忘れたら枝に二度呑む清水哉
柳ふく風は涼しき夕月夜
缺から出たかと思ふ熱かな
忘れたる文字に顔あて晝寐哉
善ひなかのはなれて座る涼哉
出た山へ又戻りけり夏の雨
初蝉は耳の花なり時鳥
釣初めし蜷に朝寐を覺ねけり
月を友水の枕や夏座敷
白蓮や葉の上に置花の影
松風をうしろに負ひぬ薄羽織
松の雫やはと、きす
火にいかな味のありてや夏の虫
笠をうつ松の清水に惠ひ君の恩
賤が屋の濟水哉
一さめに色ましにけり白牡丹
何とやら昔しそなわる牡丹哉
三日月を疊みて宿る日傘かな
文珊田植唄うたうやうたう田植唄
葉かくれの梅に嬉さ余りけり
孝行の手に味のあり一夜酒
夏菊や白を好む人こゝろ
來る迄の名は別にあり火取虫
夏の月晝の暑さを忘れけり
人目には見へぬ暑さや隱し帶

蝶一とつ飛んでわふなき芥子の花
夕立や蝙蝠傘を提蛇の目
酒の座のはづみ付けり初松魚
七夕や都も都もとらか出る
日すからや涼風溢はす庭の竹
更てからさこと豊ゆる蚤かな
孝の名は栃す養老の瀧涼し
藤さくや乳母もろともに出養生
月夜とは味し柳になく蛙子
竹の子やけふも取出すみのと笠
雪を踏む旅とおもへぬ暑さかな
花笠は乳母か手にあり辻の花
千町田や皆豊作の植どゝろ
松風をうしろに負ひぬ薄羽織
松の雫やはと、きす
火にいかな味のありてや夏の虫
笠をうつ松の清水に惠ひ君の恩
賤が屋の濟水哉
一さめに色ましにけり白牡丹
何とやら昔しそなわる牡丹哉
三日月を疊みて宿る日傘かな
文珊田植唄うたうやうたう田植唄
葉かくれの梅に嬉さ余りけり
孝行の手に味のあり一夜酒
夏菊や白を好む人こゝろ
來る迄の名は別にあり火取虫
夏の月晝の暑さを忘れけり
人目には見へぬ暑さや隱し帶

蝶一とつ飛んでわふなき芥子の花
夕立や蝙蝠傘を提蛇の目
酒の座のはづみ付けり初松魚
七夕や都も都もとらか出る
日すからや涼風溢はす庭の竹
更てからさこと豊ゆる蚤かな
孝の名は栃す養老の瀧涼し
藤さくや乳母もろともに出養生
月夜とは味し柳になく蛙子
竹の子やけふも取出すみのと笠
雪を踏む旅とおもへぬ暑さかな
花笠は乳母か手にあり辻の花
千町田や皆豊作の植どゝろ
松風をうしろに負ひぬ薄羽織
松の雫やはと、きす
火にいかな味のありてや夏の虫
笠をうつ松の清水に惠ひ君の恩
賤が屋の濟水哉
一さめに色ましにけり白牡丹
何とやら昔しそなわる牡丹哉
三日月を疊みて宿る日傘かな
文珊田植唄うたうやうたう田植唄
葉かくれの梅に嬉さ余りけり
孝行の手に味のあり一夜酒
夏菊や白を好む人こゝろ
來る迄の名は別にあり火取虫
夏の月晝の暑さを忘れけり
人目には見へぬ暑さや隱し帶

乾く野に甘露の味や早月雨
打水や掃除も屆く醫者の家
菜櫻やいつまでつゞき遊ひ獅
團白や筑摩祭りは鍋ひとつ
かわよくは子にも焚せよ夏竈
花散しより待れてはほゝ、きす
夏の月開たまゝ寐る二階哉
割竹の橋も渡るや夏座敷
清水問ふ人に柳を敎へけり
料理場の水香涼し川邊茶屋
若竹の糸すゝか鳴る月夜かな
厨庭も我もの顏よ白牡丹
ちりてまて月は動かぬ雀の露
顏の蛞心の留主にとまりけり
衣かへ一と節結ふ襷かな
古池に有より白し床の蓮
帰け聞ふ富士の裾野にはほゝ、きす
結日傘や戴てさせ親の恩
夏も長々季の保とびけり露に行
心なき人には試へす風の味し
散る日まて彫もふませぬ牡丹哉
此月にあれと乏しく火取虫
葉は夢をむすぶらしさや合歡の花
帶解て頼む手のなき田植哉
この隈りに汲とも盡ぬ清水かな
日は西へ月は東に時鳥
乘せた子に畢を敎ゆる鶺背哉
何氣なく過きて來り夏の月
この花に其土地の名もかはかけり
撫とみや茲に弓据へよもやまも
時鳥空に住かとおもひけり
花もはやひかしの巷や曉の鳥
涼しさは竹にあるかや雨後の月
廣澤やたゞく水鉦に月ふたつ
茅行を荷負ふて實るや初鰹
料理場の水香涼し川邊茶屋
涉て出る汪や貢きの遊船減
寢心の遊ふや蚊屋の釣はしめ
開雲に尻のつかへる田植かな
來ると直く水乞ふ客や夏座敷
曙の空押し分て杜宇
ゆめなりと思へすにさて時鳥
朝貞を箒へて母を起しけり
早や年も半流しぬ御祓川
空に來て其聲廣し郭公
遠れすむ世は部なり蓮の池
飲みかけて笠のひもとく清水かな
男氣に女子も出て買ふ初鰹
四季の氣の見ゆるよふなり五月雨
釣處月にかくすや螢籠
彼所花玉露はろりいとも勿へ
潔よきものや牡丹の朝期
暮め過て貰いしはなき牡丹かな
扇夜や關に手向の押し忘れ

一家内皆門に出る晝さかな
保たん花や神の御室に生立て
日月に咲はれしたり花菖蒲
寢た親の蠅追ふ間や所仕事
すゞなくも我袖濡す虎の雨
白蓮花あらそふ色はなかりけり
提燈をかりてもとるや螢うり
牡丹咲寺や雲より上に住
柳さへ動かぬ今日のあつさ哉
寢心の遊ふや蚊屋の釣はしめ
夏もりや千年の舞に博つら音
手はじめの田に植込や朝の月
實のるまて田に植こみし心かな
淡みて月ものそ、や夏座敷
五月雨か休めば屋根堀る烏哉
水の面に月動かしつ飛ふ蛙
卯の花や日和過ての夕曇り
晴はとは姿も見へぬはと、きす
心好く今日も一日鶯亭
月さして釣り直しけり螢籠
蟬の聲豊穰の夢に通ひけり
清水井や我影なから肱かし、
青田かな出來あき祝ふ壺の夢
廂なから實られて行や籠の蟬
其花に其主ある牡丹かな
鳥遠くならふ帆影や夏の月

そよく申二葉はおもしかたつひり
獅子も來て舞ひもふ門の牡丹哉
手をかへて風動らしき扇子哉
角力取の走りまけたる夕立哉
雨の原かきり無く暗き雲雀かな
帷子や袂の中をぬける風
露よりも輕し螢の草はなれ
暗りやひとり下部の門ト す、み
足音に居すまい替る蛙かな
死してより名もあらはれて火取虫
化に棄のない隱さる、牡丹哉
登ありと思ふ油斷や散るはたん
よき物は綱て拂ひし夏の雨
跡しさりして追かける田植哉
涼しさの湧て流る、清水哉
提灯の消て螢の力杖
山茨から鳴せた味や洗ひ鯛
夕立に洗ふた樣や松の月
水打て路へ暑さ送りけり
簾の香も日々に隱る、青田哉
ひすぶてのはだまてひゆる清水哉
蟬鳴や釣瓶から呑む水の味
浮きてきら魚や今宵の涼み網
岸の船螢ひとつにかたきけり
花の香もまたある空やはと、きす
獨にはおしきものなり夏の月

漕く船の行く〳〵とも見へぬ曙や哉
青芦の戰きのあひや行々子
膝に手の納りかねる暑かな
つまひ手に殘る新茶の匂ひ哉
歸る氣も泊る氣もなし涼み客
風蘭や刃物は知らぬ松の枝
夏の月寢よとて雲の屏風かな
五月閨星は野にあり草はたる
月に鳴く不二の尖りや郭公
宿取りて寢處せまし蚤の秋
一國は柳の枝や船の蚊帳
風なくてつい定まらん納涼哉
圍よりは娘浮雲無し螢狩
持つ猪口を思はす置きぬ郭公
夏の暮小池になかひはちすかな
時鳥一人寢夜哉
すげ笠のひもものしまりや顏の汗
涼しさや風はあらねと水は月
鳴呼暦面照る螢狩や止め
聞く人もあるか雨夜の時鳥
空になくものゝ、待たれて初松魚
ほちく〳〵と洩る日涼しき木蔭哉
浮きてきら魚や今宵の涼み網
汲程はへらぬ清水の出口哉
咲からに散心ありかきつばた
涼み客愛兒にみやけ螢かな

空を吹く風を便りや開古鳥
寢心やはなさぬ團扇はなす時
白瀧や水から煙る夏さひし
蚤秋や東雲早き日の音
戸を明けて見れは月夜や鳴水鷄
涼しさや四方からよりて中の島
見習ひに子も乘せて居る鵜舟哉
蚤の寢顏そつと覗くや枕蚊帳
蚤の六ツ聞もうれしき夏の夜
蟬の聲木蔭に笠をしき寢哉
雨降りて月も加込夕田かな
ぬれぬ木のそよ〳〵心や夏の月
誠心やひを水にして稗を田に
庖丁もはじめはいれす初松魚
着なじまぬ丈の蚤さや初袷
鯉飛んで袖の濡れるや夕涼み
雨なから月のはれ間に風薰
水打た流れに寫る夏の月
惜む日の蚤てもふくひ牡丹かな
抱た夜は風をはらめよ竹婦人
爭ふた甲斐なく遲し螢かな
湊乳した上やこつそり蚤の蚊屋
夕立や朝込て來る濱車ひと矢
源は見へねと盡ぬ清水かな
けふもまた今日も裾野や不二詣て
母衣蠅のくちに卵なき寢貝かな

すき髪に夏痩目たつ浴衣かな　手の屆く處に花なし池の蓮
櫻ちり卯の花咲や夏の雨　吹きゆれて柳にすべる螢かな
暑き日や御門の内も水遊ひ　黄鳥や老て鳴音は氣儘ふり
岩山の思わぬとこに清水哉　心から親子一輪に涼みけり
雨運ふ雲間の月や郷公　ちるにさへ大けしきなる牡丹哉
浮き氷り夏に見るとは北居哉　虫干の手數も富のあまり哉
年拇や何處の家にも余り苗　閻の夜を縫ひ行く様な螢哉
ぬる、とも傘かたひけん時鳥　大粒な雨は降そよけしの花
月添ふて濟ち來る汐や夏座敷　竹に吹く風さへ輕石し夜更
涼しさや松風の殞く琴の音　未た石に查の暑さや夕涼み
すひ月に別れを惜しむ涼み船　浮た世の暑さ加保や日の惠み
人添て勝手へ廻す新茶かな　涼しさやつい松島へ一走り
涼しさや月住上しの松の雫　月に涼し水に廣める山の影
卿やすき明ても月の入にけり　飛立た螢に深し蝉の聞
夕栄の影た、みこむ牡丹哉　障子越しゆかしさの洩る掛蒼哉
井洗ふ瀧の眞上や時鳥　夏の夜や我にかへらで川の面
蝉籠や清水に駒の跡すさり　蝉なくやはら〳〵こぼす荷い水
今日と伸翌日と葉の出て今年竹　入梅晴や雲間を覗く日の廐
千殿樹の蔭は涼しき清水哉　支へられ浮きや氷の船主心
九まらぬ影尚涼し水の月　むすぶ手に月もこぼる、清水哉
社寂の顔拖ふたる團扇かな　雪と見し花もきのふに若葉山
こね秋を覚ふ川風夏の夜や　草を出て窓皆を照らす螢かな
樹立や杯に見る夏の月　日あいて鳴ぬからすのあつさ哉
かれた籔なすひまもなき團扇哉　翌日は花の中にと、まるきたに哉
僧かへし夜から盈すや竹の露　りと思ふ盤寐の油斷哉
れ海青山なす水船や避け　螢見すまして盤寐哉

掛香や女の眼にもつくなみな　涼しさや柳の月のぶらつり
閉た窓また開きけり夏の月　夏や七の字の孕み姿や親の恩
岩間にて咲くやなてしこ夏の草　此風は柳もさらぬ夏羽織り
き、なれぬうた面白し田植哉　村雨や蠅の集る傘の下
月に身を失ひそうな螢かな　別莊に松風聞て盤寐かな
見て四季や鮎風鮭鱒もこ尾か髪　合点して居ても若さの堪かたし
青すだれ洩れて床しや笑ひ鮮　開に往た跡へ廻りてはと、きす
みしか夜や雪よりつらき貰ひ乳　狹ふ寐て眼きこ、ろや蛸の中
通す手を離れぬ朝の螢かな　氷とも眺めて涼し池の月
行春を毛ぬきあわせの四月かな　遣水やはたる飛かふ夕まぐれ
涼しさや月は月見る水の上　行よりは暑し蓮見の戻り時
去はらくは屠蘇けとやにはか雨　簟飛ふ宇治の川瀬や轡の音
經みたく風をとり出す扇哉　温りばれ雲ふみしめて夏の月
蚓の鳥のしかけ見なから夕涼　花見へて間數へだてる牡丹哉
窓籠て來た嫁とも見へぬ田植哉　早乙女の手から屆ける風かな
溜りにも染まぬ君子や蓮の花　風波の打てす、しき青田かな
薫さくらや知る人の知るこれも花　月は入り星にもまさる蛍哉
最う晴れて日影句はせ梅の雨　香厭かぬ程を馳走の清水かな
虫干や智恵潜りたしへその奥　阿弗利蚊に住ふ鱗や加ンフり
夕立や男瀧女瀧は影日南　物多き松も古ひて時鳥
雪よりは柳に重し五月雨　夕顔の花から出たか三日の月
登りつ、蝉見上る暑さかな　跋河路も書寐さかりや裸不二
めめにさへ水思ひ出す暑さかな　夕立やぬれてもす、ひ様のはし
付て來るかと思ひけり團古鳥　かけ橋に空足踏ひや時鳥
夕立や誰られし身の海蛇もの　京て賣る小原の露や菖蒲艸
つひ杖も忘れて出たり初袷　怠りの窓に學へと蚤かな

五客にも一ッ付けなり初茄子　明日植る田の清〳〵と暮に飛
行燈にみるかけもなき螢哉　化化の蚤積るうらみを爪の先
別莊に通ふ土橋や杜若　朝の蚤積るうらみを爪の先
白牡丹雨の一ト日も靜かなり　ふみ讀めと云はぬ斗りの螢かな
聞までは戸さゝぬ門や時鳥　細たしの睡り甘き日永かな
夢の間や牡丹に殘る胡蝶哉　郷公寐に來た宿てなかりけり
水晶にこゝろ明すや日の差み　人音に卷人のかくる粽かな
動かねは柳も暑き姿かな　氣の合ふた咄しにふける納涼哉
尺とつて見はや牡丹のはませ咲　夏なかはいつくれはてしこぬ秋の
コンドルに米さめ涼しや鳳凰羽　寐かくれの咲あらわれし花菖蒲
我事を蚊の出て行や夕煙り　薬かやかけに劣らぬ朝の時
よきつついて見るや秘藏の土用干　此上のながめ物無き青田哉
足先にせは寐られぬ蝸の月　屆けねは扇も風一の苦かな
百薬に勝るや夏の風に月　いッかどの家も戸〳〵て田植哉
瀧の音はかり隠れぬ若葉かな　登中も蚊の鳴く聲や雀の巣
いさましく熾そみるや家の風　笠取れは似た顔わなし山植人
葉櫻や中にいな、く飾り馬　夏の夜や歩行ともなく四條まて
寐た親へ團扇遣ふて夕納涼　蝙蝠やかたひく月の薄明り
鳴までは心は空よ時鳥　さみたれの頃は蛙も只の瀧
直なれや親竹に似し竹の子　獨り寐の夢をやふるや山郷公
薬うら這ふ螢や水の薄す明り　竹の子やきのふ掃たる庭よりも
梅のなき里迄梅の霖雨哉　おつかつた咄のみ聞く納涼かな
竹植て子心訶る夜雨かな　慾も徳も寐わする朝や若葉の戸
今さらにくやしき朝寐はつ松魚　雨に咲く〳〵操の色や杜若
棺まて來て分別や蝸牛　松は夜を放れて涼し朝の色
東雲や蚊に送らる、旅舘町

照りかへす麻衣白し法の華
落さうな扇しらすや行違ひ
橋立の松吹風の涼りけり
萬歳や鰹の春に浮く涼船
涼しさや添寝して知る竹婦人
白雨やしるべの門も走りぬけ
裸にて佛もうまれたまいけり
見事なる牡丹氣高き庵の庭
夏の夜を我もの顔に杜鵑
燈火の消へし寐覺や窓の月
はめられて笑顔に匂ふ牡丹哉
岩に鼻付けて水飲む清水哉
山吹に暫し振らる、小路哉
短夜や見果ぬ夢に起おしみ
重ねぬか人の人なり筑广鍋
去年のはみのにしてきて田植かな
夕立や橋に團扇の置き忘れ
五月雨や戸口に鶏の思案顔
行燈に留主を渡して涼み哉
たのひへき松も餅なし雪の峯
日さかりや醫者ひとり乗る渡し舟
花に手を添へて持行牡丹哉
白ク宅の紙の沙漠も快路哉
夕良のかけや淋しき月明り
寐た人に會釋して借る團扇かな
空も海も一ッみどりや青嵐

山里の蚊帳や寐たま、起たま、
いく夜とてまだ物たしひ窓の月
金言もある料理場や青山椒
川狩やぬけ足つかふ水の中
何事も明日に延はして夕納涼
涯心眼て隣りを起す四月かな
芥子咲や人もわつかに五十年
稻妻の打こす軒の隙れ哉
湯揚りや門とに涼みの長廂し
行義よく捨て、われるなり餘り苗
村里は皆留主勝や田植時
蚊の蹇の虫におとろく眼鏡かな
日の暮れて明るくなるや蚤籠
田舎旅道つれいらぬさつき哉
葛水や花の吉野の舌さわり
かなしひな融れ〻水の浮き氷
空蝉や世を奇麗なるしまいふり
偖もまけぬ意地ある中そ初鰹
ちらさしと思へは重し苓子の花
蝙蝠の舞込て、す簡り堂
出る月に皆向き直をる納涼哉
河越せといまに雲雀は眞上哉
おとなしうなりて短し子の袷
茶に醉ふた咄さとるや五月雨
古し見し遊女の墓や郭公
曳き舟の綱もゆるみし郭公

豆腐迄奴にさる、暑さ哉
との家もまた起て居る暑さ哉
螳螂やうけ太刀錬の氣生ひ振り
夏の夜の壁らし壁は夜中らし
雲の湧く岩間杉間や郭公
透通る様て寐にくし蚊やの月
帳子や袖の中吹く松の風
うつくしき顔のよこれや筑摩鍋
薄物や後ろ姿も見る鏡
百度や器見る毎焼け思ひ
照込し色なを匂ふ背田哉
思ひ切ッて花になりけり美人草
たか爲にてらす閨夜や鶏冠舟
藤喫や賤か伏せ家も人の來る
源とは泥で居なから清水哉
高過きる枝ふりはなき牡丹哉
用もなき橋渡りけり夏の月
方丈の居間よりあふる蚊遣かな
うどんよりうで、のうたる暑さ哉
涼しさや落ては戻る瀧の月
夕陰になりて忘るゝひかさかな
釣す手にはや風の添ふしの ふ哉
掃洩らすものは風なり夏座敷
蝙ては見せて買せる扇かな
炎天や午の跡行草のいき
南天の蛍らぬ花の白さかな

涼風や上りて輕し羽は舞へて
緋屋垂れ獅子宮さしや花詩會
日にぬれて雌子月にかわきけり
蒲團着て寐心知るや秋隣
蝙蝠の撞木されけり暮の鐘
葉櫻や花の佛陸くらし
持振に行儀の見もる牡丹かな
夕立に乞食あてなし走りけり
机に入る月を寐しはの涼かな
水草を吹けてはなる、蛍かな
生れ出る日から佛と言はれけり
膝叩きたいきて話す扇かな
木移りをしたか一聲夜の蟬
ついそこに須磨と明石や夏座敷
能き聲を都へ殘せ時鳥
船樹かけ貞や三郎のさきに垂れ
一浅香銘髪も艘なりや石竹親
拭ふ手につたわる汗や田草取
蠅飛て罪なき座た、きけり
掌も花孕む六月閏ふかな
短夜や人のうはさも宵の中
鯉刎る音にゆれけり蓮の花
雛子喰うは輕る身にも露かな
浮き星の光澤諧かせしや緋鳥薬
鍛さへとうす虫あり土用干
影深き流れも青し川柳

なつかしき人に摺れ違ふ納涼哉
母の寐る一間は先ね蚊遣哉
ねた孫の頭撫てけり夏の夕
宮守の帶屈くや若楓
咲殘る其藤いろや卯月空
蛍の苦も薄し今宵は新座敷
助けても意地に哀や火取むし
富士移る古の江に鵙の浮巣哉
去年のをみのにして着る田草取
夢笑ふ子の顔すくや枕蚊屋
辿り來しあたに見る目先に散るや芹の花
蜉なくや西から晴る、雲の脚
風鈴か寐かして起す蚤寐哉
乳貰ひの起し乗たる蚤寐かな
水肴客に端居を進めけり
月よしと罷出しかほど、きす
いわてしるさく山吹になく蛙
薄からぬ客扱ひや薄羽織
可愛子の葛や釣りたき枕蚊屋
水に蝶とまるよふすや雪の峯
親と子の間も直に田植哉
夜は木々の影をはなれて涼み哉
葉を飛て又葉のうへや枝蛙
麥秋や埃りおちつく八日月
町中に老なくさひる牡丹かな

涼しさは假の外や濱旅舘
世を捨て、見れはなつかし蟬の聲
寐刈や素肌に着たる日和哀
夜明れは大きくもなし蚊やの穴
絹脱や世は卯の花の雪盛り
水引て餘所のもそよく苔田哉
伐り惜しみして見て居るや杜若
ついと引星かと思ふ螢かな
葉も枝も花にもらる、牡丹かな
追も罪追わぬも罪や火取り虫
不二見ゆる松原行けは風薫る
寐つかれぬ蚤に眼さめて獨酒
只てさへよき朝日をはつ袷
海原や夕風絶て雲の峯
雨の夜はもわてもさひし蚤かり
水肴わ枕の下やたかむしろ
蓮咲や實に極楽な風も來る
見栄るや親と並んて今歳竹
供連れて乳母の門訪ふ日傘哉
待たれけり待つたり一人納涼哉
涼しさや月にさわらぬ通り雨
夕立や晴れて並木に人たかり
駈出や珠數くりなから初鰹
おしなべて一人にたらぬ新茶客
美しき庭の洩るや青簾
鼻取のかへるをおしと啼かわつ

腰掛た岩に禿言ふ清水かな
皆水に戻るや入梅の捌俵
溯日の溯日らしき裕かな
冷しざやき妙な腰のかけ所
遣ふたひ風のうまる、扇かな
すみよげに見ゆる葭屋の燕かな
踏出さぬうちから汗の出る日哉
顧ふても叶ぬ客や白はたん
涼しさや月は眞上に舟は仲
月影の桶をあふる、清水かな
于に呉れぬ親の帷やまくわ瓜
椽先に煙る火鉢や夏の月
夏痩は人のうらやむすかた哉
涼風や巷石にふる、椽の先
よそかへの殊更深き牡丹哉
水に富む町の際はし夏の月
啼つのる蛙やくれの品わつて
百反の帆に風のなし雪の峯
火を虫か取て手の鳴る二階哉
憑手紙ある上書麻の枕元
ひら開のかわく香や畑の瓜
螢狩盛に足をとられけり
落ついた山の妻や春の月
朝夕にかたる明治のかきて哉
郭公あれ郭公郭公
おとづれぬ破戸に燃て飛ほたる

是見よと言弦音なり大矢數
初茄子や富士を屏風に持し迦
飯櫃の置處なきあつさかな
戸もさゝで寐るや二階の蚋の月
蚊の背にうこかされけり大男
明るまて宵の肌なり竹蝿入
遁れたる老もそれ是れ田植時
艮き友の來て尚涼し竹に月
立よれはいと、涼しき庵かな
草籠や豊は盞と氣も付かす
寐よと鐘寐せしと月や涼み臺
色替ぬには恥よ重ね鍋
たまに來る風を力に麥こなし
居どころを啼て知らした時鳥
店先の柄や櫻の掴みさし
朝ねして心ちのよき春の雨
明け安き夜を埋にして朝寐哉
祇園會や吟味好みの花衣裝
花にあく鶯きくやはと、きす
その姿見ぬうちこそや閏古鳥
顧ふ雨十分みちて夏の月
蚊の中や一心こめし經机
蚊はしらの崩れて草の風かな
蝸牛家を背負ふて竿渡り
せみ鳴や砂に燒込通り雨
植つける田にも鶴の羽ばたき
賤か屋を吹や青田のなくれ風
白雨のあとや涼しき苔の花
松杉の中や櫻の暮かそき
窓に飛ふ雲雀に杖をうはわれた
蚋一と重隔て、夢と浮世かな
蚤の苦は雨に流して夏の月
松蔭は客へ讓りて氷賣り
雨厭ふ太鼓の音や蟬の聲
物思ふ姿に似たり雨の百合
青さしに鳥渡添けり捻り沙
明日ありと人もゝたんの豊寐哉
知て居て蚊にさゝれけり笹都合
紅葉さす瀧に住けり登り鮎
よき宿に來て猶さらや明安き
寐た内は鬼も佛そ蝸たゝき
樹々もれて來る風涼し様の先
居處を替〳〵迎る暑かな
讀ていた本を枕に昼寐かな
片側は雪ある土手やふさのそふ
夕立の晴れての後の旅の人
傘を疊むはつゝみや時鳥
涼しさや其眼の果を飛蛍
涼み臺乗らね顔しはなき様子
椽端や涼しき六つの花半
振返り先つ衣毋蚋を呼けり
子の夢のころけ出しけり京の針

灯を虫か取て手のなる二階かな
涼しさや心を洗ふ俄雨
涼しみの淵る、やうなり岩清水
か、り居た船の行衛や夏の月
開取も動かし蚤の手綱かな
巻すぎて色香を殘こす二八櫻
稻妻や青田に露の玉ころ〳〵
葉櫻や奈良には殘る昔ふり
ゆたかさを知るや青田の風の波
島山の弓張月や郭公
鎗近き麥の實入や時鳥
後れたる蓮を招けり掛清水
ふらすとも窶着て來たり植乙女
子子やわつかな水に浮き沈み
虹晝て聲痛の顔を洗ひけり
盛した蚊は逃て鳴く蚊の打れ處
待門た跡に夜はなし時鳥
心より外に左なし閉子鳥
青梅や隣から來る灸の詫
旅の夜や蚊帳のひと重を國境ひ
取次に山たも客らし牡丹の戸
逃處のなくて湯に入るあつさ哉
鈴釣りし木戸の内にも清水哉
夕立や晝〳〵逃る畑の人
立た間に見失ひけり蚤一ッ
いさはしや瑞穗の國の青田面

暑さする中や初音のほと、きす
寢する子に寐かされてする蚤寐哉
夕立に水爭ひも流れけり
涼しさに用なき橋を渡りけり
一と夜さの恨み酬ふや朝の蚤
門掃くや水打呉れた禮心
筆て足る事に出て行く袷哉
心なや芥子を後ろの築礎
もる、乳に一人へりたる田植哉
水鶏にはひさしふりなる月夜哉
島も樹の茂みに寐るか夏の月
雪と寐た昔し夢見ん竹婦人
買水もまくや祭りの通り筋
瓜作り鴉にこはす涙かな
人さきに矜着て居る末子哉
涼さや神に孕みし眞帆片帆
水晶を盛るかや雨の白牡丹
今一醉きかせ夜あけの郭公
雪折れは未た忘れぬか竹婦人
初夏や西も東もあさ曇り
手枕やつるす玄のゝの水がたる
年玉にたつた一醉ほと、きす
蚊の喰ふも知らすや麥の苅つかれ
夕立の今日も來をふて戻りけり
世の事はむだが七分よ柿の花
田の戰き見て未た袖に螢かな

追はぬのも追ふのも畢か火取虫
雷や老て巧になりし醉
ひしはしや不二を見晴す座敷先
折かへし又同じ事田植哉
蝦夷に來て十年振や郭公
今一醉近ふ來て鳴けほとき、す
落るまて露とは知らて螢とり
夏の夜にこ、ちよし富士の雪やめ
夕すゝみひるの暑さに引かへて
夏の夜はみじかきものと三子まで
うち水のためや此子の高いびき
浮雲を潜り〳〵て不二詣
卯の花や木かくれ床し咲所
竹の子やわか子にはしき此育ち
うかよ恩武器やなつかし土用干
俗もこよ今宵の月に蛙哉
巨燵丈壘は青しはと、きす
短夜や明ても冬の半夜たけ
蚤ひとつ操の帶をとかせけり
たまさかに蝶のあつまる牡丹哉
殘る香の翠麗しうつ、姫
鉄鉢の行も休みの安居哉
覺したもまた樂みや蟬の聲
暗の夜に奥ありそうな蚤かな
卯の花や富士は裾野も不時の雪
とり〳〵に雨の話しや蛙なく

冬瓜に盃取り逃す螢かな
夏去き湖か歩行路のうちか持哉
涼しさや蚊もる月の水うつり
立かわる人に又すむ清水哉
容めて立うしろに散るや苅子の花
慾の世を離れても猶暑哉
血に啼て誠聞かせよ郭公
月に戸はさゝねと敲く水鶏かな
誰か爲に思ひ頃く姫さもり
不二見へて暑さも忘る縁車内
影うつす放生池の杜若花
里越しに詠ひる余所の牡丹かな
手枕のしひる、頃や郭公
川舟や夏のかくる、杜若
月消て雲に聲あり時鳥
初音とて只一聲やほと、きす
富士に雪見へて麓のあつさかな
香をとめた袖殘り惜し衣かへ
風を手に握てあるく團扇かな
禮言ふて呑ひや暑さに岩清水
見て居れは植ても見たき田面哉
はと、きす啼次く外はなかり鵜
世の塵を初めて思ふ蓮かな
水を出て水より清し蓮の花
暗島の聲のみ洩て夏木立
月の外入れぬ挨や蚓帳の内

大空を我物聲に杜鵑
世の中は要め工合の扇かな
夕顔や露にひもとく日暮れ哉
祇園會や裏から出てもひとの山
人なかから分つ涼みや暮と將基
月に掛を付たらはよき團扇哉
行燈に有明殘るはと、きす
玉一つ拾ひしやうそ初螢
血に戸たゝき雑せけり郭公
花や香の磯はおし、衣更
月に戸はさゝねと敲く水鶏かな
朝風の行ねも見ゆる青田哉
誰か爲に思ひ頃く姫さもり
松一木商し高峰の時鳥
不二見へて暑さも忘る縁車内
挨拶の央なりけりはと、きす
影うつす放生池の杜若花
涼しさを出て吹せけり洗ひ髪
里越しに詠ひる余所の牡丹かな
行ゝ子暗や喧花は川向ふ
手枕のしひる、頃や郭公
五月雨や親父は圍碁に兒は將棊
川舟や夏のかくる、杜若
とり〳〵に雨の話しや蛙なく
月消て雲に聲あり時鳥
夕立や晴行く空に星一ッ
初音とて只一聲やほと、きす
呼留めて箕の螢を曜ひ飛
富士に雪見へて麓のあつさかな
手を突た跡ある庭のはたんかな
香をとめた袖殘り惜し衣かへ
されはとて寢てもねうかぬ暑哉
風を手に握てあるく團扇かな
文もなく日上もなし端午哉
禮言ふて呑ひや暑さに岩清水
包まれる者なら水も京土産
見て居れは植ても見たき田面哉
波音を押へつけたる暑さかな
はと、きす啼次く外はなかり鵜
夕立や今日もきのふの處から
世の塵を初めて思ふ蓮かな
日の近ふなる程楽し苔士詣て
水を出て水より清し蓮の花
涼しさや雨のあらひし松の月
暗島の聲のみ洩て夏木立
時々は團扇にかわる日傘哉
月の外入れぬ挨や蚓帳の内
暑過て貴ひ遇る、牡丹哉
夕立や洗ひ出しけり蚓の聲
二輪ゐて寒かく移行く牡丹哉

戴て月を飲けり納涼酒
水にさす影いと涼し夏の月
醉さめの水すゝふ手に夏の月
水引も熨斗も移らぬ水瓜哉
二親に道ひ分けたる團扇かな
大道の中をよけ行く暑さかな
あれ聞けと喚ふ田植の拍子哉
白雨や庭木に花の咲くこゝろ
一醉は一座鎭めて時鳥
空中に聲餘したか時鳥
田草取り汗や玉なす暑さ哉
夕立に軒も賑ふ雨宿り
用のない時は用ある蠅たゝき
月の出て掛直しけり蚊籠
寢道へぬけても見るや月の鐘
水の味飲たびに增す暑かな
寒からぬ雪の降りけり卯木垣
玉瀧の内はさらねと若葉かな
打水の方へ居直る蛙かな
打水に逃て又來る赤蜻蛉
蚊火や水に光りをます鏡
けふからは暑さ心や更衣
馬捨て清水の影の涼氣かな
短夜や月夜鴉と思ふうち
一人呑ひ程音のして岩清水
めのさめた子の悦ふや初蚊帳

夕立や糸繩かちみし牛の角
矢もうけぬ外輪圍ひや鍾馗
疊目の煩にかくせぬ蚤蝨かな
これもまた倭の花よ田植うた
去年よりも今年の夏の暑さ哉
水無月に雪を持て來た浪花橋
すみわたる水に浮畫や杜若花
旅人の杖忘れ行く清水かな
灯をとらぬ典は無事なり草の月
釣た夜は心のせはき蚊帳哉
人あとに成つても同し暑哉
樹の影を七尺去りて涼み哉
子子や浮ては沈み沈みては
蔭かぬ夜は耳にひまなし時鳥
涼しさやひやつく椽に足延し
所望せし火もなき家や夏の月
摺盌たす硯の海や夏の月
時鳥何も無き野に門摒へ
帆や孕ひ月は生れて夕涼し
風りんや見晴す先は安房上總
まだ木昏の朝風寒し郭公
蚓一重うき旅も子にはさせたし夏の月
落て來た閨そ涼しき蟬の聲
人の居ぬ廚に日のさす旅籠哉
暑さても兒の頑惡に居る炎

迷子のつかんて居たり初螢
はと、きす啼は只照る月夜かな
家搆氣高くなるや桐の花
歸りには夕日を帖ひ日傘哉
月かくす雲よりもれて郭公
葉櫻に影薄うすく月夜哉
月か出て小さくなりし螢かな
去られても闇に見に來る蚊かな
吠登る葵の花や五月晴
寐るにまで骨の折れたる暑さ哉
蠅たゝき溜の眞砂と仕舞兒
招かる、袖の下ゆく螢かな
母へ先出花を汲て新茶哉
たゞさかに晴る夜もあり入梅の空
風か又風に追はる、青田かな
湯上りや人の團扇の飜れ風
傘さして通る人あり夏の月
朝風呂に入てきかへる袷かな
短夜や曉うらひはと、きす
亡母の去きりに戀し土用干
青嵐竹に古ひをつけにけり
軒に竿渡す戸毎や田植時
出る度は親に屆けて夕涼み
夕富士をなかめて遣ふ團扇かな
川に影引て飛立螢かな
碁の外に圍ふものなし夏座敷

根付かとうたかふ迄や洗ひ苗
吾持た証にてよごす蚤寐かな
飛んで來る蚤に顔を隠しけり
蚊帳から魂の崩る、暑さ哉
月に戸をさゝぬ夜のあり蚊帳の人
孝行の開扇の風や眠る親
雫する軒の菖蒲や雨月夜
掛扇や誰かつれ〴〵の筆すさみ
噺しにも哀あり納涼盞
夏てまて釣瓶の音や夏の月
涼しさや月ふり飜す庭の竹
かやに日のさすまて寐たり旅戻り
一入の暑さをそはや百日紅
川狩の手拍を母にかくしけり
そよついて吹風薫る小松原
ぞつとした氷も今は馳走哉
手はしめの田へ植込や朝の月
川一ッ越して向ふは一しきり
時鳥夜の曇りにもはるゝてり
老も出てひかしなからの田植唄
五月雨や窓へ這ひ込む蔦のつる
蚤火を消す力らなし草の雨
夏痩はせぬかと母の手紙かな
短夜や鼠の荒れも苦にならす
蔵園會やむかしなからの金屏風
聞足らぬこそ初音なれはと、きす
寐支度をすれは來て鳴く水鶏哉
月の出は待つ限りあり時鳥
五月雨の海邊は晴れて暮にけり
風涼し海見はらしてひるたばて
養老の瀧を抱へて若楓
杖に突く孫を借りてや佛生會
雲を呼ふ聲の揃ふや枝蛙
寐心を母にとはばや蚋の月
驚や老ても輕き枝移り
跡もはし松風もなしはと、す
不足なき身にも暑さは暑さ哉
涼しさや氏神祭る朝神樂
川越して知らぬ雨ふむ野哉
道までは水音踏ひや木下闇
雀にもまた宿かさす今年竹
蓬に來た人の來直す寐寐かな
若竹や一所に出ても長みしか
白雨は過たり元の人通り
かたりよふ蚤の暑さや月の檬
飽くうて一人り氣遣ふひとせ哉
雨に足打たれてさめる蚤寐哉
くせのなき葉なり花なり杜若
寐るたけは寐て短夜と思ひけり
散る日はと晩日は見へす芥子の花
川狩や誘ひ合ふ子の水と魚
一二軒はや灯のみゆる青田哉
我枕附ても邪魔な蚊聲哉
寐むたさに寐れと寐られぬ蝉の聲
夏の月隈なくはれし雛鹿
湖にのつとかけ出す雲の峯
日の思は思ひなからも暑さ哉
炎天や火を吹きそうな鬼瓦
むし干やこれが此家の紙元帳
寐心を母にとはばや蚋の月
驚や老ても輕き枝移り
跡もはし松風もなしはと、す
不足なき身にも暑さは暑さ哉
涼しさや氏神祭る朝神樂
川越して知らぬ雨ふむ野哉
道までは水音踏ひや木下闇
雀にもまた宿かさす今年竹
蓬に來た人の來直す寐寐かな
若竹や一所に出ても長みしか
白雨は過たり元の人通り
かたりよふ蚤の暑さや月の檬
飽くうて一人り氣遣ふひとせ哉
雨に足打たれてさめる蚤寐哉
くせのなき葉なり花なり杜若
寐るたけは寐て短夜と思ひけり
散る日はと晩日は見へす芥子の花
川狩や誘ひ合ふ子の水と魚
一二軒はや灯のみゆる青田哉

出る月と待友遍き蝙居哉
髪もまた男仕立や辻か花
雲の上まて咲渤む葵かな
人中の欠伸を隠す扇かな
喰込けはさせぬと蚤をおさへけり
月涼し盤にそよく竹の影
月涼し〳〵はる波かへす波
汚れとる清水を聞くや猶暑し
醉ふてさへ袴もとらぬ牡丹哉
高もへのしてあとくらき蚊遣哉
一隅は客の手傳ふ蚊帳哉
二瀬ある川や二瀬に鳴水鶏
二人りして傘一本や杜若
一抓み扇にのせる新茶哉
橋出して舩にも同し夕すゝみ
初蚤にいぢられ聞くや郭公
苔水の澄切圍碁の責手かな
寐も〳〵といふ斗なり夏の月
夕立や傘もちなから雨舎り
草の戸に蚤の音する團扇かな
蚤の蚊や竹の影さす枕元
袷着て随心よき庇の下駄
蚤の相とりて待けり時鳥
貯うて居て一扉か時鳥
もの足らぬ宿屋て聞やはと、きす
堕足らぬ庭も奥あり夏の月
水まして柳に屈く浮巣哉
杜鵑おしきうて高音かな
蚊屋の月蚤の暑さを忘れけり
蚤からの天氣に殖る蠅哉
迷惑な屈けものなり芥子の花
入らぬ鉄さけて見巡る青田哉
切て見たやうな自慢や西瓜實
わか竹やまた先たけは波の形
解けそうに云ふて走るや氷實り
朝立の市夕たちに流れけり
目に人のあるて憚る蚤寐哉
川骨や一村肥す池の中
ふり俗たふりも見へけり五月雨
蜘の子の借るは目出度し蚊遣哉
夏痩や長ふに思ふ笠の紐
凋江を出抜て清し蓮花
咽かわく夕立雨や鳴子供
釣落す魚と見送る日傘かな
硯箱一すち蚤寐の枕かな
清水わく音のつめたき夜更哉
日の本と思ふ暑さやきのふけふ
うと〳〵と盆夜ふりや猫の貝
人並や旅に着替の土用干
一輪に手紙もそへる牡丹かな
來てさわる風や蚤寐の枕哉
暗く里へ來ても珍らし時鳥
嫁り舜に旭の匂ふ牡丹哉
我老を知るや袷の前下り
白蓮や浮世の塵も無きあたり
後ろ見て開や前見て開古鳥
晩の月心一ッの留守居かな
鶏の羽たゝく音や五月晴
我影の笠に纏る暑さ哉
掛香や人にも花の一盛り
懐中へ入てかさなし夏羽織
田植に夕立雨や日廻り草
見渡しの果は不二なり稲の波
凋る、も涼し客待つ手洗鉢
子福者の門脈はしき蟻かな
夕立の洗ひ上けり禿山
切てから扱ひ重き牡丹哉
さなからに言葉も涼し扇賓
疑へは啼かぬにもなり時鳥
時鳥夜空に花を吹かせけり
夏羽織盃さして眺しけり
泥の手に鳴子受取る田植哉
雨はめて沈仕直す蚤寐哉
短か夜の置土産なり朝の露
睦ましき中に別ある涼みかな
三人か三人て開はと、きす
歌立の花となりけり初茄子
青梅を喰ふ顔人に移りけり

初嫁の笠新し、田植哉
花園へ水さすひまも手に扇
高楼にひつかけ帯や風涼る
出格子に蠅のはふや青簾
御扱川遠らぬ水の流れけり
よき月の座敷に曇る蚊遣哉
人聲の聞こへて遠し夏の山
よし切や田にもならぬふけ一ッ来て聞を助かす螢哉
簀笠の下や田植の一世帯
呼状の末に花柚の無心哉
蛍や老とかもへぬ今朝の聲
新蚊帳の匂ひも一夜二夜かな
朝寝して人の登にも喰はれ鳧
貰ふより飼りて嬉し初茄子
涼しさや徳のはなれた人の顔
夏痩や親の苦に病む様子
杜若切りたるまつく夏座敷
好の飯喰うても夏は痩にけり
夏座敷いつそ柱のなくも哉
夕立に洗ふて清し富士筑波
夕暮に扇忘るゝ初螢
日向路ひ暑さ呵て塵かな
郭公今日のは夢てなかりけり
何處迄も神の國なり田植歌
盥の出て行場歩行や夏の雨

白遠や大事に切て掴み活け
客留た夜を釣初る蚊帳哉
松風をたもとにひろふ扇かな
火を借りに来るや蛍寝の覚めぬ顔
螢籠杖にして越す閾の橋
二番草人はちいさく成りにけり
悪物は墨畫の竹や夏座敷
無き親の土産に切らん杜若
客になる隣もつらき暑哉
いこふとも冷水思ふ暑さ哉
笑ふ門日傘によけて通りけり
蛍や老とかもへぬ今朝の聲
已かかけ松にのこして時鳥
月涼し舟て待つとのみ使
横櫛の辻りそうなり初鰹
ぬれた葉に鼈の動く蛍かな
眠むたきを竹の子被に忘れけり
あらためた喰やうもなし初茄子
客立たあとへ涼風這入けり
風珍も氣の養ひや冷し麥
蝶々の影のなつかし青簾
涼しさや子は寝付しにかさ草
飛ふ蚤を押へつ追つ逃しけり
強らる、程近よれぬ牡丹哉

山松のみとりはとけて子規
捨らる、兒さへもゐるに蚌の上
蟬なくや山をひかへて豊旅籠
蜑ねは柳も暑き樹なりけり
て居ても耳を破らる虫の音
日々に捨つ机も入梅の句ひ哉
咄し音の休めす更け行夏の月
寐た牛をうこかす蠅のちから哉
川狩の逃せし鯉の噂さかな
習ふともなしに覚へて田植唄
我耳に今の初音そはとゝきす
幾度も月を酌みこひ清水哉
閑古鳥鳴や麓に家もなし
雲退た富士の高さや五月晴
五月雨や湖水にさゝむ鯉の音
三味線に羽織貸すけり花の雨
田へ配る水音碧く茂りかな
負た子の歌へるふなし螢狩
竹に鯉のぼりして孫の初節句
戸さゝぬに明た夜もあり夏の月
突立た足の短かし孕み鹿
六月や物の清きは蔵の内
開直す程は夜もなし時鳥
二番茶を待たる娘の癪哭
厄抜の置物も出たり土用干
葉から葉へ露ゆつりあふ蓮哉

人ならは偏屈者や百合の花
夜は朝の涼さに戻る裕かな
蚊の勢を凌ひて孝の蚊帳かな
五月雨や簀巻たやふな江の柳
金持も苦にする者ハ脇のあせ
日々に捨つ机も入梅の句ひ哉
蛍呼ふ螢川風に流れけり
蔕き茶に懐き風味あり青嶺
雲に燃付く鵜の篝
雪のある山も見へけり夏座敷
御車の中に忍る、櫻かな
面白ひ夢を中半や明安き
帰るさに團扇わする涼、み哉
明日もふ見られぬ夢を途中迄
楠入れぬ白髪や松の落葉掻
騰月空や見にけり時鳥
飛ふ螢圀にも風の見へにけり
蚊牛や打てもきかぬ椋の釘
夕立や急いて濡る、初の旅
親に子の負けぬ脊のひや今年竹
蚤に寝る不足話しや儘合井戸
かけひきを丸くつこふや團扇賣
如何せん我か身の皮の暑さかは
千代迄も涼しや孝の蚊帳かな
よきいろや早苗は人の命草
美しき初音や月のはと、きす
夕立や急いて濡る、初の旅
山の雨眺ひる庭や燕子花

濡れて立鳥の床しや影さくら
蚊の勢を凌ひて孝の蚊帳かな
音聞てまわり道する清水哉
苦も世話も須广に洗ふやちらぬまに
夕顔や主をとへは琵琶法師
清月や空に群あり郭公
暑い程猶手はこゝゆ氷賣り
葛水や花にゆかりの吉野盆
うつひくや重きうき名を被く鍋
刈はした麥の月夜や時鳥
咄しまて消して行けり火取虫
師の恩も浮はぬ哉や蚤狩
蚊ところと聞てふみこす泊り哉
病む母に涙まきらす蚊やり哉
見渡たして夏を忘る、梁の月
貧しきを知りてや窓に来る螢
木の影のうこく壘や夏の月
富士はまた白しとかさす扇哉
蚊遣り焚く頃をはけしき往来哉
磯山や沖のかたよりはと、きす
苦は楽の種と畑打男かな
聞てから急く峠の清水かな
かわゆさに寝た子た、くや額の蚊
賣ぬのに熟れた顔する西瓜賣
治まれる御代や頭兜も傍りもの
星人にかわれり氣色行螢

ひとつ来て筏の見ゆる螢かな
朝貝やまた星一つ花一つ
六月や掛鯛祝ふ湖の勝
屋根かへも出来し小寺や若楓
世のさまを見せて散けり茶子の花
手に持ちし團扇も荷なう夕涼み
盛る間も蚤生か夢の廿日草
過き去りて跡さつはりと驟雨哉
ちる花を繋きも留めす蓮の花
葉櫻や甑のわれにたまる雨
涼風や池の深さも扇丈
風の吹秋や雀は麥の鳥
雀にも圀の花咲く螢かな
後船を待た果報や郭公
親のなき子によふなれて雀の子
孝の家庭に湧き得清水かな
竹の子や寳うて行みは笹の露
鉋もちの出世噺やあやめ酒
暑き日や動きも見せぬ今年竹
雨風に繁き五月の黒牡丹
樓に通ふ風あり桐の花
夏虫や火を見てすくに飛てくる
田の水の爭ひ流す夕立かな
月にして其形見たし郭公
螢見の約束てきて豊寐かな
井の冷に腹を養ふ西瓜かな

蚤とれに鐘の聞ゆる清水哉
六月や掛鯛祝ふ湖の勝
屋根かへも出来し小寺や若楓
世のさまを見せて散けり茶子の花
手に持ちし團扇も荷なう夕涼み
盛る間も蚤生か夢の廿日草
過き去りて跡さつはりと驟雨哉
ちる花を繋きも留めす蓮の花
葉櫻や甑のわれにたまる雨
涼風や池の深さも扇丈
風の吹秋や雀は麥の鳥
雀にも圀の花咲く螢かな
後船を待た果報や郭公
親のなき子によふなれて雀の子
孝の家庭に湧き得清水かな
竹の子や寳うて行みは笹の露
鉋もちの出世噺やあやめ酒
暑き日や動きも見せぬ今年竹
雨風に繁き五月の黒牡丹
樓に通ふ風あり桐の花
夏虫や火を見てすくに飛てくる
田の水の爭ひ流す夕立かな
月にして其形見たし郭公
螢見の約束てきて豊寐かな
井の冷に腹を養ふ西瓜かな

海見ねて一ト道岡へは汗入る、峠哉
雲寐して起きてくるしきあつさ哉
夕立や宙なりつれて跡やさき
ひと日〳〵かはる眺や若葉山
春惜ひ名殘や夏の海霞
涼しさや舟へ断しの屋く家
締りよき扇の音や若楓
ひろくても寝心さわる蚊帳かな
はつ螢圀新しうかもひけり
藪移しして飛雨の螢哉
松原を濡網提けて夏の月
刎つるへおとす砌や五月晴
夕立やなかむる人に走る人
月も日も新らしうして更衣
月登て居る折も折はと、きす

草の戸や牡丹ありての假客
雨乞を利かせた空や田のそよき
ふり向けは遠音となりて郭公
黒雲に人の氣晴る、早り哉
一酔に幾夜待せて郭公
瀧と見てつもるあつさや忘れ扇
旅人も一ト息ついた木蔭かな
五月雨や雲又雲の重なりて
夕立や夕顔棚も假の宿
宇治の閨酔て行や飛はたる
井さらへや底から寒き人の酔
明易き夜も草の葉の雫かな
雪はめた松にも蝶のしくれ哉
時鳥帥や小窓の海明り
竹植し夜の寝心や雨の音
國の富しるしといわん除苗
母ひとり留守をあつかる田植かな
夜風や竹をならして月涼し
佐保姫は何處もくらし候の寳
よいとこに休み當たり時鳥
一ッ來た蚤に舟のかたきけり
朝顔や午より辰に喰われけり
なぞらへて嫁と見に行く牡丹哉
雷やふるなる光る夏の空
乞食の時節なれとも蚊になんき
卯の花や雪をあさひく夕明り

社間櫻の散た今宵哉　蟬鳴や蘢さまて來て消ゆるかと
庭一ぱ氣色と、のふ牡丹哉　虫干の品にもあるや世の移り
鐘の音もとろけるやうな暑さ哉　時鳥雨に位の付にけり
二の庭は關を越しけり不如歸　月に閑深き芦間や啼水鷄
月と我山と蝸とへ別れけり　書て有歌も涼しき扇かな
愛敬を味くときけり葛の水　夕鏑を乘せて來にけり青嵐
目に見ゆるもの、涼しき月夜哉　水無月や入る日見掛て馬にくら
納を向けて白帆かそへる岡扇かな　花巻た木とは思へぬ若葉かな
業棚や江に添ふ家の片廂　也けん子の機嫁
更ける夜も忘て蚊を追ふ窓た哉　また花の夢を見る夜や郭公
端居して寐惜しむ夏の月夜哉　崩れたら海や埋らん雲の峯
木戸〳〵て寢れは水鷄の叩きけり　出る癖をつけた一夜の納涼哉
短か夜やしふ〳〵起る起されて　跡ひ世を知らぬそふりやかたつむり
琴爪もしはしたゆひや時鳥　夕立か水かけ論を貰ひけり
風の井子さながら蝶も立にけり　閣と云ふ閣を螢の破りけり
大陽は貧富試驗や土用干　そりや來たといふより早し火取虫
しやつ脫いて又た樂しむ涼み哉　突きぬけて親にまさるや今年竹
酔醒て見れは月なりはと、きす　よい風に枕吹せて豊寐かな
子を拾て栴も此頃五月閣　小家には奢りかましを語る陣羽織
行〳〵山〳〵なり閑古鳥　涼しさや浴衣まふれの洗ひ髪
子のひまに親の肩揉涼みかな　上下に月あるあの涼みかな
九重廼繙き句ふ牡丹かな　花の時余所にした木の若葉かな
夏の日に秋をまちかね小百性　けふも又雨の降るなり栗の花
時鳥行衛は月に隠れけり　文水無月をくたくやくたく沖津波
ぬる蝶の夢も崩る、牡丹かな　佛から灌き初めたる産湯哉
時鳥啼ゆく方や島ひとつ　夕月の光り植込む門田哉

後家建るはしらは是か幟竿　月くるみ汲分て來る清水哉
夜涼みや月の雫の垂るまて　奇麗さにきれいな名なり美人草
蟬の啼木下や鴛のちから杖　指て行傘に名殘の夕日哉
人込をやつと出ぬけて扇哉　一ぱすみ皆汗に出るや雫の峯
そよかれは物も暑きすかた哉　夕立の來るやとた、く牛の尻
ぼつかりと若葉に月の殘りけり　大宮の午睡はさとれ蟬の聲
ふた親へ遣ひ分けたる團扇哉　此あたり水は茶によし時鳥　世の中の是も苦そ竹婦人
蚤や杖伐る破に老と啼　傘させは同し雷なり蓮の雨　只鳩の鳴ても暮る卯月哉
よい雨の降たも知らぬ黄寐哉　取ちらす冬着に暑さ時節かな　涼風や海をうしろの杉並木
廣い間や天井も高し夏座敷　涼しさや眼に見ゆるもの皆動く　側の木も障れはきりぬはつのほり
名も知らぬ草にも秋の待たれけり　乘う勝ては雲にやいらん競馬　獨り酒呑て豊寐ひる日永哉
袷着て用ありそうに出たりけり　二日來て涼しうしたり庭送り　月落て閨をぬい行螢かな
二日來て涼しうしたり庭送り　鉢添てくれてやりけり夏の菊　日々にまた花新なり一重芥子
都なるはと騒しき茶取虫　發いに小雨もはしき牡丹かな　飼鶏と垣を一重の牡丹哉
月花にはさとる辟や時鳥　松風の舌に殘るや心太　挨拶の揃ふ旦や五月晴
盆き見んと秋を占ふ青田哉　笑ふ子のもてはやされし涼茲　片笊を見れは石なり初松魚
夏やせの母をいたわる寐起哉　降ると見し空を流れて雲の峯　さゝゑても横にさす子の日傘哉
寐て夢を結ふか道ぬ蝸牛　五月雨や雫のきれぬ蓑と笠　蝿打てはころける棚の遠近かな
月花の望の外やすゝみ茲　水音も深き木の間やほと、きす　二三合夕立低し富士の峯
奥のある晴しの句ふ新茶哉　夕立や村里越して杉はやし　よし切や夜明の早き隠り船
五月雨や朝寐する戸も目に立す　山寺や花卯に庭の暮ゆとり　日盛や柳に眠る洗ひ馬
木にあまる花の重みや白牡丹　水打て庭の月かけ殖しけり　月涼し人の來ぬ夜は燈もつけす
余所か降る雨の裏吹蚊帳哉　花と聞く聲の月夜や時鳥　涼風や文机轉ふ筆のさや
唄も出ぬ花嫁交しる田植哉　向き向きに向た涼の斷哉　横に行螢もよしあし見分けゝり
夏の月影を添荷や黄ひ水　はけ山や扇つかいの見へてこす　世に遠く住む身に近き水鷄かな
投られたやうに寐て居る鹿の子哉　踊子や上手は輕き下駄の音　綿抜や女の多い古着市

吹通す風のとぎれや閑古鳥
芥子咲や回り道する水貰ひ
月の山や一酔空にはとゝぎす
禁酒して蚤の多きを覚えけり
涼しさや海を眞向の別座敷
夕明りさして際立つ青田哉
神代から動かぬ石や苔の花
見し程は窮屈なし船の蜘
夏果や蚊屋に名殘の鐘の音
六月や夜間も明けて客堂人
聞くと見て夢は覚めけり郭公
初茄子此菜かくれにもう一ッ
筒先て乳を呑て居る鹿の子かな
みしか夜を略に仕おけり嫁の君
青梅やそれと知らる、嫁が袖
一ッから殖へて夜を残す蚤かな
めつらしと云つゝあよく開帳かな
面影を打つ浪涼し橋の月
心から卸くや孝の團扇かな
居處な離れそ敷や夏の月
添乳した慈悲か仇なり蚤の跡
郭公暗空廣き雨夜かな
沖に出て風待つ船や雲の峰
香は色はあらわれて出る新茶哉
咳一つ日傘にうしろ向せけり
泉水の柳と二重青巒

金屏の光り靜める牡丹哉
手にもはなさぬ扇かな
水貰ふ手に蝶も休ろふ牡丹哉
吹れ来て蝶も休ろふ牡丹哉
日傘月にぬらして戻り鳧
余所を降る雨にそよ〳〵や釣り忘
夏影や誰か折敷し柴莊
見ぬ山の深さ思ふや夏氷り
田の鶴に添ふ豊の香や露涼し
柳よし水よし鮨の出商ひ
其末は千尋に垂る、清水かな
滿て来る汐や額りに鳴水鶏
閻もよし月は又よし時鳥
日の本の目出たさつきぬ田植哉
夏渡や帶しめて知る身のまわり
短夜の物には深し草の露
蒿水やいきれの匂ふ頃
山里や起出た儘の蚊屋の蚤
大空を横切る燕や時鳥
蝶暗や幹にちらりと松の脂
寐覚とはよい里の名や郭公
暑日やうそに聞ても九十九里
楠の水て吹く田面哉
蚤一ッ飛て四五人立たせけり
打水に親のはら迄涼む風や衣桁を走る衣
かはり来る眼に見へて秋に属るや翌の色

ちさい手に風の宣たし避團扇
三ッよれは共師やあらん蝸牛
笑濃近江一酔経、や時鳥
朝月のはのかに白し個の花
後へよる程人に勝つ田植かな
松に寄る心は暑き峠かな
稻妻や帶とけて来る隣の子
提て来た手の草臥れし牡丹かな
譯聞ねて蚊をよりけり涼み蚤
しまて謝ませもやらす火取虫
葉櫻を見て居るひとり二人哉
千金の夢や牡丹の朝ぼらけ
こゝろして歩行よけしの花盛り
竹の子や千代の始のあした哉
散り初てからか盛りや雫の花
照す日の暑さにかへん夏の月
杖の手に傳ふ雫や苔清水
蟬鳴や日の輝をすたれ越
短夜の朝も靡無き雀かな
戸を明て見れは月なり時鳥
釣瓶から蝶の立ちけり雲の峯
涼しさや浪音こうふ閣の上
能う實のりそふな娘の田植かな
姫君は供の扇團に隠れけり
盛火の光り看はし陽後の草
青隊潜れは余所てなかりけり

同し葉て同し名の無き新茶哉
花の世も昨日となつて初袷
鳥居まて揚る手柄や巣立鳥
五月雨の草になりけりこはれ麥
月にかわき日と濁色の岩菜かな
今日よりも明日お恩へは猶暑し
葉櫻や雨にさわぐる銅の骨
川骨の振もあらなる、暑さ哉
よそこめて山時鳥月に鳴く
湖の上は夜明てはと、きす
流れ来る船の涼しき墨田川
短夜の足にもたる、机かな
手偽の酢て浮雲なし初鰹
さす蚤に立て行儀を直しけり
竹の子や男結ひの里土産
蚤とりや瞼まれた仇き噛んてうち
早舟に出戻る数の群蚊かな
歯朗てねむけのさすや金魚賣
雨しみし葛屋の痩や時鳥
夕立やもの買足らぬ市戻り
一鉢の洗ひすゝきや湖の茶屋
来る友を起す間はなし時鳥
答こはれさせし乙矢や郭公
親の行先へはた、ね鹿の子哉
月も出て待兼山よはと、きす
暑き日や一入勝る紅の畑

朧に松風のふく清水哉
また雲に雨とふくみぬ夏の月
日や月の影も小暗き梅の雨
鑓墨の流る、川や杜若
山にまた出ぬ日のあたる時鳥
雪の苔はさらぬ戦きや今年竹
四五軒の村も奥あり夏木立
一ッ来て船をかたむく蚤かな
雷にきも玉一つとられけり
水無月や儲気を見する家根の草
夕立のはれて涼しき雨後の月
眠る子の手からぬかれて飛蚤
倒れ木に唐歌もある清水哉
放す子にまた付て来る蚤かな
川狩や小鮒てさらす魚のより
船の蚊の柳に戻る夜明哉
疊より席の上や夏の月
出抜けれはよい里のある茂り哉
炎天や眞黒なりし瓦屋根
蝉の花や蝶々の休處
月にして歸るつもりの畫寐哉
焚足して客に跡走の蚊遣哉
空もはれすさつきやみ
仰向て見れは雲なり時鳥
花の跡枯よと鳴か閑古鳥
涼しさや湖見はらして松一ト木

素戻りの子供に分ける蚤かな
夏の風柳の枝に宿りけり
涼しさに人酔高き夏の月
心より鳥も草きる青田哉
寐た親の方へと這る蚊遣哉
道問へは流れ蚊ひる暮哉
子の袷寒かろかと思ひけり
蝶も来て雨に合ひけり杜若
降り足らて見送る門や夏の雨
朝の間は霜に邪广な團扇かな
短夜や廊の狐の尾も見ね
逃ける蚊も見なから月の蚊遣哉
山風の持て来た酔や時鳥
下閣のうへに酔あり蜀魂
涼しさや水の面掃く竹の影
持かへて馬車通したる牡丹哉
草取や夕立雨のやんだあと
牛市のすみて静けて蝸牛
描除して月待様の蚊遣り哉
夜の雨や青田にさゆる朝心
松風の影を枕にひるねかな
月暗て晴行空やはと、きす
孝に寐る素肌はあつし蚊のうなり
叱られた母の戻しや閑古鳥
親の恩おもひは底し富士詣
はかなさを月に殘して火取虫

川狩や石を枕に昼休み
閻の夜の川筋白し時鳥
日は雲の綻ひ洩る、暑かな
玉造る程の夜てなし夏の露
風迄に去める氣のある若葉哉
引上るお氣か片手の幟哉
際かれし牛も居眠る夏木立
端居して月まつかけや夕す、み
白葵の一重に移る夜空哉
やれあつし美斗能麻貝波比君の恩
五月雨や朽ちしかさはす今日晴て
彩すきるあいた用のなき日傘哉
井戸迄は小一町あり夏の月
水提た片手は綿し杜若
是年の砧の歌や麥の秋
耳洗ふ流も持て夏座敷
蝶一つ來て氣遣ふや芥子の花
辨當の邪魔者となる暑かな
去つかりと早瀬に据る夏の月
遠山に雨雲見へて暑哉
短夜の明てゆる〳〵日の出哉
酔よしは遊山こゝろか田植哉
辻賣のうまく演舌るや一夜酒
草履と下駄片足〳〵や郭公
日さかりやしはら〳〵時へあかる鶏
淵も瀬も一つ清水の流れかな

蚤のあと語り合ふけり木賀宿
一納涼行くへき處はくればとて
柴の戸や礒を登る蝸牛
六月や仰けは涼し不二の雪
一聲を昔もおしひばと、きす
氏無をて左り團扇や玉の輿
抓む手の股より光る螢かな
はめてからまだ座につかぬ牡丹哉
また春と思ふてはせぬか時鳥
世のさまを映て見せけり芥子の花
遯さしと心して汲む清水かな
唯聞て居る夜てはなし郭公
世に馴れて塵に交る團扇かな
名殘おし顔見合せて清水哉
ひと走り親のあと追ふ鹿の子哉
又來るも暑の手紙かな
二親へあをき分たる蚊遣かな
給日傘や寢ても童の枕もと
短夜や昔し噺しも親子どし
身の無事に汚る、富士の行灰哉
はし姫のけしきや宇治の螢がり
何となく佛くさしや蓮の花
竹窓の添ふもゆかりか雀鮮
白蓮は夜もくらからぬ匂ひ哉
初鰹わさひ醤油のあたり時
朝起も嬉し卯月の川手水
迚もなら月の夜を暗け時鳥

人になる汗や百日祇
上野から匂ふて歸る陸奥のはて
雨乞の木魚につれし枝蛙
油斷なく伸て浮雲なし今年竹
さ、波もたつや青田の薄氣色
ねて讀て書てねて讀む夏期休み
早乙女の笠の裏照る朝日哉
つく〳〵と喫日待たる、牡丹哉
重ねても親のか上よ田植笠
短夜や今朝も雀に起おくれ
夏痩を嫁は苦にして尊けり
こわ〳〵につり鐘草く日傘かな
石山の月をひろふて涼みかな
百姓の痩ると肥る青田かな
今聞し酔は夢かや郭公
休ませて使を返す暑さかな
思ふ事水に流して富士詣
腹の虫鳴かせに來たり初鰹
生延るよふな心地そ初松魚
居りても氣の落着かす祭りの日
玉握る稗の上も暑さかな
視先に咽も出したる田植かな
葉櫻や老木に花の物わすれ
御座提て蚤蝨する處迚ひ哉
暑き日や馬の尾をふる日の匂ひ
夏の日や急に座敷か狹く見へ

蚊を焼いてねる内も蚊に喰れけり
窓あけて隣を招く新茶哉
來る人に松茸讓る夏野かな
不足なく調ふ孫の貸り衣
夕立やおくれた連はぬれてくる
移る世や花といふ間に時鳥
涼しさや一荷の水に月二ッ
月ひとつ夜道の友や杜宇
若やとて開れは又も水雞かな
くらかりやさくる團扇に踏當り
寐た親お叱りおこして納涼哉
文眼あからのしれぬに濡れ虎か雨
川風の抜けて通るや朝の蚊帳
格子にまて句ひの殘る新茶哉
松風にひるまぬ酔や時鳥
散る時に生る、風や芥子の花
腹掛や母が歩へし豫防藥
涼しさや船まつ宿の二日月
横臭に折目の跡や箱まくら
孝々に寢おくれた夜や時鳥
かわ花火ひもとは慥涼み舟
煙草火を明りに話す納涼かな
さを〳〵と山啼た日を衣かへ
坂下る晝さや上る人思ふ
六月や貰ふた水も拾をしき
なき親を思ひ出しけり蓮の花
扇よりしたしみ深き團扇哉

鯛取りも動かす蚤のちから哉
烟切りへ誘引る、日や單物
黒衣の間や盛の糸鍋
出代りし都なつかし麥の秋
艱険たこゝろ耻かし初松魚
呑まねから譽ひる肚の清水哉
桑つみや見ぬ九重の玉の輿
蠅ひとつ附きて來にけり贈り膳
蠶草や花の姿を水鏡
蚊の爲に夜はせまくなる座敷哉
水はなを價の外か夏氷
あしか夜もおこたりはなし水車
蝉なくや釣瓶から呑む水の味
月清し名高き淀の舟涼
夕立やまくり手白き最合傘
降らぎとも晴れぬ心を五月雨
鬼死はのは吹き出す暑さかな
豊寐する貞に障るや竹の影
枝傳ふ鳥のかげさす清水哉
あたりには汲む家もなき清水かな
親の恩返す團扇のあをり風
母衣蚊帳の寐顔覗くや旅戻り
涼しさや枕の下の水のおと
松の蔭扇く手招や青簾
居なからも見晴す庭や青嵐
月抱て共に明け、り白牡丹

孝〳〵の心に涼し證あふき
蚤飛て別となりぬ腕角力
涼しさや親を寐せたる月の船
子を持た果報日に〳〵ひる寐哉
月に日に伸て鮨よき青田哉
初かやにさも心地よき蚊かな
涼しさや沖の白帆の見ゆる家
富士山の高〳〵見ゆる夏野かな
扱月涼しへ車
いそぐ身もへット立寄る燕子花
憎い蚊も叩き兼けり子の寐顔
限りなく進む御代かや夏氷り
起されて夢た、みこむ蚊帳哉
酔て寐た人を釣り込む蚊帳哉
大空も水の色なり夏の月
數人歎ふ聲や夏の雨
夕立の後ろを見たり愛宕山
羽根蟻に手もさへられぬ垣手哉

傾ひた月か不足かはと、きす
船涼し月を前にし後にし
活もげて盥酒も上たき牡丹哉
子子や今が立世か一位
分別はまた付ぬのか百合の花
初かやにさも心地よき蚊かな
涼しさや沖の白帆の見ゆる家
兒も似よと柏餅の重も鷹蒔絵
斧あてぬ神の林や蝉時雨
蚊取かけ照りつつうつりて夏書の灯
痩れたる草鞋も輕き清水哉
松風に舞ふ折鶴や青簾
水にさす雲影もなしはと、きす
落したる簪さかす螢かな
生きて居るやうに握るや心太
涼み灯のこぼれて涼し水の上
捕ねしと思ふた螢空へ飛ぶ
ならひ居る客や團扇の貰風
切る時も活る工夫や杜若
涼しさや富士を見て居る風呂上り
夏痩や庭木廻りも保養ぶり
浦かへる灯の短夜におくれけり
暮目を殘して通るやたちかな
足る事の牡丹にわまる小家哉
洩る月も時を得顔や夏の雪
岩叩く音に引れし清水かな

て、虫や生魚を売る店の朝
追はれても〳〵も來る飯の蠅
なるなれは團扇にしたし夏の月
福守りの寐顔見て行暑かな
二時うり二人出合ふて逸走り
雫を汲む清水は酒の匂ひかな
星ちらと夜を詰て足りけり時鳥
寐てしらぬ顔にも見ゆる暑さ哉
虫干やあふみ八景の裾もやふ
瓜の香や月の影さすこぼれ庭
白過て日の暮にくき水の上
蓮の合の咲まて草にまぎれけり
一ト車軸流した跡や夏の月
千草の足にからまる暑かな
水音も風も潜るや籠枕
涼しさやすくうて見たき水の月
口あいて魂見られなひるね人
夕暮や水のうへまて風熏る
見る限り海原白し夏の月
時も時色も色なりはつ松魚
夕立や暑さしのきの置土産
氷屋の笑顔は今日の暑かな
四月烏待間聞間と夜の更る
埃り立つ丈の野風や蝉の聲
寐て知らぬ顔にも見ゆる暑かな
立やすき月日の中を豊寐哉

于長者と雷は
夕立や研き出したる月の富士
舞の手に咲つ苔みつ花扇
若葉時皆一色に明けにけり
蚤はめし柳邪魔なり杜鵑
時々は扇の動く豊寐哉
神の地は掃かても消し苔の花
我か影を母に踏せる暑かな
夕立に散るはたらきや庭の蟻
涼しさやひる寐用と書た寺
世に逢はぬ我か友にせん蝸牛
湯なから夕立暑き性來哉
ちか蜂の群を聞ても親の恩
苔には夜の殘りけり
なから行夏の旅
から風の生れけり

陽の夜へ月夜の雷る、哉り哉
待受た雨は來もせす蝉時雨
片手つ、乳ふさはなして更衣
軒裏の風鈴すゝしかやのうち
酒の席離れて遠ふ團扇哉
團によく來るや都の螢寐り
動ねは居るともしらし枝蛙
暮る、戸や夕かは棚の花明り
一人づゝ新し〳〵湧清水哉
青簾捲〳〵其先や帆の走る
山は雨里は照る日や蝉の聲
匙見れは首筋赤しはたるむし
巻たれは月の座敷や青簾
孝〳〵のみちの欲へや枝のはと
酒の席離れて遠ふ團扇哉
團によく來るや都の螢寐り
動ねは居るともしらし枝蛙
暮る、戸や夕かは棚の花明り
一人づゝ新し〳〵湧清水哉
青簾捲〳〵其先や帆の走る
山は雨里は照る日や蝉の聲
匙見れは首筋赤しはたるむし
巻たれは月の座敷や青簾
舞の手に咲つ苔みつ花扇
若葉時皆一色に明けにけり
蚤はめし柳邪魔なり杜鵑
時々は扇の動く豊寐哉
神の地は掃かても消し苔の花
我か影を母に踏せる暑かな
夕立に散るはたらきや庭の蟻
涼しさやひる寐用と書た寺
世に逢はぬ我か友にせん蝸牛
湯なから夕立暑き性來哉
ちか蜂の群を聞ても親の恩
苔には夜の殘りけり
なから行夏の旅
から風の生れけり

苔の花咲や氣高き神の庭　乞し雨降や神とも賓とも
菜柳や風と撫る舟の苫　夏の夜の寐付揃はぬ家並哉
蚊帳や蚊を抱いた袖の皺　けしの花器菜になりけり今道心
糸口のみたれて暑き手元哉　袖あて、夜にして見るや釜館
浦島か寐覚の床か暑の月　遠くから涼しさ見ていその船
寐る人は寐かして月の涼み哉　建添ねた座敷開きや初牡丹
夕立や兒を泣かする留主居同士　淺き夜に似ぬ味持や一夜酒
暑き日や無事を土産の旅戻り　秋ならてまるよしもなし早稻晩稻
見る夢の中や折ふし郭公　照り負けし草も雫や夏の月
五月雨や庵は茶を焚く朝煙り　ひと手桶庭木ぬらして團扇哉
叩かれた門に月あり郭公　苧子提て褒の近道戻りけり
涼しさや名利に淡き人の顔　未だ雪の重みは知らす今年竹
日盛や牛の涎の地に干く　短夜に日を繼足して朝寐哉
花も香におさる、蓮の夜明哉　時鳥鳴や山端に殘る月
夏はまた誠に貴し五十鈴川　夏菊や雲間洩る旭に茶も匂ふ
一ト木蔭添ふて汲よき清水かな　半から蚊屋へ持こひはなし哉
強過て見人に廻るや辻角力　松蔭や扇の下の帆かけ船
かりをしむ日に客の來る牡丹哉　早起は德の物かよ時鳥
松は早秋の聲あり土用干　湯上りの手に輕ふ取る團扇かな
雷に書けは富士も手輕き扇哉　夕立を後にまたり迎へ傘
雨になる風の立旭や雲の峰　涼しさや流れは庵の前後ろ
夏やせの筆に奇麗な力哉　うた、寐の夢にも遣ふ團扇哉
魚市やあるか中にも初松魚　竹青ふひと節見せて飛はたる
引綱の目をもる影や夏の月　似た色の人か遣ふや淺團扇
一ト年や片袖濕る、盆狩　御清水や神の心も此通り
五月雨や時をわすれぬ島の聲　人招く松蔭ありて心太

放す手に暇を乞して飛ふ螢　そつと過きそつと立なや枕蚊屋
星一重牡丹は八重に咲にけり　植る田の唄聞あける二階かな
若竹に脚もとる迄風の月　往てもく同し遠音や閑古鳥
吹盈す鳥も産毛や青あら、し　耳にたつ蟷子のたゝく哉
是はかり金てかはれぬ蚓の月　御鉄をひかへる乳母や茨の花
待し夜を擬夜重ねし時鳥　木下闇有明の夜は上にあり
切りかけて久きりおしむ牡丹哉　竹の子の竹を賣ふ筆かな
一ト畝植りして膳出すや安泊り　夕立の晴れて屋くや迎ひ傘
新樵る道の塵所や苔清水　咲たけの花皆見へて藤の棚
見心の一輪て足る牡丹哉　苅藁の蒸り一ト吹き拾ひけり
寐た親は知らて殺りぬ蚊帳の破　聞く人におしひはなにそ時鳥
三日月をぬれ手て拜む田植哉　川添の柳腹はす螢かな
一折に市を崩すや夏の雨　追ふてやるなさけはさらて火取虫
竹の子を賣ふ竹の雫かな　深山から夏を觸けり時鳥
風すじの見へて青田の戰哉　發心の云はれ聞せやけしはふ子
浮く様に小石の動く清水哉　乘てから馬士の取つく日傘かな
蚊遣して待や蝸うの母の杖　片山に盤りも置かて夏のあめ
角かくす巧みも有りて蝸牛　財斗結ふ程は蔓ある西瓜かな
弓張の月のそれ矢か郭公　見へぬはと與床かしさよ青簾
よく見れは濡てはいねと今年竹　寐た親は知らて殺りぬ蚊帳の破
夏き業も憂とは見へぬ鶏嗣哉　三日月をぬれ手て拜む田植哉
親おもふゆへ買ひはせる經かな　一折に市を崩すや夏の雨
落着の悪くて見安夏羽織　竹の子を賣ふ竹の雫かな
抱經や柳もさらぬ風の吹　風すじの見へて青田の戰哉
反古にして反古にもならす夏書哉　浮く様に小石の動く清水哉
石苔に消へ込ひ盞の螢かな　蚊遣して待や蝸うの母の杖
訣れ皆夫れ郭公郭公　角かくす巧みも有りて蝸牛
飛ふ螢の機里掛て妹背島　弓張の月のそれ矢か郭公
顔み寄る松も甲斐なし蝉丸くれ　見へぬはと與床かしさよ青簾
川添の柳も眠る晝哉　苅藁の蒸り一ト吹き拾ひけり
笹の葉にひる寐心か蝸牛　寐た親は知らて殺りぬ蚊帳の破
聞つけて膝立直す水鶏哉　三日月をぬれ手て拜む田植哉
一群を影にのこすや時鳥　一折に市を崩すや夏の雨
夕立の晴れて屋くや迎ひ傘　竹の子を賣ふ竹の雫かな
かた〳〵の下駄ぬらしけり杜若　風すじの見へて青田の戰哉
わきました先父上よ菖蒲湯　浮く様に小石の動く清水哉
鬼百合や今散る迄もつかみ合　蚊遣して待や蝸うの母の杖
脱いてまた蹇く汗やはつ島　片山に盤りも置かて夏のあめ
島原の月夜なつかし蝉丸　角かくす巧みも有りて蝸牛
旅人のあくひして行く四月哉　弓張の月のそれ矢か郭公
うへ見れは限りもなきに初鰹　見へぬはと與床かしさよ青簾
一群に三夜さまたせて郭公　訣れ皆夫れ郭公郭公
おやすみな群も涼しや京すゝみ　飛ふ螢の機里掛て妹背島
振袖は膝にか、へて團扇かな　顔み寄る松も甲斐なし蝉丸
組牛の峠ねり行く暑さかな　笹の葉にひる寐心か蝸牛
看經の後ろに孝の團扇かな　聞つけて膝立直す水鶏哉
百合の落込淺や閑古鳥　一群を影にのこすや時鳥
引提て見ても魚なり初鰹　夕立の晴れて屋くや迎ひ傘
引き鳥の影に添ひ行く暑さ哉　かた〳〵の下駄ぬらしけり杜若
誂ひた料理待つ間の晝寐哉　わきました先父上よ菖蒲湯
雨殘る庭木の蔭や涼み哉　鬼百合や今散る迄もつかみ合
出て見れは歸りを急ぐ夏の月　脱いてまた蹇く汗やはつ島

よろ〳〵と熊笹ぬけて百合の花
手をうては尚は高うなる螢かな
井に放す鮒を見に立つ岡扇哉
泥水の中に奇麗な田植かな
風抱へて清水にやすむ山路哉
持歩行やうそ夏野の通り雨
されはとていつ袈るらん行々子
ころ〳〵と鳴や夕立まらし雨
夕顔や湯揚り肌の眞白き
鐘の音の元へ戻るや夏木立
水鉢に青い涙うつ若葉かな
ともしもつ手元計りや五月暗
父母を思ふ旅寐やほと、きす
手のと、くやうな螢や水の上
富士涼し浮世の塵も忘れつ、
朝の魚取る音や夏の月
杜若傘さしかけて伐らせけり
涼し湯を親に讓りて夕涼み
雇われて賑いたといふ田植哉
夕暮や夫婦中よく門涼み
芥子の蝶散ると立つとに別れけり
御座敷て客を持なす扇かな
干る内を裸で待つや夏衣
寒い程涼しき磯の二階哉
〆切の座敷にも寐し火取虫
避ふ子を遮見圍れや丘の花

退て橋越れは戻る螢かな
富士颪箱根に光る若葉かな
迹にくたけて入や夏の月
泥水の中に奇麗な田植かな
雨とのみ書くや五月の旅日記
風抱へて清水にやすむ山路哉
此里は誰か住居かほと、きす
持歩行やうそ夏野の通り雨
短か夜や奇麗に明けて東山
されはとていつ袈るらん行々子
碑の文字は消ねて讀まれす閑古鳥
ころ〳〵と鳴や夕立まらし雨
一醒に競さと行かほと、きす
夕顔や湯揚り肌の眞白き
鐘に月のさしけり螂の中
窓なりに朝貝を見よと起すも親の慈悲
水鉢に青い涙うつ若葉かな
朝貝を見よと起すも親の慈悲
ともしもつ手元計りや五月暗
追ふたとて〳〵來る飯の蠅
父母を思ふ旅寐やほと、きす
夕立を親の仰せてしのぎけり
手のと、くやうな螢や水の上
二ヶ親の無事涼しかる便りかな
富士涼し浮世の塵も忘れつ、
夕立や晴れ間に見ゆる星一ッ
朝の魚取る音や夏の月
夕立や無沙汰をわびて雨やとり
杜若傘さしかけて伐らせけり
暑めて居る雨やからりと夏の月
涼し湯を親に讓りて夕涼み
水はまた田に新らしき卯月哉
雇われて賑いたといふ田植哉
捨られて拾ふ命や火取虫
夕暮や夫婦中よく門涼み
月すいし飼ふて見たさは都鳥
芥子の蝶散ると立つとに別れけり
伏し拜ひ千切の鐙や土用干
御座敷て客を持なす扇かな
取にがす螢や花のちるおもい
干る内を裸で待つや夏衣
傘の油もぬけて五月雨
嚏心まて洗ふて涼し五十鈴川
寒い程涼しき磯の二階哉
晴たのは梢かくうかほと、きす
〆切の座敷にも寐し火取虫
嶂鳴や朝から暑き雲の色
避ふ子を遮見圍れや丘の花
蚊遣うしても姑泪こはしけり
わが家て居ところさかす暑哉

ばい蚤たばいと指にて押へけり
鳥は寐た人は世て行く涼みかな
夕立や晴れて跡なしといの湖
舟よりも涼し舟から見ゆる家
たび人の雲見て行くや枝蛙
乳を添へて紙の螢をはなしけり
川一重へたて、照らす螢かな
手を出せば人の手にある螢かな
身の巾に足らぬ處に蚤寐哉
齣る氣の手細にひいくあら絽哉
すら〳〵とのびて根強し今年竹
恥しい名をかさねけりつく〳〵鍋
清水はたとんと忘れし扇哉
寐かへれば辷る枕や竹むしろ
有明に醒も見へけり郭公
野の清水夜に入る音もおしみけり
ひとつ家のくるりを叩、水鶏哉
五月雨に疊のかびや夏の霜
蠅追ふて火入の灰を散らしけり
夏の夜の夢を水鶏に取られけり
親の恩孫もかひりぬ枕蚊帳
そつと釣る蚊帳の下には親一人
冷たさか昧の一ッや心太
涼しさや親の冒葉の扇かな
浮き沈みぼうふり虫の浮世かな

取てから見れは小さき螢かな
落る日に雫の昇る青田哉
袈もすきて及初孫の帳かな
迫て聞うるさくなたり笠の蠅
美くしい朝の別れや竹婦人
下を見て兒の恩知る蚊帳かな
行く人のはなし途切て郭公
扇荒川の水の清さや夕納涼
智くは松も醒なき暑さ哉
暑き日は酒も及はぬ水のあし
富士獨り別の浮世や夏の月
風に火は消へす螢の集めかて
笋やはると伸しの孝二ッ
遥くき蚊を叩かれもせす子の寐顔
啼すとも思ふ空なり郭公
ゆかしげに雲も抱き寐や竹婦人
暑き日やのんだ自慢の水瞳
月涼し涼し涙花か天滿はし
獨居のそれさへ淋し閑古鳥
紅かねして鳥も蹈らし今年竹
ねつ〳〵まで親をのはくや蚊屋の内
狹く身にもなればし居智き蚊遣哉
都合よき螢る盛りや閨廻り
蓮の葉に盃向けてあり烟草盆
涼しさや柳にさわる水の音
舌にをだ殘る新茶の風味哉

松風を打消すやうや蟬の聲
嫁死にも草のそたちや五月雨
月の柄にさしたらはよき團扇哉
後田のか先になりけりくらへ馬
河骨や根元に蹙も活けて置き
月よさについ〳〵永し門納涼
子は智恵の伸て短かき袷哉
一ト聲を誰に恥るや郭公
挨拶の先から出す團扇かな
片山の一ト聲を誰に恥るや郭公
追出した蚊に喰われけり門納涼
月迄は顧はぬ者を涼み船
雲踏んた心美くし不二詣ふて
絹の蚊帳見ても涼しい寐顔哉
根上りの松の下から日傘かな
着たと言ふ心に重し海羽織
草波の上をた、よふ螢哉
轉寢の夢につい夜は明にけり
醒先へ椎の落葉や杜宇
寐かす子の寐いらて母の豊寐かな
友の來てすゝしき噺しや夕涼
たいひとりむすふも惜き清水哉
嬉しいは母の笑顔そ初茄子
銀屏に翌みは尽りぬ夏座敷
涼しさや竹にこはる、竹の月
笑ふてもふ落そふなけしの花

一人來てもの憂き邊の花見哉
つれ〳〵に人を待つ夜や鴨水鍋
二醒の中に山あり時鳥
寐隠れに翌日の花あり杜若
醒先は誰か曙そ郭公
孝々なうちは道いや蚊帳の中
親の無事聞て涼しき旅寐哉
水音のして谷深し閑古鳥
蚊遣火に紛らす孝の涙哉
夏の來てまた若葉や三かさ山
ひと座敷笑ひにしたり火取虫
掛たれば山もよするか青嵐
山里や卯月盛りに鶫の醒
夕立や案山子の笠をかりにけり
花はすき月のはなしや夕涼
蚤まけの夜ふかに聞や郭公
夕立を待つや月さへもる家に
散るよふに湯を放れけり施蚤
風招く柳の下や心太
夕立に孫の片袖濡しけり
鳴き頻きり暑さ配るや蟬の聲
十日の雨に二度あふ牡丹哉
たとり行浮世の道や五月雨
追れては翠神へ戻る蚤哉
川あり中や青田の中に帆の見ゆる
ころけ落そふな處ろに蚤寐哉

灰吹の中へひねるや蚤一ッ
南天の花や小雨も十日越し
明渡る石燈籠や木下闇
わか鮎やつなくに足らぬ草の丈
喫掬ふ程は夜はなし杜若
掛けたれは風の見へけり青簾
水みせもにきわし夏の月夜哉
臭深く見ゆる住居や青すだれ
來る人を話相手や門涼
涼しさやいく度らんお消る家
引きあるは何處の清水を心太
下草はしつくに寄せて若楓
風鈴の音爽や庵涼し
とちへ舟つけても堪へぬ暑さ哉
子守る子も一人り前なり田植時
夕風に母をとらせて涼み船
離れ家に來る客多し夏の月
白雨や薩陀越れは日は鮮
遣喫や火入にもたぬ焚おとし
日の入りて日傘忘れて來たりけり
筑広鍋我か子に貝をかくしけり
裏町は棟もわからす蚊遣哉
二ッこりと笑ふて立つや更衣
涼ませよ牛も引出す木下哉
當り矢のよふ辞高しわか葉影
山根から夜の明けかゝる卯月哉

こゝろへて夜に入る旅や夏の月
湖の見ゆる住居や夏の月
朝寐する人も來るなり蓮見時
短夜もまつ間は長しほゝきす
抱て寐て浮名も立たす竹婦人
盃を置けは手の行扇かな
馬車の音にはこりも白し雲の峯
竹植てかけ又涼し窓の月
梅の實をふり落しけり雨の音
涼しさや捲ふ流る、川の音
定めなき空や五月の山の雲
花の香の袖をしみけり更衣
小流れの裾縫ふ蛭の游き哉
蔀し戸やけふは何して居らる、そ
蚊帳釣りする氣になるや初袷
行すきた友よひもとす清水哉
てる句ひた、み込たる日傘哉
おにあさみ名に似ぬ花の咲にけり
拂ふ手の下を飛ひ行螢哉
六月や其日〳〵の水撰み
草の戸も、れぬ初日のめくみ哉
閨にさへ罪の見ゆるや鵜川の火
花の氣は未た落付かす時鳥
葉かくれの花もあるなり池の蓮
涼風の上り込みけり竹格子
海原に月は落けり郭公
山此暁の清水哉

竹はただ雀に動く暑さかな
源は弓て突出す清水かな
短夜もまつ間は長しほゝきす
抱て寐て浮名も立たす竹婦人
盃を置けは手の行扇かな
馬車の音にはこりも白し雲の峯
竹植てかけ又涼し窓の月
梅の實をふり落しけり雨の音
涼しさや捲ふ流る、川の音
定めなき空や五月の山の雲
吹通す風の冷たしわか葉かけ
風道を明けて置けり土用干
雨乞や人の力に動くそら
蔀し戸やけふは何して居らる、そ
蚊帳釣りする氣になるや初袷
二度晨なり難き日を螢哉
花を見た山から來たり郭公
飲さして矢立に入ス清水哉
朝顔や夏と秋との一重垣
柳さへ眠り垂たる暑さ哉
雞の音に月を見捨る涼みかな
よい風を招く扇の要かな
菖蒲太刀勝負なき世を飾りけり
鳥居から影疊みこむ日傘かな
暁牡丹机に夢のさまし時
富士詣高き望のかこいけり
親扇く團扇に丸き家内哉

月の笹影け顔塩てし行納涼
折水や風の生る、松の艶
宵越の花とは見へす燕子花
雛棚へ來しそむかしの娘の君
隠れなき闇に狩らる、蚤かな
遣ふとり鴨すに措しき扇かな
一ト碟瞬く日間に夕立かな
鮎釣や慾を離れて慾の海
竹の子の末頼もしや育ふり
加茂川や堤つれいに飛ふほたる
掏休む水唐臼や雲の峯
きえに來る夫も逃ひや火取虫
涼しさや客に馳走の亭主振
行燈に留主守らせて夏の月
牛繋く軒の晷さよ午の刻
惜まる、身の散り安し美人草
行燈に留守をさせるや夏の月
呉竹にはや飾みへてはつ蟹
次の間へ出て涼しかる給使かな
鍋祭り一重は貞婦孝女かな
補入れの替へても試たし田植哉
投げ遣りの破垣匂ふ卯花かな
雀子の神輿かる、土産哉
夕やけの空に慶かる蟬の聲
戸もさゝぬ御代となりけり夏の月
夢天や泡立てある池の水

東風吹や七五三の動きも脹はしき
遣さくや白帆の見へるまわり椽
海原に根ざして高し雲の峯
笠とれてしるや田植の姉妹
句ひよき茶山の雨や時鳥
松の葉も動かぬ熱き蟬の聲
風あり〳〵と招く木陰や夕涼み
す、しさや水さく〳〵來る竹の風
夕立や女の手傳ふ麥俵
一重つゝ飲て日のたつはたん哉
何の木から風は薫るそ神の庭
戸さゝぬに寐る君か代や夏の月
蝸牛かへからしたね水鏡
暑き日も柳は風のやとり哉
青葉だと掃けは飛けり木の蛙
道問へは皆動きけり田植笠
念の入る庭の掃除や白牡丹
舟て來て舟て戻るや夏座敷
牡丹見や飛石傳ふ繭草履
朝の事忘る、はどの日なか、な
村雨や登も水鶏の忍ひ戸
月を吐く雲のときれや時鳥
涼しさや家の名を寳る門の松
下戸までも膝をならへて菖蒲酒
一醒は暗おしわけて郭公
旅枕寐付ぬ夜半や時鳥

蚤亂や子より預ふ親の暇
聞き學の行燈ともさぬ蚤かな
低ふ咲き高う暑る、牡丹かな
蚊の聲やひるは茂し庭の角
雨のふる日を待かねて枝蛙
無水月や根迄風かぬ草の雨
流星と見れは空飛ふ蚤哉
汚れても身は住吉の田植哉
殘りなく付て嬉しき接穂かな
閨を押し分て蚤の行衛哉
涼しさや眞帆にうけたる夕景色
孝行に使ふ團扇や薫る風
人込の中を出拔けて扇かな
新聞の來て眼を覺す晝寢哉
窓に來る潮の匂ひや夏の月
むすふ手に響さを量る清水哉
一枝も両手に重き牡丹哉
瀧音にこゝろすまして晝寢哉
雨二ッ三ッてはれて熱さ哉
川狩や親の敎に逆す魚
茸ひとつ入梅の去るしや槇社
涼しいといふ聲高し橋の上
夕立てけふのあつさを忘れけり
老を啼く蟲若葉かくれ哉
嗚呼いゝと云ふ間に消ゆる花火哉
手車の音忍はして蚤狩

灰吹の中へひねるや蚤一ッ
南天の花や小雨も十日越し
明殘る石燈籠や木下闇
わか鮎やつなくに足らぬ草の丈
喫掬ふ程は夜はなし杜若
掛けたれは風の見へけり青簾
水みせもにきわし夏の月夜哉
臭深く見ゆる住居や青すだれ
來る人を話相手や門涼
涼しさやいく度ちんぷ消る家
引きあるは何處の清水そ心太
下草はしつくに寄せて若楓
風鈴の音爽や庵涼し
とちへ舟つけても堪へぬ暑さ哉
夕風に梅をとらせて涼み船
離れ家に來る客多し夏の月
白雨や蕗苳越れは日は峠
道咲や火入にもたぬ焚おとし
日の入りて日傘忘れて來たりけり
筑广鍋我か子に貝をかくしけり
袋町は棟もわからす蚊遣哉
二ッこりと笑ふて立つや更衣
涼ませよ牛も引出す木下哉
當り矢のよふ聲高しわか葉影
山根から夜の明けかゝる卯月哉

こゝろへて夜に入る旅や夏の月
湖の見ゆる住居や夏の月
朝寐する人も來るなり蓮見時
はんかちに清水もて行暑哉
盃を置けは手の行扇かな
馬車の脊にはこりも白し雲の峯
竹植てかけ又涼し窓の月
梅の實をふり落しけり雨の音
涼しさや蹤ふ流るゝ川の音
定めなき空や五月の山の雲
花の香の袖をしみけり更衣
小流れの碇縫ふ蛭の游き哉
蹟しかのつまつき隱す扇かな
蚤中は雀さへ來ね干飯哉
行すきた友よひもとす清水哉
てる匂ひたゝみ込たる日傘哉
おにあさみ名に似ぬ花の映にけり
拂ふ手の下を飛ひ行蚤哉
六月や其日〳〵の水撰み
草の戸も、れぬ初日のめくみ哉
閣にさへ罪の見ゆるや鵜川の火
花の氣は未た落付かす時鳥
葉かくれの花もあるなり池の蓮
涼風の辻り込みけり竹格子
海原に月は落けり郭公
越の山此腸の清水哉

竹はただ雀に動く暑さかな
源は弓て突出す清水かな
短夜もまつ間は長しほとゝきす
抱て寐て浮名も立たす竹婦人
子規暗や小解てた、く隱居の戸
棟上の餅あふなかる雪丹かな
大關を動かす蚤の力哉
上風も下露もなし百合の花
帷子や内で案事た雨しらき
吹通す風の冷たしわか葉かけ
風道を明けて置けり土用干
雨乞や人の力に動くそら
蹟し戸やけふは何して居らる、ぞ
神參りする氣になるや初袷
二度晨なり雛き日を豊寐哉
花を見た山から來たり郭公
飲さして矢立に入ス清水哉
朝顏や夏と秋との一重垣
柳さへ眠り垂たる暑さ哉
雞の音に月を見拾る涼みかな
よい風を招く扇の要かな
菖蒲太刀勝負なき世を飾りけり
鳥居から彫疊みこむ日傘かな
暎牡丹机に夢のさまし時
富士詣高き望のかこいけり
親扇く團扇に丸き家内哉

月の筵影け顏塩てし行納涼
折水や風の生る、松の艶
宵越の花とは見へす燕子花
雛祠へ來しそひかしの嫁の君
隱れなき間に狩らる、蚤かな
遁ふよろ鳴すに措しき扇かな
一ト碌睜く日間に夕立かな
鮎釣や慾を離れて慾の海
竹の子の衣頼もしや育ふより
加茂川や是つたいに飛ふほたる
搗休む水唐臼や雲の峯
きえに來る夫も迷ひや火取虫
涼しさや客に馳走の亭主振
行燈に留主守らせて夏の月
牛繋く軒の暑さよ午の刻
惜まる、身の散り安し美人草
行燈に留守をさせるや夏の月
昊竹にはや飾みへてはつ蟹
次の間へ出て涼しかる給使かな
鍋祭り一重に貞婦孝女かな
補入れの替へても試たし田植哉
投げ遣りの破垣匂ふ卯花かな
雛子の執着かる、土產哉
夕やけの空に廣かる蟬の聲
戸もさゝぬ御代となりけり夏の月
雲天や泡立てある池の水

東風吹や七五三の動きも脹はしき
遲さくや白帆の見へるまわり椽
海原に根ざして高し雲の峯
笠とれてしるや田植の姉妹
匂ひよき茶山の雨や時鳥
松の葉ずれ風ありと招く木陰や夕涼み
す、しさや水さく〳〵來る竹の風
夕立やみ麥俵一重つゝ
何の木から風は薰るそ神の庭
戸さゝぬ君か代や夏の月
蝸牛かへからしたね水鏡
暑き日も柳は風のやとり哉
青葉だと掃けは飛けり木の蛙
道問へは皆動きけり田植笠
念の入る庭の掃除や白牡丹
舟て來て戻るや夏座敷
牡丹見や飛石傳ふ蘚草履
朝の事忘る、はとの日なか、な
村雨や蜜も水鷄の忍ひ聲
月を吐く雲のときれや時鳥
涼しさや家の名を窺る門の松
下戸までも膝をならへて菖蒲酒
一聲は暗おしわけて郭公
旅枕寐付ぬ夜半や時鳥

雹亂や子より煩ふ親の膽
聞き學の行燈ともさぬ盛かな
低ふ咲き高う響る、牡丹かな
蚊の聲やひるは茂し庭の角
雨のふる日を待かねて枝蛙
無水月や根迄風かぬ草の雨
流星と見れは空飛ふ螢哉
汚れても身は住吉の田植哉
殘りなく付て嬉しき挨穗かな
闇を押し分て蚤の行衞哉
涼しさや眞帆にうけたる夕景色
孝行に使ふ團扇や薰る風
人込の中を出扱けて扇かな
新聞の來て眠を覺す昼寐哉
窓に來る潮の匂ひや夏の月
ひすゝ手に暑さを量る清水哉
一枝も興手に重き牡丹哉
瀧君にて、ろすまして晝寐哉
雨二ッ三ッてはれて熱さ哉
川狩や親の敎に逆す魚
茸ひとつ入梅の去るしや槇社
涼しいといふ聲高し橋の上
夕立てけふのあつさを忘れけり
老を暗く靈若葉かくれ哉
鶏呼いと云ふ間に消ゆる花火哉
手車の昔忍はして蚤狩

同胞のなさけに我れも時鳥
起されて面ふくらせる昼寝哉
明しらむ花に人なし鹿の子哉
短夜の永き眸しや旅民り
盆程の池も持ちたし杜若
春の花袖から散るや土用干
蚊にこまる蚊も又こまる團扇かな
雨をたてぬきに一聲時鳥
漁火や涼しさふゑる浪花潟
馬の脊を別て降りけり夏の雨
植上げた夕風清き門田哉
短夜や硯の海に明る月
涼しさや大木の中の休み處
涼しさや月は流れの上と下
沙風の裏積取戻せ今朝の入海
いらぬ間もあらて涼しき泊り哉
玄を買も茶買もこぬや五月雨
猶さへもひなたをよける暑かな
さしても消るや入梅の黄の火
盛頭に汗をかゝせて涼み哉
富士の山片手て遮ふ扇哉
露は草風れてなくはをゝきす
土手哀の續日に伸し麥嵐かな
夏り蔭にすさる呼人や初松魚
覗く夏蝶の生る、牡丹かな
橋涼し月に柳の影ふんて
提けて行く網の雫や夏の月
蒸る真のやさしき鹿の子哉
蚊柱の崩れた跡や椽の月
待煎て聞はつゝしけり時鳥
雨はろり月に水雞の鳴夜哉
巣の蜂の亂れて忍ふ日傘哉
木羽船に紙の白帆や牡若
夜の雨に眦際ぬる、若葉かな
川狩や素肌に着たる破れ簑
辨當の日除にしたり田植笠
足もとは川になりけり飛螢
明殘る星を見にけり郭公
ちりひとつ眼にもかゝらぬ青田哉
下紐のとけ子にも纐纈の雫哉
卵のなき子にも纐纈の雫哉
我か汗て人の身冷き氷室
舟からも涼むに來たり橋の上
風一荷擔ふて暑し團扇うり
なかき日の心に心おはれけり
山はかり衣更へ見る眼哉かまきり
山はまた晝かて消す時鳥
花咲て低きのはかたけて通る日傘哉
近寄し山から先ゐ笑ひけり
花咲て低き牡丹の木ふりかな
葉となりて易き立居の櫻かな
月にしてそしてそして赤見る牡丹哉
うつむいて咲日の待つやけしの花
戸さゝぬは山家の常か時鳥
船に來て午時の暑を流しけり
暗なから出て見る空や時鳥
水打た庭に生る、月夜かな
庵涼し障子は何日も明けはなし
緣談の小口を鳴らす扇かな
田を植へて先う君か代を祝ひけり
涼しさや柳を洩る露の月
御濱出る舟に香のあるす、みかな
僚所を降る雨見て聞か枝蛙
又うれし櫻はちりて若葉かな
庭草や昨日の雨に二日ぶり
手まくらや扇を顔に涼塞
葉隱れの茄子見出すや雷の雨
裸とは誰れも氣付ぬ風と月
はねそうな扱ひふりや初鰹
面白き浪の雫やわかのうた
芥子提て乘り後れけり渡し舟

綠られた朝寢の癖や木綿蚊帳
起されて手足を伸はす晝寢かな
打水の禮言に出る隣かな
里の子はもう着て來たり單衣
團扇賣り風を荷のふて歩行けり
夕立に洗われて出ぬ山の月
朝かはや未だほし一ト つ花一つ
稚子の手の內ぬけて蓋かな
梅櫻庭を競ふて茂りかな
寐た門へ魚荷の付や夏の月
笑ひ顏まてもよくにて二子山
老けた山降りの山は笑ひけり
寢せたのは子故の暗か蚊遣哉
初茄子酒呑かけてきらせけり
日にやけし顏に化粧や夏祭り
時來れは名曾の森も若葉かな
傘かりた禮に添へけり花菖蒲
ある角も隱す浮世や蝸牛
てら〳〵と砂の光りや夏の月
斧打て木かけに寢たる晝哉
こゝろ見て共れから孫の初單衣
歌に何に身は長りたらす時鳥
鮮寶りて評判になる娘かな
新らしき風の立けり青すだれ
蝸牛や釘利きおるき板ひさし
長居してもふむものなり時鳥
涼しさや此處は浪花の浪花ばし
五月雨や今朝は〳〵と待新聞
湯上りの盥を橋まて涼みかな
雨の後一際色の若葉かな
波に裾濡すもさゝら夏の月
照りつゝく野邊の晝さに油滴水
恨しくて戻る途中や時鳥
短夜を吹き消す朝の灯し哉
寢付〳〵子にそつとかふせし枕蚊帳
節なれは人にもたれる團扇かな
短夜の名殘や門の行燈の火
鈴なりになる青梅や神の庭
朝起の奈良も忘る短夜かな
となりにも外て酒呑む田植哉
寢の音のいよ〳〵床し御簾の內
早飯や水を蒔く間の馴れ加減
世の人に飽せぬ水や玉に疵
月のさす方へ消るや盞の火
涼しさや富士見て居れは裏うなる
若なれねば借たやうなり初袷
入梅晴て山二ッ三ッ見越けり
咲滿て庭の小狹き牡丹哉
夕立や垂柳の糸えづく
群る、蚊の聲に力士も逃に飽
初松魚喧嘩の中を通りけり
二三日椽の空るき秋かな
蚊柱は月に崩れて風薫る
氷室守る人は浮世の別こゝろ
取りに來てみなとられけり火取虫
柳より先きに風もつ蟬かな
見るものを磐て牡丹の女客
信心の湧く遊地や法の德
夜は盞ひるは晝さのすて處
千金の價の風や夏座敷
陽炎や動て見ゆる池の鳥
かた足は秋にまた來し茅の輪哉
夏菊や奇麗に晴る、朝の雨
時鳥啼や夜明の湖の上
凉風やそつと奥野の朝あらし
水に浮く月動すや水馬
鳴かぬから鳴かぬと鳴け上時鳥
郭公ちめもかくさぬ初音哉
五月雨や掃は崩る、竹箒
片釣りに子を寢かしけり晝の蚊帳
まがらきに子は育てたし今年竹
大寺の留守の淋しや夏木立
呼て居る方へは行ぬ盞かな
水寶の聲高めかしけり日の盛
取落す盞かちきは飛にけり
涼しさや水夫ねころふ青疊
香の浮て流る、池やかきつはた

命さしてかた手に持やかきつはた
人香に脊を出す魚や蓮の花
帷子や流し廻りは人まかせ
雨乾く俄日和や飛ふ羽蟻
もゆる火を消して蚊遣の馳走哉
眼に見ゑて月日の立や今年竹
夏のきてそよ吹風もはの温し
今雨の晴れた斗りや蝉の聲
言ひ兼し戀夏痩となりにけり
水を出て水に落ちけり夏の月
實になりて見れは唾らし一重芥子
風景は盃にあり夏の山
人先に袷着るのも親の恩
なまけもの甚寝して聞く田植哉
湯の様になる田の水や雲の峯
呑んて來て人に敷へる清水かな
盆さゐも床の上にて茂りかな
雲と水わかれて遠の匂ひかな
倒れ跡に猶も駈出る蛍かな
かた足は田へふみ込て螢とり
旅人を休ます山の清水かな
夕納涼月は清に流れけり
葉柳の下に踊るや杭柄杓
單へさて出入あさや竹のれん
夕涼みかねて川邊に螢かり
牛追ふて松に啼く蝉たゝせけり

酬かねて浚く暑さや温泉場
雨摸様なりて暑さの峠かな
流れある、涼み哉
帯といて寝る夜は近し時鳥
もゆる火を消して蚊遣の馳走哉
眼に見ゑて月日の立や今年竹
夏のきてそよ吹風もはの温し
今雨の晴れた斗りや蝉の聲
言ひ兼し戀夏痩となりにけり
水を出て水に落ちけり夏の月
實になりて見れは唾らし一重芥子
風景は盃にあり夏の山
人先に袷着るのも親の恩
なまけもの甚寝して聞く田植哉
湯の様になる田の水や雲の峯
呑んて來て人に敷へる清水かな
盆さゐも床の上にて茂りかな
雲と水わかれて遠の匂ひかな
倒れ跡に猶も駈出る蛍かな
かた足は田へふみ込て螢とり
旅人を休ます山の清水かな
夕納涼月は清に流れけり
葉柳の下に踊るや杭柄杓
單へさて出入あさや竹のれん
夕涼みかねて川邊に螢かり
牛追ふて松に啼く蝉たゝせけり

朝顔や送り出したる泊り客
竹つけた馬のふり出す螢かな
手習も孝に追はれて氷豆り
涼しさや戻る際なき松の月
親子して並んて唄ふ田植唄
唐崎の松に余るや蝉の聲
宵はれに客の手當や杜若
簿もの、落こなしに増す思ひ哉
夕立や去りへの門もひとはしり
邪魔な木も切りそ、くれて若葉哉
夕顔や飯借りに來る垣隣り
息りの無きを誉れや行々子
おこさる、用を覺この豊庭哉
流れ行世は廣澤や水葵落
掛たれば巻くせかあり青簾
夕立やぬれなりて來る旅客
秘蔵に並んて高し桐の花
跡かけて馬引く橋や行々子
暑き日も行儀亂さぬ親の前
夕立の晴れ行くあとや松の月
夏菊や一雨はしき開き口
風ゆれも行儀に遣の盛り哉
笑顔してぬれて戻りぬ田植哉
夜歩行も暑さ凌きのひとつ哉

嬉しさは窃るにまさる兜かな
夕顔や中能ふ遣ふ最合井戸
ころんたり立つたり月の浮嵐哉
涼しさや川呑牛の尾ゟ動き
されはとて氷の家もたてられす
急きなから見なから戻る村時雨
涼しさや雪吹凌ひた松の蔭
錢よりも手に際のなき鶴繩かな
石川や一瀬〳〵や雲の峯
明たれば艸の本なる蛍かな
釜火をあしろう茶屋の柳かな
外に苦のなき子の業やはたる龍
二ト踈は月と最合かはと、ぎす
朝貝や二ッ〳〵に夜の明る
待ち乍らぬる、をいとふ夕立哉
明けぬ戸に手を叩きけり初鰹
ちかよれは見なくす月の螢かな
ふいて置く守り刀や入梅晴
短夜や夢の長きは畫のうち
蚊を追ふて更かすや母の枕元
蟹も甲干にあかるや更次
筆とれは巻紙濕る、暑哉
夢にまて思ひをこかす熱さ哉
なり鬼とらし〳〵ふりけり夕日影
抉援の要をしめる扇かな
晴れた日も發りはなれぬ若葉哉

いたわりて持手の扇もし芥の花
憎い蚊も強く打たれぬ子の寝顔
飛込んで見たき暑さや川の中
手土産の苞の外や百合の花
輝やける月に尋し白蓮花
泣きながらつかひ子もある螢哉
永き日をかたるや籠の内と外
親の手を引て見せ行く田植哉
獨身の榮耀もおかし畫の蚊帳
なてしてや雛抄とらぬ女連れ
打とけし二人の中の經かな
間の遠き火影と見しに初蛍
跡戻り仕てさして行く扇かな
蚊に逃て能い月見るや櫛の上
木々濡ちて庵も埋る卯月かな
夕涼み流れの月を汲んて呑
さなから枕邊涼し窓の月
山もくれ野もくれ田家のすゝみ哉
藏白し茂れる樹々の中からも
こゝろから氣輕うなるやはつ袷
一ト つ聞く蚊に釣り直す親の蚊帳
夕立や向の畑にわすれもの
有丈の世辭絞出す新茶哉
興夜中よ月をも愧る芝の露
木鼠の御手洗盥による暑哉
床だいへ咄し持寄る涼み哉

脊なの子に持たせて行や螢籠
着心は母譲なりふる袷
二ッ無き命を持つて火取虫
乞當し雨からあとの祭りかな
容易には折る花てなき牡丹哉
袖着せて畫も覗くや螢籠
片影になると邪广なり日傘
貰ひ人の伐をしみする牡丹かな
風を見る草もつらせて夏座敷
圍會も開く扇の要かな
母の氣にかなへる嫁や麥の秋
子に扇ゆづれは親を扇きけり
足洗ふひまや扇を石の上
水無月や眼に玄み〳〵と不二の雪
蚊に任す身に夜な〳〵と積る孝
春は此梅に來て鳴け放し鳥
盥圍ひの中に夏あり心太
涼臺四本の足を五七本
水暑て居る人も有り苔の花
手枕に蚊の初こへを聞にけり
いさ爰に泊りて聞かん時鳥
親思ふ日となりにけり土用干
山降りに川がとまりて時鳥
朝のうち雹て隙めかす袷哉
軒過る螢にはなす乳房かな
風なくも身のくつろきや夏の月

朝月を發して鴫や時鳥　枕をも添へて出さるゝうちは哉
庭に水そゝけはゆるゝ鉋忍ふ　念に念入れて伐たる牡丹かな
涼しさのとちらにもわり月と水　添乳した親も寢むたし金魚賣
借貸をして面白し竹婦人　涼しさや松から覗く月の庵
耻かしや袖もわけ兼今日の照　ねられんといふて歩行や夏の月
紫陽花や月にも色を咲なをし　青柳や乳母と二人の出養生
蚊蠅半分釣て寢させる子供かな　ひる顔や非を咎めて行水もらひ
遊さまに雫たらすや杜若　深山路やのそけは涼し千ひろ谷
心見に抱寐過すや竹婦人　時つゝく木の間に青し夏の富士
舍の子や蝶に預けて田草取　絕かねて隣へ來ても居哉
朝染まねは夢も結はす竹婦人　寢ぬるを蛙が知らす清水哉
吸遂た蓮から池の夜明かな　蚋打と雇人なり涼み舟
浮く塁を余所にして汲ひ清水哉　初戀の出來る浴逸や盛かり
遊さまに雫たらすや杜若　眼のしふいうちから來たり遊哉ひ
心見に抱寐過すや竹婦人　乞てふる雨や小判のふる思ひ
舍の子や蝶に預けて田草取　蚤の蚊に耳くわれけり祇の間
朝染まねは夢も結はす竹婦人　酒の坐を替へる趣向や初松魚
吸遂た蓮から池の夜明かな　二ヶ親に配る蚊遣りの煙り哉
浮く塁を余所にして汲ひ清水哉　寢に明日いまたぬに早き螢かな
心見に抱寐過すや竹婦人　一口で暑さわすれた清水かな
遊さまに雫たらすや杜若　暗す間もつかふ扇の愛想かな
一人つゝひすんてかわる清水哉　蚤ッ死げた樣や夏夜や白雨あと
珍らしき客を振り巻く團扇かな　朝良の育より独たはなの蚊
著る笠の裏に日のさす田草刈　無遠慮や蚤はどうときあたり迯
さつばりとした浴心やはつ谷　世は安し月さす蚊屋に話祇
關取もうごかす蚤のちからかな　物言はぬ義理の谷哉
浙しき扇拾ふや一二の鳥居　枕をも添へて出さるゝうちは哉
一禮を伸ての後の扇かな　庭に水そゝけはゆるゝ鉋忍ふ
無き母の汗を賣立急くや麥の色　添乳した親も寢むたし金魚賣
雲雀の子巢立急くや麥の色　借貸をして面白し竹婦人
露かとも紛ふ葉末や初螢　耻かしや袖もわけ兼今日の照
書余る手紙にちるや顔のあと　紫陽花や月にも色を咲なをし
さし宿の不足咄しや蚤の跡　蚋打と雇人なり涼み舟
來た人の起す豊寐をといめけり　初戀の出來る浴逸や盛かり
水上つ呑ひ間もをかて扇かな　眼のしふいうちから來たり遊哉ひ
風すじの見へて香せぬ若葉山　乞てふる雨や小判のふる思ひ
うた、寐の親のあたりへ蚊遣り哉　蚤の蚊に耳くわれけり祇の間
冷麥や月影三尺窓のさき　酒の坐を替へる趣向や初松魚
五月雨や梢に蔦のかこち貝　二ヶ親に配る蚊遣りの煙り哉
世を余所にして涼しけな住居哉　一口で暑さわすれた清水かな
精出した日の頼母しき豊寐哉　暗す間もつかふ扇の愛想かな
有合のものを豊寐の枕かな　豊寐過すや竹婦人
こゝそ花外月はね越す皐月闇　一人つゝひすんてかわる清水哉
暑き日や意見身にしむ袖の汗　珍らしき客を振り巻く團扇かな
油斷せぬ油斷を啼くや時鳥　著る笠の裏に日のさす田草刈
賤女も化粧ひ凝すや田植時　さつばりとした浴心やはつ谷
寐る氣にはなられぬ夏の月夜哉　關取もうごかす蚤のちからかな
浙しき扇拾ふや一二の鳥居　浙しき扇拾ふや一二の鳥居
一禮を伸ての後の扇かな　珍らしき客を振り巻く團扇かな
無き母の汗を賣立急くや麥の色　著る笠の裏に日のさす田草刈
雲雀の子巢立急くや麥の色　さつばりとした浴心やはつ谷
露かとも紛ふ葉末や初螢　關取もうごかす蚤のちからかな
書余る手紙にちるや顔のあと　浙しき扇拾ふや一二の鳥居
さし宿の不足咄しや蚤の跡　一禮を伸ての後の扇かな
來た人の起す豊寐をといめけり　無き母の汗を賣立急くや麥の色
水上つ呑ひ間もをかて扇かな　雲雀の子巢立急くや麥の色
風すじの見へて香せぬ若葉山　露かとも紛ふ葉末や初螢
うた、寐の親のあたりへ蚊遣り哉　書余る手紙にちるや顔のあと
冷麥や月影三尺窓のさき　さし宿の不足咄しや蚤の跡
五月雨や梢に蔦のかこち貝　來た人の起す豊寐をといめけり
世を余所にして涼しけな住居哉　水上つ呑ひ間もをかて扇かな
精出した日の頼母しき豊寐哉　風すじの見へて香せぬ若葉山
有合のものを豊寐の枕かな　うた、寐の親のあたりへ蚊遣り哉
こゝそ花外月はね越す皐月闇　冷麥や月影三尺窓のさき
暑き日や意見身にしむ袖の汗　五月雨や梢に蔦のかこち貝
油斷せぬ油斷を啼くや時鳥　世を余所にして涼しけな住居哉
賤女も化粧ひ凝すや田植時　精出した日の頼母しき豊寐哉
寐る氣にはなられぬ夏の月夜哉　有合のものを豊寐の枕かな
浙しき扇拾ふや一二の鳥居　こゝそ花外月はね越す皐月闇
一禮を伸ての後の扇かな　暑き日や意見身にしむ袖の汗
無き母の汗を賣立急くや麥の色　油斷せぬ油斷を啼くや時鳥
雲雀の子巢立急くや麥の色　賤女も化粧ひ凝すや田植時
露かとも紛ふ葉末や初螢　寐る氣にはなられぬ夏の月夜哉

暑さへさる氣になりぬ梅雨の窓　聞てさへ心も涼し瀧の音
寢れは又暑さ增しけり蚊帳の內　五月雨や放れ猿の啼く長堤
急そく道雪に追る、暑さ哉　雪に見た月また入ちそ夏の旅
つか〳〵と子の出たがるや夏の月　植た田にちからの見ゆる小雨哉
水無月やとちらの里も雨祝ひ　軒先のつかへて高し夏の山
夢にさへ見て能き物そ初茄子　見し夢も拔けて跡なし籠枕
憎き蚊ゝや涼みの中を涼み舟　とんな夢見るそ牡丹にぬる小蝶
蚊見や染た紺屋も立とまり　欲の身を責る浮世の暑さかな
背負見も下して共に涼み哉　重るも思案の外や筑摩錦
温泉煙る深山や夏の脫き處　ぬき足をするや蠶寐の親の前
行暮れて道を蚤に習ひけり　燈火の光りも暑し蚊屋の中
麥刈やかまの先まて切られ　何處の海川にもふるす五月雨
雛ものも重し脫かれた箔母か肩　蚓笑ふひとの女のかしましさ

暑さへさる氣になりぬ梅雨の窓　聞てさへ心も涼し瀧の音
寢れは又暑さ增しけり蚊帳の內　五月雨や放れ猿の啼く長堤
急そく道雪に追る、暑さ哉　雪に見た月また入ちそ夏の旅
つか〳〵と子の出たがるや夏の月　植た田にちからの見ゆる小雨哉
水無月やとちらの里も雨祝ひ　軒先のつかへて高し夏の山
夢にさへ見て能き物そ初茄子　見し夢も拔けて跡なし籠枕
憎き蚊ゝや涼みの中を涼み舟　とんな夢見るそ牡丹にぬる小蝶
蚊見や染た紺屋も立とまり　欲の身を責る浮世の暑さかな
背負見も下して共に涼み哉　重るも思案の外や筑摩錦
温泉煙る深山や夏の脫き處　ぬき足をするや蠶寐の親の前
行暮れて道を蚤に習ひけり　燈火の光りも暑し蚊屋の中
麥刈やかまの先まて切られ　何處の海川にもふるす五月雨
雛ものも重し脫かれた箔母か肩　蚓笑ふひとの女のかしましさ
暇先にすれ〳〵ふ窓や時鳥　親の恩身も山に余る秋をしらる、青田哉
八ッ束穂の雀人を動かす力かな　蠅の舌人をねぶる暑さ哉
花い葉と成りて吉野の雛の味　薬櫻や風いとわねば吹もせす
瀧殿は豊も乾かす苔の花　憎み〳〵寢て仕舞けり蚓の月
川狩や學ひの友の魚と水　また月の出てもゆるさぬ暑さかな
釜見て戻りは重き草履哉　夏を守りて落釣瓶
水底に夏を知らぬ雨もなし　蚊は肥へてやるやかきつはた
居直るも物憂きけふの熱かな　片足はやしろの森やにしの裾
身の光り人にや顯る螢かな　ゆらりともせすに一日牡丹かな
す、しさや樅の下をくゝる船　すきな事言せて置や涼み窓
日當りはなを具白なり栗の花　夜に入て元の在所や初螢
夜は酒の力かり寐や蚤蠅　月花の窓染替て若葉かな
水無月や月にはくる、草の朱　涼風も渡り來に鮎橋涼み
ふた親を蚊にくわせない工夫哉　木の雫うけて通るや水團扇
姑のあふき立たる蚊遣かな　夕立や跡は涼しき夏の月
藤のとり實になる辟かはなにしお　其足て隣へやるやかきつはた
散り込んた盆の木の葉や氷室から　拘からの雨にも宿れ夏の月
月もはや松すれ〳〵や郭公　片足はやしろの森やにしの裾
雲行に頓着はなし五月雨　ゆらりともせすに一日牡丹かな
短夜も來る汐は來て戻りけり　すきな事言せて置や涼み窓

卯の花や暮ても止まぬ蛙の聲
雨に成る迄は幾日そ雲の峯
虫干や小袖拂らふは花一つ
一番草とるや青田に見ねね笠
傘のかはくまはなし五月雨
夜舟乗る人の心路や夏の月
兎の野き聞き〳〵涼び戸口哉
おさな子をさそふて行や螢狩
散らさじと持手重たしけしの花
道ふ蚓を拜む手をかし朝の蠅
忍へて來た手紙短かし初松魚
我か影を親にふませる暑かな
見て通るはかりも涼し磯の家
春過きて夏らし〳〵なる木葉かな
親の汗洗ひ落すや單衣
一ッづゝ、わふいて出すや團扇哉
苔の出るたひは獲物や汐干狩
立る戸に心殘すや夏の月
汗子提て子供頼むや戸の櫛
腰扇抜て名を問ふ牡丹哉
蝶一ッか、へて眠るほたん哉
汗戸替や心をくひて貰ひ水
又起て良の蚊柿ふ父と母
團扇でかさに代りし暑さかな
吹上りなを心よし夏の月
紫門に出るも氣おいや衣更
汗拭ひ〳〵貰ふや車賃
雨に成る迄は幾日そ雲の峯
虫干や小袖拂らふは花一つ
一番草とるや青田に見ねね笠
傘のかはくまはなし五月雨
夜舟乗る人の心路や夏の月
兎の野き聞き〳〵涼び戸口哉
おさな子をさそふて行や螢狩
散らさじと持手重たしけしの花
道ふ蚓を拜む手をかし朝の蠅
忍へて來た手紙短かし初松魚
我か影を親にふませる暑かな
見て通るはかりも涼し磯の家
春過きて夏らし〳〵なる木葉かな
親の汗洗ひ落すや單衣
一ッづゝ、わふいて出すや團扇哉
苔の出るたひは獲物や汐干狩
立る戸に心殘すや夏の月
汗子提て子供頼むや戸の櫛
腰扇抜て名を問ふ牡丹哉
蝶一ッか、へて眠るほたん哉
汗戸替や心をくひて貰ひ水
又起て良の蚊柿ふ父と母
團扇でかさに代りし暑さかな
吹上りなを心よし夏の月
紫門に出るも氣おいや衣更

泊雲や晒屋まても容にけり
雫まて數に見せけり櫻の實
待心忘れし比やはと、きす
頓て死ぬ蟬も哀れそきり〳〵す
蜘引て野山は青し呼子鳥
時親の注意貴し初松魚
虫なから人の愛する螢かな
枝移りすると見るすかたつもり
竪樋をのはり詰たりかたつむり
聞ときは何時も一聲はと、きす
水無月や一口はしり岩清水
手を打は返事の長し時鳥
荒海の色またさめぬ初松魚
手の扇腰にいさめて神の前
涼しさや花に借りしもこの座敷
朝市の市の花なり初松魚
雨親の見た跡に見る牡丹かな
川蟬や羽を粧ふて水鏡
客の膳庭に向けたる牡丹哉
柱まではそ去て夏の馳走哉
ふよかせば游ぎそうなり初松魚
涼風の吹込ひ窓や釣忠のお
太き眼て世界を見そや井蛙
待人の來る辻うらや時鳥
月の出を促すやうそ時鳥
汲んで來て親に養ふ清水哉
炎天に濱の眞砂も光りけり
何處からも寒る影なし夏の山
振舞の水にちからの見ゆる事矣
雨も止み月も出にけりはと、きす
仙人の住居も有る雲の峯
茶の水の貯へもあり五月雨
鳩なくやわが菜さかりの節〳〵もり
枝蛙ダへの雨をこぼしけり
孝行の手元ゆるまぬ蚊遣哉
親も子も一つうちが晴しや夏の月
金銀の玉も盛の棚にあり
摑ひ手の裏を這たる蚤かな
親も子も同しわつさや君の恩
人心見透く意地あり不如歸
盈栽の置處かへる夕涼
更科や田毎の月にはと、きす
更科へ親の供せん夏の月
白蓮や水も奇麗な寺の池
雨雲の俄にかわる夏野かな
川狩やたんなの役は草履とり
門叩く音にもあらす水鶏かな
風鈴に起されて着る薄ふとん
月の出て待ちとうけなる時鳥
卯の花や圖深からぬ行通ひ
濁つはを根に涼風のかよいけり
炎天に濱の眞砂も光りけり
何處からも寒る影なし夏の山
振舞の水にちからの見ゆる事矣
雨も止み月も出にけりはと、きす
仙人の住居も有る雲の峯
茶の水の貯へもあり五月雨
鳩なくやわが菜さかりの節〳〵もり
枝蛙ダへの雨をこぼしけり
孝行の手元ゆるまぬ蚊遣哉
親も子も一つうちが晴しや夏の月
金銀の玉も盛の棚にあり
摑ひ手の裏を這たる蚤かな
親も子も同しわつさや君の恩
人心見透く意地あり不如歸
盈栽の置處かへる夕涼
更科や田毎の月にはと、きす
更科へ親の供せん夏の月
白蓮や水も奇麗な寺の池
雨雲の俄にかわる夏野かな
川狩やたんなの役は草履とり
門叩く音にもあらす水鶏かな
風鈴に起されて着る薄ふとん
月の出て待ちとうけなる時鳥
卯の花や圖深からぬ行通ひ
濁つはを根に涼風のかよいけり

實に長き日足や富士を一跨は
葉櫻や見かへる水の音
戻り〳〵客に待たる、暑さ哉
夏鶯も都の花や初松魚
雲間洩る月の暖さや鳴蛙
去りに火のついて靜な螢かな
上の火に足もとくらしはと、きす
葉柳や渡し待の間の氣なさゝ
木下閣朽木の光る山路かな
てふ〳〵や乙女の歌ふ庭に舞
其いろにおちつく雨の若葉哉
孝心の爲に明るき螢哉
一聲は山端くらしはと、きす
氣のつかれ眠てをきのふ田植哉
夕立や軒端に鯉の刎る音
日の入や天地賑ふ蜩つゝり
砂糖水何寫る間もなかりけり
憎い蚊とうたれぬ母の寢顏哉
月の夜に形ち見ねねとはと、きす
こつはりと溜て夫婦の田植哉
釣橋も掛り替けりかきつはた
舟うたは鳥羽か伏見か時鳥
田から來て蓑着た儘やあやめふき
首立て海の遊上る早潮かな
世を諷る樂み出來て初鰹
試に來て一俵のすゝみ哉
實に長き日足や富士を一跨は
葉櫻や見かへる水の音
戻り〳〵客に待たる、暑さ哉
夏鶯も都の花や初松魚
雲間洩る月の暖さや鳴蛙
去りに火のついて靜な螢かな
上の火に足もとくらしはと、きす
葉柳や渡し待の間の氣なさゝ
木下閣朽木の光る山路かな
てふ〳〵や乙女の歌ふ庭に舞
其いろにおちつく雨の若葉哉
孝心の爲に明るき螢哉
一聲は山端くらしはと、きす
氣のつかれ眠てをきのふ田植哉
夕立や軒端に鯉の刎る音
日の入や天地賑ふ蜩つゝり
砂糖水何寫る間もなかりけり
憎い蚊とうたれぬ母の寢顏哉
月の夜に形ち見ねねとはと、きす
こつはりと溜て夫婦の田植哉
釣橋も掛り替けりかきつはた
舟うたは鳥羽か伏見か時鳥
田から來て蓑着た儘やあやめふき
首立て海の遊上る早潮かな
世を諷る樂み出來て初鰹
試に來て一俵のすゝみ哉

親々の瓜の先こそ蚤のあだ
寐心のよき夜や雨になく蛙
白扇にうつるや雨の若楓
明易き夜なり鶏に起さるゝ
提て來た井子に氣遣ふ市場哉
せなに月おふてしもうた田植哉
まつ風のそふて味よし一夜鮓
海盥し白帆眼下や夏座敷
ませい風に日傘とられたもり子哉
いきおいに乘るや走るや初鰹
夕立の隣村にてもらい風
角たつた話あつかる圖書哉
傘に日のあたりけり蝉時雨
蚊風に折り目の直る帳かな
清潔な風の生るゝ若葉かな
今茸たあやめに風の生れけり
今日咲を今日見る芥子の盛り哉
蚤も來て水鏡の叩く野寺哉
手をぬけて月に隱るゝ蚤さかな
丹精は汗に流るゝ晝さかな
石似合な物は此家の牡丹哉
花のおと四月語らし庵の垣
鶏頭の夜は靜なり都鳥
歸そふて綠は蚤りの晝さかな
蝶はなへ客通させて凉し汁
世の爲に種蒔置す涼水哉

筆にまて染込む酢や牡丹
川狩やぬるゝ積りの其支度
白扇にうつるや雨の若楓
明易き夜なり鶏に起さるゝ
提て來た井子に氣遣ふ市場哉
せなに月おふてしもうた田植哉
まつ風のそふて味よし一夜鮓
海盥し白帆眼下や夏座敷
ませい風に日傘とられたもり子哉
いきおいに乘るや走るや初鰹
夕立の隣村にてもらい風
角たつた話あつかる圖書哉
傘に日のあたりけり蝉時雨
蚊風に折り目の直る帳かな
清潔な風の生るゝ若葉かな
今茸たあやめに風の生れけり
今日咲を今日見る芥子の盛り哉
蚤も來て水鏡の叩く野寺哉
手をぬけて月に隱るゝ蚤さかな
丹精は汗に流るゝ晝さかな
石似合な物は此家の牡丹哉
花のおと四月語らし庵の垣
鶏頭の夜は靜なり都鳥
歸そふて綠は蚤りの晝さかな
蝶はなへ客通させて凉し汁
世の爲に種蒔置す涼水哉

令下に出て拜みけり皐月富士
炎天や木かけて洗ふ馬の口
禮に手の跡深く野邊の清水哉
旅子や蒔の跡のきへぬ雨
三日見て三日めつらし夏の不二
行々子なくや出村の作渡し
犬坂を力に登る岩清水
日に殺生なり花散く木瓜哉
郭公待草臥れて寐入りけり
入江の梶の長短
は櫻や鈴の音ある吉野山
北風の身に眞直な凉み哉
燈より見ゆる山家や夏木立
酒口に冷たき風や苔清水
降るを見て降らぬに賦よ夏の雨
神慮にも叶ふよふなり田植唄
一点は眠り柑子や蝉時雨
内からも外からも云ふ晝かな
蚊揃ふ枝葉や君か名取草
松明もるゆるあはれや虎か雨
つゐと行螢の影や雨の窓
何處となく出歩行螢や夏の月
夕立や此降續世王の花
世の爲を勝ふて降や蓮の花
曙の色猶増かきつばた
雨の日は水にもおもすなる水鏡
蝉秋や苔て火を打つ盛所
入相や虹の中より時鳥
螢散のはしにもならす扇かな
洗ら雨のはれてや潮田の夕日より
蓮の香や何も交らぬ朝こゝろ
絹川を經ひ絶ぬ園の茶かな
鶏頭の御寺間の中の白さかな

思郷の人もかなめや白扇
珍客に明る二階や風かほる
蚤虱した夜に扇子の風通
青梅の熟しに掲き止にけり
干物の場所をかひけり夏木立
貴島の鴨れ椎や枝蛙
蝉なくや愛にありふれき跡の蒼屋
常陸帶尻に矢の字や辻か花
寐せ付る子に起さる、蚤虱哉
馬の脊を左はぬれて夏の月
凾里もしかに見へて夏木立
鶏付きし此の錠や閉古鳥
松島の扇に吹かせひ夏衣
ひる良や露に乏しき花の色
祭り場を出ぬけて月の納涼哉
火に干して封切る入梅の手紙哉
兩國や閻にも名ある盛狩り
人影に逃るてもなし水馬
千金の此寐心や蚊帳に月
正直は人の罠の扇かな
夜もすがら軒に去のふの蚊かな
追盛二ッに成てまよひけり
夕立は雨遇なものや二重橋
炎天や當坐通は蚊のかけ
夏痩と人には隱すれもひかな
虎の日のはれてのびけん今年竹

鯛なしに見せるや鯛の潰ひ物
珍客に明る二階や風かほる
蚤虱した夜に扇子の風通
青梅の熟しに掲き止にけり
干物の場所をかひけり夏木立
貴島の鴨れ椎や枝蛙
蝉なくや愛にありふれき跡の蒼屋
常陸帶尻に矢の字や辻か花
寐せ付る子に起さる、蚤虱哉
馬の脊を左はぬれて夏の月
凾里もしかに見へて夏木立
鶏付きし此の錠や閉古鳥
松島の扇に吹かせひ夏衣
ひる良や露に乏しき花の色
祭り場を出ぬけて月の納涼哉
火に干して封切る入梅の手紙哉
兩國や閻にも名ある盛狩り
人影に逃るてもなし水馬
千金の此寐心や蚊帳に月
正直は人の罠の扇かな
夜もすがら軒に去のふの蚊かな
追盛二ッに成てまよひけり
夕立は雨遇なものや二重橋
炎天や當坐通は蚊のかけ
夏痩と人には隱すれもひかな
虎の日のはれてのびけん今年竹

勝栗の花盛に隱して賣ひはり
水にかく様に手早き田植哉
行水は誰か扉や軒より高き水の音
凉しさや軒より高き水の音
凉しさをたゝ、掬ひの雫かな
竹の子や鼓は長者の撰とやら
蚊處や蚊に氣の付かぬ宵祭り
醒よりも茶よりもまさる清水哉
葺てから出盛る人や夕凉み
夕凉み月に伍かせる座敷哉
にくからぬ程にうたゝ日傘哉
暁中に露見る今朝や軒あやめ
打水や隣りの門も一手桶
抜通は風よかたし花菖
竹の子にまてもありけり親の恩
蝉酸や笠にかくる、影法師
水底の草も花咲く卯月かな
蹈て呑む藥も持つて雲の峯
跡を行友は見へぬそ時鳥
麁刈りや伸ひ上つても足らぬ丈
草臥も忘れし清水哉
松門の夢に覺めたる晝寢哉
唄はねは櫛子のやふな茶摘哉
短夜や明けたも知らぬ著に行燈
袈裟掛たなから漕けり蓮見舟
抱た子に指折りさせて夏神樂

林をさいれてたゝむ扇かな
待客の歸たあとやはとゝきす
貝出した月つまみ鬼簓持り
蚊に喰れ寢ても忘れぬ親の恩
晝寢しだけふりも見せす田草取
蚤切れて團に戻るや簓賣
蜘にさへ糸も張らせぬ牡丹かな
すくようにに腰付て呼ふ簓哉
兩國をふまへて涼し夏の月
去なそふとすれば手を這ふ簓哉
伐株に腰をあつけて夕納涼
茶を水にかへて團扇の逃走哉
夕涼み歩行も夏の涼み哉
鍋遊やそちも妻子のありながら
苦は樂と思ひは易き田草取
祇園會や勝手隠しも金屏風
蔓草の石に痩せたる暑かな
羽蒜て花の蝿はく牡丹哉
鳥居から思わすたゝむ日傘哉
五月雨も刈り込んでくる萬草哉
竹の子のそだちは親の半かな
機嫌よき時の角なれかたつひり
遠近へ釣らて行くや蜻蛉つり
さした蚊も叩けぬ親の寒貞哉
上を見ぬ心揃うふて田植笠
年頃は笠に隠るゝ田植かな

伊勢參りらしき田植の出立ち哉
卯花や雪をかねたる日和らし
冷汁にそよがぬ柳うつりけり
うろたへてをる間にはる、夕立哉
晝心ろ忘れぬ中に時鳥
手枕のまた夢さまず時鳥
親へよる蚊をおいのける團扇哉
笹に露持たせて捨し雀鮓
斷しにも香のありそうな新茶哉
似ふたと初かね隠す團扇哉
千代まても孝の名涼し瀧の哉
夕立や濡れす我子の迎ひ傘
もてなしや辞儀より先へ出す團扇
なつかしき昔小袖や土用干
蠶の鳴た此木に蝉の群
穂か花か出そうに見ゆる粽哉
ねひたさを忘れてさわく簓とり
笑ひなは此上いかに時鳥
來た樣も ちいさ〳〵見ゆる牡丹哉
薬柳や二軒並んて茶の煎り
寐る氣てはせぬ手枕や蝉の群
夕立の跡や静世の人て、ろ
文吹〳〵蚊は蝶も見舞ふて二十日草
遠池や涼しのかせに匂ひけり
ねか星に見うしないけり飛簓
名も高き宇治は簓の見時哉
和らかな風や若葉の波の山
月のなき夜は物足らぬ涼み哉
切株の松に指ふ〳〵暑さ哉
花てさへ一重はゆかし錦祭り
五月雨や井にふらさかる草のつる

山里は又も花なり栗の花
一と雨のあとや坐敷も風かはる
燃る程闇の際立火串哉
北谷はまだ櫻わり郭公
貞見せぬのか嫁なるか田植かな
親わらは聞かせんものを郭公
一群は月か鳴いたかはと、きす
眼の役は花に過きけり時鳥
置いと聞ふるを浮世や蜀黍花の露
酒はよい物よこの蚊に高尚き
涼しさは何より夏の馳走哉
百合咲やけふは野におけ明日は明日
朝寐した紙帳に歌をかゝれけり
白雨のおともにきわや桐畑け

夕立に暑さ洗ふて涼れむ
蝉の聲にかわりてうこく團かな
只居ても乎には際なき暑さ哉
扨か花手に手繋て遊けり
軒下に一時をしのく夕立哉
蝉の聲の人もしるかよ百合の花
おらはより一入涼し夏の月
川骨の節高きや蝉の聲
参志へ人のある夜や時鳥
夏の月涸田畦の高低し
君行もまたなはすやまかり蝉
疎せた宇の涼しそうなり蚊屋の色
雨合すかの古ぬ里も一盛り
もう少し長き手も哉狩中の蚤
宿の團扇みなよきけり五月闇
短夜や手を待て知る親の恩
耳は赤て啼く蚊もあるに時鳥
石高や薬はとつ、渡る風
片袖は伏見の雨やはとゝきす
蚊に逃けてまた余處の蚊に喰れ鬼
二つなく際にあいすや野の蛙
露きこ見れは愛ある鹿の子哉
とゝろよく親はしの字に晝寢哉
赤貝ふ人も暑をはめにけり
井戸はたに蛙飛ひ出す四月哉
團人は晝は蠅とり夜は蚤

なかるゝ其名そ涼き藤の花
夏の月物凄の介の臨走やす
さ傘見上る富士の日暮時
寐た親は知らねと嫁の蚊遣り哉
團扇持て祖母か蝿追ふ孫の勝
月は窓へ来たり田植歌
母親の寝息にゾット團扇哉
つい其處へ船の付〳〵なり夏座敷
舞ふやふに見もる柳の蔭かな
夏の月提て戻るや貰ひ水
雨乞や眼先に海もありながら
りみて暑を月に取りかへす
し親よりうれし船遊び
草を取り〳〵はむる氣候哉
けた縁に縁あり夕涼哉
や蚊になるまての浮き沈み
蔭て夢見をさます夕立哉
はなる月よか影は庭の栗
訪はれすも行たし今夜の船遊
日をきつて受た仕事の暑さかな
夕立にわれなからも笑ひかは
すゝみ客成丈端へ通めけり
錢金て聞る、ならは時鳥
松の夕日抱へて顔の鳴なかし

天照らす日影小さし豆日傘
活てから咲きし力やかきつは
また棚の出來ね藤咲新家哉
基の二手みす〳〵のみに喰れけり
茶ふ〳〵ろに今宵は明かせはつ蚤
月影はたゝみの上や夕涼み
若竹の素直に出來て伸にけり
暮次蚊屋に寝た子の顔を覗きけり
休ひ度簟敷ひや餅の昔
暑き日や茶よりも水の口さわり
潤り江にしまね漬さや蓮の花
ふとゝろの時計光るや夏の月
足昔を聞て帰やひ蜻蛉
此風を待し今夜の庭すゝみ
呑ぬ先早苅の引滑水かな
御臨走は富士の雪なり夏座敷
田を植て近し山根の一重町
白雲と見し人も哉若葉山
松魚來て又呑なをす工夫かな
木のかげのにげたも知らぬ悪寐哉
蝙蝠や炊き落ちあふ最合井戸
濡た木の下風淋しひら若葉
明け安き夜にも浮きけりこての鍋
上手程働ふ夜更の踊りかな
涼しさや山を見おろす山の上
糸水の軒端に積ねさつきさめ

娘めを寐させて縁の蚊屋釣りぬ
街道をよぎけて休む田植かな
殿いて母の恩着る扇かな
不足なき庭よ山から入る清水
馬洗ふほとの水わり夏木立
短夜の月は殊りて市の音
あらはより桐の葉もれて風涼し
昼ひとつ拾ひものなり蜥の月
月も日も戸さゝぬ窓や時鳥
若竹の取き移るやぬり机
開くとき枝ゆれのする牡丹哉
湧く音に心の進む清水哉
月も今山を離れて時鳥
親と子の睦み根へ込む門田哉
初帳嫁か手柄や男の子
暑き日の中の暮さや昨日今日
湖へより込む影や郭公
墨つぼの糸に打るゝ初蝙蝠
親の寐た方へ蚊追ふ蚊遣かな
おをぎ〳〵てうちはふらつく暑哉
繪日傘や乳母を前にし後ろにし
嘶れ馬も姿も涼し心哉
保養にと母を遣ひる納涼哉
樺さして月を砕くや夕納涼
昇る相の影にはゆき牡丹哉
殺さればそれだけ風の涼りけり

日は落て藤に殘る蜂の聲
隙な隙なくへて使ふ扇かな
呉竹の竈よりすゝや夏の月
涼しさや夜見せの引し跡の月
卯の花や色〳〵着の中に映
川岸はさた昔しの江戸や初鰹
越して來た田は登るや夏の月
文消る此庵寺や際に殘る蚊
湯揚りや何を思案のおと蚊帳
夏痩やこれ程帰のあぬめる
蝿の音にかこし初めける暑き哉
月ましてうつり行く夕納涼
結ひなかしの柳に団扇かな
得犬の寐じや縁の深ふ稲かな
川きりなす風なきなれけめ
寐不足の眼を洗ふや杜若
蚊帳にと母を遣ひる納涼哉
月ましてうつり行く夕納涼
結ひなかしの柳に団扇かな
得犬の寐じや縁の深ふ稲かな
川きりなす風なきなれけめ
寐不足の眼を洗ふや杜若
蚊帳にと母を遣ひる納涼哉
樺さして月を砕くや夕納涼
昇る相の影にはゆき牡丹哉
殺さればそれだけ風の涼りけり

寐て見得る庭木に釣るや蚊帳
居並んではなしを送る團扇哉
蝙蝠の枕一の上や郭公
若楓やかいまきそつと母の顔
九折れ奥に湖あり夏木立
子に智恵をつけて子守の涼み哉
子負て橋まで行し螢狩り
五月雨や見に出る日なし京の町
山の端に月をのこして時鳥
隈のなき月に香の立つ遠哉
足る事を知れは涼しき草屋かな
逃る戸や露低ふ宿る今朝の秋
夏痩や身に重さうな揮帯
逐込て來ても暑るや夏の雨
傚へ掬ひはつみし清水哉
笠ぬいではづひ田植の暑り哉
昼寐した儘に送るや隣の子
雛子や次第にやるひ座の締り
魚のねをねさるや主の留守扇
道速の愛から殖ゆる清水哉
雫して袖も菖蒲の句ひかな
月の夜や何を不足に火取虫
手傳に追はれて世話し田植哉
卯の花や次干置くあまの庵
濕る、手をはづて子を抱く田植哉
戸さしては寐られぬ夜なり冷し瓜

見れとこゝへ紙折を置し時鳥
氣に入らぬ露の運びや時鳥
涼しさやよせては返す浪頭
咲く〳〵花に茨の針もかくしけり
足らぬ乳に短夜長ふ待れけり
眼の付いて乳房放すや初蝙蝠
身の振りも持はぬ旅の暑さ哉
すゝ其處へ來て夕立に降られけり
寐はゞれて稻妻夜と思ひけり
箸にからむ経風津しき大
花に出た心は捨て夏籠
年よれは笠流ふる田植かな
男には知らぬ暑さや帶の幅
日に痩る身を養ふや夏の月
柚人や若葉の中の夕煙り
單朗な茶の客も來るけしの花
敬へ着き親の子堅し田植留守
手まへらに潰されて居る蠅哉
親のおんしりけり蚊にも喰れけり
投られたやうに蜂の巣哉
葉山葵や泣さる、程蜘追ふり
親の無事便りも來り不如歸
ねひいとて際とて入れる新茶哉
辞毎にまこ、ろ盡せ杜鵑
凉しさや湯とりのさ、の菜座敷

田舍ふる家風自慢や泄圃扉
降落て雨にも匂ふ花柚かな
蚊帳に思ひやらる、暑さ哉
棒の塵た、いて居る團扇哉
余所になく山彦もかな郭公
野地蔵ののつぼり見ゆる青田哉
卯の花や夜は閨なから花明り
しつぼりと曾我の碑湿らせ虎か雨
たつた今のんたあとあり野の清水
打水に座敷を通ふす手柄かな
帶しめてつい二の膳そ時鳥
心地よき空や四月の着所寐
雨晴やゝめに御ふはそなから
一ト間つ、別な風たつ蚊遣り哉
炎天や不二も帽子を脱て見せ
吹こはす行の雫や夏の月
風涼し向きた方へ向いた家
砂敷て蟻も這せぬ牡丹かな
負ふた子に教しへられけり花御堂
た、かれた果は抱かる、西瓜哉
鳴かはやと月を詠て卯月鳥
子の智恵のまして短き辻か花
伊勢は津て持つ清水茶屋女媼て持
朝早ふ來るや遥見の誘い友
夕立や歸つた跡の夏の月
麥秋を逃れて今日の出舟哉

雨雲や青田におろす五位の群
茶に宿を借りて蛍を見る夜かな
笹の葉てのんでも甘し苔清水
水に浮く花には見ねど暑さ哉
水貰ふ手にもはなさぬ扇かな
市に花咲かせて賣るや初松魚
憎い蚊を逃て遣りけり子の寐顔
甲斐もなし耳無山の時鳥
音を聞水をちからや夏の山
青田吹風や千里も貳千里
夏ばかり明る小窓や風薫り
しはらくは旭の匂ふ若葉哉
心太吹て喰ふ子や○裸か
身を守る心は無か火取むし
逃た子のそつと見にくる毛虫哉
巻おかる宿木ね足らす下り藤
夕立や軒借る余所の夕便
竹の子や短かき夜とは思われす
手後れし胡麻の小扱の暑哉
野遊にまた隙のいる卯月哉
鬼百合の花に蹲踞ふ山路哉
瀧壺に架折り曲けよ五月雨
神手洗の池端に聞くや郭公
鬼かねて釣りに起さたり初蚊帳
軒並に呼はぬ家なし氷賣り
かけ膳の粽や母の伊勢まいり
芥子持た手よりも直き心かな
居ましたと言われて暮む日傘哉
うゑ込た田に水引くや暮の鐘
上段は暑し下座の畳寐かな
千丈の瀧も音せぬ暑さ哉
夕窓に一
藏解きの
いつとなふ琴持木や時鳥
刈入を後れて婆に小言哉
聞は亦
そつと算手にも風あり團扇
涼しさにおもはす更つ橋の上
川水も動かねはとの暑さ哉
雲間飛ひと群けわしはとゝぎす
二た親は子ゆへにひせぶ蚊遣哉
短か夜や下女笑はる、寐ぼけ官
魚のなき料理も甘し杜若
人立や賈はない迄も初松魚
飯されて斬うは待れぬ時鳥
南乞や猶踈のならぬ追りぶり
落たかとも思ふ辞なり郭公
椎か根や此處は暑さの捨どころ
夕立や逃こんで聞くむらのあさ
近かよれは枯木てなし百日紅
見る火けは闇もけしきや飛螢
浮雲と
汗入て誰も見上る大木哉
山阪を登る途中の岩清水
蜩蟬は皆はなちやる子供哉
岩にさへ風情を添る牡丹かな
手から手へ暇なき湯屋の團扇かな
朝晝り日く、せとなりて暑さ哉
物臭れた人を見返る鹿の子哉
虫干や琴に昔の物語り
日の永き咄し欠伸に変りけり
一正の蚤にくつす門納涼
皆が氣の揃ふや竹の植處
親子して取り遁しけり蚤一ッ
行く我は木陰もあるに田草取
角四本立て機嫌やかたつむり
雨の夜や浮つ沈みつ飛螢
戸さゝぬも月のめくみや蜘の中
蚤あつし夜は短し蚤と蚊奴
雖さへも涼しき竹の戦き哉
早乙女の乳房抱へて戻りけり
笠火の手向こゝろや古戦場
蝉啼や里は蚤寐の夢心地
蚤中の暑さ忘る、夕涼
竹の子の味も流石に都かな
遅はする料理手軽し夏座敷
猶上の貳字も大きな牡丹かな
美たりには渡さぬ橋や杜若

朝顔おかしさや粉團子
朝されぬ子の手傳ふや蓄蒲ふき
潟つかいも心は鬼てなかりけり
蚊に世話の焼けて世話焼く蚊遣哉
掃拔や扇も帶を解日より
座頭の手を取て撫さす牡丹かな
水の緑されぬ處や釣りまのぶ
あとを追ふ子に立もとる日傘哉
柏手の薫るや風の神詣
芥子の花心なき風に菩提心
蚊もおちぬ川や月見の舟納涼
何處へ來て見ても蚊のさす夕べ哉
簀干た海士戸口や辻か花
初鰹魚の乾かぬ送り狀
花の跡今は名のみや青嵐
沈香を畑らす鬼の蚊遣哉
世のさまを翻うと見するか大阪虫
綸日傘や袖と襟の鯨絲
うち水の力や庭に風の有
朝寐士の暗わたりたる土用かな
人よけて日にのそかる、日傘哉
宿とりて吹かれに出たり青嵐
夜は笠の下から明けて不二一覧
打水や垣も景氣や飛蛙
炎天や垣より小さき柳のかげ
一世の無事を吹にもしろふ田植哉
よき句なし歌へてくれよ時鳥
歸路の橋やおそろし蛍狩
葉隠や歌そう蓄の笠ひとつ
ふたとれは飛さよにいふ松魚哉
納涼にもかくべからさる團扇かな
降るや帝や水鶏の聲哀れ
八ッ橋のおかめや燕子花
靜見へて手遂の園菜や風薫る
邪魔になるお竹の臀や涼み臺
起されて夢を見殘す晝寐哉
夕立ちをさいわい惡ふ夏の旅
蝉啼くや急へて荷ふ魚荷物
照りつゝく程名の高き清水哉
醉さめに今一はいと氷水
月借りて客立盛の暑さかな
蚤狩る蚤の光りかりにけり
夜に入て月も笠着る田植哉
あつき日もかまわぬ色や藤の花
夕立にをゝてうれしき傘をかる
笠脱いて又呑直す清水哉
男氣になりて切れぬ牡丹哉
蚤飛や晝にうつすりの紅
先に行提燈早し鳴水鶏
暇する内にいつしか初茄子
打水や崩れてはたつ蟻の道
獨たひ見つけて嬉しまみそ哉
なき親を思ひ出しけり土用干
暗の夜をぬいゆく螢そとふ蚤
五月雨や勝た碁のても久振
驚り來る風や二階は明はなし
手さねして用を足しけり子の寐貝
富士淺間繋くや雲の峯續き
鬼瓦火を吐くよふな暑さ哉
馬よけて埃りをあひる暑さ哉
鯉に卵とわれぬ連の折れ薬哉
電や千代までとめよ此光り
花になき夕栄見たり辻か花

行なれて行かぬ日もなき寄合哉
夏旅やをとせし笠の影を知る
雲退けは月に昼あり時鳥
買ふた水打や祭りの通り筋
遠くなる水鐘に近き夜明哉
日笠次是等氣付よ此熱さ
我子なら二枚は破せす筑摩鍋
蝿かしき人も都な牡丹かな
行く盤二つに見せて池の上
所さへ兵者らしい蜜寝哉
草紙持つ子の顔黒し蜘蛛つり
ねせた子の方はかり釣る蚊帳かな
色と直を叩て買た西瓜哉
解て見て結ふり習ふ粽かな
一つ來て聞を動かす盤哉
天下る花火の龍や淵の上
手元から風みせて行田植かな
聞くは今湖水に消へて郭公
上手程人よりすたる田植哉
宇治川や夜は盤のものらしき
風に宮む門や涼みの人涌り
透通る雪のはたにも玉の汗
花の香のうせぬ袂を衣更
ふり蒔た様に茶店の圍扇哉
かたすみは子に殺しけり朝の蠅
わか身に比へて小風譯りたし

親の恩若せて知りけり辻か花
掬ふ手に松の影さす清水かな
寝つかれぬ耳の果報やほとゝきす
買ふた水打や祭りの通り筋
遠くなる水鐘に近き夜明哉
日笠次是等氣付よ此熱さ
我子なら二枚は破せす筑摩鍋
蝿かしき人も都な牡丹かな
行く盤二つに見せて池の上
所さへ兵者らしい蜜寝哉
草紙持つ子の顔黒し蜘蛛つり
ねせた子の方はかり釣る蚊帳かな
色と直を叩て買た西瓜哉
解て見て結ふり習ふ粽かな
一つ來て聞を動かす盤哉
天下る花火の龍や淵の上
手元から風みせて行田植かな
聞くは今湖水に消へて郭公
上手程人よりすたる田植哉
宇治川や夜は盤のものらしき
風に宮む門や涼みの人涌り
透通る雪のはたにも玉の汗
花の香のうせぬ袂を衣更
ふり蒔た様に茶店の圍扇哉
かたすみは子に殺しけり朝の蠅
わか身に比へて小風譯りたし

うた、寐の親の蚊遣りに夜の明る
夕立も晴れて靜に暇乞
雨と云ふ雲見て勇む田植哉
水に引く夜明の色や郭公
手休めを母に替つた團扇かな
聞かでよき水は音して時鳥
さしのはす舟戻りけり郭公
勝より一夜過れて初蚊帳
捨石の庭に目立つや苔の花
一輪も花に滑なき牡丹かな
一ト舟は子に殘しけり朝の蚊帳
新涼人の種草火白し月の門
我植べし田を見渡して夕涼み
川岸の鳴き月夜や鳴水鶏
櫛にせば廣野となるや行々子
舟諍のかゝやく浦の麥の秋
暮過きて夏の日永の藤の花
羽蟻にも倫の秋よ男の子
吹て來る風は花なり夏木立
松風も絶て音なし蝉時雨
宿引の傘に客あり夏の雨
百年の老も尝圍の田植哉
五月雨や只明暮の鐘の音
窺屋に酒しいらる昏かな
摘さして蚊柱をうつ蒂哉
是てこそ仕能き旅なれ初袷

敢よれは机明るき盤かな
窓にさす月の光りや白牡丹
聞た人あつて待ちよしはとゝきす
我身には覆はて乳母の日傘かな
日盛りや牛の涎の光る坂
はら雨に暑さ流る、筧かな
一筋の塵も氣になる牡丹哉
夕立や涼しき風を置土産
洗ひはるのりのわわきや入梅の内
梁の戸やて、むし昇る雨の朝
苗代に雨降れ〳〵となく蛙
涼しさや閙に明るき橋の上
呑てから神の名を聞清水哉
若竹や風まてそつと吹てゐる
親に禮のへて初着の更衣
涼しさや木の間に見へる青嶺
流れねは水さへ熱き夏豊哉
二人りとは歩行ぬ橋や燕子花
愛想のなきをすかれて竹婿人
海見へて行足かろき日傘哉
花に來た家はかくれて茂りかな
貰ひ人の金かさしけりかきつはた
孝心の屈き兼たる暑さ哉
竹植て月影もれる小窓哉
二つ三つ扇ひらめく渡舟かな
よごれても美しき世の田植かな

栗過きる手には世話しき扇哉
閙の夜や子故に述ふ蚤狩
笠のおにしみ込あせや木下闇
晴れて見る不二は氷室の根なり処
あやめ草つほみか出るとすくはさみ
あら蕗し〳〵袷を着る氣先
子の有て盡も蚊帳の枕かな
涼風を通はす親の枕元
二つ三つ見る間に四方の螢哉
群た身のかゝれて飛かねとゝきす
花嫁もよこして戻す田植かな
稼先や机の上に若葉影
田雲より組でもろふや竹婦人
百薬の外に鮮の清水かな
朝虹に色古ひけり杜若
月の弓槻切に飛ふ時鳥
夕立やわたまかくして尻をたす
汐させはゆれる柳や行々子
飲道火や親に忍ひて朝仕事
五月雨や其日〳〵らしの船大工
摺上けて一雨はしき艘哉
婦女の湯戻り顔や夏の月
今朝さいた朝顔見たか朝ねこき
二た親の無きをいかんよ初松魚
月にきく〳〵唄は門田の植仕事
手に閙を疑して逆る螢哉

五月雨の暗間を鳴や山の鵑
吹通す長屋座敷や風涼し
夕立の殘りの雲はなかりけり
子のあふく團扇誠に奇特なり
短夜やからすの散らすゆめの花
獨り閙くはつ音は惜し時鳥
かの聲や年をへるほと耳さわり
捧振や蚊になるまての浮き沈み
菜櫻や捨れは臭き瓶の水
殘夜茶て住吉浦や夏の月
涼しさや風に宿かす扇かな
夕貝や都に近き片在所
うつ〳〵しき閙の夜となる螢かな
大汗に成てちいさな細工かな
渡し舟目當に急く暑さ哉
朝顔や朶しらね間の花盛り
國會の開くと共にさつき哉
夕蔭を追ふや青田の送り波
そこふひな夕べとまりた螢跡
琴の音を止て行けりほと、きす
舟棹の雫にかゝるはたるかな
涼しさや竹にもまる、風の月
壹顔やあわれな草に釣る鮒
賣り言葉買ふ者多き氷哉
朝〳〵もり蚓のしくれとなりにけり
師迄は月を守るや時鳥

手をとりて引張てうる蚊帳かな
蛸鳴や花にうかれし山なから
蝙蝠や河の向ひは四明り
寐まとわぬ疲の設けや時鳥
月出て青みいやます松の枝
旅日記出す松影の清水かな
閙に來て待夜は暗かす郭公
人中を垣にして行日傘かな
凌方なき暑さとて一寐入
一醒は夢の中なり郭公
鼻高く人を見さける山つゝし
金の降る心地よ夏の雨の音
古木とて陋は見へぬ若葉かな
五月雨簑の着る枝や栗の花
草笛も遠く聞へて月涼し
たまさかわ雲あつてよし夏の月
草木にもなき風のある團扇かな
青草と化ける夜明の蚤哉
此れてこそ命も續け夕涼み
加茂川に手を洗けり夏の月
譏なりの机のもとに蠶寐哉
橋守の梁からめしや夏の月
蓮の葉の裏に見へ透く蚤哉
豐なる廣間は狹し土用干
夏の日や薄き衣て蟬も汗
寐た人の顔にも見ゆる暑さ哉

又元の隱れ家となる若葉かな
借りた手を貸して返すや田植唄
鵜はまた重き昨日の時雨哉
仙翁を得しか雲呼ふ雨かへる
はうふりや蚊になるまての一世界
見る度に皆新らしやけしの花
分別は翌の事なりはつ鰹
順立て、戰きを通す青田かな
時鳥二十日過きての月夜かな
午睡した兒を見ても知れ親の恩
八束穗に出よふと祝ふ田植歌
入變る水うつくしや燕子花
乘出て港定めぬ船遊ひ
水配はよくて青田の光り哉
打水は待ては果なき人通り
水引はとりねと知るゝ新茶哉
夕立と云ふ間に晴れて峯の月
雨の來て龍に友呼ふ蛍かな
へたてなき天に依怙の夕立哉
德あつき人は尋し夏神樂
手燈りは兒の氣に入らす蛍籠
待こけて當にせぬ夜の時鳥
五月雨や川水にこるうさ苗み
蚊と共に此世にてるや氷みせ
植る田に呼ふやしきりと川の水
酒の座へ走り付けり初鰹
皮草履濕して強き蟬の聲
うつくしや風に隨ふ紅の花
勉強の夜の眼も螢の夏かな
膜かける石に折しく若葉哉
眠れとも圍扇は動く暑さ哉

遊船や乘たは船か浮ふ氣に
給日傘や雨の降日も閒分す
暑き日や大工木挽の長休み
青隈なくや湖水の眞帆片帆
帆柱の雨に痩せけりはと、きす
すれ合て共にこはすや蓮の露
差かけた日傘も親にあいそ哉
水遣て敷改める螢哉
雫さてゆつたり落る牡丹哉
濕いのも同し色なり柿の花
余所目には面白そうな田植哉
捜すのにこんな處に蠶寐哉
打水や井戸よりあかる月一つ
蚊柱に高荷の狹し繩手崎
旅人も名殘惜ひや美人草
寐た親へ屆けとあをく團扇哉
月の山て廣かるけしの白さ哉
日盛の暑さ忘る、氷水
矢場の的見るや田植の揃ひ笠
半分は宇治の川瀨へ飛はたる
袈かけに唄の醉する田植哉
狂ふ蠅飴に片足とられけり
風を賣る處なりけり團扇店
更行や月と三人時鳥
水底に鏡置く影や燕子花
みなし子に丹波ゆつるや蚤市

打水て暑さの消ゆる椽の上
際へも取られてゐて鰹賣
香をく手につかれなき團扇哉
蚤の口見せて夜舟の咄し哉
夏痩の心に通そき日暮哉
客に乳を見られて恥る暑かな
浮草や今日は隅田の岸に咲
稻村や青田の風も花心
身を起す風や扇子も親の恩
日の脚も散さぬ山の茂りかな
ありかたき親をやすめる蚊屋の内
伸ひ拔し垣根の外や今年竹
初鰹江戸の町へも時鳥
夏へ手を通し初けり更衣
川掃てすゝしふ月を移しけり
農夫の心休まる夕立かな
拾に性た子供見に遣る毛虫哉
雲脫きて山皆青し五月晴
蚊柱に遣かへてゆく座頭哉
孤着たる後のはまれや深み草
我か閙へ戻る夜明の蛍哉
聞き古す程は夜のなき水鏡哉
伐る迄の木影を杣の蚤寐哉
短夜や蓮の浮葉のひと雫
閙人のあるとも知らて鳴蛙
着た裕子は見らる、や柚の縞

御馳走に蚊遣りの過きてねむき付
泥水とあなつる中に蓮の花
泙のもつれや水のこゝろより
好き雨の降るや青田の黑ひ色
鐘鑄ると閒日やみながはつ裕
花と實の境を鳴や郭公
手に提けて輕き重荷や芥子の花
短夜も寢直しはせす山からす
遲あらは鳴せて見たき蛍哉
につこりと名迄善哉美人草
杖せよと鴛から覗く清水かな
智をみがく窓へ照合ふ蚤哉
第一の團扇と、かぬはたる哉
踏所もなき程打つや川の水
寐る氣にはなれぬ涼や月と風
夕立や蚤寢を叩く板ひさし
嫁に來て今年始めの田植かな
叱る程子の出這入や初蚊帳
冬の物みて猶暑し土用干
暑き日の板の間ことに人氣哉

雨晴れて耳に新し蟬の聲
手拭につゝひ山路の清水かな
水打ては風を生みけり青蔦
留のあとて力ひや卑怯もの
薬となりて皆一ッ名の櫻かな
まつ物のこゝろにもなれ時鳥
かきつはた一輪雨をのかれけり
暑き日やもしこかこゝかこゝあしこ
押合ふて來て一人りつゝ茅の輪哉
富士の風枕に受けて蚤痲哉
慈悲の手とゝちぬ哀や灯取虫
親の恩あをく團扇の戻り風
そつと來て蚤痲の團扇借りにけり
入梅晴や盆にかわる水の星
米洗ふ水の溜りや今年竹
取逃す手に團ひ蚤哉
寝たかる女の早き裕かな
板の間や夏と冬との愛憎もの
我國の山も新樹になりにけり
傘借てついわすれたる扇哉
いつまでも消ぬ盆の光り哉
五月雨や見ぬ世の人を枕伽
明け易き夜の殘りけり蚊屋の隅
孫に手を引れて走る盆狩
雨の日もぬれぬ蛙なり時鳥
はつ物のあるか中にも松魚かな
苞薬や人は畑の見えぬはと
物音に止てをしきや時鳥
顔なで、暗直しけり枝蛙
夕立や降らぬ星から來て溜る、
芥子活た儘ひ止らす蠅の先
涼しさや清みし此世を潤り水
盆團扇御代に隨らぬためし哉
暑き日や牛の涎をひく車
涼風に覗と替るや置坐敷
青淵を委鏡や夏木立
夕立の過してまわるひる痲哉
羣にも水の打度き土用かな
丸く世を過んとく、るちのわ哉
茂りけり花も昔しの吉野山
不二白し筑波は青し初松魚
田植女や幾萬石を指の先
雉子に透て恥かし乳の黒み
寐た親の心氣遣ふ團扇哉
美しき野にして戻る田植かな
世の塵を播切る庭や散杜丹
旅の瞬男の臆や不二詣
晴れてから暑るや夏の通り雨
出嫌ひに似ぬ魁や初袷
仰向けば散るも程なきけしの花
家を負ひ自由葉たどる蝸牛
ひつそりと蔭や蚊屋の別世界
源佛や世界へしめす父母の恩

竹の子や延はと思へ親の恩
風爽に戻りや笠に澁團扇
遣まれて日傘におもき親の恩
鶏遣ひや子もうき栗を水訓棹
さら〳〵ともへぬ工夫の蚊遣かな
蝸牛角か角てはなかりけり
痲處を替へても暑き夜なりけり
油斷せぬきわの油斷や子規
水音に角ふり分て蝸牛
孝の手に酒ともまさる清水哉
こゝろまで團を離る、蓮かな
川舟や夢施らる、木綿蚊帳
花は早や浮世の夢や團魂
とくおりの心安さや笹ちまき
思ふ事果したよふや夏の雨
掛たれば柱の古し青簾
痲た親へそつと蚊遣りの向をかへ
夏谷次汗に鴨海の絞かな
眞圓まて熟る新茶の二葉かな
牛の子の痲惜しひ門や夏の月
青柳に男らしきはなかりけり
袋から風握り出す團扇かな
分別の杖除につく〳〵扇哉
土用干や寐ひそうにする裸か嫁
一昨日の花てありしか初茄子
柳の蚊船呼ぶくちへ混入りけり
一枚は罪の外なり蝿祭り
蚤はせき定釘に巾けり顔の汗
山の端に月はし坊けて時鳥
芥子に雨傘さ、せたく思ひけり
來る人に夏を問けり氷室守
曝ふ氣を花に取らる、牡丹哉
木を洩れた月に驚く鹿の子哉
初袷子供のげん氣ふるにけり
延齢き用有なかち涼み哉
書心もある植やうや竹二本
一醉にうたゝねさめる時鳥
またしては汗に目覺の暑り哉
堪忍は徳の敷へや時鳥
神や流る、内に花の映
初嫁の顔にとろける田植かな
夕立や晴てかち來る迎傘
ふ細工も子ゆへの間や蚤籠
蚊の聲の四隅にひそび夜明け哉
天丸〳〵三日月寒し時鳥
輕尻の替へ杏ぬらす清水哉
孝行の涙にしひ嫁の敷遊り哉
傾城の魂見らる、霊寐かな
草臥た足に縋る、暑さかな
夢乗する車重たし蟬の聲
初鰹りの竹の子を兒のかへけり
切りかけて思案にくる、牡丹哉
蚤一つ係のかたきと押へけり
葉隠れや花に追る、初なすひ
能ふ見せて置よ娘に鍋祭り
認城をしたる思ひや蚊帳の内
人にする子に人の水飲ませ鳧
杖となる子にかひらせる日笠哉
湯上りの肌に蒼蒲の匂哉
蚊に孝も不孝にかまる裸か哉
徂し夜と昔ひつ、永き咄し哉
夕かけや流れのうへの白扇
さしなから來とく下女の日傘哉
國の爲かもひつかれて霊寐かな
一醉は團貰くやはと、きす
五月雨や子の喰ちきる鹽煎餅
綿たり伸たり涼し涙の月
風さへもたしなひ嫁の扇哉
空慾を視くまもなし郭公
杜若花に兄あり弟あり
辨はぬかけつく馳走や涼み客
時鳥醉の余りを船の上
明降れは隣も遣し五月雨
來る人のさがの儘なり夏木立
蜘の子の住んて目出度し葉鍋
人數に合せて取るや初茄子
日盛りや枕の先のおらし山
借家から月を雲ちす蚊遣哉

蛙聞くまゝに寐てけり涼み盛り千瓜や一ト日といへぬ稚子子や蝉うちに浮き沈み乳牧の子は新しき衣更五月晴や洗ひ揚たる錢黄空葉になりて葦月のある樫かな不二を巻く雲の力や虎か雨身は軽ふもちたき物よ水馬奥庭は竹の嵐や雀寒計閑度に初音心や時鳥鳴呼見事さて見事なる牡丹哉咲けしの花の底まで一重哉短夜や夢に日のさす不二の山須磨の蚊屋月を枕に更しけり諸人の汗の實のりの田植笠雨を待つとまり筏や雲の峯一本の扇子借りあふ木影かな月見れは最ふ鴫頃や時鳥水音の心よき日やはつ松笹の葉の雫にちるや水すまし嬉しさは今年の蚊にも食われけり暑き日や眞壁にせわし氷り店寐た家も窓明てあり夏の月落ちそうな栃木も落ちす苔の花追つめた盆うらみし小川哉鳥の尾に打たれて死る蚊哉稲の波の崩れて涼し月の舟

川狩やいまのはかにの滑石雨の夜に醒はよてさつ時鳥實櫻や蜜狐見る山の寺いたいたいて見る物多き土用干麥打と聞や下男の顔おかし風止みて手にひまのなき扇哉風ふたに礒云はれけり花菖蒲實ふ京へ出て小町となりぬ紅の花雲は名を何と言しぞ火取虫近道に行悠はなし夏の月別れ路の名殘をかくす日傘哉夏の夜はうた、寐ざつ、明にけり白雲や流れ行く世の我おもひ日盛りや野には道問ふ人も居ず神に風の道あり夏の月夕立の置て行けり水の月日にかさわるく取れて曇かな酒盛の邪魔なす蠅の憎さ哉入る月をおはに戻るや涼み舟温れ色は竹の常なり夏の月葉柳の中に醒あり涼み舟往人の首捻つ滑の蛙哉道の香や窓へ吹込朝嵐大船に氣もゆつたりと月涼し今に伐る木陰に柚の午睡かな稚し夜を明に蛙に田歌かな

若竹や親にさるも親のおん日に重し筑摩鍋帰き捨し醒はいつくそ郭公我すなと帯しめでやる袷哉水無月を逆とふしけり温泉山の戸打水や鮑てのけたる隣りの子雑子にすかさぬ心遣ひかな〳〵と風によこざる蛍かな水寒る人や虫干や座敷の内夕立や天地荷ふ雨の竿雲は追けり飛螢手の届く迄涼ひからぬ垣穂の雪や不如歸さめて嬉しき母のね顔かな蚊遣る皮揺り落す竹皮哉角出しや丸身崩すや蝸牛世を隔つ卯の花垣の住居哉一部をもてはやされて時鳥蚤を圓ひ人や蚤にも負けぬ顔〳〵や牡丹見て書く招き状月さして植しかる子や蚊帳の内さた門に寐ぬ音のする團扇哉女や蛙飛だと膝乞返す盆を縫ふ卯月哉経ふやふに見へけり飛螢二親にあおら分けたる蚊遣り哉厩で馬は毛ふるう卯月哉日の浮く日や雲の峯百合の香ら魚の泣た袖引れた袖や土用干日ざわり窓照らす笹や心ある緑に慣の見ゆる牡丹哉もなくて涼しき野中哉暮さの身にあまりけり富士詣涼しき風を待夜哉涼しさやなかぬ舟に月のてる又こいたわり歸す火取虫雨の夜にずる水鶏哉茨幡山に草庄とかする牡丹哉来て涼しき竹植て涼ふ流すのは心のちりか御秡川し行は隣りも登寐哉眼覚しに雨知る遠の葉音かな月に雨知る遠の葉音かなたびつかれ見へぬ初音や時鳥をとなへは奥に登寐の厠哉

見の泣も知らすに乳母の蚤寐哉
笠島や祀念の芒五月雨る、
一輪て爾ひ庭もつはたんかな
叩いても〳〵來るやふ敷哉
蚤のあと數へながらに添乳哉
刷りけり雨も降らねはならぬ程
水明り程の月夜や鳴水鶏
雨よりも月に飽あり今年竹
降雨に紅はかたふく牡丹哉
曝らしき思ひの外や宿木立
雪の香もありやと思ふ清水かな
かとにき〳〵奥に蚤寐の高いびき
儚れ漏る星飛ちかふ蚤哉
夏菊や手燭にかざす妹か袖
痕付せる兒に起さる、蚤寐哉
雨の露笹に殘して夏の月
もてなしの數にも入るか夏の月
月と日のそばで寐起や富士の宿
寐た人の名は笠にあり夏木立
宿にせし博多目立つや初袷
蟬鳴や日脚のしれぬ谷の道
蚊は耳へ來てさへ鳴くに不如蚊
富士詣で夢も屆かぬ所まで
罪のなき拾ひものなり山清水
尾上から見下す里の輪かな
人かけの流る、梢や社若

こゝろよい足の障りや夏の月
三日月や軒にイお蚊遣り哉
提灯は置き忘けりはたる狩り
空に夜は有ても遠い夜明かな
川風を麾めて通す涼み船
二言なき言葉遣ひや白扇
五月雨や氣儘に伸る畑の草
卯の花にふけて跡なし月の影
一ツ來て船のかたひく蚤かな
雲井にも近き身なれと雀蝿
脫た綿期うも着たかそおもいけり
炎天の雫となるや松の脂
月の出て向き直しけり涼み臺
玉苗や親の露命をつなき草
植て好き松かげや心太
月隱して見せる蚤かな
今買た風新らしき扇子哉
朝日さす方は一入青田哉
穴〳〵の蟹も無事なり五月晴
日盛りや人にも隱れさうな風
六月や家の中にも水の音
心ある人に見せたし白牡丹
能い友を誘ひ出しけり夏の月
仮寐して夢を釣こむ蚊帳哉
打水や鞭かへて庵の犬は足らねとうれし初真瓜

うは玉て子を遣せけり盛圖扇
蝿ふたつ重い因果の祭りかな
短夜や酒の座數に鍋の焼
行燈の今消際やはと、きす
子を叩く親の恵みや蚊の盛り
君が代の無事や青田の戦く音
時鳥一聲に上ひく座頭哉
賀ひ子の機嫌直しや蚤狩り
かり褥をたゝひて通る日傘哉
盃石は雪の高嶺や夏座敷
清瀬の勢い増すや蝉の聲
蚊帳に來た子は佛なり夏の月
月に鳴く聲は未だなき鹿の子哉
仰向は泣く兒の母か田植笠
水も霞る夜を松風と杜宇
新らしき物のくるひや背廣
今買た風新らしき扇子哉
短夜も待てはなかけり時鳥
啼くならば暫し止れ郭公
夏座敷見おろす下に釣小舟
風涼し翁の反り見る船の中
針かくし氣の美しき茨の花
大屋へは口をぬぐして初松魚
念入て茶の扱や入梅の中
發きそふに見る一日や燕子花
里子や山より高き親の恩

島羽玉の眼鏡ふて飛ぶ蚤かな
はなし迄島渡取られつ火取り虫
子供等に留守させてあり麥の秋
絞るはと濡れし柳や夏の月
話まて消して逃けり火取虫
散る覺悟すれば伐よき牡丹かな
ゆさ〳〵と青空遍る若葉かな
一掬ひ月も手に取る清水かな
明にくき戸に明き安き旭哉
結ふ手に月をいたゞく清水哉
うけおふて聞きに行かれぬ時鳥
風にして客をもてなす團扇哉
橋杭を鎖かわりや納涼船
猫の子や蝶に獅子舞ふ花牡丹
浮の世のやみはてらさし鵜の篝
さし昇る若葉のういや旭の光り
寢る連れの來て眠られぬ蚤寐哉
蚤先へからまる風や青嵐
短夜や寢ても忘れぬ親の恩
咳二聲母わ夜風をあんしけり
水汲に夜明を問はれ夏の月
来た花の日元持れぬ若葉哉
起さるゝ約束もして午睡かな
顔見すに渡す蚤の土産かな
涼しさや丸ひ間のなき水の月
涼風や高勝燈る閨き狀

なんとのふて、ろ豐に田植哉
子のせがみ涼みかたく蚤狩り
涼しさや水も一ツの料理種
雨宿りまて居る軒や夏の月
鶯く〳〵や蚤に磨く智恵裏
鳴いて來る蚊の邪魔になる蚤寐哉
拾ふたる心や蚤のはと、きす
ふり水に鮠もたのます初茄子
聞く度に耳新らしや時鳥
瘠たて、見れば月のみ時鳥
住古す軒も明るき牡丹哉
寢るにさい足らぬ夜を又郭公
葉ばかりや吾も一度は花の主
雨晴れて松の月夜や時鳥
初鮭ないて色そう池の水
青田から生れた樣な富士筑波
豐年の魚躍潤してはなすや蚊屋の内と外
の色に出にけり青田面
手輕うに換もかへて新茶哉
招かれて扇も語し相手哉
雨に傘してかけ込や澁團扇
廣沼の深さは知れて杜若
風入れと夏と思へば暑さ哉
驚舞やつい飛そうに風の添ふ
入船の帆にも香を持つ菖蒲哉
文を書く〳〵返事聞取るや時鳥
蚤献きと枕並へて蚤寐哉
花隱す葉も伐おしひ牡丹哉
初涼しさや座りし下に水の音
有中向はつ我を冷やす木の間の清水哉
笠を着て出づれば晴る、皐月雨
大空をやう〳〵戻りし牡丹哉
白牡丹戻や目に立つ破れすだれ
はやうい
初蚤迷いし證の土産かな
涼しさや横かち樹の見ゆる橋
手傳の出來ていさまし田植唄
雨賞めて別る、門の納涼かな
から低へ山も名をうる清水かな
親の髭伸す思ひや蚕畑
昔靜か夜の明けふりや瓜の花
古池の蛙や昔し物語り
傘取りに戻る木陰の清水かな
千俵の蚕を枕へや五月雨
罪もなき空を咎ひる鵜舟哉
此儘に舟も置きたし夏の月

月さして恥る思ひか飛ふ蚤
京へ立つ日に着初めたる袷哉
祖一重光る蚤や閻月夜
雲お賊て月お吐いたか時鳥
拍手の響く嚴やかんこ鳥

月出て、松のもなたや時鳥
耽てから渡る川瀬の風涼し
くたひれたこゝろ休めり藤の花
燃し火のふらと消飛夏の月
打水や巡査指揮する御幸筋
氣張くも妻の押出す鵜舟かな
釣りそめた夜は旅らしや蚋の月
月にもの言ふて居りけり蚊屋の内
黒光る佛の赤子生れ鬼
笠脱げば同し人なき田植哉
提ごろの石を片荷や初松魚
實ちぬかと思ふ急ぎや初松魚
廟す間にならしても見る扇哉
追ひゆけは後ろにまわる螢哉
葉裏かりて済した客や夏座敷
二日寐た手拭断しや五月雨
賊か家に身をつる兒子の蚊遣哉
客の來て次の間に出す蚊遣哉
鶏を追ひ廻しけりけしの花
此處までは來る筈でなし夏の月
花は花又一入の若葉かな
閨の夜に君に用立盛かな
郭公こゑを酔せし月の影
一りんて閨を欺く牡丹哉
帆は風に任せて水主の晝寝哉
盥の浴た涸りや苔清水

朝と午時實揃かへけり心太
耽てから渡る川瀬の風涼し
くたひれたこゝろ休めり藤の花
燃し火のふらと消飛夏の月
打水や巡査指揮する御幸筋
氣張くも妻の押出す鵜舟かな
釣りそめた夜は旅らしや蚋の月
月にもの言ふて居りけり蚊屋の内
黒光る佛の赤子生れ鬼
笠脱げば同し人なき田植哉
提ごろの石を片荷や初松魚
實ちぬかと思ふ急ぎや初松魚
廟す間にならしても見る扇哉
追ひゆけは後ろにまわる螢哉
葉裏かりて済した客や夏座敷
二日寐た手拭断しや五月雨
賊か家に身をつる兒子の蚊遣哉
客の來て次の間に出す蚊遣哉
鶏を追ひ廻しけりけしの花
此處までは來る筈でなし夏の月
花は花又一入の若葉かな
閨の夜に君に用立盛かな
郭公こゑを酔せし月の影
一りんて閨を欺く牡丹哉
帆は風に任せて水主の晝寝哉
盥の浴た涸りや苔清水

吹風に遥近遠る池の蓮
汗に出て人に流るゝ清水かな
涼風に吹取られけり門柏し
昼寝へる力に光る螢かな
不揃江な中に咲あり田植哉
聞てから耳立にけり郭公
能も花はおれと手遊し杜若
一ツ來た蚊に釣そむや親の蚊帳
搭合て見れは粽子や夕涼
氷を置て呑なし不二詣
氷に退た鳥の影さす清水かな
降りなち君てわひしや虎か雨
蚊も戦に宿世の血の縁か
實のるまて來難もしき早稲哉
花て見しまゝ木も交わりて見木立
動く氷につなき替へけり納涼船
子のありて豊も御さぬ蚊帳哉
雨遥るわひから追ふて郵時雨
新宅やてんた跡なり船の飯
夕立の濟んた跡なり船の飯
田の戸にさし入る月の影涼し
都利かれ船を扇に戻しけり
しつそする香もあり蚊屋の釣初め
柏手の曳る、林や当清水
草吹た乳母の手數や螢狩
此辺は御代の基が田植唄
卯の花や端は小くちき窓なから

船よりも涼し船見る樹の上
まちる夜はさなから雨かと時鳥
涼しさや雨は限りの見除て降る
汐くさき卿の風や郭公
添寝して浮名も立た走竹哉
冷々と夜の明てあり五月晴
頬も膨も双ふ田植かな
蚤飛ていやしうまたり四疊半
薬になつて風にくからぬ扇哉
また花も有る藤棚の茂りかな
鳴呼今ぞ耳に欲する郭公
富士の峯幾掛くよふに郭公
ひと隅で蚤痴さす兒の蚊帳哉
涼しさや月をゆり出す納涼舟
傾けて子にさしかくる日傘哉
轉ひ寝に錄を西瓜の樹哉
閑心秋は豊かと蟬の聲
虫干や祖父の倹約おもはる、
たゝく程靜なる夜の水鶏かな
散る牡丹親に別るゝ思ひ哉
書熨斗の盆にひやすや眞桑瓜
五月雨や雲にとりつく草のつる
并子提て女の跡にあゆみけり
君竹や雫に重きまないふし
ふむ足のあとから出れる清水哉
蚤夜の飢れものなり影の月

初鰹をさそふはとや初茄子
打水に座敷も冷る心かな
月や上船にも困る夕涼み
紅扇唉へて裾を直しけり
空に氷何程あるか五月雨
誓り社眞社に鶏
留主の戸あ蓋ま田
時ま來し個扇使は
此髪を猶折と見
めたる間の爺や
身も疵の影や
夏め野も名遠なき
寝る人を渡望して
悔れ蚤ゝ
月涼しさわれは
清水まて氷てはたら
ある日を船へ戦
明湯ゝ夜をゆう
筋子は来た花は
蚊遣火を夜なへか
向涼し舟ひくく
白雨や濟ひ瀬
よく決て捨てられ
えぐれても朝と
門迄は月と戻る
座を扱けて涼て

龍の目を氣遣ふはとや初茄子
打水に座敷も冷る心かな
月や上船にも困る夕涼み
紅扇唉へて裾を直しけり
空に氷何程あるか五月雨
誓り社眞社に鶏
留主の戸あ蓋ま田
時ま來し個扇使は
此髪を猶折と見
めたる間の爺や
身も疵の影や
夏め野も名遠なき
寝る人を渡望して
悔れ蚤ゝ
月涼しさわれは
清水まて氷てはたら
ある日を船へ戦
明湯ゝ夜をゆう
筋子は来た花は
蚊遣火を夜なへか
向涼し舟ひくく
白雨や濟ひ瀬
よく決て捨てられ
えぐれても朝と
門迄は月と戻る
座を扱けて涼て

深川の鯉料らせて涼みかな　其角
御馳走の酒よりわたの清水哉　嵐雪
桜先を客の上座や夏の月　其角
よけられて氣儘に戻や茨の花　嵐雪
川風に火入團ふや澁團扇　其角
はいからね母に添寝や蚤防ぎ　嵐雪
蜉鳴や地に粒雨のむらかはき　其角
盃を押へて扇遣ひけり　嵐雪
のそき見の顔どりまいて蚊蚊哉　其角
佛にも生死のあり花見堂　嵐雪
雛ふ雲を綻はす音や時鳥　其角
イは後に啼く〳〵や閑古鳥　嵐雪
機々の咄しに更かす納涼哉　其角
扱も醉なくて逃るや雲の峯　嵐雪
芙蓉も皆出揃ひの節句かな　其角
折りに來て折る氣牡丹に折られ　嵐雪
君か代の更衣に白し駒兵協　其角
青簾掲くる暮や釣る蚊帳　嵐雪
散るはちす此も無常の一ツかな　其角
一ツ松日當てにいそ〳〵昔かな　嵐雪
思ひ出す涙の程や虎か雨　其角
斷腸や聞も血を吐くはとゝきす　嵐雪
雨の鵙ひれてうるさし笠の内　其角
小さくも親の忌日や初茄子　嵐雪
日をあらみ今日は神田の植初め　其角
日お隈み過して雨の田植かな　嵐雪

競伊の苦は見も夏の褄襟長　其角
風なり北道のつゝなり夏め草　嵐雪
果報は寢て待時ありと蚤虱哉　其角
聞も手に握り恭るや蚤蠅　嵐雪
宵寢して見ても短かき夜なりけり　其角
人醉も絶へて誠め納涼哉　嵐雪
ひとすゝ斬にひや〳〵清水かな　其角
待人の便はなくて杜鵑　嵐雪
出る風にふた色はなし避團扇　其角
生れ出たなりを其儘夕納涼み　嵐雪
提燈をかりても見たし日傘哉　其角
遠揉て昨日の雨に濡れにけり　嵐雪
植ゆる手に行儀の見ゑて田植かな　其角
陸島耳朋當た果報かな　嵐雪
折鶴を飛はする乳母か扇子哉　其角
よべば遠高ふなりたる蚤かな　嵐雪
九重もしめり通るや民の汗　其角
人よりも日傘に狹き渡し哉　嵐雪
かわい子のあたま打けり蚤罕　其角
きせる子の母も笑顔や初袷　嵐雪
夕立と聞て水汲ひ在所かな　其角
寢た親のそはにうつむく蚊遣哉　嵐雪
蚊に君初た親の袷かな　其角
短夜や雫の殘る井の釣瓶　嵐雪
子に重荷讓りて輕き團扇哉　其角
蝉はしふ搗ちす里や湧清水　嵐雪

頃城も色に迷ふやかきつばた　其角
相傘の顔見に來たか飛蚤　嵐雪
あくるまて月に名殘哉時鳥　其角
人井に犬も來て居る涼かな　嵐雪
舟つなや場所も替るや夏の川　其角
岑行の團扇の書や壁際　嵐雪
遠慮なき谷間の庵や夕涼　其角
扇〳〵手の乳母の手柄や軸主　嵐雪
出る風にふた色はなし避團扇　其角
生れ出たなりを其儘夕納涼み　嵐雪
提燈をかりても見たし日傘哉　其角
家柄も株かちも能き牡丹哉　嵐雪
植ゆる手に行儀の見ゑて田植かな　其角
陸島耳朋當た果報かな　嵐雪
折鶴を飛はする乳母か扇子哉　其角
よべば遠高ふなりたる蚤かな　嵐雪
九重もしめり通るや民の汗　其角
人よりも日傘に狹き渡し哉　嵐雪
かわい子のあたま打けり蚤罕　其角
きせる子の母も笑顔や初袷　嵐雪
夕立と聞て水汲ひ在所かな　其角
寢た親のそはにうつむく蚊遣哉　嵐雪
蚊に君初た親の袷かな　其角
短夜や雫の殘る井の釣瓶　嵐雪
子に重荷讓りて輕き團扇哉　其角
蝉はしふ搗ちす里や湧清水　嵐雪

蓮に風筋見する青田哉　其角
泪くみ客の應昔ふ蚊遣機　嵐雪
みなくした蚤は月に取られけり　其角
暑い氣の立や讃院の空氣悉　嵐雪
水の音もなくてすゝしき森の下　其角
千俵や女寨のものたさが　嵐雪
袷着て今日此頃の起居かな　其角
汗の衣乎掛くるみ渡しけり　嵐雪
丹生にも余る蚊遣りの煙り哉　其角
居處を替へても蚤に喰はれけり　嵐雪
兒の顔を蚊に打つ母の憎み　其角
傾城の納涼出口の柳樹　嵐雪
乘しさに嫁も小鰐で田植哉　其角
風を見る樹もある夜や夏座敷　嵐雪
子の晝寢そつとかけるや親の恩　其角
月花も叱るや梅雨の袖のかび　嵐雪
手の團扇止ひか搆に寢入けり　其角
諷り合ふ清水や旅の鵜み同士　嵐雪
六月の夜や生かへる草の露　其角
夏やせや好ひ娘にいとゞ母　嵐雪
踏迷ふ道の闇や郭公　其角
楊はかり見へて遥なし五月雨　嵐雪
五月雨や三筋の瀧も一流れ　其角
さうかとて酌されす夏の月の水　嵐雪
月一ツ呑んで涼しや夏水　其角
妹背の富浦も取らて子の日　嵐雪

けふ当り不二もくもれよ蚤か雨　其角
笠寺へ逃げて夕立通しけり　嵐雪
昼ゝ見增る青田かな　其角
貧つきの若ふなけり通し鴨　嵐雪
水は西の滑き物なり御板川　其角
春さいてうつり行月日は早しはつ松　嵐雪
夢移ふ水になつかし四月哉　其角
鐘聞て蚤撞寺や五月雨　嵐雪
富士の雪とけてきに見る暮さ哉　其角
袷圃扇や見ても涼しき京仕立　嵐雪
帽子のおて撮おつし親の恩　其角
足らぬ乳に兒のより下る暮さ哉　嵐雪
卵の花に客の來てとる茶哉　其角
涼しさや寢は四ツ辻扇哉　嵐雪
一トしきりの暑さ忘れし滑水哉　其角
樹の雨の乾くも待たす蝉の聲　嵐雪
降りたらぬ雨の噂さや涼み臺　其角
夏の月山の噂はなかりけり　嵐雪
夜涼にさけて築しきはたる縫　其角
音もなき風に岩葉の戰きけり　嵐雪
涼しさや余所の新うの囁ひ雨　其角
東雲や月は殘りてはと、きす　嵐雪
柳やと人にいわるゝやなきかな　其角
涼しおや隣々ひすのひと重帯　嵐雪

貪慾の角振り立て、蟻牛けふもまた乾くほやはと、うす汗ふいつしか暮る、田植哉

川狩の網束雨に流れけり

笠の雫は未た夜の色そ蓮の花

犬蓼も花咲き揃ふつけねかな

親も流つ東路に追ひけり

五月雨や郷のなつかし旅こゝろ

温泉場に寐て初時鳥聞夜哉

火入だけ風にかくして夏座敷

夏の夜の分けて短かし不二の山

郭公一聲高し初松魚

一聲に寐ね目も覺めて時鳥

笑ふ口隠す團扇を取られけり

誇ひ昔や

上手はと手に隙のなき繩かな

親の氣に叶ふて嬉し涼み臺

見るうちは荒息もせぬ牡丹かな

昔さかなき若葉の色や水の面

國富ます色の見へけり青田圃

物凄き若葉の色や水の面

ないものが出來た思ひや夏の月

踏延ひて館き寐かけんや初鰹

虫干や孫に昔しの物語り

青梧の一ト木や庭の夏座敷

脚峯をはなれて梅雨の空

底までも見へて涼しき流れ哉

咄しさへ同手にあまる牡丹哉

手に風の生る、うちわかな

捨られて仇に思ふな火取虫

暑さかな蛙たわむれ面白き

放ねば暑はなしけり

苦は樂の種となり行く田植哉

石狩の川上遠し團子島

池を巡りて夏坐敷

月させは風ゆれのおり釣しのふ

何よりも風か馳走や夏座敷

あるよし池を巡りて夏坐敷

竹の子の育つも竹の平かな

吹おろす溪は若葉の涙の花

いとふ心はなくて火取むし

晴蚊よりなかねば蚊にある恨み哉

いつの世に松は枯れしそ團子島

猫の手にひかれ勝なり蚤狩

水打ては打つ程燃る篝哉

人手にはをけぬ牡丹の掃除哉

假の世に假の泊寐や竹婦人

最少し長き手も哉宵中の蚤

臭庭に畦掘けり五月雨

雷の遠音ひゞくや雲の峯

士產には淋しき書の益かな

鶏啼て炊五月の雨間哉

青柳と共にいけたるはたるかな

今植へし田に夕露のはら〳〵と

年は年たけの功あるたうへかな

市寺の鐘は見せぬ牡丹哉

直〳〵いのけ人異似もよし今年竹

瑞の手にひかれ勝なり蚤狩

指す竿の雫水涼し涼み舟

川狩の網束雨に流れけり

笠の雫は未た夜の色そ蓮の花

犬蓼も花咲き揃ふつけねかな

親も流つ東路に追ひけり

五月雨や郷のなつかし旅こゝろ

温泉場に寐て初時鳥聞夜哉

火入だけ風にかくして夏座敷

夏の夜の分けて短かし不二の山

郭公一聲高し初松魚

一聲に寐ね目も覺めて時鳥

笑ふ口隠す團扇を取られけり

誇ひ昔や

上手はと手に隙のなき繩かな

親の氣に叶ふて嬉し涼み臺

見るうちは荒息もせぬ牡丹かな

物凄き若葉の色や水の面

國富ます色の見へけり青田圃

踏延ひて館き寐かけんや初鰹

ないものが出來た思ひや夏の月

捨られて仇に思ふな火取虫

青梧の一ト木や庭の夏座敷

苦は樂の種となり行く田植哉

咄しさへ同手にあまる牡丹哉

月させは風ゆれのおり釣しのふ

手に風の生る、うちわかな

竹の子の育つも竹の平かな

放ねば暑はなしけり

晴蚊よりなかねば蚊にある恨み哉

石狩の川上遠し團子島

水打ては打つ程燃る篝哉

何よりも風か馳走や夏座敷

人手にはをけぬ牡丹の掃除哉

吹おろす溪は若葉の涙の花

最少し長き手も哉宵中の蚤

いつの世に松は枯れしそ團子島

雷の遠音ひゞくや雲の峯

今植へし田に夕露のはら〳〵と

鶏啼て炊五月の雨間哉

市寺の鐘は見せぬ牡丹哉

瑞の手にひかれ勝なり蚤狩

なく〳〵音ぎてもらさはいかに飛螢

夏痩もないと薬の證手紙

短夜に長ふして寐る手足かな

見る鯉に科る鯉あり夏座敷

湖もゆるかぬ日なり雲の峯

閻はさもあれと月夜も火取虫

日は月にかわるもしらて門田植

淵江に染まぬ風情や月と蓮

着ぬよりは涼しさふなり夏羽織

天のひらやゆひの數程初茄子

冷かしの植て廊の暑さ哉

打釣も利かぬ柱や飛羽蟻

短かきを文の手柄やはつ松魚

涼しさに添へ乳らつへ寐ぢな

時鳥待たて望みの足る夜哉

旅人の煩杖て聞く水鶏かな

山里はつゝみにかへて時鳥

おこされて腹の立ぬや郭公

雪降らす夜討の鐘や夏芝居

洞りにも染ぬ君子や池の蓮

蹴追ふて居る子や親の叢寐中

二人してとり逃したる蚤かな

放遣り火や母と居かわる煙り先

身には蚊を受て母には盲ふかな

起〳〵の心澄ますや蓮の花

涼しさや川に掛たす家搆へ

眼はしらしふいつしか暮る、田植哉

寐にねけた汗の冷たき茂りかな

手傳の物讀すきや土用干

余所の門かりて見上ける蚊かな

炎天や雫

雅の友の多くてうけり夕涼

料理人知らぬ風味や沖なます

月涼し此夜戸さしていかんせん

涼しさや萬の葉裏に風見もる

吹風のおひ育てる今年竹

名の付かぬ木の有る山や閑子風

白牡丹雫も落す水の色

親の慈悲海より深し初袷

寐る程はおとに夜もなし時鳥

早乙女や笠の片手に水徳利

追ひ行けは月に消へたる蛍哉

さも降たやうに水日打暮哉

うへしろにおくや早苗の自分量

蛭愛や烟拔井戸に夏の月

蚤は人もこうもらむ夏氷

古園扇風は古くもなかりけり

實われて婦をはつかし余り苗

寐さは葉裏にあり初茄子

この映を親にみせたし野の清水

客にたす御茶のかわりの氷水

寐た親に風とる寐の扇かな

十日はとおくれて老の衣かへ

白牡丹雫も落す水の色

鴫鳴に姿殘して時鳥

空立の跡涼しけり蟬の聲

特人の身にもなれなし時鳥

一里二里三里山奥時鳥

木綿着た人か牡丹の主かな

呼鳴に尾鰭の竹はつ鯉

晝に君代々に民あり神祭り

風筋を親に譲りて涼けり　子心や蚊にも喰せぬ親の面　孫の代に世は治まりて初幟り　四五本の竹もなかめや雀鮨　政屋一重世を隔たる心地哉

月の洩る住居は近し時鳥　人は寐に足らぬ夜すがら鳴水鶏　万代の蔭なるや初幟り　早乙女や厭しく咄す唄の際　梁しさや蚤寐の親の高鼾　眼のなくは心よさぬ牡丹かな　涼しさの壁や蠟燭の片のかれ　夜飛脚の蚤に喰る眠みかな　片かけのてきて忘るゝ日傘哉　水く〳〵る思ふ漁士も傘さす五月雨

山の蔭にまた若月や時鳥　茶る夏の表道具や蚤　夕立や信濃太郎か又生れ　親はとに節高うなし今年竹　田て寐し親に蚊を追ふ娘かな　打水やさしも日影のぬるひはと　夏痩をなためているや妙つかひ　庇にも草の香のする五月哉　一日の苦を捨てに出るすゝみ哉　辰に寐て拾ひものなり時鳥

大空を假に一聲時鳥　美しや里や家こゝに笑ひ牡丹　涙の花潤も出て船の納涼哉　飯次の時鳴見とれて柏餅　うか〳〵と京に長居や更衣　今宵そゝきもむる日のなし時鳥　我影を砂へ踏みこむ暑さ哉　月涼し爰は名にきく門田川

牡丹見や神走る鈴の音　雨はなし静な夜立り鳴水鶏　夜明するの現の海や夏の月　あやめ葺ふいて開くや扇かな　羽蟻やら燕子花につやもり　寐もやらて更行空や夏の月　蝋の香のつれて張出す馬士の唄　庇丁の光り春よや初松魚　鯉白魚にも飽きて初鰹　弁の骨のすてき哉

それをく〳〵川狩や母の晝寐の覚めぬうち　時鳥いさや月を飾の鼓傳へ　涼しさや明る共さ、よ暗く迄時鳥　海見よる機に進みて夏の富士　捨られたうふに板間の午時寐哉　庭風や吹香あまりて盆の音　試みにかけた傘なり背簡

月も日のそむむれも好むむ床しき夜明を青田哉　白扇只てはへ親は寐てかさめてはもなし夏の月　涼たい卵しや雲にゆれ水音にゆれ涼しさや土手の松陰人の行　乳香む子も〳〵月のはつみや陰高い人り遊ぶや蚤の秋　背戸口に物乾てわめ栗の花　銀の力や盛山や深く聞ゆる蟬の音　親の心を汲ふ雁や夏の月

短か夜やもた明けのてる九行燈　影法師踏つふれつ納涼哉　物さへ動かぬ頃や雲の峯　金魚は夢にはめて牡丹のあした哉　花火や夏の夢の迹　追ふ蛍や拾ひよみの川の中　涼しさや月漏る蚊やに風の来て　とんはんや涙に浮木の風情哉

五月雨やおのさいやまずしるし哉　五月雨や家に人なし蚤の跡　五月雨や垣普請して戸口から富　五月雨や旅の宿屋にうわさ哉　五月雨や畑打の鍬の柄長し夕日かけ　五月雨や草にうつまる数寄屋下駄　爪先を入れて身振るう清水静　我影に驚く月の蛸子哉　蚊も居ぬと咎るよい風よい月夜　棡に手のと、きやすさや初秋　吹く風に卵の消へたる火中哉

いつ暮る、ともなき夏の月明り　柴の戸を明けよと叩く水鶏かな　飛螢のいつちの盛哉　鈴の音は蚤か母の枕元　火取虫一昨日来よと放しけり　百蚊の消に追ばる、暑さかな　花の香は深山に入りぬ時鳥　御車を舁る、風の薫り哉　千なりに旭の輝きやはつ鰹　白かさねきぬいにわけし輝けわい　卯の花に降れば明るし閨の雨　何處さても急ぐ色なき五月哉　鯛鱒や水かさに休む真ひる時　水に夜の明け原はやし蓮の花　不意とたつ片手に磐るや郭公　灯の消へて近よる水鶏かな

風呂に居る一口清水かな　晝寐の肱枕し閨扇休めけり　夕立や日傘用意行き違ふ　ねた親によい夢見せて蚊遣かな　短夜や人待つ時は程長し　蚊火や名も無き川の夜るの景　短夜や子にかたりつけて寐る女房　飛螢のいつちの盛哉　鈴の音は蚤か母の枕元　火取虫一昨日来よと放しけり　百蚊の消に追ばる、暑さかな　花の香は深山に入りぬ時鳥　御車を舁る、風の薫り哉　千なりに旭の輝きやはつ鰹　白かさねきぬいにわけし輝けわい　卯の花に降れば明るし閨の雨　何處さても急ぐ色なき五月哉　鯛鱒や水かさに休む真ひる時　水に夜の明け原はやし蓮の花　不意とたつ片手に磐るや郭公　灯の消へて近よる水鶏かな　

手枕の涼しさ夢となりにけり
君論イ一ト指舞わん初扇
蚊帳子やひやりと松の一雫
短夜や座もかわらぬに鶏の聲
座崩れの思わすしたる晝さ哉
都へも出てよねなかの時鳥
新ちしき蚊帳へ寝た夜の心地哉
氣遣ひやひとり旅地の儘合蚊帳
親よりもいやましすゝし氷かな
あきもせて搖迯通ふ夕涼み
今朝見れは麓へねし釜の跡多し
古池へ影をうつして飛ふ蜑
麥秋や馬引なから重荷哉
夕立や見しらぬ人に茶と火いれ
短か夜や二三度超る鼠わな
寢心を夫に問ふや竹婦人
ひた〳〵と水踏遣の杜若かな
寄る年のよるとも知らぬ新茶哉
泥の手へ泣く子受取田うゑ哉
抜〳〵杭を棚に渡して燕子花
不二に目のとゞけは寒し雲の峯
白雲に遠見なくすや不二詣て
流れ行〳〵水に奥あり夏の月
恨み聞〳〵耳ならかされすゝみ哉
來る人の一足ひかる蚊遣り哉
すゝみつゝあかす一夜や日和山

人もまたこゝろもありたき牡丹かな
人に跡踏りてのくや涼みの座
見おろして汗をふきけり坂の上
夕立やかけ込む軒の釣しのぶ
涼しさを客にもてなす青すたれ
こゝろよや草に露あり夏の雨
花安の花に付て行く螻々哉
末廣のあんきかたとる粽かな
魚市の人無勤かす暑さ哉
伸たかと苗代見廻る雨の朝
花のちはさもせぬに初瓜子
竹の子を竹にする氣が竹の垣
山も和らく若葉哉
夏座敷庵打來へ蝿迅しさ男の子
茶袋に今宵は明て飛かはる蚊の袋
短夜や二三度超る鼠わな
寢心を夫に問ふや竹婦人
ひた〳〵と水踏遣の杜若かな
寄る年のよるとも知らぬ新茶哉
泥の手へ泣く子受取田うゑ哉
抜〳〵杭を棚に渡して燕子花
不二に目のとゞけは寒し雲の峯
白雲に遠見なくすや不二詣て
流れ行〳〵水に奥あり夏の月
恨み聞〳〵耳ならかされすゝみ哉
來る人の一足ひかる蚊遣り哉
すゝみつゝあかす一夜や日和山

炉の中に煙草火もなし麥の秋
出て見れは歩行〳〵連あり夏の月
水不足五月待や田植かな
暇するすゝに帰けり時鳥
定ざらぬ風や蚊やりの置所
招かれて扇の下や薫る風
先ち母に着せて身輕き袷かな
明てよい暮でもよしや郭公
蠅虫の籏新らしき五月哉
よい中も喧中合せや門納涼
花鰹の酔はいちらし茶摘歌
五月雨や故郷思ふ親の恩悲
顔出されていやとやいへす蓮を切
夏座敷庵打來へ蝿迅しさ男の子
うたゝ寐の姑をおこす團扇かな
無沙汰しの心に高し雲の峯
たが音ひ初し牡丹哉
富貴草ちらほら一つ遊出し盆かな
酢されて下女も暫しの登座哉
昔柳の葉もみたれけり川嵐
聞とれぬ般の舳しや行々子
千鏡や正札附に虫の入り
大船をゆるがして行盛かな

夏の月夜や蝿かくも衆道ひ
只高きはかりてもなし夏の富士
家移りもせぬ燕の出入かな
暗や草も動かぬまひる中
つい音は交すに安き夏の月
結ふ手に不二の影さす清水哉
筆の軸焚て書生の蚊やり哉
美くしふして戻しけり蚤蝨
半日は長持〳〵さしはつ谷涼し
火取虫靜かに立て送りけり
御坐の間を遠に蓮ふ扇かな
朝晴の山新らしき五月かな
山茶にも色もある新茶哉
蟬なくや話にたへる並木原
花ひとつ咲て傾く牡丹哉
なき人の小袖も今や土用干
誕て髪結ふ一と里や閑子鳥
憎い蚊といふて強るや兒の寐顔
岩清水うきの座もなかりけり
空高く湖に移りぬ夏の山
金溜める際りは寐たり郭公
入船にせまき卯月の港かな
子を替へてまた來て潜る茅の輪哉
行〳〵先の見へつゝ遠し試ふ行
花よりも若葉の庭や朝心
千代を呑ひ様な心地や苔清水

魚に散〳〵催め葉うらや蝙牛
家々の雷振はし夢の秋
夕あ性物下やひつ暮し旅姑
屋は秋ろにもも驚ふ蟲
ある修行峯の若葉かな
夏の雨や田植の祝ひ酒
美くしふして戻しけり蚤蝨
半日は長持〳〵さしはつ谷涼し
火取虫靜かに立て送りけり
御坐の間を遠に蓮ふ扇かな
朝晴の山新らしき五月かな
山茶にも色もある新茶哉
蟬なくや話にたへる並木原
花ひとつ咲て傾く牡丹哉
なき人の小袖も今や土用干
誕て髪結ふ一と里や閑子鳥
憎い蚊といふて強るや兒の寐顔
岩清水うきの座もなかりけり
空高く湖に移りぬ夏の山
金溜める際りは寐たり郭公
入船にせまき卯月の港かな
子を替へてまた來て潜る茅の輪哉
行〳〵先の見へつゝ遠し試ふ行
花よりも若葉の庭や朝心
千代を呑ひ様な心地や苔清水

短夜や上手は殊る碁の勝ふ
夏氷立赤ふ旧に立つ稲荷堂
家に生原なつかしや時鳥
屋ゆけた扇に白し富士の雪
室に此涼しさはしり夏の月
佛かな生れたてから拝まる、
たつた今咲たきうなり杜若
讃め納書を直々に畫葉の枕かな
風も其色に吹そめ背田哉
書のひゝきに咲や杜若
駒ゝめて水乞ふ家や蝉の聲
遊ひつゝ居ても世話しき扇かな
日からかさ朝からさして通りけり
風を着て月を枕や夏座敷
蘇建て、狹し牡丹の植所
五月雨て隣りも遠くおもいけり
潭つはへ青味のうつる若葉哉
身を焦すふりも涼しき蛍かな
七五三飾てある井がわや蝙牛
麥秋や留守を翻る渡し守
取ちらす團扇も暑き座鋪哉
行〳〵船の布を曳きけり夏の海
静かさや不二も日長の夕詠
玉襷の内へ通すや薫る風
ない袖も子に振らせたる祭り哉
夕立や鈴音あちき戻り馬

迄よ時は角を力敲かなうかり
引船の綱もるみけう時鳥
島一ッはのかに見るや夏の月
大家を中に狭んて夏木立
武者の具似する子の好む蕈被
庵清し此谷水に此新茶
もや晴て暫の走るや時鳥
むしあつき時計り音う雷の音
鉢物に水くはる日や雲の峯
夏の山眺めて走る孫草の窓
邪魔そうな庭へ煙管や苗配り
月になる雲の離れや時鳥
おとし文解のなつかしも杜鵑
初鰹候思はさ朝寐したりけり
筆形に朝の笑顔や杜若
苦たれて息せく犬の暑さ哉
朝市に出して匂ふや真桑瓜
枝の儘はしき柳の蔓かな
薬櫻や吉野心を夢にして
夕晴や青田に移し海の色
今切た水のにごりや蓮の花
障子迄來るや牡丹の返し照
暑き日や間〳〵の松の風
風見もる程にのびけり苗代田
おり〳〵は團扇の動く蚕棄哉
富士さへも裏線見ゆる暑さ哉

五月雨や柳の垂れて眠るさま
雨時の間に時に付くや行々子
月二ッ身は一ッなり船涼み
植付たけふや楽しらうたのふし
夕立のあと静なり苔の上
蚊釣舟の世話にはならぬ西瓜哉
降るより登りを急く富士參り
風先や母に居かわる涼み臺
風と來し雨に香ふや夏の月
百里の間も涼しさや夏の月
竹の子や土まて京は京の味
夕月の影に乳を呑む鹿の子哉
涼風や團扇に受る下もの
なつ人のこゝろ間水影の涼み哉
好吟白ノ風雅ノ一ばりヲ見本道ノ蓮ナルヲ思ヒ安ア
蒸り來る風や風雅の乘り門
手のとゞく水にうれしや杜若哉
乞へ遣けし雨や來て聞く面白み
露や老ても辟は明の内
撰様より風の直を持つ扇哉
落合た咄しに更る納涼かな
瓜小屋を問ふ人もあり夏の月
夕立やゝすゝ〳〵語る秋相庭
世に染ぬ心尊き蓮かな
よし切や帥に痩せたる川の市
杜鵑目は愛めにけり月明り

あつい哉は昔也と評に及ぶ
乳貰の乳も遂込む夕立哉
小流の涼しきを音や夏座敷
へむしろかるすや夏の月
茶湯花や草に置かる根なし水
窓の灯に照る野菰や蛍哉
けむたかる子を思ての蚊遣哉
蚊の影さしそむ窓の蚤寒哉
子をあをく調の身あつき深哉
遠白し今見めた眼の星鹿
よい縁になる子は蚤寒せさりけり
逢込む蝿殊へて戻るや闇の上
小流の涼しき音や夏座敷
へむしろかるすや夏の月
茶湯花や草に置かる根なし水
窓の灯に照る野菰や蛍哉
けむたかる子を思ての蚊遣哉
蚊の影さしそむ窓の蚤寒哉
子をあをく調の身あつき深哉
遠白し今見めた眼の星鹿
よい縁になる子は蚤寒せさりけり
逢込む蝿殊へて戻るや闇の上
小流の涼しき音や夏座敷
へむしろかるすや夏の月
茶湯花や草に置かる根なし水
窓の灯に照る野菰や蛍哉
けむたかる子を思ての蚊遣哉
蚊の影さしそむ窓の蚤寒哉
子をあをく調の身あつき深哉
遠白し今見めた眼の星鹿
よい縁になる子は蚤寒せさりけり
逢込む蝿殊へて戻るや闇の上
小流の涼しき音や夏座敷
へむしろかるすや夏の月
茶湯花や草に置かる根なし水
窓の灯に照る野菰や蛍哉
けむたかる子を思ての蚊遣哉
蚊の影さしそむ窓の蚤寒哉
子をあをく調の身あつき深哉
遠白し今見めた眼の星鹿
よい縁になる子は蚤寒せさりけり
逢込む蝿殊へて戻るや闇の上

日をえらぶ工夫につまて蚤寒かな
蚤も稼み上けてあり蚤の峯
地にうゝと見ねば鎖島の踏哉
大家を中に狭んて夏木立
武者の具似する子の好む蕈被
庵清し此谷水に此新茶
もや晴て暫の走るや時鳥
むしあつき時計り音う雷の音
鉢物に水くはる日や雲の峯
夏の山眺めて走る孫草の窓
邪魔そうな庭へ煙管や苗配り
月になる雲の離れや時鳥
おとし文解のなつかしも杜鵑
初鰹候思はさ朝寐したりけり
筆形に朝の笑顔や杜若
苦たれて息せく犬の暑さ哉
朝市に出して匂ふや真桑瓜
枝の儘はしき柳の蔓かな
薬櫻や吉野心を夢にして
夕晴や青田に移し海の色
今切た水のにごりや蓮の花
障子迄來るや牡丹の返し照
暑き日や間〳〵の松の風
風見もる程にのびけり苗代田
おり〳〵は團扇の動く蚕棄哉
富士さへも裏線見ゆる暑さ哉

閑〳〵まてそは大事の夜なり時鳥
樹に遠て筆研く鳥や花菖蒲
夏海に遠て筆研く鳥や花菖蒲
地にうゝと見ねば鎖島の踏哉
大家を中に狭んて夏木立
武者の具似する子の好む蕈被
庵清し此谷水に此新茶
もや晴て暫の走るや時鳥
むしあつき時計り音う雷の音
鉢物に水くはる日や雲の峯
夏の山眺めて走る孫草の窓
邪魔そうな庭へ煙管や苗配り
月になる雲の離れや時鳥
おとし文解のなつかしも杜鵑
初鰹候思はさ朝寐したりけり
筆形に朝の笑顔や杜若
苦たれて息せく犬の暑さ哉
朝市に出して匂ふや真桑瓜
枝の儘はしき柳の蔓かな
薬櫻や吉野心を夢にして
夕晴や青田に移し海の色
今切た水のにごりや蓮の花
障子迄來るや牡丹の返し照
暑き日や間〳〵の松の風
風見もる程にのびけり苗代田
おり〳〵は團扇の動く蚕棄哉
富士さへも裏線見ゆる暑さ哉

百合咲や汝一ッ朝は蟹の穴
薬殿や魚釣り一人り岩の上
家出して子ゆゑに今日の暑かな
おとすなよゆふを持たせる扇哉
かけ茶屋の取込む庭の清水かな
子に乳と駒繋のへる田植かな
持合の蚤厠く音か郭公
夕立や連の紫来て珠一つ
今日からは杖にもよちす初松魚
鮫進火はひせて手にとる團扇哉
果たりと思ふ夜はなし夏の月
薬櫨や花は昨日とおもふ間に
若竹や艶に染りし朝の色
終もる始の色そ若楓
氷の日を朝から待つや夕すゝみ
轉寐や團扇片手に持ちながら
いつとなく寒み愛や秋隣り
暑き日やうるさくみゆる犬の舌
但一人すり火を友や夏の月
撰座や若葉の中の水の音
白雨や見覚のある蓮の顔
蓮を呼ふ手から清水の雫かな
道とへば杉に指さす清水かな
涼しさに夢もぬけるや籠枕
蚊夜や明けたと聞いて起き惜み
涼み人や皆我さいな居りやふ

村雨を袖に包むや時鳥
涼に影は碎けて月涼し
丙談も外に追はるゝ蚊遣哉
岩清水坂のつかれも忘れけり
このもしき一と夜の伸や今年竹
花活けてしばしわするゝ暑かな
兒を抱ひた母から先に蚤寐哉
花の夢言の葉となる櫻かな
牛を曳く人の心のあつさかな
親に似ぬ子そ美しやばらの花
かたびらに解た琴や夏氷
蚊は狡猾く逃て只打顔哉
乳子へ來る蠅そうと追團扇哉
はさむ夏月の動くや水脊
夕風の凪て川越す蛍かな
閑に來た友は寐入りて郭公
花見から馴染宿やはとどきす
花嫁は炊事方なり田植時
初袷孫の仕事こ晝てする
身は影で影は主なり水の月
是にさへ手際の見ゆる粽かな
初蚊帳やよき程に出る山の月
蚊追ふた跡ねむらぞに仕舞けり
月涼し膝の上にも松の影
世の中は是てこそ好き袷哉
五月雨のもる辻堂や蝸牛

さらによき碁を圍ひ身の引茶哉
買い當た馬の咽しや溢團扇
時鳥きかぬ様なり田植うた
三日月の影汲みこぼす清水かな
袷日傘や子を歩行させる日車
出て行けば又も降りけり夏の雨
したゝりて寒き岩根の清水哉
蚤に立つ際から針のこぼれ鬼
掬ふ手に松影動く清水哉
主あらは聞の言ひたき清水哉
笑われて手のとゞきけり杜若
脫ぎ捨ての衣物冷たし五月雨
涼風に戀しき風もまじりけり
花ゆれの名を動がして牡丹哉
二の腕て汗を拭ふや田草取
蝿火たかへて親公へ笠かな
逢ふて來た人に寄る日傘哉
田舍から暑さ持込都かな
村雲のやみおり〳〵や時鳥
氣のおけて初夜眠れす竹婦人
空にさし棹に碎けぬ水の月
蚤の若になかは卷けり青簾
涼しさや笠とひこゞ青田風
風かみを親にゆづりて納涼哉
身を輕う持て重たし筑磨婦
やみの夜に得意顏して蚤哉

口漱く流れ冷たき茂りかな
不手際を寛に結びなす粽哉
不二の夢入れて蚊帳の廣さ哉
孝行な話に更ぬ涼み臺
餅店の瓶や團團のつかみさし
一ッ家に客のふえたる夕立哉
蚊遣り火や幾度もかへる置所
寐みたれや乳房放して出る鉄屋
親の名を傳りて貰ふ清水哉
只居でも汚がし頃を田草取
飲び様に出來て友呼ふ清水哉
君が代の豐かなりける麥の秋
扇がら出る風だけの一間がな
手心に出る風丸き團扇かな
月欠くる音は棹にあり夜の船
門の戸をたゝと明〳〵れは水鶏哉
急ながら飛で來るなり初松魚
機筋も興たる人に會釋して借る團扇哉
寐ぬ身の果報なり木下闇
涼しさの人を寐させぬ月夜哉
涼しさの價は取らぬ夕渡し
月待つ間や郭公
直もさめぬ厄丁取らすや蚤かな
二階から故障云わる、蚊遣り哉
とある足の力や蟬のから

涼しさにいびきも高し船の中
鮮苴や帷子着き樹の雫
鬼盛して白黄に戻る牡丹哉
涼しさや竹を洩れ來る午時の風
蠅しさのうれしき夜なり初蚤
來て見れば休む影なし夏野の木
月は山雨後の夜景や時鳥
夜は夢の中から明ける卯月哉
價お問へは不二に臆居や初茄子
あせをはす旅の衣や松のやに
人知らぬ暑さや嫁の身たしなみ
團にして帷掛り上げる團扇哉
切る慈に袂わしれて杜若
時鳥眠る心になりてから
許されて蚤痛の鮮となりにけり
解りしと云ふ聲あり夏の雨
戻けれは咲く晒晒れ色や牡若
人の手をかれて結びし田植笠
ね惜しみてそひ帽の雫かな
暇ざわりの無くて涼き衣魂の家
文使ひ待せて切るや花しよふぶ
錢なしの財布を旅の暑さかな
經か夜や添乳のまゝのひと眠り
月花の外や早苗の朝ぼらけ
粒の名も書いて流すや御秡川
蚤士筑波根にして高し雪の峯

夏草や野は向き〳〵の朝ぼらけ
客にたゝす門涼みや夕立や蓮の蛙はうるたべなからぼうふりや天にまかせた洗ひ髪
蟬鳴て猶にかへて子の寝入
宿着て宿に居られぬ暑さかな
寝た人の名は笠にあり夏柏立
覚かれて寐るも取かし夏の月
涼しさや枕をなでる竹の影
推らへし水風にはべる夏の月
子を持て見たき菖蒲の軒かな
時鳥鳴や月夜の雨の雫
つゞれたがとれいて見にけり稽古笛
山城の国思う鳴く四月かな
夏座敷すゞしそうなる海すゞれ
餅酒はさておきさゝに国勇笹
短夜や聞しの残る旅寝哉
船宿に傘干頃や暮月晴
橋守の戻り土産や柳蟹
苅薬や牡丹逆りて又二十日
身の垢を洗ふて嬉し単物
迎火や衣に名残を親の恩
孫の客今日目立けり庭牡丹
帳子や月に見らるゝ影さはが
川風を孕て重し夏羽織
致た銭残る盆に算べば秋

行々の頭も出たる門涼み
虹短な狩山水に訪ふれぬになる扇哉
月雪や蚤一ツに大人まで
大樹な親にそろつも蚊帳かな
組〳〵りに二度の火のしや五月雨
蟬鳴て猶にかへて子の寝入
知らぬ凉さの有る庵かな
宿着て宿に居られぬ暑さかな
寝た人の名は笠にあり夏柏立
覚かれて寐るも取かし夏の月
涼しさや枕をなでる竹の影
推らへし水風にはべる夏の月
子を持て見たき菖蒲の軒かな
時鳥鳴や月夜の雨の雫
つゞれたがとれいて見にけり稽古笛
山城の国思う鳴く四月かな
夏座敷すゞしそうなる海すゞれ
餅酒はさておきさゝに国勇笹
短夜や聞しの残る旅寝哉
船宿に傘干頃や暮月晴
橋守の戻り土産や柳蟹
苅薬や牡丹逆りて又二十日
身の垢を洗ふて嬉し単物
迎火や衣に名残を親の恩
孫の客今日目立けり庭牡丹
帳子や月に見らるゝ影さはが
川風を孕て重し夏羽織
致た銭残る盆に算べば秋

百ふた門出なから遠ふ隣哉
短か夜や寝たとは見へぬ枕絵
みじか夜の更行さまや身のよはひ
色も苔も共谷も高し桐の花
卯の花や雀のおらぬ朝ばらけ
眼は花にさらして耳に時鳥
瀧壺に夏の暮を拽ひけり
暑より厚さを思ふ親の恩
嫌がれてあつし圃扇の騒走哉
苔に明て又茅に暮る五月雨
人音の木深に居らぬ暑さかな
此頃は栗山子に着せん田植笠
世を九万無事と聞と圃扇かな
吹く風に行先きさかず納涼舟
白蓮の白きに注めや人心
山の井蔵の川に流しけり
母の手で膚げて渡す日傘哉
風ぬれば重み氣遣ふ牡丹哉
送りたき隠居は遠し初松魚
見はらしや夏を忘るゝ山の湖
乳母が子を慰めながら鮫遣哉
凉じさや船の眼當てにさる、家
宇治川の岡を見に行蛍かな
夕立のやめは傘もて来たりけり
短夜に残りし月と江の光
地を陥で姿の淋し時鳥

百ふた門出なから遠ふ隣哉
短か夜や寝たとは見へぬ枕絵
みじか夜の更行さまや身のよはひ
色も苔も共谷も高し桐の花
卯の花や雀のおらぬ朝ばらけ
眼は花にさらして耳に時鳥
瀧壺に夏の暮を拽ひけり
暑より厚さを思ふ親の恩
嫌がれてあつし圃扇の騒走哉
苔に明て又茅に暮る五月雨
人音の木深に居らぬ暑さかな
此頃は栗山子に着せん田植笠
世を九万無事と聞と圃扇かな
吹く風に行先きさかず納涼舟
白蓮の白きに注めや人心
山の井蔵の川に流しけり
母の手で膚げて渡す日傘哉
風ぬれば重み氣遣ふ牡丹哉
送りたき隠居は遠し初松魚
見はらしや夏を忘るゝ山の湖
乳母が子を慰めながら鮫遣哉
凉じさや船の眼當てにさる、家
宇治川の岡を見に行蛍かな
夕立のやめは傘もて来たりけり
短夜に残りし月と江の光
地を陥で姿の淋し時鳥

眠のさらひ暑さをためす湯殿計
灯も少ひやや戸も赤さ、む夏の月
白雨の一吹涼がな
破れ窓をのぞく蓮あり夏の月
涼しさや船の眼當てにさる、家
宇治川の岡を見に行蛍かな
夕立のやめは傘もて来たりけり
短夜に残りし月と江の光
地を陥で姿の淋し時鳥

夜や涼し風に唸わる、琴か機
夏ぶすま訪ふれぬになる扇哉
月雪や蚤一ツに大人まで
大樹な親にそろつも蚊帳かな
組〳〵りに二度の火のしや五月雨
蟬鳴て猶にかへて子の寝入
知らぬ凉さの有る庵かな
宿着て宿に居られぬ暑さかな
寝た人の名は笠にあり夏柏立
覚かれて寐るも取かし夏の月
涼しさや枕をなでる竹の影
推らへし水風にはべる夏の月
子を持て見たき菖蒲の軒かな
時鳥鳴や月夜の雨の雫
つゞれたがとれいて見にけり稽古笛
山城の国思う鳴く四月かな
夏座敷すゞしそうなる海すゞれ
餅酒はさておきさゝに国勇笹
短夜や聞しの残る旅寝哉
船宿に傘干頃や暮月晴
橋守の戻り土産や柳蟹
苅薬や牡丹逆りて又二十日
身の垢を洗ふて嬉し単物
迎火や衣に名残を親の恩
孫の客今日目立けり庭牡丹
帳子や月に見らるゝ影さはが
川風を孕て重し夏羽織
致た銭残る盆に算べば秋

月はめて親と居替る納涼哉
雲秋や隣りの子さへ久しぶり
蝶の來ぬ斗りに月の牡丹哉
菖蒲湯を出て新らしき心かな
親の汗子を美しふ育てけり
養父入の笑わせて行く木蔭かな
結ふ手もこゐる、ほどの清水哉
ちりの中遅れて來たか古團扇
夕にじや山から海へかゝるはし
秋もまたさ咲いて涼しや夏の草
植て見よならぬでもなし初茄子
虫干やたもとに花のさそい文
蠅りかけた鍼疵もわり今年竹
一醉は歌の千種や時鳥
裏町を出抜て日傘開き鬼
子に別れなみだの綱や土用干
乳母に子を負せて渡す日傘哉
越の國比羅夫來風や涼亭
二ッ家をとりまいて啼く蛙かな
六月や汐より來る夕ふ嵐し
親の云ふ通りに植ゆる田面かな
牛は只追はれて戻る暑さかな
盆火の浮くや硯の海の中
虫干や親へ不足を云ふたけら
菜先から蚤り離る、若楓
常盤木の花とも見ゆる若葉かな

浮き草や今朝は向ふの岸に咲
見かけでは受合かねる西瓜かな
すきどろひみさ、き山や時鳥
蚤寒しおもた間をひるがほの盛り哉
小田植て初めて聞くや家の唄
立ち朋しひとりは日傘たゝみ蠅
眼の覺めて見れば遠わる蚤寒かな
花の花や日傘のうしろ影
葉かげや男からげて來る女
汗くこゐろの厚き團扇哉
親を汰ひて涼しや夏の草
月落て蚊帳に花のさそい文
蚊水鶏や浮めて蒋光寺
鶏追べは寐入る赤子の笑いけり
拯影もともに流る、清水哉
世の暑さ語り合へけり籠枕
灌佛や施し米のおはつかみ
降る雨を甘包みけり栗の花
安穩にゆれる蚊の聲や納涼船
右は月左に鴨や隈島
夕立や女夫喧嘩の中直り
よふ水のすて處なき虫のこへ
柳干に子をおぶなが涼み哉
柳まてとり付く風の蚤かな
採採の手品にならす扇かな
足で足、洗ふ流れや杜若

古き蒸新らしくなる若葉かな
夏痩と知らせぬ乳母の氣兼かな
みなもへも届く田植や澗り水
見て暇で親へまゝげる團扇哉
木下闇灯ひとつ見へて暮にけり
奥羽絆戸花や特ト妙秀開
なか〳〵に思ふ親の思
蚤干やつ〳〵思ふ親の思
見初寢せてそつと蚤を放しけり
玉の緒も延る詠めや青田面
夢にさへ鶯じき物や五月不二
先ツ親に煮花進める新茶哉
住吉江の松風わたる青田かな
蚊の群れるうちや赤子の貰ひ乳
蚊かしには役にもたちし蚤かな
月三更はるかになくや時鳥
宵の間れ油斷の耳や郭公
抱き上ケて叩て暮けり西瓜實
さす月を詠めて庭の涼みかな
五月雨や汁の椽なる蜆川
柏餅家の涙風包みけり
蚤顔や下戸も上戸も砂糖水
井の中へ遣入れは寒き暑さ哉
やれしさを誰か名付しぞ鬼蚊
涼風や柳の叩く船の窓
北海邊の垣鐵と袖や簀防

月の戸そこた朝良に來かれる
夕立のまとまつて來る流れ哉
橋へ來て晝さを川へ流しけり
風薫る向ふて高し不二の山
水廻し〳〵植へ行山田かな
種まゆや戸は山なる糸の市
われひとり寢て見る蚊帳の廣さ哉
山田へも運ふ跣や玉さなへ
田は米の降ると譬めけり夏の雨
卵の花やなせ露は古ひ屋
朝蚤り蟬の時雨となりにけり
入梅晴や廣き處へれたこゐろ
親のおんあをく蚤寢のうちわ哉
四ッ橋の下や燕の十文字
筍や短き夜とは思はれぬ
涼しさや孝女の緣と仰がる、
ふんばつたまゝに流る、蛙かな
鵙呼愉快心を洗ふ瀧の水
許されて濁りは汲ます門清水
水見ても柳を見てお晝さ哉
五月雨や簪に付たる菓子の紅
笹葺に落る涙や衣更へ
あさつきに向ふ光や蓮の花
鬼殘こす雨戸にしばし涼み哉
栗いも閻から閻へ鍋釜かな
誰が親も子故に閻の蚤かな

一醉は我つ句を盃ひはと、きす
丸木橋朽たまゝおりかんこ鳥
着たと云ふむに暑し薄羽織
見て往た緣とは見へす錯祭り
山寺の鐘さへ青き茂りかな
一ト雨の跡嬉れしけに飛ぶ蚤
火取虫怪我さゝね間を月にせん
雪に花咲せた比其も夏木立
蚤に來る風に吹かれて蚤寢哉
笹葺に落る涙や衣更へ
あさつきに向ふ光や蓮の花
鬼殘こす雨戸にしばし涼み哉
栗いも閻から閻へ鍋釜かな
誰が親も子故に閻の蚤かな

我が影を子に踏せ行く暑さ哉
秧盛る庭に夜はなし白牡丹
靑せ迎る孫先涼し和歌の浦
夕立を見送て居る戸口かな
五月雨や往にし昔を思はる、
どろ水をぬきて涼しき遠かな
蚤顔や秋は汐木も拾ふ處
雨の手を膳にうたせて田植かな
炎天や樋口乾く日の匂へ
月一ト雫手に結ふ清水かな
遠處に使ひたせてころもがへ
未た夏の月は目方も輕そうな
人もたつ跡は潤さじ岩清水
消かゝる燈そ夜明の蚤かな
蚊のちからたゞめして見たき雨夜哉
木影さへ明るき夜半のほたる哉
寢支度をして夜更すや夏の月
船の荷は場たま、なり雲の峯
氣安ふに更け行夏の月夜哉
極樂と思ふ心地や夏すゐみ
夢ながら子旅に跡く團扇哉
見失ふ蚤に閻をかさめけり
手枕の夢も本意なし時鳥
涼しさや椽の下まで魚のくる
夕立や通りし跡の山近み
夕立や小道をなかる犬の蹤

縞を選ふ人さへあるに夏行哉
使にも美せたる庭の牡丹かな
和らかに風の當るや今年竹
灌佛や雫も甘き法りの雨
棚尻の流れ恥かしかきつばた
我庵は外にたゝかね水鶏かな
夕顔や煤けし猫の膝に來る
故郷のしきりに戀し郭公
初松魚めの冷へそふやあさの市
曾ふ子に行儀改ゆる扇かな
山路ゆくまつやね〳〵さゝ蟬の聲
卵の花や思へば月の入し跡
持ようて行義の見もる扇哉
山はみな青葉となて子規
身の上は翌日も知れぬと遣見哉
昔深き若葉の庭の流れがな
風に明〳〵戸は涼しさの余りがな
世は秋と移る名殘の芽の輪哉
きぬ更てひとしを重き親の恩
父母の蚊帳釣て月夜の端居哉
關守を超す夜もある水鶏かな
天蓋の手傳ふ御代や五月雨
從き家を飛越す夜半の螢哉
はめられて見たさに入る蚊帳哉
短夜やはなし殘して鳴烏
忘れ獨は日のさし次るや蜘の巣

牡丹おき御堂の内そ哉〻
夏海や薄たゝなはる鈎小舟
帷子の凉しやあつい親の恩
月の夜は白髪の光る繩道かな
許されて鉄の重き牡丹哉
我庵は外にたゝかね水鶏かな
夕顔や煤けし猫の膝に來る
故郷のしきりに戀し郭公
初松魚めの冷へそふやあさの市
曾ふ子に行儀改ゆる扇かな
山路ゆくまつやね〳〵さゝ蟬の聲
卵の花や思へば月の入し跡
持ようて行義の見もる扇哉
山はみな青葉となて子規
身の上は翌日も知れぬと遣見哉
昔深き若葉の庭の流れがな
風に明〳〵戸は涼しさの余りがな
世は秋と移る名殘の芽の輪哉
きぬ更てひとしを重き親の恩
父母の蚊帳釣て月夜の端居哉
關守を超す夜もある水鶏かな
天蓋の手傳ふ御代や五月雨
從き家を飛越す夜半の螢哉
はめられて見たさに入る蚊帳哉
短夜やはなし殘して鳴烏
忘れ獨は日のさし次るや蜘の巣

鵜の花や魚の骨を打つ夕月夜
椿の香も引〳〵や涼しき湊川
岩付の持て生れし嵐かな
打水や邪广になる子を誉なから
石地藏誰か手向しや苔の花
江戸ッ子の命とろうそ初鰹
遠び出した子の神て行西瓜哉
再逢きて繰は知らぬ歟桐の花
測しても動かぬ水や蓮の花
捕道を譲り合行く日傘かな
巢瓶の下のみ風の戰くふうつ〳〵わね委美し杜若
見惚れ居て駿河の山や藤の花
寢たる子へそつと掛けり母衣蚊帳
頂てつとたつ雫を捕ふと雫子哉
涙にぬれし土用干
蝶のさしたる方を背にして田草取
日のさしたる方を背にして田草取
制の新屋も知らぬ短夜かな
重の中を焼におもふか蝸牛
寢心を母は尋ねて蚊遣り哉
根の眞へて育つ木もある清水哉
結涼し汲を枕の島かゝり
線の雫を拂すや飛螢
雲の無色の暑さかな
子規

白雨に追はる、長き堤かな
宵月とのみ思ひしに郭公
招手の昔に染まる鹿子哉
二里塚なかは茂りに隠れけり
おなじ様に並めたつ田植かな
寶暦の生て居そうな初茄子
草臥の扇翁する暑さかな
甕の水のもる、やひとつ飛螢
夕立や杖つく老に譲る傘
寢させたる子供にそつと掛る蚊屋
入梅や冠り勝なる月の傘
凉風の松に昔して夏の雨
買ぬのも遣ふて見たる團扇哉
凉しさや水に流る、二階の灯
寢ると云ふ樂を苦にする納凉哉
水無月や照る日〳〵を恨くもり
女とは見へすはたんを呉た枝
幹盛て見上る松や月凉し
井の底の深きなさけや施行水
夕暮や暑さ掃取る竹箒
開に來ておもひかけなし時鳥
古き世に戻して見たし土用干
凉しさや寢た子を留守に門歩行
入梅の印歟今朝のにわかあめ
兒雀に精もありや今年竹
夕日さす障子に移る蟬時雨

高みより茶屋のつゞくや夏氷
打水に來てそれ行小蝶哉
たへかたきあつさ忘る、氷哉
世業になりけり庭の苔清水
月の欠く方に向けり蚊帳の向
ほむ俤の風におと乙く鹿の子哉
窓日の扇開て影る日傘哉
千金の夜を夜に仕たり時鳥
明近き窓にす、しや山の月
碁を打たよふに並ふや田植笠
看經にはつすや蚊屋の一ト釣手
門畑に物はしてあり美人草
葉櫻となるや杖にも出來るひま
山にあきの野にあき屋に誾子とり
ぬけ道はすなとて牡丹渡しけり
鯛は焼き瓜は冷して豊寐かな
降り足らぬ雨に夕の暑さ哉
一夜ことかけの殖へけり若はたる
醒れても清水望むや竹筏
箱庭にのせて置たり夏の月
花盞の上や寐易き納凉塩
石菖や座敷に目立置机
つはみかゝらつゝ曝ひ人や辻か花
子に甘き親は常なり一ト夜酒
雪と寢た昔しを語れ竹婦人
先連ば雲に入けり不二詣

花は水水は花なりかきつはた
光陰の矢先を奈ふ豊寐哉
夕風の一やうに吹〳〵青出かな
親を蚊に喰さしと蚊に喰せけり
雲のわく道からも涼く清水かな
帷子や親によふ似た居り絞
濡衣となるまて更す納凉かな
金屏に來て迷ひけり火取虫
音にさへ心養ふ清水かな
夕立に突きかけて行〳〵白帆かな
湖も山も見なから豊寐哉
若竹や何時も暇さはしらぬふり
杜若操たてぬ〳〵水鏡
戻りには左りにかさす扇かな
明近き枕ら時計や時鳥
語りたき夫は留主なりほと、きす
峯作る雲の下行く白帆かな
卯の花や色につい〳〵朝ほらけ
暗かねた今年からすや雲のひね
五月雨やゆるみてはまた通ふ雲
果報なら寢て待つ物を時鳥
眼と耳に消し蓮の開く音
貝買ふて岩に錢つく汐干哉
琴の音の御簾を漏て風薫
夕立の行衛見て越す峠哉
蝸牛の角打込むや木の雫

引提て散る水清き桜魚かな　杜若蛙の飛て開きけり
日盛りや柳にさへも見へぬ風　座を替て客待庭や時鳥
草の根を洗ふてわくや岩清水　くりかへす唄潔よき田植かな
雨の傘蝉のしぐれにたゝみけり　酒の座を月夜にしたり火蛾虫
覗き見を叱りはせぬ歟牡丹守　短夜もおなし遇ひや月の脚
月に向く方を上座や涼み臺　親の手を引てのせるや涼み船
さりけなき月は眞空に時鳥　栗櫻になつて吉野の花見哉
蛍追ふて一ト群散らす牡丹哉　燃立ちて話の消ゆる蚊遣り哉
笹にも竹杜動かぬ暑かな　見る人もなけれど咲て栗の花
母親は鵜飼の留主の念佛かな　飾るにも後ろは見せぬ兜かな
迹のひて光りさたまる螢哉　月影の動て涼し隅田川
暮たれは翌日の暑さの噂哉　金屏に人のかけひく牡丹哉
門口や痩るまて鳥も納涼させる　自慢けに拇約添けり門清水
淀川に月は流して時鳥　野に寝る名殘や水に戻す風
晴上る風に戦くや若楓　夕立の別座敷親にひこをてうちは哉
汗のまゝ呑て顔ふく清水かな　別座敷親にひこをてうちは哉
五月雨や田の中にある秋の併　つかまふとする手にきへて飛螢
出里や軒から漏く蝉時雨　せり立て、推べさせる心太
栗になりて人涼ませる柳かな　短夜の戸の叩かれす乳もらひ
たのもしい花やもたなき初茄子　華原に六月一盞の學者かな
子も抱て愛す力や瓜の馬　松蔭や蓮見せよとの眞盛
聞もらす君のとのいや時鳥　拾ひ子の人となりけり苗はこひ
涼風の一人に余る小窓かな　しのふ身を忘れてならす扇かな
寝轉んた親に枕や涼み臺　子子や蚊になるまての浮き沈み
走り井の名にもそむかぬ清水哉　たゝかれぬ親の寵顔や蚊のにくさ
露の身も風に任せてとふ螢　若竹に古竹見へすなりにけり
山蜂の人群に付く茂りかな　我か影の傘に隠る、暑さ哉
葉になりて寺見てもとる饅哉　時鳥傘投けて地藏濡れ
故里の夢を覚ませり時鳥　坐敷洩る烟り重たし五月雨
二タ親を蚊帳に我身は蚊遣り哉　川狩や顧ませぬ人の助たかる
思の門顔かくし行圃扇かな　水際に見ゆる計りや初螢
氣に合ふた斬に更る涼みたい　神なならて此雨なし水無月
月洗ふ夕へ涼しや須磨の浪　清宵や土用に近き日の匂ひ
瀧冷のする裏坂やはと、きす　一と降りはふりて嬉しや夏の雨
追はれても元へ居直るとんは哉　節なれや牛も花咲く牡丹哉
ふみよめぬ稽は見頃そ螢籠　亡き親を思ひ出しけり土用干
洗ふ手の垢眦しき清水哉　畑中に富る家あり桐の花
蟹追ふて足までぬらす清水哉　松風の室に来てある卯月哉
娘子の身振りも軽き袷哉　住所已か都や郭公
清水から清水まて来て休みけり　あつき日や風に離れてねひる草
蚊柱の立つや野末のはなれ家　辞退して二度に近よる牡丹かな
養老の水も自鶴や時鳥　旅人の笠にも結ふあやめ哉
もたれよき柱はすしに取られけり　水無月やかねとも思ふ夜の雨
水音の外に音なし月涼し　水音を聞いて涼しや夕なかめ
一盞に夢をさまさす郭公　時鳥其一盞は何處まて
翻れ非に水玉散るや心太

風なりに流て涼しやかた船　月花は歴にもたれて郭公
花に手を添へて下掃く牡丹哉　涼しさを行けは閻てもなかり鬼
宴に入る松陰長し夏の月　爰に又知らぬ村あり夏木立
五月雨や五月鯉中に通り雨　思ふことたらて涼しき草家哉
夕月を扇にのせてすゝみ哉　日は雲に暫し埋れと暑さ哉
乳母も子に異事掛たる枕蚊帳　午時前に炙すまして衣更
二階まて来るや青田の風のうら　油断した跡に群なし時鳥
田遠りの蚊屋の廣さや旅の留主　竹の子や小歌にあまるせきはらい
誰か掛けし徒の鉦歟岩清水　花と釣る切籠は紙もよしの簡
口紅の伊達も忘る、清水哉　庭石に水かけさせて新茶かな
涼しさに寄り添ふ竹の柱哉　竹低て小雨を凝物語りけり
若草や松の木蔭に忘れ笠　待らせた義理かつ、けて時鳥
あれ庭に行儀正しき牡丹哉　はね落て直ゞに蛙の筏かな
待つも此月夜に倦す郭公　涼しさや川の向ふも高嘯し
寝酒しにするや朝茶の品定め　月涼し猶また涼し橘の上
飛こんた蛍にさわく座敷哉　覚るまて起せぬ親の昼寝哉
家かくす河岸の柳や夏の月　村中や涼みなからの蔬細工
思はしな橋を知らする螢哉　時鳥旅の妻子の窓に啼け
褒應の枕に醒る午睡哉　乳の足らぬ子に短夜の永さ哉
海山の氣色は持たね牡丹哉　きのふ見し儘や鹿の子の足の泥
朝酒のおもわすしみる祇園哉　なけたれはかもめも潜る芽の輪哉
寝へた戸に返す蓮や月涼し　湧音の汲手にさわるしみつ哉
提て試て大事に醸る牡丹哉　一盞て草臥出すや時鳥
ともし火は文しるたけの螢哉　晴て居て降るもおかしそ虎の雨
竹の子は堀るといふのを馳走かな　時鳥聞はつしたり夜明たり
山涼し蔀木は高し閙古鳥　もつたりと月は出けり夏の山

吹き上る船や青田の浪の上
夕立に追はれて走る車哉
墨畫まて一入目立つ驟雨哉
親に先つ風呂仕舞はせて初袷
笋や風にも落ぬ葭の露
馬よけた袂に散るや茶子の花
庖丁て天窓算る西瓜哉
薬の露も香のありそうな蓮かな
笘潜る雫つめたし五月雨
草臥た足のあまるや蠅の外
暑中よりも手紙に厚き親の慈悲
喰た蚓へ蚊屋釣る庵のせまさ哉
押しこめは浮くちからあり桶の瓜
喰まての鮮にもはしき氣色かな
覗かれて蝶の立出る牡丹哉
木の間からこぼれて涼し夕灯
此上の澄やうはなき清水かな
雨の日は尻から濡る田植哉
翌日切るにしてかそへるや初茄子
人訪れと容子を見せで行螢
松に月一ッ添へけり蜀魂
時過て次更へけり旅の人
船の燈の一ッ更けり時鳥
二ッ來てともらも遥き螢哉
八十をこした耳にも時鳥
涼しさは風に限らす月と水

月花に叩かれぬ戸を水鶏かな
父母にまさる直さや今年竹
墨畫まて一入目立つ驟雨哉
親に先つ風呂仕舞はせて初袷
笋や風にも落ぬ葭の露
馬よけた袂に散るや茶子の花
庖丁て天窓算る西瓜哉
薬の露も香のありそうな蓮かな
笘潜る雫つめたし五月雨
草臥た足のあまるや蠅の外
暑中よりも手紙に厚き親の慈悲
喰た蚓へ蚊屋釣る庵のせまさ哉
押しこめは浮くちからあり桶の瓜
喰まての鮮にもはしき氣色かな
覗かれて蝶の立出る牡丹哉
木の間からこぼれて涼し夕灯
此上の澄やうはなき清水かな
雨の日は尻から濡る田植哉
翌日切るにしてかそへるや初茄子
人訪れと容子を見せで行螢
松に月一ッ添へけり蜀魂
時過て次更へけり旅の人
船の燈の一ッ更けり時鳥
二ッ來てともらも遥き螢哉
八十をこした耳にも時鳥
涼しさは風に限らす月と水

飛ひ越へて向ふから汲む清水哉
五月雨やある夜潜に螢の月
親鳥の來てはゆれ止ひ浮巣哉
とふ見ても風の色ある青田哉
毛毬になる様子は見へ初栗の花
落る音聞くさへ涼し掛ケ扇
惡口は日傘に受る暑さかな
五月雨や根もはへそうな山の雲
涼しさや一人釣る岩の上
さす月を旅寢の友や蚓の中
一ッ來て船のかおむく蓼かな
關取の手にもあまるや蚤一ッ
浮船の夢破りけり時鳥
青空の色は掴なし若楓
涼しさの塊なれや夏の月
杜若花を柳のはらひけり
わく音に冷さ知る、清水哉
行水の草に音あり夏の月
漏圖扇腰にはさめて夕涼み
松の葉も殘み盡しけり夕涼み
時鳥ないても晴す留主居哉
手きわ能くついて見せけり心太
蚤に寢ぬ夫婦喧しや明の鐘
世に廣き那須野の原の泡清水
夜は更けて水音近し夏の月
短夜も夜長に勝る朝寢かな
孝行の腰家虫干褒哉
須磨のうら遥ふ扇や蓉の相手
夕立や迎ひ傘やる親の恩
北角て雨ふらせけりかたつひり
水はあれと一ト雨はしき青田哉
日の本やひらく扇も富士の形
庭風呂て晴しは長し夏の月
立ち日の様な女子も日傘かな
夕立や智惠さま〳〵の通け姿

若竹や露こはす音そよ〳〵と
なつかしき櫻のちりや土用干
字て見れは頭に火ある螢かな
有明の消やる時刻や杜鵑
蚤一つ操の帶を解せけり
汗衣や洗て返す親の恩
海の外せても名殘れる新茶哉
月の出て暇き止みけり若楓
木影りに一群蛸くや月の蟬
すゝしさに小簾から吹く扇笛
池に咲花を算へてすゝみ哉
蚊て呑ひや肚の岩清水
抱て寢る子は持なから竹婦人
空もその色や青田の旭栄
蚊取に蚤た、み飛枕紙
雪や元は硯の一と雫
祝ひ日に着替へて寒しはつ袷
ふる雨に草臥見ゆる五月哉
闇古鳥是から先は連もなし
涼しさや草の上なる華硯
漏しはし見揚て蟲ひ扇哉
涼しさの塊なれや夏の月
青空の色は掴なし若楓
虫干や母の片身に淵らす袖
氣も晴れてふと浮ひ句や夏座敷
水論も一トタ立に流れけり

眠りもよをす鳴く蛙
川上る船の夜明や時鳥
田草取手でませ消すや不二の山
桶の輪のはちく日和や蟬の聲
世の艶を出すや新茶の黄金色
暁く時は音もしそうな牡丹哉
月と水うへしたに見て涼み哉
五月雨や胡瓜の蔓も延次第
暑さうな書寢の貞や背戸紙
夕立を千里に渡す虎か雨
奥ありと見る遠里や時鳥
二三丁に窯人船頭や涼み舟
宵闇の庇り光るや初螢
磯に寄る波に音なし夏の月
立なから子に添乳する田植哉
蚤飛んて大うな角力を立たせ鬼
門水の障なき井や夏の月
御代の恩知て山由の團扇かな
山高う見ゆる夜や時鳥
石山や螢に多き京の人
眠竹と詠めて涼し心太
數柱やをた折れきらぬ三日の月
白道ふ扇や膽の消たあと
右竹の生着も足の飾りかな
同乞やぬれて喜こぶ歸り道
ゑへ渡る最中も過て夏の月
夕立や知つた門まて駈つたひ
行きなれに膝をかゝへて牡丹哉
論る、兄に親の意見の日傘哉
夜は雨と思ひし窓や杜宇
五月雨や傢の見もる蜘の窓
夕立や破れ笠丈は貸し渡り
生滅の法をしめして螢哉
掛て置く簑の雫や時鳥
見せながら自身もはめし牡丹哉
鰡人はやつれて太る置哉
蚊帳の廣き噸しや旅枕

結納の要に遣ふ扇かな　快う氣も輕き日や衣更
料理した血まで自慢や初松魚　老樂や重ね着なから更衣
子寶を遠眼に見せる幟哉　目の屆く山皆青し初松魚
思ひ出す裾野の狩や虎か雨　丁度よい處へ客あり初松魚
燈火は榮耀らしさよ夏の雨　着物まで着かへて見たる暑さ哉
虫干や系圖は忠と親の恩　蚊屋を出て見て旅の夜と思けり
夕立やしはりわかりしあとの空　手作の鎌も青し片山家
取り遁す魚につふやく皺手哉　菰かはや汐汲業も一しきり
寄止めて碁石の音や背すたれ　樂寢する身も苦は絶へす韮の蛋
足早な鳥のかくる、青田哉　語り合ふ人は罪なし此清水
遁まわる子にさしかけ日傘哉　親の側湖に膳ひけり扇を遣ひけり
聞ためた晝寢の種やはと、きす　蚊に肌をあたへて守る親の見へぬ
たつ鳥に浮雲なし芥子の花盛り　かたむくは泣く子の母か田植笠　夕立の晴れて蚤かな
朝戶出や青田に戰く月の影　照し見る古今の史や盞の火　步かねハ痺られぬ夏の月夜哉
乘り合のいひきつみなし時鳥　玉の緒のもろきも斯や器粟の花　重着の牡丹はさくに更衣
一日の事皆すみて團扇哉　短夜や夢にも遠のはかとらぬ　あの空も須磨か明石か時鳥
水乞ふた家や扇の忘れ處　見のこせし夢を見るよと晝寢哉　朝戶出や青田にうつる月の影
吹き切て稻に入日のはやさ哉　動き出す雲の下よりはと、きす　山木戶に錠の打けり夕紅葉
蠅追の過ても へ出す蚊遣かな　伸ら涼風も膚かる青田哉　のせた手に殘る雫や夏氷
日は月に捨てある夜や時鳥　眼の見へぬ親に握らす初茄子　蚤火をふら〳〵提た柳かな
青葉にも笛の音色や島の暮　新ら籠のおろし始や初なすひ　膳引けは一度に開く扇かな
王從の見分も付かぬ川の狩　馳走ふり見へて手輕き團扇かな　眠る間も團扇の動く暑さかな
駒はめて繪馬堂を出る日傘哉　短夜や目の重そうな給仕人　蚤にも喰れ盛りよ夏の秋
手の愛に引かさる親の扱遣哉　納るや扇に不二と三保の松　けにあつき情にとくる夏氷
我あとに光りを殘す蝸牛　人もかくありたきものよ蓮の花

水影も花の色なり杜若　短夜といひつ、風にもよひけり
綿脫や氣も輕うなる舟上り　おいさつもそこ〳〵裏の清水哉
暑き日の余りや夜の人通り　兒を寢せる母も釣りこひ蚊帳哉
寄扇を知らぬ一座や初鰹　雲脚のきれて居なおる夏の月
酒町の障子に戰く幟かな　すゝしさに置所なし涅槃盆
富士てさへ次脫捨るあつさ哉　亡人のむかし殿や土用干
水底をすんて通ふや戀蓋　今一度鳴かせて見たき郭公
色氣なき老も添寢の竹婦人　筏さす手のゆるみけり時鳥
片付た處にはなき團扇かな　谷川を横きる聲や時鳥
丹前は花に見へけり白牡丹　ついとんた蚤に足をとられけり
水色の醒ぬ切身やはつ鰹　六の鐘開て猶汲ひ清水哉
暗して戻る氣になるすゝみ哉　海からも溯立檣や雲の峯
一竿て屆く渡しや行々子　水音に氣を養ふや夏座敷
蚤を取る蝦は蚤にとられけり　通てまて青影のひくすたれ哉
遁る使ひ畑までつれて初茄子　打水や面白かりて隣まて
蚤とり足をとられてもとりけり　目休めに蜘の知惠見る夏書哉
三方は水に根〳〵や杜若　瀧の音もかすみて跡き暑さ哉
涼しさや柳と水を前後ろ　母に杖隣りすゝしと敬へけり
雨雲を啼き廣け、り枝蛙　鈴付た扇さしけり按摩取
鳴ぬ夜と思ふ夜明や時鳥　子の汗に老の名殘りか郭公
提て來て市をさわかす牡丹哉　一醉は春の暑さを忘れけり
珠た顏にかさす蚤の土產かな　風りんの音に暑さを忘れけり
氣藥りに徹はへそふな入梅哉　富士峯を仰けは白し夏の月
蠅や老ても寄られぬ辭の皺　蟬の來て書手の狂ふ寺子哉
笹筒の中にもさした扇哉　書て見たき團扇哉
蚤入る兒の蛸取り出て納涼哉　山水を盜書て
矢の如く弦月にはと、きす　蝶も夢結ひ無けり芥子の花
雲かけに草木にきおふなつ野原　蚊遣りして客いれ替る座敷哉
たもとまて濡す清水や夏の旅　時鳥暗く音は月にかよふ哉
茂りけり昔のまゝに神の庭　傘の宿かすや野路の俄雨
料理場の水音高し初松魚　歯整まて染入る岩間の清水哉
筆遣ふ机の先や釣しのふ　鰹一つ目に立つ百合の白さ哉
追廻す跡へ亦來て火取虫　牡丹咲く園や雜の目も正し
幸に月も出てあらはと、きす　卵の花や月雲花にはこる色
里へ出て川の名となる清水哉　汗いれる湯錢て買ふた氷水
竹の子や貰ふて折れは音のせす　月を背にして花嫁の涼みかな
涼しさや流れも盡ぬ五十鈴川　靜さの備わる蓮の白さかな
貰ふ氣のなくて拳けり牡丹花　池水も影に染みけり杜若
時鳥暗く音は月にかよふ哉　さまさましとそつとたき込む蚊帳初
傘の宿かすや野路の俄雨　好ましき新樹の中や野立茶屋
茂りけり昔のまゝに神の庭　松風は耳の馳走や額まくら
料理場の水音高し初松魚　老樂や重ね着なから更衣
筆遣ふ机の先や釣しのふ　螢雪の苦樂は知らす晝寢好
追廻す跡へ亦來て火取虫　松影のふりかゆる遊納涼かな
幸に月も出てあらはと、きす　うすくとも暑さ恐れぬ團扇かな
里へ出て川の名となる清水哉　ひと君はものおも云へぬ清水哉
竹の子や貰ふて折れは音のせす　松風をた、み込んたる扇哉
涼しさや流れも盡ぬ五十鈴川　釣橋の下飛ふ雨の螢かな
貰ふ氣のなくて拳けり牡丹花　灯の点た二階ゆかしや青簾
時鳥暗く音は月にかよふ哉　親の影ふまぬ乙女の田植かな
傘の宿かすや野路の俄雨　湖に膳ひけて扇を遣ひけり
茂りけり昔のまゝに神の庭　夕立の晴れて蚤かな
料理場の水音高し初松魚　步かねハ痺られぬ夏の月夜哉
筆遣ふ机の先や釣しのふ　重着の牡丹はさくに更衣
追廻す跡へ亦來て火取虫　あの空も須磨か明石か時鳥
幸に月も出てあらはと、きす　朝戶出や青田にうつる月の影
里へ出て川の名となる清水哉　山木戶に錠の打けり夕紅葉
竹の子や貰ふて折れは音のせす　のせた手に殘る雫や夏氷
涼しさや流れも盡ぬ五十鈴川　蚤火をふら〳〵提た柳かな
貰ふ氣のなくて拳けり牡丹花　膳引けは一度に開く扇かな
時鳥暗く音は月にかよふ哉　眠る間も團扇の動く暑さかな
傘の宿かすや野路の俄雨　蚤にも喰れ盛りよ夏の秋
茂りけり昔のまゝに神の庭　けにあつき情にとくる夏氷
料理場の水音高し初松魚　人もかくありたきものよ蓮の花

日本中土用干なり國盡し
捨る手に付て來にけり火取虫
子は甚寂しても廻るや風車
住吉の明ふり見たし時鳥
富士詣氣も一筋の繰路かな
梨むれはふみおもあかす螢かな
苔のして來るに間のある夏の雨
獅子は留守犬の番とや牡丹畑
紅つけた口をわすれて清水哉
何處もかも留守の家多き田植哉
涼しさや庭に設けし作瀧
短夜や枕にのこす夢半は
夢の間に春は暮らして麥の秋
足跡を早苗てかくす田植かな
龍枕晏て間もなふ寐入けり
乘に來た舟見て涼む二階哉
花茣に圍の際立遽かな
姫百合のくもに引かる、風情哉
往かげをふひや御萩の戻り道
葛水や女主の京言葉
產神へ備へに行や初茄子
焼けぬといふは唯なり涼船
一時雨おくりし庭や夏の月
短夜や瓦硯のひらかわき
はたに兒や世間の事は人任せ
證圓扇風にかわりは無りけり
夏痩や思ひすてしも親子中

假名はかり書くや蚤の誘ひ狀
開いては置處せまき牡丹哉
初茄子や花の暇さもなきなふけふ
かたつひり登りつめたり雨の垣
波に裾引かれて涼し磯の松
汲馴れて岩に下駄はく清水哉
卵ひ給ひきよめたまいと閑古鳥
時鳥一聲はしき夏の月
時鳥郎くや旅出の筆初め
去年捨てし日なと云へ出す扇哉
菜さうに乞食は寢たり夏木立
青梅やすいもあまいも葉隱れに
夕立や庭木の埃り洗ひ行
走れたけと指て咄すや初茄子
三井寺の鐘近う聞く青嵐
蠶もとまりし竹や蝸牛
市の夜はまた明けきらす初松魚
稚風世ぬ共に茂るや杜若
出る月を盤らす柚の蚊遣かな
泣へた子に添乳して終ひ豐寐哉
蛍飛ふ川のあちらも人の波
陶劒た子の泣て來る田植哉
まけられて負ふにこまる西瓜哉
やかて死ぬ景色は見へす蟬の聲

轉寢の夢を破るや鳴蛙
ふるさとにかさる錦や衣更
鳴かねとも暇う圍の蚤かな
蚊遣り火や母には厭ふおき所
涼しさや風も流る、櫛の上
郭公啼くや帥のや雲の内
心地能く眠りにつくや蚤のるす
ふけやすし月に風情も有なから
かけなから旅の夫へ新茶哉
人に角出さてこそよし蝸牛
今も世に袖ぬらせとや虎か雨
箱庭の草に盞の光り哉
投かけたやうに咲きけり藤の花
八束穗を込めて唄ふか植乙女
立てふ斗歟る、針や火取虫
道ふ手に人柄見ゆる扇かな
鳴蟬や雷チにまて恐チもせす
幾人の戀ひ持つ君や杜鵑
うかくと夜も更しけり夏の月
呼ひあふや田植の留守の放れ馬
影物の腕て料るや初鰹
蚤除に妻のと、のう寢酒哉
學ふ書に殘る盞の光りかな
蟬息の野邊に線付炎暑かな

花に風氣色の外の氣色かな
裸てもまた暑さうな男かな
涼しさや月にさわらぬ通り雨
生臭き濱邊の旅や苔莚
をひと取る笠も女歟田植歌
得ひもはかにもあるよ郭公
夏の月四條は人の川原かな
盞飛のみの夜更や下り船
湯揚りは常さへよきに夏の月
降る雨に歷の澄きる田植唄
假名文て書や暑の見舞狀
上手程手に油斷なき田植哉
惹くしき母の悲寢にうちわかな
一つ家を別けて淋しき夏夜かな
松磐ぬて暑さをた、む日傘哉
夕立の裏を急くや戻り馬
白雲の裏を見て越す峠かな
不二の雪剛劒遣ふて詠めけり
夜は暑し昼の涼しき紙帳かな
春惜む心牡丹に讓りけり
虫干やた、み込たる日の匂ひ
夏痩の母に進むる食事哉
親に勝つ手も悪からぬ田植かな
遠山は險を壓ひや旅の蚊屋
提けた手に風の重たき牡丹哉
なを高う雲井に掲よ初幟

一とはつみして猶れに蛭田植頃雲に月とられたあとや郭公
郡かな蚊〳〵日傘は日本橋宿どりて又出て行や清水迄
夜更るも知らす歩行や夏の月木に暗き座禅の窓や閑古鳥
青蔵うこ〳〵や菜の高調子秋のたつ日か暗そめや庵の蝉
更科も須磨も知らねど蚊屋の月一聲を杖や箱根の郭公
治まれる御代やとさゝで夏の月初物の筈とる朝や郭公
詩合と掫て見せる西瓜賣り池に波立て薫るや杜若
たゝひ手に神の香洩らす日傘哉船まちの暑さをしの〳〵日傘哉
虫干や間毎〳〵に師父の恩迚もなら鳥も聞かん時鳥
何を苦に病てなくにや蝉の虫安いのも能き風の出る團扇かな
こちらひけうしろはさひし郭公夕立や晴れて名殘を送る風
雨水から連の殖けり奥の院雨乞やたみのためなり國のため
夕立や瑞穂の國のたから雨許されて寺子も登窯したりけり
朝顔の晴れ口床し杜若松風にせなか吹かせて心太
蚊に逃て蚊に〳〵われけり門の月小娘も結ひたもとの田植哉
一と株の牡丹に客の二間哉茶碗まで貸して敎ゆる清水哉
枕ゑ楽しひ見ゆるや初田植青蔵奥ありそうと思ひけり
納涼して歸り來る時月燈り短夜や月に驚く文枕
閨に繪圖引て遊ふや飛螢寐切て安心をする夏氷
赤心の知れて嬉しき西瓜哉敎育の鶴や田植も誘合ひ
泰平の御代や鍳も土用干閨にとて歸る機嫌や螢賣
雨親に聞いてちきるや初茄子朝露によれ薬もとるや貢草
山賤か捨てた跡なり夕涼田に暗て峯の雪消す蛙哉墨染のみさほ美し絹團扇
一雫はしき日照りや蝉の聲大寺や一切經を土用干世の中は忙し、きたなし五月雨
雫して夜は明にけり今年竹富士の雪見上けてひま乞窶哉座敷に早き新茶哉
虫干やちきれ鎧の花菱み客移す座敷に早き新茶哉座につけば羽織ぬかすや涼み舟
見へたるか辭儀して通る青蔵れ雨ふとび空や蛙の隠れ稻き世を忍ふ一聲高し時鳥

寢る鐘も聞はつしけり夏の月をとし文心はいか水時鳥
俤の眼にさわらぬ稻や莢く蚊遣作らねど夜に降る雨の日本晴
閉けはなをあとのまたれて郭公蝉聞くや
暑さ脫涼しさ冠る清水哉叩いては其色をとる西瓜哉
雲吸か霞を呑ひか峯の蝉繪日傘や見覺へのある片笑凹
手拭を名殘に洗ふ清水哉世の中のよう手本なり火取虫
とり合に鶏卵も添へて初茄子五月雨や出入におもき蚊やの裾
蚊帳に夢盃へて立けり旅枕仁と義と忠と孝ある幟かな
船と舟つなきて流す涼納哉五月雨や五十鈴川さへさゝ濁り
後れても初茄子なり痩畑差出す手焼申譯なし子規
聞かさぬも親へ孝なり閑古鳥夕立に追はれて迎る嵐かな
雫たる様な色なり青蔵指先て月も植へ込ひ田植哉
見はらしもよい水茶屋や心太御勝も親の恩なり今年竹
富る田も命の親と植にけり幸ひな貰ひものなり初松魚
初幟りやがて公候伯子男借て來た傘は邪广なり夏の月
遊しさや親のほめけり初鰹白い手の下手譽らる、田植哉
なせはなる世はたのもし、夏氷追出せは替りて來るや火取虫
汲れした水に散りけりけしの花諫めぬ宇を押へて坊んの蚤寐哉
雨雲の今日も肩越す田植かな初鰹魚演からすくに走りけり
草の戸や扇ならして朝の客玉の汗人事のくらく夏氷
暑き日や親にかわりて刎釣瓶短夜や宵に御客かあつてなは
足の蚊を足て拂ふて立咄笠はとの雲をとはれつ虎か雨
追出した蚊にさゝれけり門の月測らして見ても後から清水哉
深みかく蝉お枕て蚤寐哉吹風に吹かれて灯す蚤かな

一日の無事閉はれけり門涼み
日の晴負て雨待つ田植かな
澄切て砂のうづまく清水哉
兵隊に出た人も居る田植かな
夕立や一村驟く放れ馬
籠も暗せてあるよ青蔵
夢の音はさわる思ひや五月雨
五月雨に蝶も笠着る葉裏哉
新座敷庭も奇麗や蓮の花
國々へ宇治の名の立つ新茶哉
雨乞やこわね在所も一しめり
蝉暗や三階もまわる松だいて
白うても赤うてもよき牡丹哉
ねた顔の半分見へるうちは哉
明らかに紫雲渡る牡丹かな
若緑にゆつる杓子や田植の日
短夜や夢になりたる鶏の聲
暗く里は聞人少しほと、きす
末世迄光る蚤のともし哉
五月雨や棚から落る桶の輪
こゝろ能きものや青田の朝景色
早乙女のもの云さうや遠めかね
氣味の能い蜜人買人や初松魚
青梅の好みにそれと知られけり

一聲を暗て樹昏る夜の蟬　田植振り見て貰はる、娘かな
蝸牛や起するうちにあそこ迄　家もつて遊びに行くや蝸牛
照り込に根張の見ゆる青田哉　傘借て出れは晴行夕立哉
ま、親の使に來たか火取虫　二三人たゝせておかし蚤ひとつ
母はいと永き晝寢を覗きけり　高低は姉と妹の日傘かな
五月雨の暗間をのぞく一日月　たかとのや東風に向て夏の月
夕涼み今日の暑さの噂さ哉　蚤きらひ蚤につかれて寢入けり
涼しけに聲を荷ふて團扇賣　我席を押取されし門涼み
珠數の手て伐るや貰ひし蓮の花　年毎に位の勝る牡丹哉
旅立や月の三笠にはと、きす　娘より嫁は小聲そ田植唄
哉人の心しづめてはと、きす　夕立や山は日かけのさしながら
蚊の鳴て出ぬ間に濟す夜喰哉　よき風をれいて晴たる夕立かな
釣り初て朝寒背寒の蚊帳かな　氣樂にも池の浮葉に蛙かな
白ひ手に黒き塗り柄の團扇哉　山里や花散る中をはと、きす
遠ひ世や山の上にも田植哉　質藏と向ひ合せの牡丹哉
智恵淺しておわれさ多し火取虫　一聲はたしかに聞た時鳥
飯焚も出て植たかる門田哉　土鉢の道おゝふ草や閑古鳥
はし居して茶に呼はれ晩夕納涼　乙女子の聲も涼しき田植哉
蚤所へ出張て釣るや留主の蚊　日〳〵らした甲斐に戻りの蛍哉
傘借て出れは晴行夕立哉　雜談に夜をふかしけり夏の月
身にあまる慈悲いたゝいて更衣　鬼瓦撫る鑑尾の幟り哉
二三人たゝせておかし蚤ひとつ　手招きの風にも散るや芥子の花
安心の二字訓るや遠の花　川狩に客まて連て行にけり
高低は姉と妹の日傘かな　若竹の直きに習ふ心かな
奥深く中に人なし青簾　身の辮は論して止まぬ晝寢哉
たかとのや東風に向て夏の月　氣の付た嫁の暑れや初松魚
月の輪を啼はつしけり時鳥　片蔭のあるに娘の日傘哉
蚤きらひ蚤につかれて寢入けり　夕立や晴れて往來の人多し
我席を押取されし門涼み
珠數の手て伐るや貰ひし蓮の花
旅立や月の三笠にはと、きす
蚊の鳴て出ぬ間に濟す夜喰哉
釣り初て朝寒背寒の蚊帳かな
白ひ手に黒き塗り柄の團扇哉
遠ひ世や山の上にも田植哉
智恵淺しておわれさ多し火取虫
飯焚も出て植たかる門田哉
ひと世潜はこひて植る山田哉　差覗く客や牡丹の花の底
蚊織る水の光りや夏の月　明家のうらもさかりや杜若
我部屋も忍んで這入る蚊帳の中　草の戸や狩らぬ蚤を夜の氣色
薬柳や船を待つ戸の明はなし　三伏に命拾ふや俄雨
よき風の生れ處か今年竹　きのふよりあすを待るゝ芥子の花
夕立に見てもやせるやけしの花　蛭降ると聞しあたりや閑古鳥
人絶を眠る日永の渉し哉　椎子や居らぬ先の仕立際
あつき日や湯上り肌の心地よき　關取をこゝろはす蚤のちから哉
額て帆を動かす苔の清水かな　子を一人醫に殘して麥の秋
屋を見て小供いらつや蚤狩り　形りのよい方より配る粽かな
はらつゝいた雨も匂ふや遠の花　蒲に勝つ角力男や蚊にはけし
ゆふたさを客に詫つゝ蚊遣哉　一ッ家の夕暮遠る蚊やり哉
月花の念も忘れてゞ郭公　夜の明渡る牡丹哉
蛙つなく群立野邊やあすは雨　徐に夜の一ッは戀の下こゝろ
親を背に負ふた思ひや氷り賣　三伏に藥飲ます暑哉
蚊帳釣て浮世見渡す氣樂がな　蛭降ると聞しあたりや閑古鳥
冷し汁厚き心の馳走かな　椎子や居らぬ先の仕立際
風の竹涼しき音も翻しけり　關取をこゝろはす蚤のちから哉
降らぬのは包む涙か虎か雨　子を一人醫に殘して麥の秋
柿の花是丈ケなると遊ふても　形りのよい方より配る粽かな
果報哉牡丹に眠る番ひ蝶　蒲に勝つ角力男や蚊にはけし
酌替はす酒は月なり門涼み　一ッ家の夕暮遠る蚊やり哉
夕月の噂り上る稻の露　夜の明渡る牡丹哉
照込んた色にひらなき青田かな　徐に夜の一ッは戀の下こゝろ
遠の香もあるや螢の越る池　夏痩も一ッは藥飲ます暑哉
稚子蚤にをこすや笑顏哉　蚤火の滴水にうつす星のかけ
快き窓の日あしや梅雨上り　掃除した滴水溢る、月夜かな
蚤火の滴水にうつす星のかけ　夏痩を親に問わる、風呂上り
そこあけろ遠の匂ひの涼ひ口　軒に夾て柴に灯を打つ螢哉
友を待つ●菜の雫や月涼し　打水に月のした、る庭木哉
短夜や鐘も烏も少のうち　優しさや茅の輪を潜る角力取
乘せて出す菓子や扇の牛開き　給に書た河も波立つ扇かな
飛ふ螢かせれは殘る閨に風　晝き日や魚發ひの貰ひ水
短夜やかわら硯に殘る水　蕈菜や二人りの外は乘れぬ船
いたけな兒の寢すかたや枕蚊帳　なかめて飛鯣の中や似に哉
兄しやとて太ふも卷ね粽哉　愛敬の山葵になくや小はた鮮
五月雨や我もの顏の蝸牛　是程の青田夜にして水の音
豐年と見へて青田の茂りかな　炎天や氷り賣るにも絞る汗
宿と取つて月に汗干す二階哉　卷いつる葉も奥床し玉芭蕉
勝われて涼む心の暑さかな　心深の屆きてつらし蚊遣り下ゲ
蟬鳴やひき並へたる板のそり　虹の根の殘る籠や時鳥
まちてこそき、甲斐はあれ時鳥

乳を兒に任せて乳母の晝寢哉
團の夜を橫糢に誂ふ蚤かな
納ふ風ありて川越す蚤かな
土產には寒い咄しや不二詣
笋や我あい道をふさぎけり
裏の木戶毛虫一ッに塞きけり
うたかひは聞く人にあり郭公
日の本の風を直輪の團扇哉
近寄れは辟もあるなり飛蚤
破れ傘も功德になりし夕立哉
曳水の音拂ひて青すたれ
團扇から仰き出しけり京はなし
初產の出來たしませや不如歸
捨て兼て三日經はり余り苗
駒川の深ふきこゆる晝さかな
馬吃るまても世話しき田植かな
夏木立きこりも隙に杖休み
蚤足の早い宮なりひきの秋
香も團をはなれて白き蓮哉
鴨き止んで待人笑ます虹哉
打水や待ては果なき人通り
仕舞荷と直きられもせすはつ鰹
夕立や海麥屋に德を添ふて行
茶好には憚もなし土用干
夕立や皆よみかへる屋根の苔
團を疑ふ一針ぬきの蚤かな

虹の根に富士見はらして行々子
子を持て泣人もあり初幟
潛へ出て植仕舞する田植哉
母痩て閒へは笑顏の晝さ哉
蜂のかふりて落る風仙花
面白な辟かけ合ふや夏の船
形代を流すやこゝろ墨田川
試に滅りめの付くや一夜酒
笛の音をのせて流すや納涼船
不行さは田舍によらぬ晝さかな
短夜や床に名殘をいふておき
黑髮の亂れる程の晝さかな
雨降れと消そも見へぬ蚤哉
冷々と夜の明て行く若葉かな
抱いたのも浮世の夢か竹婦人
涼しさやそゝ水汲なから留守の札
短夜や夢を結ふ心持や竹婦人
痒ぬ夢をもらい人のはめたる下手の粽哉
夕貞や水に流るゝ川普請
鵜鴨くや人もさわらぬ力ら石
風吹けは月もこはる、若葉哉
蝙蝠の機嫌や町は片月夜
泥はいねやふにはからふ蚊遣哉
早豐の風にそよくか青田哉
寢た親へ蚊遣りすゝして團扇哉
御ふる世の花やこけむす補の石

土用干虫に喰せぬ親の恩
蚊の辟の付て流る、夜船哉
蜜蜂のかふりて落る風仙花
母痩て閒へは笑顏の晝さ哉
こい魂も猶振る箸や麥の秋
接木して桃と櫻の花くらへ
汐音に月のゆらる、清水かな
甘風呂は里の窘りや田面の日
色も香もふくむ苔みや辻か花
そつと引乳房に縋る晝さ哉
笋や客に掘らすもちそふふり
手廻しのならぬ細工や花御堂
世をすて、拾ふ初音や杜鵑
ゆれる度柳に光る蚤かな
道問へは皆振り向や田植笠
親竹の露竹の子へかゝりけり
我田とて植て戻りし廣野哉
夕立は田に黃金降る思かな
烏羽玉の闇を見窮し蚤かな
朝顏の中に辟ありはと、きす
木の根から二筋になる清水かな
燃たゝぬやふにはからふ蚊遣哉
今日よりと夏は告ねと衣更
五月雨の二の腕て拭ふ玉のあせ
余の鳥は啼やむ森や、時鳥
これもその卵の一ッや郭公

子を寢せて涼はなしやる蚤かな
啼くは○と客を待たせる水鷄かな
鍋よりも面冠りたし祭の日
帷子や手織は重き母の恩
乳貰ひにひろけて渡す日傘かな
あつい湯に入て涼しふ思ひけり
卯の花の雪や文よむ窓の先
みな橋へ落合ふ人や夏の月
白は世の色の司か白牡丹
早乙女の足ふみ伸はす月夜かな
はと、きす辟も葛らぬ月夜哉
居所をかへても同し暑かな
寢られねは雛る樣なり床の蚤
横にして松風通す日傘かな
寢損した夜の幸ひや時鳥
服ふて秋取辟や田植唄
粟になつてもきかぬ枝を拂雨
人の脊に猫の鳴行く躍時
麥秋の埃りの中や子守唄
一群は派手な日傘や祇園町
水音の心に寒ひし初袷せ
夜はもの、かけを離れて風薰る
涼しさや帶紐といた晒し蓮
此奥も聞けは涼しや瀧の音
五月雨や湖の中にも一在所
雫はたの松蔭白し田植笠

我摘し、音の葉添る新茶哉
錆た錢親に見せけり初鰹魚
今日よりは晴れて色ます夏木立
五月雨やそうや花を初覽杜若
さみたれや煎茶の味も變りかち
渡し船人の日傘の黃ひかけ
世の塵に染まぬ色香や蓮の花
袖て暗つくりて晝の蚤かな
鞭あて、牛はしらせる夕立かな
萬倍の名も賴母しき青田かな
さきそめし花や煎茶の味も變りかち
閑子鳥啼くや見ぬ草知らぬ樹々
竹の子や直きは御代のひ蚤
樣先に飛て出て喰ふ西瓜かな
戶をあけて風につれある鳴蚊哉
卵の花の腐き甲斐なき月夜かな
けひくとも后は寢やすき蚊遣哉
四方山の話しを乘せて涼み臺
底しれぬ水のなかれや若葉影
我身の先へ來て居る清水かな
夕立のす、きあけたる月夜かな
詫わらぬ袖に涼風の屆きけり
ぬきぎぬの乾くひまなし夏日和
手か、りのあれは立つ兒や初幟
僧い蚊の叩かれもせす子の寢顏
さし汐や宵の蚤の草離れ

涼しさを水にまとめて竹と月
我親へ聞かせ雲井の子規
短か夜や島かうとうて目のさめる
川はたの家や間毎に飛蚤
子子や雨の降る日の一ト休み
潮りても湧口見ゆる清水かな
時鳥今一聲の名殘りかな
青梅や鈴のよふなる神の前
裏表なきこそよけれ白扇
竹の子や直きは御代のひ蚤
戶をあけて風につれある鳴蚊哉
卵の花の腐き甲斐なき月夜かな
けひくとも后は寢やすき蚊遣哉
四方山の話しを乘せて涼み臺
底しれぬ水のなかれや若葉影
我身の先へ來て居る清水かな
夕立のす、きあけたる月夜かな
顏かくす心涼しや絹團扇
此にわに狹きと思ふ牡丹哉
袖に來て京染め光る蚤哉
さす汐もしらぬふりなる花淺哉
奥ゆかし青田の底に水の音
一聲は名殘に鳴けよ郭公

竹の子や親のめくみの露うけて
宗教もなき山里や郭公
苔もむすそふな景色や梅雨の海
机丈け狹く思ふや夏座敷
小女房の手ころや低し蚊帳の紐
算盤を投た人なり初螢
夕立や力ら任せに牛の尻
寢た親の汗をぬくうて團扇哉
また雪の亘みは知らす今年竹
杜鵑かて月夜の烏哉
葉を染る雫はもたす紅の花
おもひねの夢まとはして時鳥
くたひれを捨たあとある清水かな
釣置た手も遊はさぬ扇かな
君か代の豐な麥の穗の出様
初茄子や葉蔭に忍ふ艶のよさ
寢苦しい暑さ頼母し土用干
望まれて根わけをそ〳〵牡丹哉
眼合ふ道に傾く日傘哉
寢る外に欲なき入梅の野守かな
夢さめて親の恩知る初蚊帳
投けて行ように田植の上手かな
親の恩君の惠みや蚊帳の月
雲良や崩れたま、の假土橋
紐つけた蚊帳や華主も釣出し
團圓會や懲こしらへは井戸の中

惰けある人の拾けり火取虫
物持ぬ袂は輕し夕涼み
文選長へ歌續けかけつ、田植かな
月清し天邊懸て時鳥
小女房の手ころや低し蚊帳の紐
算盤を投た人なり初螢
夕立や力ら任せに牛の尻
寢た親の汗をぬくうて團扇哉
また雪の亘みは知らす今年竹
杜鵑かて月夜の烏哉
葉を染る雫はもたす紅の花
おもひねの夢まとはして時鳥
くたひれを捨たあとある清水かな
釣置た手も遊はさぬ扇かな
君か代の豐な麥の穗の出様
初茄子や葉蔭に忍ふ艶のよさ
寢苦しい暑さ頼母し土用干
望まれて根わけをそ〳〵牡丹哉
眼合ふ道に傾く日傘哉
寢る外に欲なき入梅の野守かな
夢さめて親の恩知る初蚊帳
投けて行ように田植の上手かな
親の恩君の惠みや蚊帳の月
雲良や崩れたま、の假土橋
紐つけた蚊帳や華主も釣出し
團圓會や懲こしらへは井戸の中

京て賣る越路の塵や夏氷
短夜や寐酒の醉も醒ぬ間に
行き留て君の惠みや田植哉
圃親に先そなへけり初松魚
若葉にも又枕曳くや嵐山
見知らさる人の日傘に貰かけ
追つめて泣兒に喂る螢哉
腹叩く無病自慢や夏の月
牽牛花や世辭追從は門の外
抱籠の寐こ、ろ妻にとわれけり
蛍や初音の里に老を暗
清水から又新しき命かな
憂悟よき浮世なりけり蝸牛
蚊子花やとちらの露を貰にし
花嫁の口へになをす清水かな
卯の花の盛りは月の明るはと
醉た親疎せて靜に蚊帳かな
夕立や架に打たる、麥萱わ
虫干や天ッ日つきの讓り物
七五三張た神のかまとや夏木立
眠る間も子ゆへに動く團扇哉
圃りを己れ忘れて螢かり
螢一ッかりてあたや市の中
蓑々一人学を結ひ侘の蚊遣哉
程すきて寢る時きくや杜鳥
眼と耳は若うなりたし子規

文老の身の宿借る門や蚤の痛
魚釣や何時も返事はつれなせん
おい客もなくさ涼しき一間かな
稚子の添乳の蚊屋はすゝし哉
取々に蝉の聲しや水水
白きにも見覺へのある扇かな
なか〳〵に孫の差圖や益狩
暗きのも客のちそふにはたる哉
山吹や昨日は愛宕けふは嵯峨
葬る、のに庭は牡丹の花明り
花やかなものよ若葉に初松魚
夕立や手かるい傘の重き恩
こと山の千代もかわらぬ茂り哉
老の手を引て橋迄涼みかな
早乙女や笹に間にる笑ひ聲
夕立の雲間を走る夏の月
湯戻りや吾家をすきて追ふ益
不如歸つきぬ名殘や窓の月
風鈴もしはし休ひや雲の巖
身につけた冬着は重き暑さ哉
夏の日や雨も見に行角田川
叩かれてはらをしらる、西瓜哉
洗濯した子にもの言ふや旅戻り
來た人を褒想して居る新茶哉
水茶屋の景色をそふる團扇哉
打水や犬のせわしき忠淸ひ

すこ〳〵と山路一ト人て閑古鳥
短夜や夢の中きるあけの鐘
暗れそと見れは月のみ時鳥
夜はふへるや浮水哉
食ふた日を禮にいひ込む水哉
釣舟のそよ〳〵三階や豊の夢
夕立や田草のうたは半にて
夕立のおとや涼しき蟬の聲
龜の背にはこりの見ゆる暑かな
文中は川遙影かくす若葉かな
夢破る夜のあしきなき水鶏哉
卯の花に夏もてさむき月夜哉
てかるれと雨ともならす雲の峯
子福者の門脈はしき蛙かな
雨時て松に雫や夏の月
闇の夜に目立つ垣根や花卯木
腹せ付けた子に起さる、豊猿哉
常盤なる松に色もつ卯月かな
起されて居つて聞や郭公
影さして海の鏡や夏の月
附けて來て植て呉れけり餘り苗
豊寢した親に掛けり蚊のよけ
見廻りて小の戻き青田かな
坐を立て大きく遣ふ扇かな
器は瞬と見てとなうちわさせる哉
かけかへて心も涼し青すだれ
蜘のいへは消へて用こす益かな

なき親のおもかげ見るや土用干
琴の音を一面隔て風薫る
ひと聲のもとの遠さや子規
夕顔やとて始めける親子酒
蚊か蚋の蚊をうつてやる蒲哉
夜の菖蒲香に心得て溶けり
姫百合や賤か伏家の垣根越し
山間に空の高さよ閑古鳥
雨もまたかわらぬ門や夏の月
笠は子にとられて母は田植哉
朝顔の笑ひ初めしや朝はらけ
朝顔や昼迄はしきわさ盛り
人の子も我子もたいし日傘哉
雲は余に少しも見へす雲の峯
峯の寶を頓て結ふや辻か花
雨乞は國の爲なり君の爲
ともかへて風試る囲扇かな
ちりそめの名殘をおしむ牡丹哉
寐る人はねすかし我は夏の月
極風を耳にうつ〳〵蚤寐哉
眞丸になく〳〵も蛸し夏の月
うた、寐やついうつとりと三時間
外に映く物もなき戸や苔の花
五月雨に窓籠われけり鳶の糸
立寄れは氣味よし瓶は夏の寐
扇にもおらはや念の入た人

雨の鼈雪も句へおりけなり
空に目を配る人あり夕涼み
親の祝此と筑广の祭りかな
涼みたいうしろ合せの咄しかな
夕立に念佛申す畦かな
世を捨た姿なりけり苔子の花
極樂か地獄の上や涼みふね
片影を子に歩行せる日傘哉
うた、ねや鮭月をとる夕まくれ
村雲に消こむ際やはと、きす
夏痩に叶わぬ戀も交りけり
苦竹の艶に身の付く三日の月
夕立や暑さ蹴り行く雨の足
松の葉の落て地にたつ暑さ哉
月に跡隠りて戻る田植かな
玉みかく夜のちからや郭公
みしかよや鶏もうるさき朝の門
親の肩もむてやるなり夏の雨
覗ひたら夢に笑ふて兒の昼寐
竿竹は親のゆつりやはつ蚊
一命を的にかけ、り火取虫
何の苦もみんな暑に勝れけり
眠ひいてはなけれと猶の昼寐哉
參らしく鰡も醉けり菖蒲酒
竹の子や其日のうちに見忘る、
涼しさに別れて這入る戸口哉
暑いとて戀を明れは火取虫

蝶千舞ふやたま香の殘る 玉盃樽
涼しさや天龍川の橋の上
親の祝此と筑广の祭りかな
富士詣皆々佛心かな
藤の花に來て低ふ吹く野風哉
多枯を知るや知らすや夏木立
野の景色荷ひ歩行くや菰賣り
うた、ねや鮭月をとる夕まくれ
村雲に消こむ際やはと、きす
夏痩に叶わぬ戀も交りけり
苦竹の艶に身の付く三日の月
夕立や暑さ蹴り行く雨の足
松の葉の落て地にたつ暑さ哉
月に跡隠りて戻る田植かな
玉みかく夜のちからや郭公
みしかよや鶏もうるさき朝の門
親の肩もむてやるなり夏の雨
覗ひたら夢に笑ふて兒の昼寐
竿竹は親のゆつりやはつ蚊
一命を的にかけ、り火取虫
何の苦もみんな暑に勝れけり
眠ひいてはなけれと猶の昼寐哉
參らしく鰡も醉けり菖蒲酒
竹の子や其日のうちに見忘る、
涼しさに別れて這入る戸口哉
暑いとて戀を明れは火取虫

蚊帳に御の餘り合ふ田植前
蚊のためにた、くや可愛子の寐顔
打つ人の背中へ蠅は回りけり
雲の峯くつれて二度の入日哉
一聲て逃れの夜や郭公
打割たこゝろ涼しや竹婦人
午連れて歸る夕へや郭公
寐たる子の鄰聞く〳〵端居哉
閨の夜を一針縫の盛かな
膝引て枕くはるや夏座しき
竹婦人其夜は蚤も來さりけり
雨乞の騒き祭りてなかりけり
親の恩山より高し辻か花
青梅に行足かけつ枝蛙
水かけた田を見廻るや夏の月
窓はとの月の影さす涼りかな
蚊の聲に氣遣ふ親の寐貝かな
顔丹數汚れやうなり田植笠
暗かりへ咄し集ふ蚊遣りかな
たしなみは夏も布子や土用干
忍ひ音に閨にもなく〳〵か五月公
兒一人に家内かゝるや更衣
夕立や青淵の上へ何事そ
葉櫻となれは風なき浮世かな
田を植て綾や錦の思ひ草
女房にも晴れて夜更す納涼哉

竹の子や孝の信は 百味より
ねきかへて巷をしのふや花衣
氣のまゝに蚤寐も親の御恩哉
世話しさに似ぬや田植の唱ふ聲
暑き日や鮭起しての水の味
逃けた子の又戻り見る毛虫かな
子瓜の上手に出來て盜に合はす
捕へ來し蛍燈しや隠しみ
古池やゆかしき椎の夏木立
青東風や椎若葉哉
親の膳直にうけて今年竹
翻る扇も雲の富士詣
田の出來にかへて立ちも暑哉
くるしさに多忍はる、暑かな
蚤蚓の身は木隠れに顯經かな
蚤影を子に歩行せる暑さかな
草はまた元の閨なり飛螢
唯子のたもとにおもし琴のつめ
咄しまてけして行けり灯取虫
涼しさや軒の簡に宿る月
見蚤雀の育つや麥の刈り心
花咲た木も咲かぬ木も若葉哉
涼しさや蚤寐なからに見る白帆
五月雨やあ〳〵ひまじりの子守歌
わかき手の竿もまちりて船涼み
千金の價あり月にはと、きす
其するめは月も影浮〳〵泉かな
待てと來ぬ人に寐ぬ夜や時鳥
涼しさや蚤の拾ひ所
添乳する子に起されしひる寐哉
よ〳〵寐れは寐るほと覗く蚊帳哉
座敷する僧付込て痛蚊かな
動なき世や岩かれの苔の花
細元手出買片荷の團扇かな
青梅や見てさへ動く虫喰哉
身儘も自由になりぬ更衣
釣鐘を撫て聽く暑さかな
五月雨や雀の朝か有るはかり
一本の松に氣の寄る暑さかな
穂麥喰に出た噂さあり繪馬の馬
來て見れは人の手にある蛍かな
振子や駒の蹄の土挽り
重さうに提て通るやけしの花

里の名も京に負行新茶哉
青梅や錠鎖ふた姉が知り
蒲焼の匂り解高し土用の空
殺理の子を風上に置く暑さ哉
殺鳥の貰つかみて田植哉
蝿の子や蛍目へて担蹄
涼しさに数へる寺の鐘かな
蝿の花や涙の映する岩の上
一群は牡丹に似たり白胡蝶
炎天や木二は世界の放れもの
乳母か手を添て持たせる子の日傘
弓張の月のあたりやはとこさす
はのしらき路の小蔵も涼みかな
竿つかう手の勇ましやもかり船
勘忍の二字を要に扇かな
二本出て一本長し今年竹
冷へるまて昼寝しよふか桑瓜
かけ枕の雨蹴盗すや木下闇
何処よりは進ふ蛍や四郎河
一ならび山根に白し田植笠
短夜を残してあるや別座敷
すわつてもたつてもゐられず蚊哉
蝿飼兒や涼み長屋の勘遊び
朝顔に蜂冬の姿を見られけり
生出す風手にまかす扇子哉
蚊遣り火や夕顔黒む戸かな
氷

待人は舟にて涼しさ堀や都の上
月山て涼しさ出来る味なり冷し酒
夜摩者の海となれよ釣り蛍
蝿追ふや親の午時寝の枕元
五月雨も晴れて来そふや田植哉
手の早さうへに唄出る田植かな
水請て酔りへ送る暑さかな
青柳の糸もひるまぬ暑さ哉
松は千代すいし舞子の遊ひ
川狩や母には云はぬ瀬の強み
葉柳の鍵れ蜜蜂や青嵐
蜂見て生の御用を思ひけり
悲しさや鮮鳴蛙親の
ひとつ出て夕暮作る蛍哉
柳植は一葉に香あり菖蒲太刀
世を静われ綸旨そ行々子
秋近き風も知らせし昨日今日
逃す手を放れ兼たる蛍かな
葉しきに思ふ木陰も冬のよに
旅人も扣子合せや茶摘うた
手習も孝に追はれて涼うり
涼しさは日の裏にあり月のまへ
先祖の汗を思ふ土用草とり
涼しさの動きうめなり釣忍

荷車に込み合ふ町の暑かな
綿入も土用に出されて思ひけり
来て見れは車や生のある蛍哉
夕立来て散もうてす門芝居
色もよろし香もはる今日の新茶哉
蝿追ふや親の午時寝の枕元
五月雨も晴れて来そふや田植哉
手の早さうへに唄出る田植かな
水請て酔りへ送る暑さかな
青柳の糸もひるまぬ暑さ哉
松は千代すいし舞子の遊ひ
川狩や母には云はぬ瀬の強み
葉柳の鍵れ蜜蜂や青嵐
蜂見て生の御用を思ひけり
悲しさや鮮鳴蛙親の
ひとつ出て夕暮作る蛍哉
柳植は一葉に香あり菖蒲太刀
世を静われ綸旨そ行々子
秋近き風も知らせし昨日今日
逃す手を放れ兼たる蛍かな
葉しきに思ふ木陰も冬のよに
旅人も扣子合せや茶摘うた
手習も孝に追はれて涼うり
涼しさは日の裏にあり月のまへ
先祖の汗を思ふ土用草とり
涼しさの動きうめなり釣忍

暑き日や何処に心の置所
乞し雨宴か降ると聞さけ牛十
待折に晴て暑れぞ時鳥
苦も悠も月に洗ふて夕涼み
せき止めし寒さ涼しき氷室哉
閨古帥く松は美濃路を打渡り
蚊遣り火や蝿が立の間に一寝入り
涼風や入れてあげたい親の寝間
なつかしき音は夜半の清水哉
秘蔵子のあたまと撫て柏餅
水遊や人の名をよび庵の足
全快の祝に代けて夏御座
両乗に漏れる小稼や蝉牛
孝の名は四海に光る夕涼み
水明り鬼江のうへやはとけ、きす
さす網も親の寝息や旅の笠
手の届き所たる空や飛蛍
時鳥師や蝿草の火もきへて
蝿釣た夜にも撫けり親の足
子を寝せて出るには重し蚊帳の裾
寒する子に遂寝かされて昼寝哉
わけもなく只憎まる、毛虫かな
時ならぬ火鉢出さる、蚊遣り哉
起された顔笑わる、午時寝哉
夏の月や狩り寝おしみ立おしみ
空蝉れて庭木の梢や夜の

仰ぎ立つ最真角力の扇かな
月の暗に笑をさし込む蛸涼み
風雨に誰はす手足ちぬ清水哉
蘇張やはねに除なき夫婦蛍
倫約のき引ひしい家も初鰹
寝せた子をそつと抑さし団扇哉
寝笠の人化貰ふや杜若
卿暗や蛍の那除は朝のうち
身巻りに子が喰れけり朝の蚊帳
船を出る片足に知る暑かな
座に着いて手にひまのなき扇哉
着せて見る親のこゝろやはつ松
眉ありやなきやと覗く日傘哉
寝せた子をそつと抑さし団扇哉
我さきと跳て来にけり火取虫
重そうに見へて牡丹の夜明哉
剛れぬ手て植さす船の涼み哉
詠め居る間も伸そふな苗田哉
寝そふれぬ夜の杜合や時鳥
もんで立つ足のしひれや蓮の側
植る青田の蛍や水かゝみ
同し音に帰とも涼し朝の蝉
西郎に今は目出たき蛾かな
世をかこつ家とは見へす牡丹哉
時に歌に人慰めつ郭公
夜學ひの光りは消ぬ蛍かな
野の先にみゆる四月の白帆かな
汐風に寝顔撫けり蚊屋の裾
寝心や田植の済て雨の音
火を借りて暑さ後くや茶屋の様
草木より神ぬらしけり此か雨
細道に田畑の図き暑さかな
口元の洗りや可笑し蚊のあと

短夜の名殘も惜し、宵涼み
水打て樋々の香を呼ふ廊かな
卯乙女や兒の泣く方へ植て行
消て立高根の雲や明子鳥
降り撒く雨にもさめす杜若
涼しさは調理の外の馳走かな
苔へ〻の付てた、みぬ扇かな
手に書た用手の汗につれけり
玉だれの透間を照らす釜哉
月に雲か、れは叩く水鶏哉
ほと、きす鴨や此頃水の黄
夫さは寝て夜業も細き蚊遣り哉
仁政に飯ふ民や田植歌
暑き日や只居れは只草臥る
味わいをとはれてしらぬ初松魚
涼しさや房總手に取る愛宕山
扇持つ客にもかせる團扇かな
晴れてから來るや夕立の迎ひ傘
短夜や問ふ人稀も夢こ、ろ
水瓶の切れて流る、暑さ哉
千鳥賊や猫のつめとく古戸棚
里に眠の届きて遠き青田かな
海山のけしきを持ぬ牡丹かな
出來譽て改革を問ふ青田かな
雨譽めて青田に向ける灯かな
勝と見て扇ならすや巷の船子
蚊の敵を防く蚊帳の城搆へ

譽せてけふ菜のたけしる更衣
仲人口けふ露顯して納涼
五月雨や物に飽く世をけふも又
尼寺のむかしかたりぬ土用干
水揚もよき紫陽花や筒の花
遠慮いてのそく柳の蚤かな
祝にも日盛のあり海の鵜
遠の業にあふなし夜るの忘れ雨
眼に入れていとふない子や初鰹
水のなき池のまわりや燕子花
蟲の花に涼しさを增す流れかな
松原に譽の音や夏の月
夏搜せて劣らぬ華の力かな
廣けたる扇に筵の日影哉
村雲をはけた光りや月涼し
夕立の瞬さ計りも三日哉
苔青み流れ盡せぬ清水哉
船頭に翌日の空問ふ納涼哉
風下へ躍直したる蚊遣り哉
風筋を見て座を作る納涼哉
寢勝手の違ふや蚊屋の釣はしめ
乳貰ひのそばからもをく團扇哉
吹て呑む茶に落込や顔の汗
雨てなし峯かけたり時鳥
井子の花民き揚へして雨の降る
短夜の月拾てあり三笠山

先つ無事に伐て嬉しや芥子の花
鳥さしの竿にもつる、朝蚓かな
尼寺のむかしかたりぬ土用干
水揚もよき紫陽花や筒の花
遠慮いてのそく柳の蚤かな
祝にも日盛のあり海の鵜
遠の業にあふなし夜るの忘れ雨
眼に入れていとふない子や初鰹
水のなき池のまわりや燕子花
蟲の花に涼しさを增す流れかな
松原に譽の音や夏の月
夏搜せて劣らぬ華の力かな
廣けたる扇に筵の日影哉
村雲をはけた光りや月涼し
夕立の瞬さ計りも三日哉
苔青み流れ盡せぬ清水哉
船頭に翌日の空問ふ納涼哉
風下へ躍直したる蚊遣り哉
風筋を見て座を作る納涼哉
寢勝手の違ふや蚊屋の釣はしめ
乳貰ひのそばからもをく團扇哉
吹て呑む茶に落込や顔の汗
雨てなし峯かけたり時鳥
井子の花民き揚へして雨の降る
短夜の月拾てあり三笠山

友に恩ある山路や明子鳥
性た〳〵と育中に出てし夏の月
花椰應風流のかさへかな
月のさす方へ寄せけり納涼盡
眠る子の手かに歸ひ立つ盆哉
伐れと言ふ鉄の重き牡丹哉
夏計りある心地して用かな
夏菊に呑發したり貰い水
卯の花の垣根は暫し裂れ遁し
人先に不二は雲脫く四月哉
一里つ、脫て無我なる芥子坊主
あてなしに川はた歩行く涼み哉
汲切れい湧口見もる清水かな
戸口から日のみれかゝる若葉哉
先妻のそつと見に來る轝かな
柳さへ竹さへ晝き風情かな
蟬啼や反て日の洩る板庇
夜は旅のつかれ戻るや竹婦人
月涼し船の帆棚のひち枕
朝風を押へてた、む蚊帳哉
葉かくれて水にうつらふ盆かな
蛸打つて南無阿彌陀佛と懺悔かな
心太買や昼寢のたらぬかは
慢へ落て涼しき雨松葉
閑子鳥付て來るかせ思ひ兒
青梅や口にもひとつ袂にも

やる草を持て追ふたり午の蠅
より合ふてひるの雨の涼な盡
行程轉ふ西瓜哉
井波へや初手からねて起きてみても晝さは晝さ哉
能い宿と寐て思ひけり蚊屋の月
陸らしき物て哉や夏氷り
働のよい人からや初袷
杜宇鳴くかと月を詠めけり
子子や魚も及はぬ身の自在
一葉つ、夏しらせけり若楓
卿の暗木かけに蟬の突ひけり
五月雨や貰ひ水する田の小家
草路をたとりて何處多す、み
來て見れは古木も藤の盛り哉

明近き月の盛りや時鳥
櫻さへ伐る泉になるや入梅の窓
電は飼ても開には、きす
阪道や木かけのせせき心太
夕暮や晝さ掃捨る竹箒
いつ誰か蓋を取りし蚊遣哉
短夜の朝起惡る蚊かな
蚋の鳥や叩き捨に遁け捨へ
夏寒し不二の浮世の旅れもの
川狩やおんた殿の智太し
衰秋や子供の手さへ只盛そ
初盆いたわり過て逃しけり
星の名も覺へて戻る納涼哉
慢ひ春過て又この牡丹哉
川狩に大きな魚の咄しかな
身に添ふて旅籠に着蚊旅の蝿
里拂も見ゆる木影の轝哉
風かをる所へ居へけり親の勝
まひ〳〵と朝寢の門のつはめかな
逃廻る子に差掛る日傘哉
雨晴れて涼しさのうへ松の月
月の輪の見ゆる小雨や郭公
照りまけぬ光りや月に飛螢
うた、寐の裾に月あり夏坐敷
門畑に物はしてあり美人草
竹婦人盡は屏風に隠れけり

夕立に椽干番らす留主家哉
彼岸会や撫り佛に蚊の浮
赫上の餅や牡丹に寄せぬかき
一ト足は踏み戻りけり蛇の次
かたひらや腰に垂たし敷の雞
人中へ笑顔盈すや鉾の兒
蛸啼くやはつふたかしてある仕事
待島は啼かす夜明て閑子島
打水や手元に戻る匂ひ風
植時の雨や野道も田のぬかり
月の出て又これからの涼かな
焼塩に戻るしめりや五月雨
辞きくも涼しくなるや密氷
ひねり紙盆をかりの禁錮哉
廣い場も鼻を突くほど蛸の酔
うへ揚た田を撫て行嵐かな
口きかぬ嫁のはかとる田植かな
笹計り戻る都会の氷賣り
雑子や親によふ似た居り敷
新らしき色もさまさす杜若
書調屏や三味の稽古はまたいろは
起されて、時計見に立つ蚤寐哉
興醒て乗り後れたり一二渡し
草臥を枝る戸口や戸の次
寐返へは梅干臭し涼み臺
急かすも月日は立つや油蝉

用もなき降り歩行や夏の月
彼岸会や撫り佛に蚊の浮
橘の香をうつ雨や郭公
栗車の來て車座崩す祭り哉
一ト足は踏み戻りけり蛇の次
かたひらや腰に垂たし敷の雞
人中へ笑顔盈すや鉾の兒
蛸啼くやはつふたかしてある仕事
待島は啼かす夜明て閑子島
打水や手元に戻る匂ひ風
植時の雨や野道も田のぬかり
月の出て又これからの涼かな
焼塩に戻るしめりや五月雨
辞きくも涼しくなるや密氷
ひねり紙盆をかりの禁錮哉
廣い場も鼻を突くほど蛸の酔
うへ揚た田を撫て行嵐かな
口きかぬ嫁のはかとる田植かな
笹計り戻る都会の氷賣り
雑子や親によふ似た居り敷
新らしき色もさまさす杜若
書調屏や三味の稽古はまたいろは
起されて、時計見に立つ蚤寐哉
興醒て乗り後れたり一二渡し
草臥を枝る戸口や戸の次
寐返へは梅干臭し涼み臺
急かすも月日は立つや油蝉

夕立や一雨ごとに秋景色
夕立や涼とあつまに虹の橋
呑むまでに門から涼し氷店
戸口まで打ふて廻る田植かな
妻の手を腹てはめけりはう裕
風呂よふ竹の奥から夏の月
角力取も小さう潜る茅の輪哉
花弓やうへ姉妹にかへね琴
方角を問ふて這入るや旅の蚊帳
湖の透て見もるや背すたれ
日盛りにひつと露持花薬哉
月も亘そふにさしけり白牡丹
うい〳〵と閙繞ふ原の蛍哉
家に戸はいちぬものなり夏の月
香にあふれ蜑の寝つかぬ牡丹哉
出はつれぬ内は涼しき旭哉
そつとした氷も今日は馳走哉
能い宿を問ふ町端や麥埃り
時鳥啼や寝た戸を叩く人
涼しさに寝る極楽も忘れけり
月涼し波の白さやあはし島
一ト月は永ふやせけり夏の閨
なき入りた子に落かゝる母の汗
水無月の色はかわらし不二の姿
竹植た夜や月の砂雪の

酔見てのはらぬ先の暑かな
廣澤や暮れぬ内から飛螢
月涼し店行燈の消た鐘
拍手は濁れた音なり川社
暑き間もあをいて居るや水團扇
若竹や月に延ひたる今朝の影
短夜や咄しの殘る曉のかね
五月雨やしふ〳〵もゆる船の曲突
居處をかゆれは涼し氣は心
短夜を心にかけて朝寐かな
郭公とこて啼たか月一つ
叱られて手に汗握るあつさ哉
降中に盛り過けり合歓の花
船の灯を算へて橋の納涼哉
拝殿に夜も人酔や夏の月
旅の夏見たひ處も殘りけり
初袷着せる笑顔に着る笑顔
乗も夢結ふ間のなし風車
蛾も道かゆる牡丹の蕊かな
我は聞て人を思ふや郭公
窓の灯のもれて遠近く水鶏哉
風に灯をとられて暑る納涼哉
草臥の戻る間もなき短夜哉
あわひかぬ巳かみさをやもりの花
葉かくれもせぬや牡丹の遇れ咲
大切に盥喰ふ里や閑子島

風なかれよめぬ字の上に落けり汗の玉
叱られて手に汗にきる暑かな
花なれは心置夜をはと、きす
すゝしさや夜更けて一人掛の止
精進てあれと花柚哉
閑子島付て來るかと思ひけり
行く先へ廻る櫓なり岡古島
戸を明た儘に留主なり夏の月
蚊道火にひせて去にけり油買
島居まて降た跡あり夏の雨
清水わく木蔭に賎の豊寐哉
豊寐には過た夢なり富士の山
栞り戸に雨の紫陽花もたれけり
山影の風また寒し初袷
月の夜とたゝめしてや見ん白牡丹
風なりにまかせて流す涼み船
君もさそいつ〳〵しひへき田植哉
氣の展ぬ山家住居や初袷
献立に大きく書くやはつ茄子
時鳥蚤の四月に蚊の五月
もらはる、子のすなをなり初袷
雪よりも笠のおもし蝉時雨
鬼百合の角かと見れは苔かな
蚊帳に口おしあて、消す行燈哉
寝取て渡る小橋や杜若

小流れは持たき物よ夏の月
涼しさや机にと、く竹の影
松風をた、み込たる日傘哉
雨の日に駕の客あり杜若
夕立のはれて涼しき夏の月
九重の人に見せたし田草取
酒よりもたしなき水や沖鮹
竹の葉に移れは重し蝸牛
見てさへも暑し鍛冶屋の鎚の音
初茄子ふくさに包む二ッ三ッ
松風に墨すりみたす夏書哉
舌鳴す子の智恵付や砂糖水
ありあまる水に事欠く皐月哉
麥秋や赤ふんとしも一人前
竹若し柳の月は見古して
守の入る子に子おわせて麥の秋
馳走とは枕一つよ夏坐敷
月の出て連のふへけり夏の旅
風筋は此處たと招く涼み哉
海と山とちらも見ゐて夏坐敷
子の安き寐顔に涼し蠅の声
もらはる、子のすなをなり初袷
汗ふりて蝶も又來る踊り草
朝は富士夢には逢賀の涼み哉
子子や暮の浮世の浮しつみ
水音に昨の出來たる卯月哉

蚊屋を出て門の咄しに交りけり
一正て舩傾くる盛かな
流れ山て青田奢ふ清水哉
涼しさやこふもり傘に孕む風
川狩や身拵を包む煩悩り
咄しまて消して仕舞ふや火取虫
惜みく捨てる新茶の出かす哉
榊垣や願の外をほと、きす
子守する子も麥秋の動め哉
照り込た青田を花よ人心
湯上りの心奢ふ團扇かな
夏菊や隣りの松の貰ひ影
照り飽かぬ断しや里の雲の峯
手枕のしひれて覚る昼寝哉
入梅のわら打宿の高咄し
傾に寐ても轅の主かな
秋近き夜の明ふりや不逞の山
六月や井戸持なから貰ひ水
石に手をつかせて逃る蛸蛤かな
親の手をいたゝいて着る袷哉
ゆれる葉にとまつても見る蝶々哉
髭れはもうとこへやら初蚤
世の富は水と日にある田植哉
此畑は獅子も居そうな牡丹哉
和尚とはつらき牡丹の無心哉
姑の蚊遣りて嫁をふすへけり
母の無事祝いて着る袷かな
雪と寐た昔を語れ竹婦人
鶏遣ひや佛の道も知りながら
夕立やこふもり傘に孕む風
人呼は馬の嘶く茂りかな
乳貰ひの鉄土産や初蚤
山廊にかゝいて、ゆうたり遣ふ扇哉
蠅をいて机勝手のかわりけり
月蚤も痩て飛にけり
夏め月涼しさや遊毛吹かれて啼雀
五六尺去てまた見る牡丹かな
身にかゝる雫は知らぬ鵜飼哉
若は勝をと見て吸付る煙草哉
嫁はたく笑に出たり蓙狩
門引そ天窓打たる暑さかな
辞れて来た雀踏るや今年竹
分別の杖にもつかふ扇かな
ある角も出さねは丸も蝸牛
辛抱の汗流しけり下女の貞
閻暑し風を待ねる人の聲
庵百合の思案にくれし風情哉
極風のたるみにひらく扇かな
利腕めし身にかゝる雫は知らぬ鵜飼哉
涼しさや更けて秋呼ふ松の聲
朝遅の苦もならいなる四月哉
明け行や濡れ縄のならふ船の中
持かへて風新らしき扇かな
越して来た山見てつかふ扇かな
うつゝにも繩追ふ親のこゝろ哉
葉となつて春をはなれぬ櫻哉
うたゝねの親の蚊を追ふ團扇哉
乙吉も来て植て見よ初田植
青梅や天氣見に出て二ッ三ッ
一枝をになひて持や藤の花
親の手を曳て門にけり門涼み
住吉や松を涼みの友こゝろ
氣を輕ふ持ては涼しき心哉
浮草やけふはあちらの岸にさし
心茲にある時遅のかはりけり
二つなき心は花よ鍋祭り
翌日の遅ふみ越す夏の月夜かな
暫し見て拝み直すや花御堂
待う鳥は暗かて摂應す新茶哉
蚊柱を撞わり行や汕瀕り
見すまして乙女抛越す早苗かな
馬洗ふ門口に妻の蚊遣り哉
梅雨時や思わぬ處に富士の山
短夜や井戸に殘りし月の影
團とりにまけて涼みの留主居哉
雨乞をするはと擽く天氣かな
虫に火を取られて咄止みにけり

一人行く山の奥迄せみの聲
茶をする人や閻扇の遣かい方
風筋の間毎にはこふ蚊遣り哉
着心や旅先なから初袷
雲かはや盛り過ての人通り
面白し浮雲し芥子に遊ふ蝶
笋や世に出ぬ庵の垣の外
雨雲を持込宿や風涼し
涼しさや馬追ふて来る俄雨
汗に眼をしはた、きけり須磨の浦
水打てしはし置座の端居哉
妻や子は能も寐入て時鳥
門涼みまた逢ふまての別れ哉
とふ向て見ても寐にくき暑さ哉
蠅は送行扇きけり施行米
蝶程に見へて山越す日傘哉
一盞に夢も覚めけり蜀魂
きぬ糸や細くはあれと國の綱
本の下に誰ともしれす昼寝哉
閑古鳥住めり都とおもいけり
旭さす古池にうつる花あやめ
客に提をかせて出たり涼舟
留主居してふと思ひ出す新茶哉
苦は楽の種と育て、辻か花
なら漬に酔た咄しや下戸と下戸
つんぼふに将棊かたれて時鳥
扇の客来てうたがわし新茶哉
魚提た鳥の行衛や雲の峯
立なから舞きめて行團扇哉
讀さしの本て蠅追ふ寝覚哉
五月雨の小家に重し夕煙
運開く昔から白び夜明かな
はな抵のにけて廻るや夏座敷
初蝉やさわらぬ耳の聞心
暑き日や水も柳もありながら
さす影に疊もしめる若葉哉
細けれと御國をつなく生糸哉
寐た親へそつとかけたるほろの蚊帳
暑さとて東雲立や神参り
蚊遣して寝かよう親の寝顔哉
着て見れは心も輕き袷かな
姫百合の粧ひふりや夕月夜
踏て見て渡る土橋や行々子
寐た親をそつと團扇てあふきけり
掛香や桃と櫻の二人連
閑古鳥住めり都とおもいけり
葉櫻に面目のなき無沙汰かな
蚤明けたよふな湖なり雲の峯
月蔭の仄に寒し夏木立
浴みして明日咲花を数へけり
転寝の母を守りて團扇哉
羽織着て出る手へ渡す扇かな
初松魚買はぬ不自由や杜宇
雛子供はふく〳〵雨の肌寒へ
馬の汗詠めて遣ふ扇かな
窓明て蚤家へ見する蝙蝠
下を見て何を楽ひ百合の花
人聲も流る、さまや夕すゝみ
桂男に詠められけり美人草
胸の戸を明けて涼しき咄し哉
庭風呂の肌に床しや夏の月
月涼し〳〵いよ〳〵晴てより
捨るにも男手かりる毛虫かな
火にいかな昧のありてや夏の中
手細工も子ゆへの閑か蚤籠
蚊屋に口當て吹消す灯かな
夕立や濡れなからにも巻る簾
涼風にはつされて居るまくら哉
すゝしさの音の流る、清水哉
片道は蚤の明りや螢る数
鉢の水も同し色もつ若葉哉
五月雨や器に殘る菓子の紅
心ちよき者よ青田の朝景色
絲瓜ても黄色な花の世界哉
柚に道問へは清水も教へけり
親の恩旅笠に知る暑さかな
休ますにとるや田草の終へ仕事
羽織着て出る手へ渡す扇かな

傾城や日傘もつ手もおりながら
蒼なぞせは汗のつめたし笠の紐
見直しに出るや雨夜の時鳥
夜もいつも青田も明て茶の煙
早乙女に我か影のある植田哉
親にはと蚊帳の借りたや賤か孝
活てから二の花咲や杜若
たのみなき翌日の心や芥子の花
面白き帖じ消されて火取虫
船と船月をはさみて納涼哉
葉の上に花の影おく蓮哉
鼠とる猫の断や土用干
急かる、者よ卯月の鰹り旅
川狩や逃した魚の尺積り
田車や雲の峯踏ひ足運ひ
いか栗の名にも似合ぬ若葉かな
中坐する悪悟見らる、扇哉
人こみを出てから使ふ扇かな
玉の緒のひる心地や夕涼み
泳したり止たり月の涼み舟
風ふかぬ庭かと思ふ牡丹哉
緑も来よ花の都の土用干
卯の花に蝶の羽かろし朝日和
花ひらに夜はしつまりて牡丹かな
五月雨の簞笥て殖る衣服哉
見渡せは浪も動かぬあつさかな

炎天や火を吹きそうな鬼瓦
其跡は宮の太鼓よはと、きす
見直しに出るや雨夜の時鳥
夜もいつも青田も明て茶の煙
早乙女に我か影のある植田哉
親にはと蚊帳の借りたや賤か孝
活てから二の花咲や杜若
たのみなき翌日の心や芥子の花
面白き帖じ消されて火取虫
船と船月をはさみて納涼哉
葉の上に花の影おく蓮哉
鼠とる猫の断や土用干
急かる、者よ卯月の鰹り旅
川狩や逃した魚の尺積り
田車や雲の峯踏ひ足運ひ
いか栗の名にも似合ぬ若葉かな
中坐する悪悟見らる、扇哉
人こみを出てから使ふ扇かな
玉の緒のひる心地や夕涼み
泳したり止たり月の涼み舟
風ふかぬ庭かと思ふ牡丹哉
緑も来よ花の都の土用干
卯の花に蝶の羽かろし朝日和
花ひらに夜はしつまりて牡丹かな
五月雨の簞笥て殖る衣服哉
見渡せは浪も動かぬあつさかな

峯の松遥れは星よはと、きす
其跡は宮の太鼓よはと、きす
観音の利生湍たる滝水かな
青空に見とれて蝉にさゝれけり
蝉鳴や池に動かぬ松の影
夕貞や主まつ間を花ひとつ
眠氣さす頃や蛙の聲かり時
はと、きす鳴昔待間に聞からす
盂宗に延勝つ孝の一字かな
念佛て腰のす老の田植かな
蒸目に来た跡殺す水鶏かな
井戸替りへ下女は小酔て頼みけり
親の恩うつひく斗り百合花
蚊遣りにも痩るか庵の鼠逃
竹の子や客に掘すも馳走ふり
女房の悟氣はなくて竹婦人
初蝉や椙に登る水の艶
楠なかて返す人ある夕立哉
苅薬や重きかうろの露雫
寝た家をかそへてもとる涼み哉
涼風を誉めくゝ夢に成にけり
短夜や月の下行朝からす
まちわびて叫く机やはと、きす
おかいかれ菊は栄へる夏の忍
旅に明て吾か庭らしきあやめ哉
扇帯も蚊やの釣手や蚊客

宿妻に見付られ勉忍ふ夫
代に連れて芭蕉揚屋へ参へけり
上座から行儀崩る、暑さかな
神前へ相手そへて二匹扇
虫干や昔しをおもふ紅小袖
五月雨や娘に習ふ花合せ
嫁の夢覚ます姑や蝿た、き
降出したいさみの蛙や枝蛙
蚊屋せまし愛と孝との譲あひ
夜櫻にして見る宇治の蛍哉
花嫁のつくりも余処に麥の秋
もちなおす日和ねつよしねむの花
白南風の吹て黒みし青田哉
五月雨にふりこまれけり二三日
夕立や川の向ひに日のあたる
まちかねた月に一群都鵑
時は今世も豊なる田植かな
汲て出す新茶の匂いもてはやす
載ひで見る物多し土用干
下り登り川を旅路に蛍かな
さけて居てさへも暑さに打畑ケ
朝からの暑さをほとくわらし哉
朝顔はしらぬはつなり旅戻り
別荘もまはらに見へす五月雨
其簑に其香をとめよ菖蒲賣
黒南風に延るか如し不二の山

第立した子によろこばし親雀
おらが春なしやあやめ木偶
水菜子や器の中は花つくし
すゝみ船たへんとしては吹つゝく
翌日の花待つ寝心よ一夜すし
翌日のは開けて遠の浮葉かな
とのゞ群かよひともしれぬ田植哉
撫待や園もいらぬ蔭の棚
虫干や孫に泪て物語り
遠山に戦きうつすや青田原
降雨もいとはて映や花菖蒲
親かれて庭馳しき牡丹哉
満足を親にとらせてすゝみ哉
物毎は斯く揃へたし田植笠
卯の花やまたうそさふき朝の窓
六月や口て云へぬ水の味
懇の淘に塵り拾ふたるはし居哉
夕立を誉めて逃け行く畑人哉
手をひろけひろけ牡丹の咄し哉

武き夏菊の盛りに嵐しなし
明ぬ間を待ちかねたる蝉哉
おらけなき断扇つかいや船上り
もう程書かれぬ扇の船遊ひ
卯の花や屋根のうしろに目立けり
夕立や闇の逃こひ牛の腹
火入まて隙てあるやすゝみ船
暑らしき思ひの外や宮木立
たらちねにさそと襲應す團扇かな
鰹木や尾はかり見へて夏木立
菅笠の見へ隠れする青田哉
提灯を消して見にけり蛍狩
さしかはた傘の小さき牡丹哉
箱明けて出した様なる牡丹哉
夏痩を母は見つめて居たりけり
出嫌や蚊に喰われても庵の月
卯の花や蠟燭の心つみそこね
指折れは月も出る夜を五月雨
痣た親へそつと着せたる浴衣哉
大平と治まる御代や初のはり
卯の花やまたうそさふき朝の窓
あつからぬ程に見てゆけ稲田草
大鋏を提て思案の牡丹哉
はと、きす跡へ向く間をまへの群
否いへぬ人か望ひや白牡丹

傾城や日華もつ手もおりなから　　炎天や火を吹きそうな鬼瓦
着なをせは汗のつめたし笠の紐　　其跡は宮の太鼓よほど、きす
見直しに出るや雨夜の時鳥　　うれしかる子に畢はなし鵜の篝
夜もいつも青田も明て茶の煙　　涼しさや土堤に夜網の溢れ魚
早乙女に我か影のある植田哉　　夫レてかなしき見よりも乳母か簪好き
親にはと蚊帳の借りたや暇か孝　　足音をすかして見るや木下闇
活てから二の花咲や杜若　　窓解の笑ひももれて青簾
たのみなき翌日の心や芥子の花　　打水や草からかよふねなし風
面白き咄じ消されて火取虫　　ランプには來た跡もなし火取虫
船と船月をはさみて納涼哉　　益見のひらいものなり時鳥
葉の上に花の影おく蓮哉　　素襖の歴や若樫
鼠とる猫の断や土用干　　是も亦花や暁くらん蚊やり艸
急かる、者よ卯月の鯔り旅　　いつも日の永い顔なり蝸牛
川狩や逆した魚の尺餘り　　暁みちし餘りにゆる、牡丹哉
田車や雲の峯踏ひ足運ひ　　初かつを動くや市の人こゝろ
いか栗の名にも似合ぬ若葉かな　　夜る見れは家より高し夏木立
中坐する覺悟見らる、扇哉　　短夜を叩て起す水鶏かな
人てみを出てから使ふ扇かな　　見るうちに島の湧出る盥干哉
玉の緒ののひる心地や夕涼み　　先連れは雲に聲あり富士詣
泳したり止たり月の涼み舟　　涼しさや橋は暑の捨て處
風ふかぬ庭かと思ふ牡丹哉　　短夜を長ふ聞けり雨の漏
蝶も來よ花の都の土用干　　文箱から思ひ掛なしはつ茄子
卵の花に蝶の羽かろし朝日和　　不二詣暑き咄しはなかりけり
花ひらに夜はしつまりて牡丹かな　　湖も呑干す程の暑さかな
五月雨の簞笥で殖る衣服哉　　夏の季も隨意に歌ふ田植かな
見渡せは浪も動かぬあつさかな　　杯洗の昔もけしきや夏座敷

蜑立した子によろこばし親雀　　舉の松迦れは是よほど、きす
代に連れて苗蕪擴廣く栄へけり　　ふらき煙をかき立て開水鶏哉
上座から行儀崩る、暑さかな　　湖の底はしらねと不二詣
神前へ担手そへて置扇哉　　暑き日や田明けて立つ池の鯉
虫干や昔しをおもふ紅小袖　　水音を聞に蛍の軍哉
五月雨や娘に習ふ花合せ　　行先を定めす出たるすゝみ哉
嫁の夢覚ます姑や蠅たゝき　　寝た人を寝よと起すやすゝみ臺
降出したいさみの靡や枝蛙　　夏菊の開くと見れは文も書ひ
蚊屋せまし愛と孝との讃あひ　　往昔の手柄はなしやあやめ木偶
夜櫻にして見る宇治の蛍哉　　水菓子や器の中は花つゝし
花嫁のつくりも余處に麥の秋　　すゝみ船たへんとしては吹つゝく
もちなおす日和ねつよしねむの花　　鏡木や尾はかり見へて夏木立
白南風の吹て黒みし青田哉　　翌日の花待つ寝心よ一夜すし
五月雨にふりこまれけり二三日　　翌日のはしらねはつなり旅戻り
夕立や川の向ひに日のあたる　　とのゝ庭かよひともしれぬ田植哉
まちかねた月に一座都鵑　　振待や園もいらぬ藤の棚
時は今世も豊なる田植かな　　虫干や一座に泪て物語り
汲て出す新茶の匂いもてはやす　　遠山に戦きうつすや青田原
載ひて見る物多し土用干　　降雨もいとはて映や花菖蒲
下り登り川を旅路に蚊かな　　親かれて庭馳しき牡丹哉
さけて居てさへも暑さに打畑ケ　　満足を親にとらせてすゝみ哉
朝からの暑さをほとくわらし哉　　物毎は斯く揃へたし田植笠
朝顔はしらぬはつなり旅戻り　　六月や日ては云へぬ水の味
別荘もまはらに見へす五月雨　　戀の淘に塵り拾ふたるはし居哉
共簔に其香をとめよ菖蒲賣　　夕立を暑めて逃け行く畑人哉
黒南風に延るか如し不二の山　　手をひろけひろけ牡丹の咄し哉

武き夏菊の盛りに嵐しなし
明ぬ間を待ちかねたる蛾哉
あらけなき團扇つかいや船上り
かもう程書かれぬ亜の船遊ひ
白妙のふしは常なり夏の月
卯の花や屋根のうしろに目立けり
夕立や繩の透こひ牛の眼
火入まて探てあるやすゝみ船
暑らしき思ひの外や宮木立
たらちねにさそと饗應す團扇かな
鏡木や尾はかり見へて夏木立
簀笠の見へ隠れする青田哉
提灯を消して見にけり蛍狩
さしかはた傘の小さき牡丹哉
箱明けて出した様なる牡丹哉
夏痩を母は見つめて居たりけり
出嫁や蚊に喰われても庵の月
卯の花や蠟燭の心つみそこね
指折れは月も出る夜を五月雨
痣た親へそつと着せたる浴衣哉
大平と治まる御代や初のはり
卯の花やまたうそさふき朝の空
わつからぬ程に見てゆけ稲田草
大鋏を提て思案の牡丹哉
はと、きす跡へ向く間をまへの摩
否いへぬ人か望ひや白牡丹

年とつた耳に卵あり郭公
眠る袖引れて起てほと、きす
柊のねちれて見ゆる暑さかな
五月雨や夕飯時の遅早し
野と山と宮振り分て夏の空
月待の戻りに聞やほと、きす
最ふ寒よと母に呼はる、納涼哉
しつけまて母の慈悲ある裕哉
杣入らぬ蛭降る山や閑古鳥
厭の來ぬ筈の音や夏の月
鮎すしや夢ひと房をのし心
灌佛や夫から後家も濡かゝり
見る人の眷めぬ人なし牡丹かな
後々はわか身もやくか蓙かり
野戻りの拾ひものなりはつ蕃
代々のゆすりかしまし土用干
問はれても味はいはれぬ清水哉
暮てから香をあらためし蕎麥哉
道四五里わさと暮すや夏の月
涼しさや風にもつる、潮の糸
顔かくす程のそかる、日傘かな
高低ふ野はさまく〳〵や綿の花
開線のよふなり寺の土用干
樹々の葉のひしろきもせぬ日の盛
柳さへ動かぬ昼の暑さかな
汗拭てそして入けり門の口

打水の庭相咎めす夏座敷
慢漬りの咄しも上手や溫圓扇
こゝろる直をさはねうちなり初鰹
から犬和一ト間の内に廣け、り
草の戸や蚤痲するにも蚊屋釣て
水ものにさす影涼し夏の月
行く人と戻る人あり夕すゝみ
風に觸れ姿のかわる蓮の露
白妙のふしふみなから田植かな
こゝに來て見てもおなしき暑哉
門先に風呂焚く里や五月晴
靜かさに飯るは是非なき牡丹哉
飜ふたる醉の稚き田植かな
世の人は知らぬ味あり沖膾
涼しさをふりかたけ行日傘かな
鐘の音もつゝひやうなり夏木立
見る人を見にくるよふな蓙かな
先ッ水の色を暮けり冷し麥
夕立や戸をゞて居るさゝ蔕
三親を風上にしてまた横へ涼み哉
そよりともせぬ驚の羽や雲の峯
乳貰の覗て居るさゝ蔕
道問われ返事にこまる青田哉
蓮の葉の雫に重たき夜明哉
雪の衣いつこに干そ五月晴
蓮な色はおの元なり綿の花
夕す、みひるの暑さはどこへやら
蓙は白を持て涼しき廣間哉
抱た子に廻して見せる日傘哉
月す、し竹の柱や釣り忍
短夜も垣に扁くや草のつる
雨の日や存在になる片つむり
魚市の跡は無月の匂ひ哉
鳴雷を共に飛た蚊はと、きす
炎天や水賣りのみの人通り
一ッ來て船の傾ふく蓙かな
遠目には笠の幷よき田植かな
乳母もつい心はおなし夕涼み
行逢ふて人の顔見る蓙かな
雨垂に夕日のさすや軒菖蒲
麥苅の雲にかはれて稼きけり
藥の花や水にも月の晴れ曇り
二度目には松から出たり夏の月
井の水の冷たき日なり雲の峯
雨は地もぬらさす晴れて夏の月
蚤や蚊を思へは秋そまたれけり

鯛子島暗人沙汰や記住居
灯取虫月の二階にしたりけり
夕立と見て乘急く渡しかな
日盛りに並樹の下や別世界
月に掛をつけたやふなり師屋かな
夏草の祉ろ埋むや池の島
印籠に杢うつしけり夏羽織
針て涯易く渉りぬ五月闇
追ふ蠅も叩くな母の寢入さわ
夏の月水も歪るかと眺めけり
寐覺せは味の出來たり冷し瓜
活たれは暮も張たき牡丹哉
夕立にたへぬ暑さもぬるみけり
腹立て丸うなりけり蝸牛
化物の煎りや四條の川涼み
蚊にさけた跡あり梅のつはみ程
かわ切のすんて鼈打片手哉
小田の水暮ても匂ふ晝かな
降るものと思ひすて、も五月雨
我門に戻り掛れは蚊遣かな
貰ひ人の方から惜む牡丹かな
溪川や牛の鼻突く雲の峯
吸越してまた日を拾ふ日永かな
九階より市中見暗す涼み哉
笠取て見たき群あり田植唄
蟇濱やあいのは別の一世界

物諫や鳴き出す蟬に晴る、雨
新お置けは人に邪魔せす納涼臺
取らぬ氣を知て近よる蚤哉
山里の馳走の數よ子規
家風とて結目正しきちまき哉
よい清水ありて名高き野茶屋哉
夕す、みひるの暑さはどこへやら
蓙は白を持て涼しき廣間哉
抱た子に廻して見せる日傘哉
月す、し竹の柱や釣り忍
短夜も垣に扁くや草のつる
雨の日や存在になる片つむり
魚市の跡は無月の匂ひ哉
鳴雷を共に飛た蚊はと、きす
炎天や水賣りのみの人通り
一ッ來て船の傾ふく蓙かな
遠目には笠の幷よき田植かな
乳母もつい心はおなし夕涼み
行逢ふて人の顔見る蓙かな
雨垂に夕日のさすや軒菖蒲
麥苅の雲にかはれて稼きけり
藥の花や水にも月の晴れ曇り
二度目には松から出たり夏の月
井の水の冷たき日なり雲の峯
雨は地もぬらさす晴れて夏の月
蚤や蚊を思へは秋そまたれけり

山こへて一ト吠し遠き時鳥
雨に散り月に脈はし辻か花
夕貝やもふ鶏の寐つくろい
一ト揃ひしては崩る、田植笠
兎に角に膝の崩る、暑さかな
夕立や思はす拜む辻佛
見上けたる雲を踏みけり不二詣
あたら蹙を只遊はせて川涼み
靜さや暑さを捨に川遊哉
言のはやたのむ心のあふき哉
聞て來た耳を借りたし子規
藻の花や折に逆まく咲所ろ
萬國の風も渡れる扇かな
おはしたも負す騒くや船あそひ
海に似た走り穂もあり青田かな
子に土産遣て脫きけり海羽織
次の日も無心し兼る牡丹かな
振り仰くとのゝの空や時鳥
並ひては亦はなれたり納涼船
寢た親をそつと仰くや團扇かな
草臥を風にちらしこ月涼し
初茄子籠の目もらさす青うなり
す、しさや親の無事聞く旅宿り
月見せる雲の切間や時鳥
雨たれを潜て夏の月夜かな
青柳のしたれ涼しき庭哉

おはら女や阪を裸に登るさま
暮すきて夏氣にくらす暑さかな
水苦勞した田に秋を待たれけり
撰こはす塩も香のある新茶哉
友ゆれのしてこはれけり麥の花
手に取て背に眠るや盆狩り
奥深ふ見ゆる御燈や夏木立
世の憩の魁するや火取虫
盆見や京も田舍も廿日閒
寢心の真きに猶更明け安し
夜中から小雨に明て時鳥
散るまではちらぬ色なり杜若
男氣の味を持ちけり菖蒲酒
守役の乳婆も日々に日傘かな
盤置て將棊たおしの盤程哉
炎天や汗かきそうな石佛
暮打つ間は左てつかふ團扇かな
時雨して暑さわする、椽の端
ふしの根にこふり掛たる時鳥
暑さをは凌くてたてもつきに兎
兒の敵き遊ふ盃迄取られけり
さま〳〵に昏降りかへて五月雨
初音まつ身になりて見よ時鳥
人數にあまる程出す團扇かな
花零た隣も嫁ふ散さくら
五月雨にかわく世帶やかしき桶

鯉の浮く池に日傘の並びけり
地も島も降りつゝみけり五月雨
寢た親へそつと風やる團扇かな
月に風凉はこゝ、そひじ枕
住吉の反橋高し夕納凉
家ひとつ朧き世界やかたつふり
凉風を御代の惠みと仰くなり
寐せつける子にたまされて晝寢哉
兄は手の屆く蚊帳のつり手かな
うたゝねや手の動さやひ團扇哉
一すぢ來てぬくひ始むる夏の客
旅寐した心や蚊屋の釣はしめ
明日の夜もかくて聞たし時鳥
乘合や余所の扇のもらひ風
我山になけ郭公酒買はん
提けて來た腕のたるなる牡丹哉
拾遺て石の階のはりけり
鷄の軒に羽を嚙む暑かな
子を抱て釣り急きする蚊帳かな
ふらんこや天地に通ふ道
菅笠の紫振りは同し植乙女
よしあしは天にあり氣の小麥取
世を一重隔て、近し蠅の月
若葉して水音遠く成にけり
打水をして客を待つあるし哉
羅羽織ぬきかけてあり竹縁人

暗き蚊もたゝきかねけり母の顔
十日めの外に一日虎が雨
凉しさや子は寢て居るに風車
五月雨や艸の庵のはと、きす
はるすきて夏木にてらす螢哉
月に夜を取られて狹し飛螢
葉櫻や心安氣に吹かへす
海山にた、一聲やはと、きす
來る年も賑合ふ名古屋祭り哉
粧へたる酒屋の藏や桐の花
旅寐した心や蚊屋の釣はしめ
明日の夜もかくて聞たし時鳥
日か暮れて艸に花咲く螢かな
氣は年の寄らぬ咄しや納凉臺
うき艸や日照用意の團ひ水
驅ひ人のありて嬉しや余り苗
繩の氣も付かぬ木蔭に晝寢かな
寢さす子の枕行燈や螢籠
去年の冬を荷ひ歩行や氷賣り
繩張や青田の風の通ふ道
菅笠の紫振りは同し植乙女
よしあしは天にあり氣の小麥取
世を一重隔て、近し蠅の月
若葉して水音遠く成にけり
打水をして客を待つあるし哉
羅羽織ぬきかけてあり竹縁人

時鳥たつた一聲たつた今
顔の蠅胸の思案を崩しけり
流る、にまかせて船の夕凉
わか楓も櫻も若にけり
居直れは瀧を眞向や凉み臺
一間つ、戻きる夏の旅籠哉
雨乞や何處へ行ても田の蛙し
醉も出ぬ前に花袖の匂ひ哉
月にして戻り急かぬ凉みかな
川風の部かにもれて青簾
戰く度風情の見ゆる青田かな
汗も苦にならぬや親をみつく薬
傘借りて出れははれけり夏の雨
手元から風の生る、田植哉
囓ふ身になりて送るやかきつはた
獻立にのらぬ氷りの馳走かな
ふとんやのおやち躾に晝寢哉
蚊帳の中入らぬ蒲團に狹はめけり
抱た子の手のひらほとや若楓
草は皆裏葉となりて暑さかな
なきすて、あとうつわしき時鳥
子はおさくそたてともなし柏餅
我一人り聞くもおしさや時鳥
分けて持つ手に風のたつ早苗哉
角かくす心は如何に蝸牛
時衣蚊帳や守る度のそく親心

人馴て蛙も呼ふ田植かな
白遠の花から閻の放れけり
雲良や唉へて氣の付く薮の中
夢に聞く寢よとの醉や納凉臺
雨晴し五月の不二や雲の上
親に杖わたして戻る凉みかな
深山には花もまたある郭公鳥
武蔵野や何處か暑さの捨處
夏座敷上座に月の勝をそへ
割れた田に心の入るや夏の雨
こゝろよく通るや夏の薬雨
かくこした程には降らす夏の雨
見ていれは中々ちらす茶子の花
借りて風貰ふて返す團扇かな
降そうな雲に逢はる、夏野哉
そゝう迄穂にあらわれて麥の出來
盛りには裏表なき牡丹哉
草苅の袖より出す蚤かな
五月雨に手入れの見ふる刃物哉
長ふ辞義する首すしの暑かな
容は客見かけて呼ふや心太
挨拶にひと先た、ひ扇かな
雷落のかれ木目に立茂り哉
蚊の聲や我身を措て兒の寢顔
雲に乘る氣込も見ねて枝蛙

藥玉や心のしまるかけ
約束もなくて寄合ふ凉み哉
夕立に傘持て親の迎へかな
凉風を入る、や蚊の枕もと
手先き丈け夏を見へす氷賣り
雪を給にかきて扇の風もかな
寢るしたくして亦いてつ夏の月
うなね子の凉しう瓶を割にけり
料理屋の人の出入りや夏祭り
動かねは草木も暑き姿哉
いやかれは猶見せたかる毛虫哉
左座や人の扇の貰ひ風
紅薬風散り來る虫や紅とんは
凉しさや月にも見ふるその風情
花散りて錦の庭と成りにけり
夕顔の棚に暮こむ日脚哉
撫子に拾水呉れて暮靜
昨日今日是非直す氣て晝寢哉
不二峯の風を受取る扇かな
千金に向ふ初音や郭公
もたぬ身になつて初茄子送り兒
ひら〳〵と人の中行く扇かな
一人住む家にも余る清水哉
一二三四の習へはしめや手鞠唄
凉しさのあまりを松の半哉
兄弟もふたてになりて印地打

夕くれや遠くて近き蚊のうなり
蚤火や昔しの人の名も光る
蝶に貸す饅頭き牡丹かな
朝寝して人の蚤にも喰れけり
立ては手も固さそふなり夏の月
十六夜の閻程嫁の聖寝かな
花折らぬ文字は淑れて初若葉
子の智恵も長し短かし蝉袋
ゑつとりと香も殊更よ雨のけし
五月雨にしつぱり重し簗と笠
夏の月余念もなくて更しけり
夏の夜や釣瓶の音を人の呼
鴨川に心洗ふて夕涼み
涼風を親に譲りて戸口哉
木移りもうかれ姿や春の鳥
子子や日に幾度の浮沈み
天地もゆたかな色の背田かな
松を吹く風を枕の聖寝哉
門ト涼み欠ひ移して別れけり
時鳥蛙の聲は古ひけり
庭そうしすまして出る夕涼
臨夜や笈ろに寒し靴の音
御社にそなはり出茶し茂り哉
散る牡丹玉打砕くおもいかな
霜踏んて出た旅先や単物
秋近うなる簗の虫の姿かな

涼しさや沖を後ろに臂枕
此頃や田歌に馴れて寝る子供
温泉けふりにむせて横切る水鶏哉
戸明れは人影もなし啼水鶏
念佛の座に角引く蝸牛
啼方へ向けは後ろや時鳥
筒一つ花二ツ色や杜若
慈悲深き手に捨てらる、火とり虫
夕立や煙りにきはふ一ッ茶屋
蝉の聲暮れても耳に殘り哉
しばらくは若葉の上や三日の月
大切に水を扱ふ青田かな
朝々の眼の養ひや杜若
涼しさや柳櫻の葉もそよき
見て斗居られぬ垣の蚤哉
憎い蚊の訂だれぬ母の寐顔かな
蚤の跡月の夜風に吹せけり
親は子の蚊を追ひのけて喰はれ飛
思ひ掛ケなき雨に逢ふ夏野哉
初茄子逗留の日を蚊へけり
持ちなれて寂心のよき團扇かな
多いなうるさしちらりはらりの蚊
貧り辞の生ていそうや初かつは
花に來し人は不沙汰よ葉の櫻
末なりは隣りに育つ凪かな
負けさせて買ふも派出なり初鰹
谷の庵茶煙りはそき茂り哉

一ト日は物もいはれぬ清水かな
脊負た子のさしつ得て取る蚤かな
炎天や朴の廣葉の裏に反る
明渡る山の峯より青嵐
大筒のあとや遠音の時鳥
蝙蝠や外風呂たてしひとつ家
帯解いて風に抱きつく暑かな
料理る手に馴染ぬそうや初松魚
死んた蚤を生して使ふ扇哉
花嫁のみなりくす、や麥の秋
湯る乳をもみ込んて取る田草哉
水くはる人もさなから暑かな
川を越す内荷にされし白傘哉
涼返れは時計の音やはとく、す
松影に暑さをはとく笠の紐
雨乞に覚悟して出てぬらしけり
釣草や船から直くに座敷先
氣味のよへ自由〳〵や蝉の聲
雨晴れて氣の勇み立つ田植かな
聞て居る身はしつかなり行々子
夜は滝の音にせかれて明安し
家柄の見ゆる若葉の茂りかな
はんのりと夜の明け頃や時鳥
暑る手に貰や庭の杜若
蚊遣り火の消へて又蚊の啼て來る

もや隠れして群遠ふし時鳥
初蚤そつとしつかり握りけり
墨付て母に託云ふ袷かな
ふり向いて蚤る風抱く峠哉
何處の家の煙りもおなし蚊遣り哉
琴來た甲斐ある蔵の清水かな
涼風も入らぬそ老の竹婦人
橋杭に水際立や夏の月
初茄子在所の親へ土産かな
いろよきは旨く喰る、茄子哉
影きよし清水に移る夏の月
水までも余所から汲て新茶かな
標先に持出す茶器や夕涼
蓮佛や鳩にもくる、施行豆
汲はとに澄む清水かな
月に夜を取られて戻る鍋船かな
徑から徑を傳ふ清水かな
古き家に此薫りある御茶哉
蛙啼く夜は静なり飛鳥里
親の恩山より高き土用干
風盡て蓮重し雲の峯
本町はさた起ぬなり初かつは
蝶はかり來てはうこかし牡丹哉
涼しさや思わす寺に長廊

柳亭主留守かゑつたらすく見せましよ

扨まれては蔫るや宇治の茶の廼
今洗しあやめに引くや蜘蛛の糸
時鳥よもやになりて最一時
海苔の香も茶の香も薄し入梅の空
夕立と月夜と春中合せ哉
小雨降はてには飛はぬ濡烏
きのあたり親の恩見る土用干
雇はねに手徳多し柏餅
野に照る月を見よとや火取むし
氣輕けに誰寝しなから玉の汗
見時しや不二を石に賞る一夜酒
虫干に斗り鐙を見る世哉
曲るまて蝶の見らるゝ日傘哉
夏菊や圍け廣けたる檜のさき
散るまても行儀くつさぬ牡丹哉
手はなせ共光りのふとる蛍かな
手にわてぬ様にかさすや日傘
水際に落ると見へて飛螢
雑花圃を見廻る圃の夕べ哉
寝た母へ部に釣す蚊張哉
斯ふ持てと言はれて置き牡丹哉
山の端に出掛る月や杜宇
小原女の足取輕し雲の峯
集ひ來る蚤になつむ文の窓
盃をさゝれてた、む扇かな
日盛りや水も一つの料理種

かとす、み母の噂に崩れけり
河はたも一トきは涼し木陰哉
ほと、きす暗やよし野は只の山
聞かせたき母は留守なり時鳥
卵の花や眠くも朝の起心
可憐に水の禮いふ晏さかな
神苑の神を枕に韮寒かな
松かけや風から晏てところ天
初夏や寝心のよき夜の雨
杯に影を寫して飛ふはたる
一隅は柳に釣て船の蚊帳哉
川を抱き山を枕に蚊屋哉
花散らぬ内寛られけり初茄子
朝寒して人の蚤にも喚れけり
どちらから見ても威のある牡丹哉
水無月や毎朝早き水賈ひ
親の鴨方へ流る、浮巣かな
ほと、きす一聲聞をはなれけり
あさかはもよめの旭にさめる愛

抱籠や韮はつれなき放れ鴛鴦
蚊柱をたをす蚊遣りの力かな
椎茸の椙うつ音や閑古鳥
腰掛の松葉掃ふて夏の月
大佛の鐘のすそとる、扇かな
雨もりか止めは來にけり火取虫
松かけや風から晏てところ天
手から手へ涼しさ譲る團扇かな
夕立や蹈まて來て雨宿り
一隅は柳に釣て船の蚊帳哉
川を抱き山を枕に蚊屋哉
花散らぬ内寛られけり初茄子
掬ぶ手に我影移る清水哉
鷺白ふ飛んて日和の青田哉
城あとに來て袖ぬらす茂りかな
果てもなき圃の田面や飛ふ螢
笹筒から夏引出すや初谷
他の圃の人迄薫る桐の花
さつと來し雨の跡なり蟬の聲
一人りつゝへりて一人の涼かな
朝寒して人の蚤にも喚れけり
どちらから見ても威のある牡丹哉
水無月や毎朝早き水賈ひ
親の鴨方へ流る、浮巣かな
ほと、きす一聲聞をはなれけり
あさかはもよめの旭にさめる愛

涼風の入て扉なし盤の穴
動かと木の葉見て居る晏かな
火取虫話を圃にしたりけり
蝶さへまだ脫たらぬ晏かな
鉦金は世のわき物よはつ松魚
涼しさも晏さも見へし薄羽織
柴橋を渡る人なし閑古鳥
岩木槻山はこゝらかいんこ鳥
貧屋の晏めて通入るや初幟
不自由な家も自由やかたつふり
師し毎に千代をこめたり鍬等
子を寐せて草に戻すや初螢
上手程歸の深瀬を鵜匠哉
涼しさや巌に砕くる浪の音
涼しさや寐耳に惜しき水の音
雨乞やけふも聞こゆる法螺の音
降らてよき雲を起しな枝かはづ
短か夜になれてみじかき寐起哉
たゆますに越せや裙野の蝸牛
間違ふた道に手柄の覆盆子哉
成るなれは親にさゝけん此清水
今越へた山の影さす清水哉
時鳥見あぐれば只月夜かな
苗賣に來たは昨日よ初茄子
寐若葉露の辭古びたり
似面取れは知た顔なり壬生詣

是はし夢にも見ぬに初茄子
夕雲のふかきより出る鵜船哉
取次の出るまで遥ふ扇哉
蠅も來て拝んで居るや花御堂
試みに着て夫なりの袷かな
憎い蚊もたゝき兼たり子の寐顔
月影に並へて潜くや涼舟
短夜の夢にも高し不二の山
往來の人にも見ゆる晏哉
火取り虫紙を一重の命かな
早乙女や子の泣く方と二タ心
蚤につふせり小半日
夕立や蹈まて遥ふ扇哉
波流せにせかる、野邊の夜明哉
君か代を呼ひながらや田草取
供連れて自から提けし牡丹かな
落る日を暫し抱き込む牡丹哉
孝盡し〳〵幾夜の蚊のふとき
また花の夢を見る夜に時鳥
涼しさや月夜は秋のものなから
柳吹く風幡子を通しけり
聞てから夜明にしたり時鳥
艮りには常の顔なり鍋通り
なさけにも誰か名づけしや美人草
余所のちりかくれて廣し牡丹哉
眠子の手から飛出る蚤かな
はや風の庭とはなりぬ竹植て
鯉はねる音も涼みの餘興かな
はつかしき頃か苦よ辻か花
捆みさしするや田植の餘り苗
時鳥末の七日の月夜かな
非戸へ行くはかりの道や社若
眞心の要ゆるまぬ扇かな
結搆な清水流れて野原かな
米櫃に雀とまるや土用干
基に勝て大きく遥ふ扇哉
大原や夕立空の白のうた
月ばかり宵の様なり時鳥
追て遥るあとへ又來る蚤哉
釣上けた魚落しけり郭公
雲に際貰ふて疊ひ日傘かな
戸を明けた儘に眠るや夏の月
寐若葉露の辭古びたり
己か世を舟て仮食ふ鵜飼哉
似面取れは知た顔なり壬生詣
眠る子の手から盈る、團扇哉
旅人の荷もかるそうに團扇かな

鳥の勞れ知るや手細の仲ひたるみ
團底に花を喚せる螢かな
乳母は子の寐顏に覗く蚊の日暮
夕立や涼しさあまる稻の丈
川狩の殘して行くや水の月
寐おくれて耳に聞けや時鳥
遠近に友呼ふ雨の水鷄哉
蜘うけてそつと座を立團扇哉
青梅と聞て虫齒にさわりけり
更衣一つは寺のかたみかな
短夜や簡の雀に起さるゝ
月の出て置場替るや涼み臺
踏處へ水のしみ出る若葉かな
蜜頃は癖にして寐る男かな
非の底に釣瓶の屆く暑さ哉
子の手から螢貰ふて逃しけり
活花の中に日立や杜若
月花もしばし扣て四月鳥
廊下から紙燭の移る新樹かな
低う釣る蚊帳にも高き財哉
打にくし親の寐顏の蚤蚊かな
笛竹の跡も涼しき夕暮や
時て柚春思ひ出す笠の遣き
時拾た雲井は床し郡公
晝寐き姿なりけり雲の峯
谷川の聲も涼し水の音

はやく行けおくれを取な初鰹
立しなに挨拶たゝむ扇かな
引受て腰のす老鯖の田植かな
泰平をかさりて脫ふ兜かな
暮おくれて耳に聞けや時鳥
根と花は谷を隔て、躑の花
照る降も笠と舍るや松の下
遠近に友呼ふ雨の水鷄哉
流れ出て芦間に浮くや淡の花
雨に咲き雪のはだひやあへの風
蜘うけてそつと座を立團扇哉
快き雪のはだひやあへの風
更衣一つは寺のかたみかな
蚤一つ來て崩れけり夢の不二
聞く意見總身に痛し蚊屋の外
月の出て置場替るや涼み臺
蟬鳴くや夕日に赤き松の膚
踏處へ水のしみ出る若葉かな
風を呑に受けて見るなり芥子の花
蜜頃は癖にして寐る男かな
末廣く蹈しを壓む扇哉
非の底に釣瓶の屆く暑さ哉
櫻かけ汲ひや上野のはね釣瓶
子の手から螢貰ふて逃しけり
樗あつて行に行かれぬ飛螢
活花の中に日立や杜若
散れ殘る花の實生るや御代の夏
月花もしばし扣て四月鳥
孝の一字世界のほとゝぎす
廊下から紙燭の移る新樹かな
夕なさに聲も親の思ひ
低う釣る蚊帳にも高き財哉
初袷頃日ら〳〵着たりけり
月入て閨をあやなす螢哉
打にくし親の寐顏の蚤蚊かな
汲て出すあまりを問へば清水哉
筍竹の跡も涼しき夕暮や
俄か雨はれて日傘の二度ひらき
時て柚春思ひ出す笠の遣き
朝の氣をはなれて清き新樹かな
隣まてくる神の意地
不自由なる里に自由や郭公
晝寐き姿なりけり雲の峯
親の恩暑さ思ふや賀ふ團扇
時鳥聞く夜や月の二重瓶

蚊帳の火も有明や遲の花
水神の在す社や夏木立
濁せとも濁せとも澄し清水哉
暮際やゝさのさめる松のいろ
照る降も笠と舍るや松の下
乳母は子を親より守る蚊やり哉
快き雪のはだひやあへの風
客毎に扇子をた、ひ松の茶や
拾着てはだ迄涼し藏座敷
月のはる夜はさやかなり時鳥
螢火で名を高めたる調書哉
會釋して孫に笑はる梁山子哉
枯枝に雷干や雲の峯
闇に置けふみ見るための螢籠
卯の花の散り破れけり蜘蛛の糸
いさゝかな水も夏野のちから哉
澁佛やふみ兼て退く蠅の道
帷子や着て海とも親の恩
蚊のぶんと流石につらき夜なり鬼
汲て出すあまりを問へば清水哉
俄か雨はれて日傘の二度ひらき
朝の氣をはなれて清き新樹かな
不自由なる里に自由や郭公
親の恩暑さ思ふや賀ふ團扇
五月雨や田舍張紙ものうのさく
君が代の民ぞ豐かに鄽ひあはさ

孝の子か千代迄のこす蚊帳をおる
植仕舞ふ青田に殘る螢かな
寄の音やあつさ忘るゝ松の風
そよ風に時を移すや白と黑
小田原で夜廻爛りにくるはこげ
柚人の入る道もなき青葉かな
暮てなほ暑さの匂ふ川原哉
行の子や先思ひ遣る
散る花の一と日は浮くや清水井戸
團扇もはち巻したりあやめの日
殿暑やいかにも牛の歩行ふり
旅の夜や蚊屋の一重も國堺
日あいて團を見らる、たにし哉
一羽でも心さしなり放し鳥
映かてさい尊き世なれ桐の花
田た山も海もはなれて時鳥
白菜にまさる鮓の清水かな
おほろ夜に星かとまごふ螢哉
夏車道に聲殘しけり時鳥
夕立や晴て後から三ケ月
柴柳にゆる、光りは螢かな
人に問ひのみに赴く清水哉
限られて熱さの增る團扇かな
わせおくてみどりはおなじ早苗哉
艷な御代に傳ふや鶴の聲
夕涼み團扇も忘れ戻りけり

辛抱は後のためなり夕蚊遣
また淀むかけ樋や柿の花
て蠅に吸れう筆のすみ
寐た兒に向けて門涼
田を月にして戻りけり
手の上に見る扇子かな
罪無き牛を口小言
れば身にそう風や初袷
の追風凄し閉古鳥
笛の音も空にすみけり夏の月
際なき扇哉
君か德今年もかなし田植哉
る庭の堺や青すれ
根のふんばりや引蒲
こしらひ送る團扇哉
手の上に息子が螢買ひ
あしたの空や郭公
風を見下し空や揚雲雀
早苗見ての
る心美しあやめかな
入に問ひのみに赴く清水哉
限られて熱さの增る團扇かな
わせおくてみどりはおなじ早苗哉
艷な御代に傳ふや鶴の聲
夕涼み團扇も忘れ戻りけり

短夜やたれに問ても知らぬ百
しのさよ振りや暑さのとも座敷
雲てないやうそ卯月の其處曇
かげぼうに聲かけてみる涼み哉
竹の子や親の腰のすちから杖
さみだれに深山かくれの草や栖
みはのはら清水尋る日永かな
萬人の口機嫌とる清水かな
孝行の眞心移る清水かな
竹植て雨呼鵑闇夜かな
松風もいつしか絶て夏の月
君か代を仰く扇の雲掛
水影となつた二ッの初螢
傘に聲聞て、やはと、きす
鷄の鳴初處や百合の花
あすありと云はおろかよ芥子の花
君か代の貢きの元や田草取
暁匂ふいばらの花や夜の雨
蚊柱の元で月見る在所哉
庭風呂は今にかきるや夏の月
松の緒の屏風涼しき座敷哉
人音に魚は驚けり杜若
小島まで納涼みに來しか盛の上
八千も一ト聲からや時鳥
螢買ひした身の果てはなに賀れ
浮草におもひみだれてとぶ螢

五月雨の柳横切る燕かな
油足もねつく〳〵様な暑さかな
松島に月をなかめて時鳥
舟に居て舟の笛聞涼み哉
暁き満ちて風に重たき牡丹哉
一聲は耳新しや郭公
松しまや夏の夕くれ日の山しは
青々と野一ばいや露の恩
植込て山から戻る朝田かな
松風を請ける座しきの新茶かな
五月雨の夜にも笠ぬく主の門
口きれは今年の通ふ氷室かな
露はらり三國一のそよきかな
世を安く見込む青山のそだち哉
催した雨降兼る暑さかな
雨の夜の盛よ牡丹のたわむ振
朝もやの空に一聲はとゝきす
居ると見て留守の様なる蚊帳かな
見直して二人か笑ふ案山子哉
雨過る名残涼しき夏の月
戸さゝぬも静なる世に入る螢
風振れは酒もまだあり夏木立
細雪吹笠に痛むたし夏の月
皆に包む追分ゆかし閑古鳥
笠の雪は長者の内か夏の月
見こらせは笠に手のある田埴哉

夕立は世を鎮めたる嵐かな
曉の空青〳〵さし時鳥
杉立の雨静かなりほと、きす
母親にたかれてすゝみする子哉
時鳥鳴や雲間に殘る月
藤さくや待風早しよし賀茶や
松か枝の月に一聲時鳥
夏に来て秋に下るや富士詣
夕立や落あふ川の片にごり
新客の来てくつろけぬ暑哉
三日月の心もしるか今年竹
この頃は風さいはつと暑哉
月に耻つ閨に初音の時鳥
うた、寐の親の暑さをあをきけり
親おもふ旅寐の空や不如歸
叩く戸もなきを水鶏に疑覚哉
通り雨する跡さきや蝉の聲
夕立や水かけ論の鳴うわかれ
浮島の帯に廻るやかきつばた
夕立の間にあふ傘も桐一ト葉
古池て月を動かす蛙かな
足もとへ日の来て起す遅寐哉
關取を動かす蚤のちから哉
ゆるされて高き枕の遅寐かな
田がしらにかこいしたや雲の峯

薄の花の咲くや日増しに痩る川
夏の日を咲重ねけり百日紅
手にひねる煙草にも知る入梅哉
母親にたかれてすゝみする子哉
唄も手も笠も田植の場へけり
川音をきゝみ流すか青々子
客とらぬ夜は親里のみで泣く
虫はしに虫を集むを雛かな
雛子や夏に備はる水の色
卯の花やちらほらふ、く窓明り

学行な螢か孝な父が賣り
風流な蚤や硯の海て果て
身にかゝる卵は鍋縄の雫かな
葉櫻や遠音に洩る、山の鐘
葉に風の見へて静けき牡丹哉
折〳〵は螢行かふ橋の上
伺ふて追ふ角のあり蝸牛
かさ取て見たき聲なり田植謡
いちとても母の慈悲ある單衣
涼しさや雨の名殘の月一つ
涼しさの舟一はいや夏の月
立つ人に休む人あり夏木立
螢狩る子に學文の噺しかな
船人の笑ふこはる、蛍かな
月よりも閨に狩りよき螢かな
親に孝子にはなさけの剛扇かな
冷物に味ある夏の料理かな
俤けは夜も白む鍋細のもつれ哉
我れ知らぬ疊む扇や夏木立
涼しさや聲も蚊の鳴竹ばやし
蚊帳抱て螢を釣るやのら息子
海山を隙子一ト重や夏座敷
この奥は瀧の名もあり夏木立
身にも來る風かろ〳〵し初袷
のつそうと小庭に開く牡丹哉
僕さきや庭のかげんに松の月

とふ螢柳の下に呼ふ團扇
五月雨や田うた流る、日の夕へ
あなにくや待夜水鶏の叩く音
蝶は舞ひ蜂は香に酔ふ牡丹哉
文長へ唄潜しふしよき田植かな
二本めの扇子をおろす暑さかな
夕立や追つめらる、一とつ家
有明の月をとひきる時鳥す
月雪を見よはる夏のころも川
切れば手へつとふ雫や杜若
翌日の夜へ涼み殘して戻りけり
露も花もすぎけりほと、きす
夕風に酔はしらして時鳥
君か代を枕にしたる豊庭哉
夕立のあとや柳の動きふり
松風に機嫌とられてひる寐かな
水を出て水より涼しところ天
通の香や朝は氣の澄むものなから
若竹の句ひや雲の一ト雫
大切に芥子持やうも教へけり
また空へ登る酔あり綿り雲雀
橘や千歳に匂ふ淺川
いねた子の飢追ふうばの手愛哉
夕立や喜ふ中も今二すぢ
闇夜にも鳴て通るや時鳥
人浪の打つや日傘の浮き沈み
烟とりて見れは牡丹の眠りけり
山舘の酒倒きはるや雲の峯
水色もまださだまらに夏の月
撫子や咲せるまての氣扱ひ
日でりとはいへど田植に簑と笠
雨も暮め日和もはめて田植哉
とまる木の有るに巴へ出る螢哉
立つ蝶に覗く顔打つ牡丹かな
ゆれるにも一ト位ある牡丹かな

松風の江る流れや杜若
部かさや青田の中の一軒家
駒坦や横にさしたる日傘
水鶏啼夜は近くなり遠くなる
ぬれてはし旅路の雨や不如歸
膳の灯を見せて折らせる花柚かな
蝉や今宵は何處に月を見る
蝉啼やゐるじふりして夏木立
松蔭や此處等か汗の捨處
冷たさを盤に持せて氷豆腐
呼ぶ聲も個と高し初松魚
子は門に泣て母待つ田植哉
寢ても涼し起ても涼し水の音
三日月のぬれて出てけり若葉哉
風に聞く河鹿は加茂か淀川か
風祭る顔なでに來るかやの袖
蒔かぬ種生て見事や鳳仙花
木しづくの落て締むるかたつひり
朝の間は一處にある團扇かな
灯は家の締りよ涼み哉
岩かねの清水に月の澄む夜かな
影ゐ風を撰出して買ふ團扇哉
夕立や何處も親ふ人の聲
青〳〵と青田へ不二の移る影
剪た蠅の親を扱ふ團扇かな
夕顔や蠅を寄せ見れば一抱

神の森急けば遠き晝さかな
常にさへ洞らぬ水を御萩川
泣た兒も見受たり木賃宿
蚊に泣て親の衣着て涙かな
枯れた木の生きかへりけり藤の花
貰はれた我またうれし余り苗
骨ぐみもかたへ扇や角力の繪
うつくしやその一もとの杜若
蚊帳もれて來る蚊に蓋くさゝれ兒
夕立やなき里までも屆く水
せつなさや暗闇よりも蚊哉
人込を出抜けて遁ふ扇かな
三日月の影はのめくや峯の秋
闇取を負かして逃る蚤かな
捕ること〳〵の出茶ぬいばらの蚤哉
夜嵐の靜かなあとや郭公
傾けて浮名をかくす日傘哉
有明て磯部なり夏の月
親喰た蚊に有たけの力かな
親の夢覺めて蚊帳の廣さかな
世とし〳〵のふ笠にあやなし時鳥
蚤は手の下を潜りと光り見初ふ蚤かな
蚤にまで付くや五月の雨の滴
一盤を雲非に拾て、時鳥
冬なれば見向きもせまじ夏氷
枯た木も拾たらぬものや藤の花
蝶の來て破一ッちるばたん
涼しさや物數揺る、枕もと

名も廣く貰る扇屋の店開き
死斯燈をあさむく卿の蚤哉
あがるには水音もせぬ蛙かな
捕し添る左草はなし蓬子花
川風に暑さ忘る、すゞみ哉
柴賀も來ぬそ思へば八講祭り
笠斗り歩行樣なり夏野哉
松影は殊更すゞし夏の月
身ひとつをもてあましたる暑哉
力より氣に草吹る、田植哉
三日月の影はのめくや峯の秋
亡き親の衣見て泣くや土用干
捕ること〳〵の出茶ぬいばらの蚤哉
夜嵐の靜かなあとや郭公
傾けて浮名をかくす日傘哉
有明て磯部なり夏の月
親喰た蚊に有たけの力かな
親の夢覺めて蚊帳の廣さかな
世とし〳〵のふ笠にあやなし時鳥
蚤は手の下を潜りと光り見初ふ蚤かな
蚤にまで付くや五月の雨の滴
石にまで付くや五月の雨の滴
軒菖蒲かけて這入るや朝乙鳥
煙草吸ふ陰もから撰る田植哉
一ト勝負おわりて涼し蚤筵枕
月雪の樹は卿の樹となりにけり
借りかしの出來る名でなし竹馬人

雜道具を出して又行涼み哉
閻の夜になせ鳴き立てぬ時鳥
改めて親に貰ふやはつ袷
足のばす程夜はつまる四月哉
子子や雲の影にも見へかくれ
うりの馬眼鼻なくても通り兒
涼しさや水にこぼる、舟の唄
母屋から菖蒲も葺て貰ひけり
見かけより風の輕さよ蓮團扇
豊なるものよ青田の戰き振り
ねむる子に松風きせて夏の月
卯の花や雪にあやかる夜のさま
一盞寐龍宮も見て戻り兒
蝉啼や夕日かゝやく月のそら
角ともなき断しに夏る團扇かな
わか汗を荷にして休む峠かな
暗は新ふ暗かる、ものを郭公
日盛りやあれも人の子牛使ひ
短夜やしはりた盥に夜の明る
盛の子も穴へ逃げこむ大暑哉
落付きし家のかまひや白牡丹
松風や音に名高きところてん
寐た親の蚊を追拂ふ團扇哉
竹の子の殘すかたみや皮草庇
蚊柱の立軒並や夕月夜
沒み渡る月は暗まじ杜鵑

富士は笑ふて居らやふに五月暗
葉櫻になれば訪れぬ浮世かな
孝行の風の生る、團扇かな
爭ひは扉を隔て蚊蚤狩
折よくも門出るやはつ時鳥
文窓にあやかりものや雪見草
涼しさや月にしめりて様のはし
簗きれは蚊に見らる、暑さ哉
五月雨の雲冠けり三笠山
猫の目の時計をあわすしけり哉
貰ひ乳を眦て濟ませる田植哉
負けそふの巻も曙う打初袷
蚤よふこいや行逢ふ人と人
承知してこぼす涙や扇からし
柴の戸や締り付けても月涼し
言譯を足して配るや初茄子
親の蚊を追ふて假寐の明易し
夕す、みつゐり雨晴し非倚や蝸牛
夜の閻に位の付きし郭公
限うつうに遠富士白き青田哉
年の數手で云ふ頭や辻が花
月からも風を貰ふて夏ざしき
我父母と飾まけて汲む清水かな
宵月に氣味よき舟の涼かな
夏やせや知らぬ旅路も夜もすがら

身にあまる暑は日にこにかけり
涼しさや艸むら分る風の筋
算盤の數りそこなへや郭公
うれしさをつゝみし扇や土用干
浮雲なしと蝶に手をふる牡丹哉
大宅を雨に洗ふて五月晴
夕立の晴て新らし月夜哉
月なくば暗ぬものかや時鳥
あて、來た蚤は川の向ふ島
都かさや猫の居眠る白牡丹
寐せた子を見に戻りけり夕涼み
小夜ふけて月の戸叩く水葱哉
青梅や葉かけに飽を待日頃
入梅しみて竹も動かぬ夕へ哉
卯の花や貧しさかくす垣一重
初松魚聞き都を餞ね廻る
塵雲もなき明ぼのやはと、きす
家一つ見へて青田の戰さかな
糸卷きうらからのぼる蚤哉
秋や邪魔になる子も尻からげ
酒はよき物よ此蚊に高いびき
上へもなき酒の肴や郭公
舟あちへこちへ動かす蚤かな
夜びかりの呼ひ起さる、蚤寐哉
煙草盆一つで足るや夕涼み

汗の出る程に思ふや母の恩

時雨來て案山子の樣に田植哉

川筋の間は螢に取られけり

骨折し恩は仇なり捨團扇

吹風を命に思ふ暑さかな

涼しさや枕に響く水の音

杜若うつし流も隅田川

入梅あきを加減に知るや糊細工

若葉して谷川すこう見へにけり

五月雨や傘さしなれて遊ふ稚子

かたやかな心も日にそふ青田哉

鉄さけた人になれたる水鶏かな

〳〵に明りとられて月のある

葉傳に池も越しけりかたつむり

夜の露下りて發ふ青田哉

暑き日や母の痣顔に握く團扇

蚊や老をなくさへはこり貞

重そふに提け來る茶子の便哉

馬の首動す蠅の力哉

買値より安賣りと云ふ夜店哉

常盤木に負けぬ色持つ青田哉

明日はちるけしきは見す若葉の花

夏の日やなけて我身を從にけり

芳野見た笠も用立つ五月かな

若竹も眞直に延しあつさかな

蚤た蚊の蚊を追ふて蚊に喰れけり

高ふ飛ふ夜の靜なる螢かな

一輪てあまる坐敷や白牡丹

何よりも柳植たき清水かな

汗しほる故郷の母もあんしけり

骨折し恩は仇なり捨團扇

吹風を命に思ふ暑さかな

酒そしる顔の並ひし新茶かな

涼しさや枕に響く水の音

しばらくと思ふ間長き晝寢哉

杜若うつし流も隅田川

逝けたやうなり蚊帳

入梅あきを加減に知るや糊細工

吹て青簾

若葉して谷川すこう見へにけり

時鳥初音は人の耳て聞き

五月雨や傘さしなれて遊ふ稚子

夕立や手に持つ傘も間に合わす

かたやかな心も日にそふ青田哉

山彦に醉しらへけり郭公

鉄さけた人になれたる水鶏かな

能い月を蚊屋にも入れず戸さし廻

〳〵に明りとられて月のある

伽にせし月は落けり郭公

葉傳に池も越しけりかたつむり

着た子より母の嬉しき袷かな

夜の露下りて發ふ青田哉

姉が手もまたと、かぬや燕子花

ゆふみした

暑き日や母の痣顔に握く團扇

袷凉しはつ〳〵殖る袷島の灯

取りに來たひに坂られけり火取虫

山里や櫻散日を衣がへ

蛭たる海水引添し青田哉

雲足の早き月夜や郭公

蛭たる海水引添し青田哉

痣心と思へは蚊帳の夜明哉

馬の首動す蠅の力哉

親の名を譽り受たる暑かな

旅次初めて嬉し五月晴

寶瓶の鯉立會や土用干

買値より安賣りと云ふ夜店哉

孝に汲む新茶色香の飜れけり

常盤木に負けぬ色持つ青田哉

松陰のゆれ、はもれる青すたれ

明日はちるけしきは見す若葉の花

たゞ〳〵の三日月見へし入梅の空

母の手を藏て着る袷かな

夏の日やなけて我身を從にけり

遠の葉の涼しく動く夜明かな

竹の子や今日は主しの身の祝へ

芳野見た笠も用立つ五月かな

若竹も眞直に延しあつさかな

土産より先へ見せけり幼の跡

五位よりも一ト屑高し青田哉

蚤た蚊の蚊を追ふて蚊に喰れけり

水音を階へて橋の納涼かな

池の夜は遠の花から白みけり

夕立に追はれて來たりしらぬ人

ゆづられた日傘も親のひかけ哉

淪の上にすゝめは風も渡りけり

人こゝろ昨日に遠ふし更衣

富士の嶺見揚て高し夏の月

見ぬ方に開く書あり蓮の花

涼しさや柳の雨にうつる月

待雨は降らて崩れし雲の峯

茶話に夜半の鐘聞く涼みかな

今越た山も霞や暮の鐘

初袷着て銀の針くや爪のあか

結ふ手を洩すも惜しき清水哉

雨晴れや今飛ひそふな燕子花

盜人のむかいに氷たる牡丹哉

自由とは思ふ心に暑さかな

風吹かは波や立つらん夏の月

先一夜掘場きさらす納涼盛

朝貞や日の出る前の一なかめ

ぬきんて松に茂るや高うるし

虫干に親のおん知る小袖哉

動かせは竹に雨あり夏の月

蚊帳越に聞くや出船の受こたへ

手の平に付て壯舞ふや蚊の命

涼しさのとこへすへけり親の膳

世の中に海きこゝなき清水哉

追ひ出して夏奢哉

朝夕にこゝろの廻る青田かな

低ふ聞ゆる棚田かな

起る身にも他の手を借らす田草取

打れぬ親のまくら元

またたる、酔の雫や初松魚

碑高し開古鳥

陽貴妃や五湖に遊はん薔薇の花

時鳥そふな牡丹哉

人の目の欲にもかけぬ糸瓜かな

もふ物言ひそふな牡丹哉

神代より伐らぬ木立や開古鳥

てもかわらぬ夏や親の恩

短夜や夢を中から破る鐘

癒た母に世話ののがれぬ圍扇かな

雲の峯左程に富士も高らす

花に浮し心もとりぬ若楓

涼風に端居を親に譲りけり

風の手に曳れて出たり門涼み

老の夏去年より痩の見へにけり

松がけや爰か暑さの捨どころ

夜は急に白みて遠き水鶏かな

痩畑の麥照りつける卯月哉

うき云ろ見に開くにたんの太さ哉

あふなけなとこに癒て居る納涼哉

昌日に風を賣り出す店の口

行舟の後にたかし雲の峯

水に月殘して戻る田植哉

夏痩や親に向ては無邪な顔

時鳥初音は人の耳て聞き

郵便の小遣かけぬく茂り哉

夕立や手に持つ傘も間に合わす

樂そふなかはみて嬉し蚊帳の外

山彦に醉しらへけり郭公

抜道の數有森や田植時

能い月を蚊屋にも入れず戸さし廻

葉柳や足そゝくにはおしき池

伽にせし月は落けり郭公

寐支度をしてから涼む下女哉

着た子より母の嬉しき袷かな

松島や誠の夏の夕けしき

姉が手もまたと、かぬや燕子花

世の耳を空に集めて郭公

袷凉しはつ〳〵殖る袷島の灯

今淪を出たぬれ色や夏の月

山里や櫻散日を衣がへ

川邊の閘を動かす盤かな

蛭たる海水引添し青田哉

共に氣の開く牡丹のわるし哉

雲足の早き月夜や郭公

暑いとも父共染し筆のさき

痣心と思へは蚊帳の夜明哉

すてられて無邪に去りけり火取虫

親の名を譽り受たる暑かな

顔ふりて嵐に向ふ鹿の子哉

旅次初めて嬉し五月晴

落てから名の高ふなる鶯哉

寶瓶の鯉立會や土用干

閒とけし夜の痣心や時鳥

孝に汲む新茶色香の飜れけり

美人草あやしの家に盛りかな

松陰のゆれ、はもれる青すたれ

夕立や盥たる樣に殘る月

母の手を藏て着る袷かな

心から帶ひもとかすのみの知惠

遠の葉の涼しく動く夜明かな

鳴神やこゝは桑原御免なり

竹の子や今日は主しの身の祝へ

蚊帳釣て父に案内を仕る娘

五位よりも一ト屑高し青田哉

袖で拭く眼鏡の玉や入梅曇り

池の夜は遠の花から白みけり

植てのく田にも夕露夕嵐

すや〳〵と子より卵なき晝寢哉

木や草の色にせかれて更衣

時鳥ふりかへり見る椙かな

雨晴の冷たき空や時鳥

そろりつと乳房はなして枕蚊屋

骨ひ蚊のたゞかれもせず子の寐顔

蓮白し額の古ひも奥床し

かた福のめんも出たり土用ばし

薬降る頃か頭りに眠むくなる

皿ねるを親は数へず筑紫鍋

破す、し松の名處の七重八重

富士程の白扇はしき暑さ哉

蚊屋越しに受こゝろよし富士の風

蚊帳に月水晶ひ、く枕哉

日は松にさして暮けり入梅の中

ひとつ來て廣間の闇や火取虫

あせ水を流してつくる蚊屋の中

硝子灯の掃除に清し夏神樂

親に餌を運ふ鴉や木下闇

鳥かけのうつりそめけり青簾

蚊帳越しや行燈吹消すおよいこ去

聖日もまた旅に寐る身そ杜宇

今日降は虎か雨そと覗きけり

人の世は戒しめにあり誰團扇

活る間に開く花あり社若

さし汐の夜を追ふ様や夏の海

角ふるはあそふ心か蝸牛

嫉妬なき妻の寐顔や竹婦人

月は夜の見添ものなり夏祭り

折鶴を崩して色む盞かな

客間にもひとつ設けて竹婦人

短夜の果やあしたに発る夢

吹風を殊勝にさはく牡丹哉

蔀重りけり草の露

庭下駄のはき

河骨や舟一艘にせまい川

包まる、瀬の音なり若葉山

五月雨二人かゝりの送り

芦の根を力に鴉のうきすて

あしの葉に月はかくれて啼水鶏

漆乳した児に向け直す蚊遣哉

悪し嬉し蚊の喰てこそ親に孝

打水や余所には雨の降る噂さ

雲井にも屈く暮れや釣瓶鮨

何風もうつむくはかり百合の花

月花の栞曜の外やはと、きす

蔀おる音もさわるか芥子の花

木雫をなめて動くや蝸牛

暮涼し川へ乗込む猟馬

郭公子の泣きわわず寐覚かな

蛤日傘に罪なき寐貝隠しけり

汗の出ぬ世渡りもあり氷室守

にきわしき中にも涼し夏神楽

植ゆる田を鏡につかふ女かな

薬櫻の花より深き夜明かな

年〳〵に色新らしき小鮎哉

枝咲た話に狹し涼み臺

六月の雪見る山や田子の湖

筆もまた數ふるはとの今年竹

蜜柑の酸や牡丹こさし向ひ

蔀菜の浮葉付やはつ嵐

壁まで干て氣味よし五月晴

包まる、瀬の音なり若葉山

蓮の香やこゝろしつまる法の庭

玉葉より香も蒸し、菊の苗

ためべそふな名のめてられて氷り餅

漆乳した児に向け直す蚊遣哉

悪し嬉し蚊の喰てこそ親に孝

打水や余所には雨の降る噂さ

雲井にも屈く暮れや釣瓶鮨

何風もうつむくはかり百合の花

月花の栞曜の外やはと、きす

蔀おる音もさわるか芥子の花

木雫をなめて動くや蝸牛

暮涼し川へ乗込む猟馬

郭公子の泣きわわず寐覚かな

蛤日傘に罪なき寐貝隠しけり

汗の出ぬ世渡りもあり氷室守

にきわしき中にも涼し夏神楽

植ゆる田を鏡につかふ女かな

薬櫻の花より深き夜明かな

年〳〵に色新らしき小鮎哉

枝咲た話に狹し涼み臺

ひとつこし涼しや田の二ツ橋

乳もらひの來て賑ふ蚊遣哉

桶の小影は涼しはと、きす

提て行人の顔見る牡丹哉

炎く母を子のけひたかる蚊遣哉

不二に賂給ない盛やはつ茄子

人斗り短夜てあり朝す、め

短夜や對瓶の細の朝雫

花畑の中に一ト木は牡丹哉

送り犬や見へぬ別れの惜まる、

五月雨や舛日の切れるはかり鹽

水音の枕へ夏の月

較取て馬に飼ふ昼さかな

澤の世こそつらけれ風のま、

夏の月柳はぬれて明にけり

螢打や隙なき机の及ひこし

紫陽花や日數に戻る水の色

報謝日は追ふ斗りなう蛍たゝき

三日月の茂りから出る夏のやま

新麥や不行儀勝のそろへ

五月雨の中に廻るや夜間山

いけ花も毎日かへて夏座敷

川にまて賺り月冴て味ある夜

氣まへよき貴人貴人や朝松魚

石菖や昼も祇のなかめ草

あらそひも今日の花なりくらへ馬

風形りに靡むや船の薄羽織

追ふて行人の跡追ふ盛かな

人の卵言はおかしき鍋倒哉

よき色はさめ易ひのに百日紅

また海の色もはなれす初松魚

時鳥鴉や聞く人鳥かぬ人

待つ人の氣を汲て退く清水かな

樹々高し昼しと思ふ心より

今年はと笑顔て植す青田哉

短夜や蚊に残る竹のさけ

ゆらくと風をやり出す芭蕉かな

番頭の居眠りおこす四月かな

卵の花や夜るも戸さゝぬ比丘尼寺

牡丹見て花はこれそこ思ひけり

月の出て寐直る蚊帳の心地哉

盃に受込む月や夏座敷

蚊かけの本を枕に蚤寐哉

暑き日や指もさゝれぬ社頭け

今はいた化粧流かる、暑かな

白けしの花やよころ、ひまもなし

なさけなく追ふも情けや火取虫

涼しさや深一ト重の波明り

竹の子やのひても就にさからはす

短夜やかたよせて置針仕事

板にして馬はこりぬける日傘哉
涼しさや着くのも惜き渡し舟
見つめけり芥子に一日の浮沈み
蝿とらぬ身も雨乞の支度かな
暑さをは持て行けり宵の雨
古ひ笠着た人田植上手哉
二ト筋は小田へ流る、清水哉
待〳〵し末て夢見る時鳥
富士に降る雨見て曝ひ日傘哉
地に足の付とは見ねすゞらべ馬
降てくれかしに楽もし夏の雲
月共に呑て清水の涼み哉
見せ合て立や宿屋の蚤の跡
寄の昔の動く様なり青簾
さ、ならぬ蚤のひくし水の上
亂れ毛の敬て涼しき昼寝かな
庭に迄位の付し牡丹哉
水にかけ捨るにもせよ餘り苗
島の根や麥の秋風吹渡る
活花の屑乘せて立つ團扇哉
草分の家といわる、牡丹かな
芥子提げて飛はる、川を渡り鳧
花の香の殘る梢や梅若葉
櫻見て散る眼を戻す牡丹哉
力らなき水の流れや雲の峯
暮るにはまたゆとりあり五月晴

きり水の庭を出て行螢哉
思はすに何時か肌ぬく暑さかな
澄めは尚澄はと涼し夏の月
吉野から戻りて買ふやはつ鰹
こゝわりてなけ盃や涼み舟
涼しさに月をたき寐の庵哉
蚤ひねる指に惣身の力かな
爪跳た石に谷なし時鳥
寐おしさに門掃夏の月夜かな
北窓を殘夜待しそ時鳥
蜂の巣や瓦の無事を謀計
人の無事我無事あふく團扇かな
寐た鳥の起き忘れけり木下闇
蓮咲や茶箱手前の椽の先
寐る樂を苦にして戻る涼哉
子の長寐譬めて疊むや枕蚊帳
夏の月澄むや寢おしむ人の上
あいらしき中に勇あり杜若
賤けれど手足の利かぬ余所の蚊屋
折のしの折目もきかぬ五月雨
涼しさに寐にもはいらす眠り鳧
魚賣も買ふて去ぬるや初茄子
持やふを聞て重たし芥子の花
雪霜を午睡の夢も果報
涅槃圖扇すや〳〵親を寢かせけり
孝行に親のひせたる蚊遣り哉

推子や輕しと思ふ日は一ト日
珍らしき燈の朝寐や初蚊帳
一ト口に足らぬ馳走や初茄子
三聲まで月にあづけて郭公
いざ問はん宇治より來たか此の螢
時鳥一聲き、たき山すまへ
捨日傘や逃け歩行く兒に着せ廻る
飯たきの下女も蚊遣りに上手哉
瀧守に客もあるなり夏の月
短冊も硯も入れて蚊屋の月
一ト口に足らねをあます初茄子
笹の葉の雫となるや虎が雨
小夜更て窓洩る月や郭公
柳から月吹き出して風涼し
水に月竿さし捨なし涼み船
富士の雪見つ、も田子の涼み哉
雲に攀ぢ雪に悲ひて富士詣
毒になるとは聞ながら蜜寐哉
若苗やまた吹風も薄みとり
夏痩や得手の蚊も音の聲り
短夜のたしにもならぬ蜜寐哉
夏の夜やまた飛石はなまぬくさ
蚊遣り火や其昔思ふ老の居間
花に鳥また限に眠る卯月かな
九窓の中にも光る螢かな
見た松魚初めて聞ふて初松魚

親の手をかりていた、く衣更
はと、きす啼くや皆たつ船の人
燈火へ來て隠れけり飛ぶ螢
炎天や親の影ふむ親の恩
日傘より外に影なし馬の上
涼しさや月動かして遊ふ龜
松蔭や流る、汗の入れ所
未だ嫁の披露もなさて田植哉
勢田を出て間もなき船や時鳥
月の鎌槻卸る聲や郭公
花を見た眼には用なし時鳥
一ひらのみとりは千田の早苗哉
葉柳に一隅晴き鞦韆かな
時鳥啼くや呑込む枇杷のさね
朝々の葉の働きやかきつばた
夕露の見る間に昇る青田かな
日のよれを月にもとしの夏の草
たんせいの始めは青し苗代田
竹の子や親を離れて庵住居
時鳥里は田植の笠もあり
夕立や何處ぞ浮雲なき雷の聲
わたましの日に映初るはたに哉
海山は笠の下なり富士詣
湯上りの心の裏さや涼蚤
蚊屋釣た夜から落付く心かな
時鳥聲の行衛や海の上

炎天や水增す富士の麓川
行き合ふて晴のあつき川原哉
忠孝の昔し語りや虎の雨
病む母の蚊帳に替る素肌かな
峯て着る湘子持たして不二詣
蚊遣り火や夕月くもる賤が軒
寒かへれば轉で退けり竹婦人
五月雨やゞだかの登るはしりさき
つゑの賢斗解くや新茶の案内狀
並松を力にいそ〳〵暑さかな
汲かへて父に味ふ清水かな
可愛さに銀が里から田植かな
老たりと思へば今日の若楓
宵寒して子に蚊遣する親こゝろ
雷に生れかわれよはゝきす
河骨や日毎に乾く潮の匂ひ
刎そふの馬を洗ふや夏の川
親庭せて母ふ光りの盆哉
朝月の障らぬ色や白牡丹
乘となりて山靜なる櫻かな
傾た日に傾むける日傘哉
氷る意のとけて貴ふや雪の下
照り詰めて雨待畑の暑さ哉
盃を動かす酢やはゝきす
夏の須广涼しき月の昇りけり
蟾には蟬のしくれて水室守

百三十

葉柳の影へ廻るや聚き牛
屋はれて米の銀喰ふ田植哉
手の白き女子は下手な田植哉
子の爲に乳母は夏痩したりけり
風鈴も水にふらすや夏座敷
挨拶のまに〳〵開く扇子かな
日にさらし雨にかわきつ若葉山
我影を兒に歩行せる暑かな
世の中もゆるめや今日の青田面
圖十郎あたかゝ關に次更
手に持たぬ宿の土産や時鳥
着よこれは母をたのまん裕哉
涼しさや世を捨に來る橋の上
暑に痩せる水の音
短夜に都の噺し余りけり
齢ひした御代の松あり田植かな
戰く度窓にもたれつ今年竹
川水に流れて涼し月の影
更衣簞笥に春は直しけり
日暮しや汗の滯つく笠の紐
若葉して一倍くらき社かな
頓て實に成や笠着て田草取
一筋は小田へ流る、清水かな
貰ふても切惜まる、牡丹哉
花にます朝の眺めや出來青田
金錢て買へぬ峠の施行水
鶯や入梅に暗ても春の野
暑き日や高しと思ふ庵の垣
鉄炮はかし白茶はやりや夏の襟

業は苦の種とこそ聞け納涼盛
田のためと思へば嬉し暑さ哉
子の爲に乳母は夏痩したりけり
風鈴も水にふらすや夏座敷
梅落て鐵の門口取られ蛍
白刃にも涙にも遣ふあふぎ哉
柳からゆりこぼされて飛ぶ螢
蝙蝠や二度目は山に三日の月
手に持たぬ宿の土産や時鳥
傘かげへ來るなり雨の飛ぶ螢
割て其心見せるや西瓜哉
短夜に都の噺し余りけり
齢ひした御代の松あり田植かな
戰く度窓にもたれつ今年竹
川水に流れて涼し月の影
更衣簞笥に春は直しけり
日暮しや汗の滯つく笠の紐
若葉して一倍くらき社かな
頓て實に成や笠着て田草取
一筋は小田へ流る、清水かな
貰ふても切惜まる、牡丹哉
花にます朝の眺めや出來青田
金錢て買へぬ峠の施行水
鶯や入梅に暗ても春の野
暑き日や高しと思ふ庵の垣
鉄炮はかし白茶はやりや夏の襟

も一群啼けかし月の時鳥
あふ取りや尾切の牛の後ろ足
涼しさや戰く蝦蟇も畜の柳
男にも冠せて見ばや鍋の敷
瀧迫は影の屆ぬ日傘哉
枝替る蟬氣みしかに鳴にけり
日盛りや動くは鳥の立し枝
諸人の河原につどふ納涼哉
鵜遣や地獄の業も佛顏
拾ひたき石に根のある清水哉
芥子提て心小さく歩きけり
牡丹活て疊の汚れ目立けり
うた、寐や蚊に起されて聞おしへ
早乙女や濡れ子に乳をしぼり捨て
來〳〵見れは人の居るなり湧清水
水打て往來涼しう通しけり
堪忍の敎へ草なり百合の花
海こしに見ゆる競馬の挨り哉
改めて汗の流る、風呂上り
袈裟の花柚に齒の根うきにけり
歌や詩の種を一群はゝきす
鵜遣ひの脊中に寐る見は佛哉
清水くひときは暑さも忘れけり
釣瓶もる水昔たかし秋蘭り
保らかに海の暮行四月哉
澄昇る月なは涼し栖の上

のぼるはと尚涼しさや月の船
虫干や鎧着て見る玄關番
窓に暉く盆哉
夕立やおはて、走る物干場
入る月も小雨の中や時鳥
接木するを見て居て足のしびれ鬼
笠となり杖となる身や蝙蝠傘
湖一ッか、へし里の青田かな
今朝聞て一日嬉し時鳥
酒樽は伊丹の銘や牡丹園
齒の根まて味のしみ込む清水かな
相伴もした、か遣ふ清水哉
肺の名も知れて涼しき社哉
水無月も水こ、ろうる柳哉
怠らぬ手入に暮くや富貴草
寐て足らぬ夜の親しさや郭公
行儀よふなら ふ畠や芥子坊主
麥秋や音戸から廻る看賣り
涼しさや絵もの寄彈く三保の浦
夜更けまで知らで遊ふや夏の月
涼しさやましたに川を見る座敷
いつよりも鴨戸の近き四月哉
薬の裏に光りの通る螢かな
ゆるされて汗の肌脫く使哉
常よりも富士の新らし五月晴
留守をした心は戻り夕納涼

幾の雲も鴨出す茂りかな
日盛りてあれとゆかねはならぬ用
花咲て鉢の小さき牡丹哉
筍や誰が住み捨てし家の跡
廣き世に身の置き場なき暑さ哉
聞ふりの御佛もあり閑古鳥
一ト節の竹に風ある團扇かな
天も地もしんと動かす牡丹哉
勝軍見る心地する幟哉
鬼灯や垣の高さの二三尺
子心に夜も寢す親の蚊を拂ひ
咲く門に賣しきはなき牡丹哉
我心寫して恥づる清水かな
炎天の頃や短き釣瓶繩
ひとさかり川の閘けす螢かな
灯明りに夜は猶涼し川處
寐た母のうしろをあふく團扇哉
好き處へ汐待ちしたり不如歸
蛋取りの姿おかしき無極哉
我ま、にすきた窓も夏 慈悲
幾里の青田ぞ富士の裾をわり
漏れて來たやふな群なり朝水鍋
從へば水にも角や心太
山田から稽古して出る田唄哉
蹈ためしせる板橋や杜若
釣り込て月を驅走や庵の蚊帳

杜鵑 あとに一輪月無情

ふとにげた蛍あをなし猫のはた

何國でも同し姿の田植哉

いつ花の果見る事そ百日紅

關取を動かす蚤の力哉

月出て罪も消るや蝙の箏

氷水賣る群多き暑さかな

結句よき夜道の旅や夏の月

おもみなにか、ある露の牡丹哉

打水や思はぬ木から蝶の立

竹の子や竹にしてよき生へ處

谷間から都と出の水や杜若

時鳥鳴くや氣のせく一人旅

思深き親のめやみの蚊帳かな

山々るみ都にはしき清水かな

開まては茶に座をしめて杜宇

血を分けし身とは思わぬ蚊の憎さ

曳き出して馬にも義理の蚊遣哉

水音の高き木曾路や木下闇

夜は暗い箸よ蛍さへ木下闇

笠す、しき夢の置きどころ

尻に火を付て飛出す蛍かな

古くても用に先立團扇哉

宿かさぬうらみ忘れて夏の月

さし懸て師の影踏まぬ日傘哉

暑き日や水には風の見へながら

後や先なるや夕立の人崩れ

貰ふ手もぬれて杜若

わけきけはまた無理もなし重ね鍋

招かれて飛ひこひ舟の涼みかな

五月雨降るも田植のきはひかな

生て居て蓮の葉に乘蛙哉

蚊に困る蚊も又困る蚊遣り哉

涼しさや腰より取し扇風

亡き母の小袖も今や土用干

行末は誰か身に添ふや紅の花

金貯める氣では食はれぬ初鰹

砂に這ふ蟹の塩りや通し鴨

生茂る倭にしきや桑の出來

松風の色動きけり青簾

涼しさや夕立あがりの月の顏

きぱし世の花に錨るか柚か斧

舟遊川盃洗となりにけり

蝉鳴や裏かき中やたま〳〵薄月夜

入梅深かきうしろへ廻す蚊遣哉

よを算のうらも風に飽あり涼團扇

見たよりも夢中に聞やはと、ぎす

ひと群は夢中に聞やはと、ぎす

來て見れは扇か谷も暑さかな

ひとり碁の思案に盡てひる寐哉

島飛んだ羽音はかりや木下闇

入口に番附てある牡丹哉

風一荷荷ふて暑き門扇賣り

梅つけや流石につよき兄の妻

さなきたに里思ふのを郭公

水なからこゝも火宅か蝙の簟

開く人の心〳〵やはとゝきす

揚たらて昔の餘所へちる雲雀哉

牡丹咲く空も願した日和かな

田植見も同じ心の田植哉

朝顏や露のひぬ間を一代に

雲のなき夜の猶深し草の露

親思ふ仕事の汗は忘れけり

御田植の濟ひや靜かにさす旭

世を捨た人ものがれぬ暑さ哉

巳が火で人にとらるゝ蛍かな

鯉の尾に水さく音や夏の月

夕立に走る堤のなかさかな

うるはしき日影地にし〳〵五形哉

雨の夜も事なく〳〵て燕子花

來て見れは家も留主なり蝉の聲

取分て一色あるや藤の花

蝶一つ形は見ゆる跡や先

雨乞や蚤て滑き人心

噴水思はす呑つ郭公

火取虫螢になれと放しけり

汗出してこすや雪吹にあふた山

余所に降る雨にもさよ〳〵青田哉

電線の小島飛ひ去る暑さかな

なき母の手かたなつかし土用ぼし

夕立やある夜ひそかに松の月

涼しさや月まともらぬ水の面

酒のさを上手に扱けてすゝみかな

眼はしき四條の橋や夏の月

夕顏や庭の上に一世帶

やわらかになるや團扇の黃ひ風

夕立におちつく顏や植木うり

夕蚓や一丈長し人の影

しつかさの水に影ひく柳かな

降らぬ間も雲の厚みや五月雨

短夜や帖の內に鐘の聲

今朝の夢見はてぬ中の蓮見哉

月出て松吹く風の音涼し

化花して桐の盛りや江戸座敷

野も山も里もゆるさぬ暑さ哉

病ひ人の名を笠に知る夏野哉

牛痘せて母寢せて莢く蚊遣哉

夏瘦や持藥進める母のみ

八ッ橋に唉渡りけりかきつはた

宵やみをはとく川邊の螢哉

結名付した嫁も來て田植かな

朝市を見て來て鮓の所望哉

動かして見てから切るや苧子の花

おくれ來て先き急ぎけり涼み船

短夜や宵のま、なり捨た水

濟先に思ゆる雲や時鳥

拍手に鵜のあつまる若葉かな

瓜となる花から違ふ仕組かな

あ、邪見蛍をかくす夏の月

行く雲は月を置せり蛍狩り

新茶にも古き利休の道具哉

瀨の音に夜のへる月の涼み哉

涼風やつ、を忘れし子の寢顏

孝の子の親より後に初松魚

子を抱て扇子遣ふや庭歩行

帷子や夜道をしたる海しとり

捨て來た先まで聞くや毛虫の巢

何よりも鮨の馳走や夏まつり

月二つ詠めて橋のす、みかな

寢ふ氣の方へはよらす涼み船

見送がせしいはらの中や初蛍

泉水に橋も八ッ手や杜若

涼團扇まで持て來たり隱居客

一聲に驚つくしたり初松魚

眼のさめて居たもろんなり時鳥

太やかにして靜なり飛蛍

牛は尾をしきりにはねる暑かな

城跡や堀るも盛行々子

ふけたりと思ふ夜はなし夏の月

裸なる罪をかくしや青簾

いそがしき人も先ち出る門納涼

日傘さしなから日の陰廻りけり

乙女子の咄し根の付く田植かな

武士の昔語りや土用干

竹の子の延ひて短かくなる夜哉

蓋負や水まて暑き咲き處

蚊屋越しに明日の道のり尋ねけり

捨た身もおなし庵の蚊遣哉

夕立と知る下駄賣の掛直哉

涎うつ日暮せわしき麥の秋

夕立も晴れて逃たる迎ひかな

親の恩輕ふ思ふな更衣

やがて伐る木陰に柚の昼寢哉

來る客を見かけて宿の蚊遣哉

何處までも月も流れて納涼哉

夏知らぬ身の置床や長崎風呂

人となる物の位や今年竹

夏木立照り降りなしの笹昌哉

椽先や扇遣へは舞ふ胡蝶

忘らぬのへ扇を出して團扇かな
昼寝する親に添寝團扇かな
小夜ふけて學ひの窓や訪ふ螢
金出して買ふた風なり涼み船
漏からぬ花の身振りや深み草
蔦垂れの家に咲ても牡丹哉
夏痩やなれては利かぬ買薬り
風筋へまわす午睡の枕哉
あはがれて買ふ氣にもなる團扇哉
ひる飯を笠て數へる田植哉
殘月や浮き藁にとまる朝の蓮
一手づゝ心を配る田植かな
手紙より大事に持つや芥子の花
塵ひとつ摘んで捨る牡丹かな
夏の夜や衛士も篝火はとに焚
鉢植を置替へて見る暑かな
一寸着て見て又脱くや夏羽織
打よれは雨の願や涼人
能い中を呑中合せや涼み臺
見流しに過る人なし山清水
給團扇も思ひ出さる、都かな
大木に似あふて高し蟬の聲
乳貰のよ手てた、ひ日傘哉
呑てから親に呑せる清水かな
若竹や未だ風馴れぬ戰きふり
旅に倦く氣をとりもとす袷哉

取立のつるのまゝなり冷やし瓜
雲の峯くつれてそよく小草哉
時鳥碁のまけ腹を直しけり
金出して買ふた風なり涼み船
興に入る船やあふなき螢かり
漏からぬ花の身振りや深み草
植仕舞ふ田に影移る笑顔かな
七五三張りし樹は殊更に茂りけり
居眠りや手から團扇の桐一葉
夏痩やなれては利かぬ買薬り
居眠りや手から團扇の桐一葉
風筋へまわす午睡の枕哉
蝦夷島に住み替る身も夏の風
あはがれて買ふ氣にもなる團扇哉
來過きたと閉戸り路の暑さかな
ひる飯を笠て數へる田植哉
よふな夜空や時鳥
飛月や浮き藁にとまる朝の蓮
治れる世にも忘れな印地打
一手づゝ心を配る田植かな
夕立の跡や田畑の美くしき
手紙より大事に持つや芥子の花
帷子や親に土産の京戻り
塵ひとつ摘んで捨る牡丹かな
呑た蚊を叩かれて吐く木魚かな
夏の夜や衛士も篝火はとに焚
卯の花の垣根や夏季の遣入口
若竹や未だ風馴れぬ戰きふり
暑き世を離れて高し富士の山
旅に倦く氣をとりもとす袷哉
時めくや朝から雲の峯仕度
打よれは雨の願や涼人
坐につかぬ先に目の付く牡丹哉
能い中を呑中合せや涼み臺
傘持た人も逃け込む夕立かな
見流しに過る人なし山清水
掌の香の草に戻りて夏の月
給團扇も思ひ出さる、都かな
折夏菊やつね見ぬ蝶も來て遊ふ
大木に似あふて高し蟬の聲
打捨た將棊の駒や夕涼
乳貰のよ手てた、ひ日傘哉
己か身の宿る葉を喰ふ毛虫哉
呑てから親に呑せる清水かな
蚤狩りに出るも子ゆへの閨夜哉
若竹や未だ風馴れぬ戰きふり
是も又親へ先へと初なすび
旅に倦く氣をとりもとす袷哉
國二ッまたげし橋や夕涼み
形ちにも似合すたけし夜蚊の程

雨そねてこゝろも涼し夜の庵
眞石の田地にかゝる清水かな
蟬鳴や眠撮きつけて戻る馬
遠山もこちのものなり青嵐
山寺の椽先くらし栗の花
子子や化けて飛ぶまて水の中
持よりの咄しに殖し涼臺
五月雨や鐘の響もとふくなり
藥と苦の喞し一重や蚊屋の月
蚊遣りして上座へ客を直しけり
月にものいふて寐かしひ團扇哉
句ひなき島となりけり夏木立
寄にのふすかたやさしや辻が花
見覺のならぬ小道や夏の山
乳貰ひにゆけは隣の蚤寐哉
庭た親のうしろを仰く暑哉
年寄た親の祝ふ田植かな
持はこふ人にいの付く牡丹哉
家鴨飼ふ時の晉詣やかきつばた
苔から貰ひ手のある牡丹かな
月出ぬ夜見はねあり飛ふ螢
川竹の誠は朽す虎が雨
舍釋して端居讃るや夏の月
瀬まては廣き道あり夏の山
松風に調子合すや庭の蟬
手に上けて蛍に顔を見られけり

來にけりと告るや閻の郭公
子の寐顏眺めて遊ふ團扇哉
花のみの都てもなしほと、きす
住過の風拍手に猶かほりけり
味はみたとふりなりけり夏氷
大空も地に染む穐や夏の色
日盛りや虫もはい出る米俵
笠着ても國の廣さや田植歌
孫呉れた水給の入た團扇かな
世のかきもしらぬ戰さや今年竹
苔から見所のある牡丹かな
川上の麥秋しるや水のちり
來か、つて植た手て取るのは惜しき初茄子
涼風を袖につゝみて獨り言
編笠や些と降る雨の心地よき
蚤寐する顏にのせたる團扇かな
梅ケ枝にかわつて鳴や草の庵
一輪の花も大事の牡丹哉
水草にこよゑは月の宿りかな
花に日を包んてくる、牡丹哉
水呑だあとから聞へて冷し瓜
麥秋や塵に歸込む宵の月
貰はる、約束もあり辻か花
大ひまのあけし田植のわかれ哉
夕立を明日に持越す蔑り哉

孝行に身も蚊屋に釣る九はだか
よい中の涼しさ男浪女浪かな
夕涼み富士を机子に近江八景
落て香の殘る青柚の雫かな
たてかけてよその振見る幟かな
行き馴た隣も遊ふ青田哉
松風や留主番婆も田植歌
誰か家も老は留守なり田植時
草に置く露を照して飛ふ螢
皐月闇一ト針つゝに螢ぬい
來た程の客に馳走の團扇哉
夜嵐に押れて遠く鳴く蚊かな
村雨のはしや一と辞時鳥
涼しさに寐頃も知らす長居哉
氣味よしと母を呼ひけり門涼み
蝸牛這行形や車牛
一ト日宛花表を包む茂りかな
日は無事にのつと出にけり五月晴
ひしはしや蔀をふるふは櫻かな
顏に日のさして寐替る午睡哉
朝時雨團扇の水となりにけり
植おけた門田を月に覗りけり
寐姿の皆暑そふな午睡かな
また月は春の色なり今朝の夏
こゝろある人は濁さす清水哉
閑古鳥日すから同しところ哉

山太ふなる日や入梅の晴る晴
うり歩く牡丹の花に蜂一ッ
母の坐を取つて共子も納涼けり
おかしさは毛虫に逃くる角力哉
釣りあけた魚の走るや木下闇
客に夏先にもてなし團扇哉
手加減を親の教ゆる田植かな
眠る子の手から飛立つ蛍かな
水音を心の杖や夏の山
蚊に起た焚火のみゆる山家哉
月花は浮世の塵りや田植唄
水やりて植木見て居る涼み哉
大海や船を涼みにしやてて銅
待てゝ ろ扉けは暗けよ郭公
葉櫻となりてつゝみの長さ哉
とろ川へ出てもすゞ立つ清水哉
見る影の移るようなり白はれに
水奥れて豊の無事見る蛍かな
日に濡れて月に身を干す涼み哉
噫して母に呼る、涼み哉
帷子に日脚の通す暑さ哉
蚊屋に蚊を入れる娘の髪の出来
おしむ花おしまぬ風の牡丹哉
今きたるよふに松魚の走り哉
友の來る座を明けて待涼み蛍
子かゑの〳〵影を蜘蛉に知れけり

白牡丹一輪咲いて月夜かな
一人つゝ子をあをき込む蚊帳哉
頼母敷唄へる田植かな
振子や引捨てある船の綱
雪なから不二も四月の氣色哉
帷子や肌に馴染まぬたゝみ曲
遊ふ身のかわし處なし五月雨
客に夏先にもてなし團扇哉
落そうに見へて心涼しや竹婦人
打割た水や我ためのみてなかりけり
月包む雲影寒しはと、ぎす
追かけて心の行や時鳥
寐ぬ連の寄合橋や夏の月
古郷の私し道や茨の花
雨はめて居ながら遊ふ扇かな
下水におもかげ置くや藤の花
竹に降る雨の氣味よし夕涼み
徒らに子か渇しけり門清水
母親の眠り覚しや蟬の聲
寝た親へひそかに遊ふ團扇哉
蟬啼や水も一とつの料理種
鳥の子の水呑む音や杜若
紅付た口も忘る、清水かな
茶に醉た耳の果報や時鳥
奇麗な程猶氣味わるき毛虫かな
田に水を競ふ眞上や雲の峯
來た人か田植の上手かな
助に來た人か田植の上手かな

百三十六

掛物は雪の富士なり夏座敷
手移しに貰ふて嬉し初茄子
米搗は朝の間きりや蟬の聲
花迚も此曠はなし初蟬
入口のしれぬ小家や藤の花
郭公雨も大事にきく夜かな
雨を替て双呑酒や夏の月
親あをや手はふもからし大團扇
獨りなら此處に住たし夏木立
夕立の來へき戰きや軒の草
畑番た日に果報の新茶哉
切た水を枕に柚の豊寐かな
二ッ三ッこはすも義理や虎が雨
植初や買ひ殖したる門田から
人はめる噂聞きよし夕納涼
恙なく今日も夜にして夏の月
我庵は水の清きを馳走かな
飛ひたがる紙にのせ團扇かな
冬人の往かぬ山寺の蜜柑かな
未た花の香のある室や不如歸
誰か身にもか、る青田の雫かな
山影の半分かゝる日傘かな
扇禮の門除ケするや麥の秋
水呑んで首振る馬や雲の峯
涙はどこはして行や虎か雨
はたらかぬ蠅のなき筒の蒲團哉

用ある客をたゝして芦の粽哉
落掛來ぬ間を郭公
月は落掛來ぬ間を郭公
初手際始の試めす田植かな
竹の子や道の中へも一二本
寐覚めとはよき里の名や時鳥
夕立や後れし船は無事な顔
そつと出た月も暑さの姿かな
寐させたい〳〵けふの氷室哉
しつかりとそつと握るや初螢
提燈て汲に來てゐる清水哉
寐せた子に此有明や蚤籠
四五輪に朝の客ある牡丹かな
冠らねは孝の一つか筑紫鍋
雲の峯たつや出雲の神やしろ
ちう〳〵と草木の見よる暑さかな
翻け替た硯を見に出て夕す、み
新宅の内見廻るや初つはめ
賤か家の門てこそあれ富貴草
で、虫の角のみじかし雲の峯
世を拾て暑さも知らぬ庵りかな
整刈つた馬草の中や飛螢
一聲は夜はまた明すはと、ぎす
傘さして客に伐らすや杜若
船々の篠とる聲や夏の月
一輪て月も日も乗る牡丹かな

蚊屋の波月もた、よふ磯家哉
小杜に茶畑立つや夏木立
寐心のよき夜となれは明安し
彩色の繪を取ちらす暑さ哉
杖となり親に突れて涅槃像
寐た家の中に音する團扇かな
思ひきや母の惠みそ更衣
親と子て顔見合すも暑かな
見すかせば水田樣きや月すゝし
虫干や花にもまさる家の無事
若ひ迚ちきり惜む初なすび
御勅使の宿する床や白牡丹
何處ひいて鳴て行しか時鳥
若葉から翻る、月の雫かな
打水のはこり匂ふて暑かな
抱れ來た鰹に短し辻か花
世に汚ぬ大利こ、ろよ大矢數
夜もすがら戸さゝぬ御代や夏の月
富士はまた景色かへぬに衣更
親の寐た方へ向け置く蚊遣哉
朝起の徳は是なり青あらし
夕立や日傘間に合ふ小半丁
蝶一つ呑まれてふなる牡丹かな
人顔も見へぬに白し蓮の花
のつと出る月に暑さはなかりけり
夷國までその陰ひろし桐の花

百三十七

流れるも水の靜やかさつはた　涼しさや草木も戰く瀧の音　乳貰ひも來しそ田植の婆る休み　月の輪を啼明し鳬時鳥　蠅打を首にもたせて盆寢哉　旅人の杖ともなるや岩清水　水際へ來て影かくす蓋哉　螢火の少きとこや夕納涼　背東風や川には川の砂烟り　母の恩載て着る袷かな　挨拶とともにさし出す團扇哉　衣更して氣の輕き丁稚かな　短夜や動くともなく更る月　夢さめて誠を聞くや子規　夕くれや逃おこる御萩川　酒代にとらせてやりて衣更　大小のある作德の田植かな　烟草火をもらふて譽る青田哉　捨られて又世に出るや澁團扇　さゞ是で出來ぬ乳離せ笹粽　心地よや田植せし夜の雨の音　逃るにも身は隱されぬ蓋かな　草や木に身は誘われて更衣　木に苦勞かけぬ初音や時鳥　新宅を羨む婆や蛍の秋　つい明る夜を來て叩く水鷄かな

挨拶は跡にと客の團扇かな　道ふ手も澁の樣なり澁團扇　傘の雨はづして聞くや時鳥　きぬ〴〵の別れに鳴や杜鵑　郭公わつかにのこる闇夜かな　朝の月かゝへてゆれつ白牡丹　蚤はぬ流れ碎かぬ夏の月　何風も頼まて涼し竹の月　夜の雨に磨き上ケたる若葉かな　暑き日や押退けられぬ烟草盆　閉かねは扇は風の蒼かな　五月雨や軒端を傳ふ夕烟り　押酢に海と山とふならへけり　振揚る鞭や風切る競馬　蛍顏の咲くや千草の凋む頃　議り會ひまとまる友や船遊　しかられた事おもい山つゝじ祭り　子を負ふて母に涼風譲りけり　繪屏風に立居涼しや辻か花　暑さをは洗ふて澁ふ涼み舟　衣更して取安き巷かな　寢てからも起て又焚く蚊遣り哉　我門に夕日をたゝむ日傘かな　金持に負けぬ心地や夏羽織　角を出す物とは見へぬ蝸牛哉　耳痒き雨の寢覺や時鳥　夏旅や草分けて訊む岐立石　夕立や濡れて後の一ト笑　茶杓取手元のかるし初袷　孝行の磨さ尋し澁團扇　子に聞かす曾我の話しや庇か雨　蚊屋越しに寐たらぬ夜の哨かな　待兼た子の乳にむせる田植哉　鐘の音にはや魁けて啼蚊哉　後に實を結ふ姿や辻か花

夕立や酣にに寢る宵の月　烟りさへゆかしき道を開古鳥　盂母ならでおきて隣をかゆる蝉　樹々の葉も動きやみけり雲の峯　出て見れは鮮はかりなり郭公　むだな湯を涌かして待や不如歸　峯なすは只白雲や五月晴　讀つて破た茶碗に泣の粒　雨を聞夜は身に添はす竹婦人　親の手てさゝす抱子の花日傘　卵の花やたつぷり白き二日月　涼しさや窓にゆり込む竹の月　二階まて消たさわきや火取虫　紬垣や白帆の見へて風薫る　卵の花の垣をはつれて探り足　湯なから雨暮合ふて田植哉　盡ぬとは知りつゝ持つや團た、き　松風は假ひの外や心太　ひやつこへ醉に汗かく氷賣　用もなき河遊ゆき來や夕涼　寐覺にも紛れぬ蓮の香哉　吹たびに月影壘む若葉かな　極樂にはたされてなく水鷄かな　卵の花の春を陋つる垣根かな　八ツ橋や杜若にもからころも　時鳥面目もなき蚤寐かな

うかゝくと來た道遠し笠哉　知らぬ家に逗入り寐たる夕立哉　濕れ色の木は賣安し夏の月　もふまとは際立夜なり時鳥　初茄子作らぬ人に貰ひけり　草も木も葉垂れて卿の高音哉　一ト夜には余る船路や時鳥　川入の馬蹄くや青あらし　給日傘に重ねる母の日傘哉　物言ふて男と知れる師りかな　銀苓の衆翅咄しや土用干　見へ透し寢顏愛らし枕蚓　箸洗ふ窓先近き鹿子哉　座を替へて風をくらへる涼み哉　伐て來て荷に思案の牡丹哉　せり醉も高し卯月のはつ鰹　松かせにさめる佛の産湯かな　閻をぬふはと夜は明きらぎ夏木立　おもふやふに行かぬ蛍かな　五月雨や今朝も寢床に梅の音　釣草の影を動かす金魚哉　一寸くいるのが極樂や蚊帳の中　手に受て朝の蚓の子逃しけり　斷てのどく牡丹の小芝逗　舟て來て紬詣する茂りかな　傘杖て文字讀惡し皐月雨

水打て暑さ卷込ひすだれ哉　植木やに門をかしけり夏の月　のみのあとさすり起すや子の朝寢　かんばつや田毎に月の宿か無い　苦は樂の種としれかし田草取　飯る下へ扇受たき牡丹哉　五月雨や撞出す鐘のしめりける　明けて迫灯のきく翠や不如歸　わく水の齒に染はとや冷し瓜　たのしみは身にも余りて日の永し　待花の咲ケはちる待つ茄子哉　雨水の濁りに染ぬ清水かな　風口へ醉はこはせて冷し汁　板橋に月出る頃やはと、きす　目鑑掛なりに日永の蚤寐かな　水提けにいたを納涼ひや下女の隙　宇治の名も呑廣けたる新茶かな　鉢持て來るや五月の水貰ひ　夏來ても風訴し、柳が家　寢るにして名殘おしさや夏の月　丸藥のこはれて光る清水哉　智惠をかすひさ杖にする扇哉　麥わらに押され加賀の笠屋哉　白蓮のとりわけ白し朝月夜　乳も出さす涼ひ乙女の行義かな　分別も年も苔や辻か花

五月雨や木の葉を宿にかる蓙
切咲をいざとよ見せん葛飾太刀
大宮の茂りに鴉や枝蛙
起ふしに雨聴なれてことし竹
はめながら明る戸口や皐月晴
一醉を聞て膝うつはと、きす
涼しさや登れはふじも足のした
ひと醉は雲井はるかに時鳥
待つ外は工夫も付す時鳥
よき醉は早乙女にあり笠の内
涼風や湖のしたきの顔にまて
竹婦人つれなき豊の姿かな
若竹に取られて國る山の道
短夜や知らぬ雨ふむ船揚り
ころされて名に花の咲く蘆哉
白ひ手や黒ひ手もおる田植かな
月涼しはなし持よる芝の上
夏の夜の涼さ增すや氷室
草木まて開を手傳ふ皐月哉
すみ〳〵へ廻す月夜の蚊遣哉
孝の名は幾千代高し瀧の音
低ふ出て人に親しや夏の月
あいさつもをもし牡丹の主かな
燈火の消ては窓に蓙かな
蟬なくや繋かぬ牛の草まくら
葉柳に月の離れぬ風情かな

寝こゝろの能き夜や蠅に月と風
灯は虫に暗しなかはを取られ鳥
夕立を遠眼に遣ふ扇かな
深山出て初音告けり閑魂
浮草や月も濁さぬ池の上
涼しさも暑さも心一つ哉
顧ふ事なくて涼しさや神の前
蟻の付く溢れ砂糖や夏座敷
住付ぬ葛のうらはや蝸牛
ひるかはや汗の滴る笠の紐
早稲田からた、く醉する水鶏哉
見かけにも似合ぬ風や澁團扇
待たる、や月花よりもほと、きす
短夜や沖に白帆の明殘る
乳母の背に夢の重たし日傘
鶏遣ひの上手も卑の一つかな
人のみる花も青葉と衣更
美しき名なり花なり美人草
下屋敷掃除して待つ田植哉
旭にひかふ露のやかりや杜若
何日見てもよい風のある青田哉
うろ〳〵と涼み歩行や須广の瀧
卯の花に闇夜もおかし垣の内
朝歩行して心能き青田哉
世の塵を離れた跡や時鳥
寝た親の枕をあをぐ暑さ哉
親の醉するを處や風薫る
谷越しに親まち貝の座の子哉
涼人の多き土橋や夏の夜
深山出て初音告けり閑魂
組紐の解けぬ添ねや竹婦人
涼しさも暑さも心一つ哉
顧ふ事なくて涼しさや神の前
蟻の付く溢れ砂糖や夏座敷
住付ぬ葛のうらはや蝸牛
ひるかはや汗の滴る笠の紐
早稲田からた、く醉する水鶏哉
見かけにも似合ぬ風や澁團扇
待たる、や月花よりもほと、きす
短夜や沖に白帆の明殘る
乳母の背に夢の重たし日傘
鶏遣ひの上手も卑の一つかな
人のみる花も青葉と衣更
美しき名なり花なり美人草
下屋敷掃除して待つ田植哉
旭にひかふ露のやかりや杜若
何日見てもよい風のある青田哉
うろ〳〵と涼み歩行や須广の瀧
卯の花に闇夜もおかし垣の内
朝歩行して心能き青田哉
世の塵を離れた跡や時鳥
寝た親の枕をあをぐ暑さ哉
親の醉するを處や風薫る

世をさけし人の相手や竹婦人
出る船へ投け込んでやる扇かな
車からわかる、水や暗水鶏
雨を蔑ひ雲は崩れて夏の月
濡れて來た人も譽るや夏の雨
暖の女の髪の香臭き暑さ哉
汗かいてのぼるとふげに下り坂
鬼瓦眞向に見たる暑さかな
五月雨や着物にふしやう現われて
紫陽花や何時を眞の花のいろ
夕立や木にも草にもなひく露
うろ〳〵と川邊歩行や蓙狩り
兒を抱たかた手に重し瓜一つ
変秋やよい月譽て畑なか
白芥子や痩せて殘りし朝の月
帆柱の林茂るや五月雨
夜船しにかなめのゆるひ扇かな
庭見へて杖の屈とかぬ清水哉
詩歌發句下手の苦勞やはと、きす
しやも鍋て一杯のひや涼蓙
ふところへ琵琶湖の繪圖や富士詣
やふさめの矢數ひ、くや夏木立
店先を兒猫の守る豊寐かな
崩す蓙に短夜の鏑聞へけり
蹊へも涼さ分ける風鈴哉
汗かいて客の汗とる氷り賣

連立つて居て寄合ふや蚊狩
ねふしみて獨りになりぬ涼蓙
夕顔や主しは明日の荷膳
明けて米た月の居殘る青田哉
鴫蟬や暮れても暫し耳障り
立すともきかるゝものを郭公
こゝらねばならぬ樹に居る毛虫哉
夏の夜は暑忘れの團扇哉
涼しさや竹にもまる、月の音
涼風や机にころ〳〵筆のさや
笑われて又結ひ直す髪哉
牡丹散るやはしめ終りのある習ひ
追て待蠅や男の膳の先
こふもり夜遊するや夏の暮
涼しさや旭に向ふ伊勢の海
柚か踏ひ遣さへ絶へて閑古鳥
ぼうふらも早や蚊となつて水忘れ
睦ましい風情振なり田植哉
客泊て畑を馳走の蚊やりかな
吹れ來て團扇照らす蓙かな
谷へは〳〵掃の先や時鳥
暁時はおともしそふそ遠の花
雨乞や水鶏は何處へ出るやら
暮てさへ草の香深き暑かな
雁の行やうに韭ふや田植笠
かけうつる三日の月や初松魚

又しても團扇とりけり玉汗
白遠や浮世の塵の捨所
結ふ手に松の影さす清水哉
遠に來た人の來直す蓙寐哉
獨りみる夜明の山や郭公
清簀をかるう着て出る田植哉
雲影をおさへて眠る團扇哉
實櫻で涼しくなるや寒氷
葉櫻や客をたいにする出茶屋
ひはの水ひいていさひや田植唄
田を買ふて吹かれに出たり青嵐
塵の世をはなれ坐敷の蓙寐かな
吹かへず風さへ暑し充屋ね
涼しさや竹の溢れ葉に月の影
若竹の伸るも親の力哉
能く夕きぬ笑へ嘶しや涼み蓙
掬ふ手に冷やう愛ゆ清水かな
おそき花の青葉かくれや閑古鳥
眠になれぬ水さへ涼し蓙の音
寐てみれと矢張寐られぬ蚊帳の内
大きさや両手て咽す牡丹哉
須磨へゆく用意に買はん初蚊帳
子の寐顔覗いて見るや朝のかや
雨は野へそれし庭木や蛸の聲
手を潰て遊ふて見る清水哉
涼風を遮はして居る柳かな

風の來る方が客坐や夏座敷
夜る點の差別もないよ氷室
涼たりの身をこそせめ午時の
寢れる日は柳もゆれず心太
いかはとかその業〳〵の晝哉
雲水の身にも手傳ふ蚊遣かな
朝かはや千哉の松もありながら
取る手より瞑のつかる、田草哉
下戸一人庭を歩行や夏の月
はとゝきす月夜を己か自在哉
寐た家の方へ飛ひゆく螢かな
浪音もふり鎭めけり五月雨
客引の長い欠伸や藤の花
團扇かは友にするなり夏の夜
朝市や爭は露持た儘
角力取芥子持餅て通りけり
まだ何も思わぬうちや遠の花
藏園舍や門の賑ふ月の鉾
酒豆腐山谷越へてはとゝきす
沖に魚のはねけり夏の雨
古き庭の見栄とふとき牡丹哉
はい出て詠ひる空や猛の月
垣の外一本立や今年竹
人里は空にかくれて閙古鳥
富士の山小そう壓む扇かな
涼しさや小雀をそゝくつゆの音

短かしと親の笑顔や更衣
時鳥啼や五尺の根長草
白遠や花に置かゝる朝こゝろ
寢れる日は柳もゆれす心太
いかはとかその業〳〵の晝哉
雲水の身にも手傳ふ蚊遣かな
朝かはや千哉の松もありながら
取る手より瞑のつかる、田草哉
下戸一人庭を歩行や夏の月
はとゝきす月夜を己か自在哉
寐た家の方へ飛ひゆく螢かな
浪音もふり鎭めけり五月雨
客引の長い欠伸や藤の花
團扇かは友にするなり夏の夜
朝市や爭は露持た儘
角力取芥子持餅て通りけり
まだ何も思わぬうちや遠の花
藏園舍や門の賑ふ月の鉾
酒豆腐山谷越へてはとゝきす
沖に魚のはねけり夏の雨
古き庭の見栄とふとき牡丹哉
はい出て詠ひる空や猛の月
垣の外一本立や今年竹
人里は空にかくれて閙古鳥
富士の山小そう壓む扇かな
涼しさや小雀をそゝくつゆの音

誰も居ぬ日や竹皮の落る音
蟬なくやいびきばかりの蓙所
燈し消す虫もあるのに螢かな
我宿の松魚なりけり初茄子
船へ茶の客に呼れて夏の月
辟憩て呼合ふ友や夏の山
見たよりは涼しき風や澁團扇
やつと見の蚤痒に親の肩やすめ
笠とれは女船頭や行々子
五月雨や雲の這ひ行く窓の先
行過た下女の笑ひや夏の月
泊る氣で往て戻りけり夏の月
叩かれて蚤の出る木魚かな
鼓かげや風さへあつき昼時
短夜の客に夜を足す屏風哉
涼風を腰にさしたる扇かな
湖も動かて干るや蟬の辟
湯は泌る程が涼しき數寄屋哉
風の香に涼しさふくむ扇哉
御萩川心一瀬に流れけり
風入を誉めても遣ふ扇かな
托鉢に庵主は留守か百日紅
酔て寐た親にそろりと蚊帳かな
肌を蚊に貸して親守る團扇哉
封もせでありぬ氷室の添手紙
呼合やひとつ盆を橋と船
涼しさや浮て來そふな千松島

活乳して乳母さゝがけの蚤寐哉
鎌倉の泊りはうれし初鰹
鳩ならば吹てよせうに時鳥
碑に孝は盡せす遠の花
形代を流せは易き心かな
燈火に留主を預けて門すゝみ
暁く日より客數の增すばたに哉
青梅やいましめ解けし母のみ
子子や昔しは誰か水かゝみ
思ふ門越して日傘の輕さ哉
短夜も知らすに鳴か朝雀
楼先や硯の海も月涼し
澄む山は月のちからか時鳥
盛人はこれにと笑ふ花仙かな
雲の峯富士も裾野と成りにけり
稻妻に身掛へしたりひきかへる
耳ふるき田螺かわすや郭公
間込のやうな直をいふ松魚哉
みしか夜や夢の尾となる明の鐘
蚊屋に寐て尚も苦になる鳴蚊哉
夕立や俄なしみの最合傘
椙にも瀧の蔭あり夏木立
雨に增す水や花潅の流れ咲き
梁寐おも君の恩なり蚊屋中
侍ぬ氣の鳥は啼けとも不如歸
涼しさも晝さのありて涼しけれ

はる乳に我家見返す田植哉
影さへも蹈さぬ庭の牡丹かな
神風や夏を吹き切る夕萩ひ
見馴染は元の晝さの流れかな
燈火の戸細を叩く水鷄哉
尊來の味は上戸に尋ねけり
關取も蚊に負けて出る夕日哉
足音に池に飛び入る蛙かな
今朝の事昨日に思ふ日永かな
もろこゑに鳴ぬ蟬さへはやし哉
四君子の畫には漏れても牡丹哉
灯の引けた跡は明るき鍋川哉
耳かねかあるなら母に時鳥
思はぢも拾ひものなり時鳥
涼しさの袖に句ふや浜の花
夕立のあとやひそかに草の月
出嫁も門までは出る納涼哉
芥子畑は風のそよぎもいとけり
夏の夜のゆめも結ばぢ明にけり
蟬の爲め植へたよふなり大根
牛逐ふて雨におわる、夏野哉
破れ傘のさしかけあるばたに哉
鶏の軒に羽を噛む五月哉
張た乳に内の子思ふ田植かな
でゝ虫の何をたよりに竹昇り
音のなき雨にもれけり今年竹
夕くれや水山にうつるなつの月

泣く子かは抱て出つる蓋狩り
夕立にしつかりにきる日傘
己か身は圃を戻るや蓋賣り
花の香を簞笥の底や衣更
人醉の流れ合けりなつの月
照り昔を折目にた、む日傘哉
そよ〳〵と竹の掛盡や夏座敷
三夫婦も居て手の足らぬ田植哉
言ませいと思へは今日の暑さ哉
一ト醉に花も實もあり時鳥
夏の月加茂川見ゆる泊り哉
山で見た渡しへ出たり行々子
月涼し風に吹ちる竹の雨
夢の間に朔れて涼し子の頭
乳貰の覗いて戻るひるね哉
蟬鳴や昇夫の汗を駕籠の夢
青梅や袂に一とつ灸の種
蚊味方入亂れけり群れ蓋
雨乞や降りて晴れたる人こゝろ
自慢顏して人先に日傘かな
ちりて思ひに燃る蓋かな
れさなてにそつと掛たる枕蚊屋
曽にちん
木の下にあつさ忘れて石枕
沙花の磯に照り付く暑かな
さゝかにも道を横切る夏の雨
風迄も涼かと思ふ清水かな
夜は花の中から明けつ白遠
人も子は育てよふなり今年竹
初松魚噂さはかりや木賀宿
蜂々となれは好かる、毛虫哉
さんすいにふりきんはどの蓋哉
世の物と思へで蓮の花
はかま、て着せて出しけり祭衣
る、徳のそなわる日傘かな
白牡丹夥多の蜂の傷きぬ
の留守とて買わぬ松魚哉
來て芥子一輪の嵐かな
物しれは足事しるや溢圃扇
輕けれは幾理には重し薄羽織
酒の香に來る蚊追のも父に孝
飛ぶ蓋長柄のやみの深み哉
涼しさや寐肌に竹の戰〳〵影
早すしや刎もしそふな魚の色
卯の刻の雨でも啟るかけしの花
晴れて行雨や跡から蟬しやれ
顏の汗ふき〳〵ねたる酒手かな
曲りなき心の杖や不二詣
世の塵に染まて氣高し白遠花
蚊柱を打崩しけり竹釣瓶
炎天や逢ふ人毎に雨の沙汰
冷させて眞水にしたり旅籠汗
親の寐る居間や先から一蚊遣り
散らさじと提れば重き牡丹かな
短夜の明るを待や乳貰ひ
面白い事に世話しき祭り哉
打水や人のこゝろも溢る、迄
紫陽花や人は見かけによらぬ物
世の濁りをもちと澄ませ水馬
夕立にぬれじと這入るかわや哉
傘になる親の言葉や夏の雨
船人の漫うつすやなつの月
抱籠や言はぬは言ふに增思ひ
すゞしさや顏に櫛櫛の翻れ水

勇む鵜を見ても哀れな夕へ哉
流れては瀬による船か筑摩鍋
卷わけて不二の雪見ん青蚊帳
一醉は谷にこけ込ひ郭公
扉の口へ戸はたてられす行々子
棚干に置わすれけり汗拭ひ
古池の淑余所にして杜若
御池には惠みのふかき夕涼み
世のために汗水のたる田植かな
捨られて命拾ふや火取り虫
追い出して跡から這いて蚊帳哉
就寢籠のふと小戻りや時鳥
愛旅と言ふて寐た夜そ時鳥
夕立の衆足氣味よし手習子
聞なからゆく雁あつき思ひ哉
門口にねた酒醉や蚊の餌食
五月雨や〳〵も鼠にすゝひ露しのぎ
夕立やすへ置にして石の風呂
忘れたる杖に二度呑ひ清水かな
す、しさや淵を潰して建た家
增す智惠に譯りて減るや夏の硯
寐た親を圃扇て起し暑哉
夜や涼し寐し草〳〵も起るはと
さらし井や返せぬものは水の恩
朝涸にも外智重き卯月哉
村雨や橘かはる軒のかせ
一郭公いつくか假の宿ならぬ
落付た川原柳や夏の月
卯の花や親けば〳〵らき窓の内
今朝植た竹見る窓の月夜哉
田植した母旅でさすら娘哉
寢かす子につい寐かさる、蠶寐哉
かたびらや人は氏より育ちから
一粒の米や皆是れ汗の果て
漉き日を思ふや夏の氷哉
日盛りやよる人畑のかけ清水
聞捨のおしや舟路の時鳥
虫干や松風の操る須磨の巻
道なれはこそ來し山か開古鳥
夏痩の氣にする屋根の烏哉
一ッ咲て人の目を引く牡丹哉
竹の子のやふに伸ひ行手習子
古塚や郭公喘〳〵明の月
口へにをおちるともこの清水哉
鳥渡來た客にも馳走團扇かな
手輪くらて新茶の力暑にけり
蚊に烟り吹かけて蒼の工風哉
一ッ來た蚤に廣間のさわぎ哉
乳貰のそばからあをゝ團扇かな
並んでは越せぬ小橋や燕子花
上を見ぬ笠にもなるや日の盛り
人替る湊の船や夏の月
雨雲に追われて逃る日傘かな
夏痩や帶の短かくなりし嫁
こゝろして提れば重し芥子の花
暫しまて汗收めてん氷見せ
入梅や居心わろき古壘
寐る頃になれは涼しき瀬音哉
眼覺しく明る夜もなき四月哉
虫干や母の小袖の懷かしき
年開けは日傘て顏をかくしけり
青梅も落ちて笑めく子供かな
蚊柱の戶口に立や俄雨
眞蒜刈る鎌磨上や鵜の雫
寢かから水よふ小田や鳴水鷄
夏の山高ふなるかと思ひけり
後手に籠り掴ひや時鳥
來た客に子の見せに來る袷哉
さい禮の明日を賣るや初かつを
乳に太る兒に夏痩を覺へけり
親あはく手は草臥れす反古團扇
さま〴〵の咄の乘るや涼み臺
風鈴の音も涼しき氷見せ
五月雨や水の出て來る蛇の穴
夕立や借りたる傘の荷になりて
賣物の死も出して土用干

喰い過きて薬隠れなき毛虫哉
郭公帋くや木の間に殘る月
まねく手の先てらし行螢かな
足音もさわる心地や都鳥
二ッ三ッ來て釣初む蚊帳かな
土用澁訝る猿や眼ところみ
夕立や跡からすゞに峯の月
團〳〵と夏痩もせて孫と彦
頓て咲く浮世當や土か花
兒の眞似るのは愛らし・田植唄
人しらでくちる蘐芝や鵙古鳥
親呼んで上座譲るや納涼塞
行くつれも咄しの杖や夏の旅
寐せ付た子に載せて置く團扇かな
夏籠りも飽なくいへば飯の種
寐付く迄子につかわる、團扇哉
旅人の禮に譽めけり岩清水
井戸替や澄まて遠き貰水
夕立や大夫の位松にまで
小判から先きに出りしけ土用干
身の叡は心から出つ里ね鍋
延竹も腰をか、めし白牡丹
打水のあとやしはらく日の匂い
朝もやの動き出けり柚葉
人群れものけ る威勢やはつ鰹
忠孝は神も見拾す御坂川

しふき茶を呑んで待けり時鳥
一八やはそくも孝の糸車
寐た親に汗をかゝせぬ團扇かな
先つ親に見せて茄子の初ちぎり
二親を子二人あうつ團扇かな
早乙女や幾萬石を指の先
土用澁訝る猿や眼ところみ
夕立や跡からすゞに峯の月
團〳〵と夏痩もせて孫と彦
頓て咲く浮世當や土か花
兒の眞似るのは愛らし・田植唄
人しらでくちる蘐芝や鵙古鳥
親呼んで上座譲るや納涼塞
行くつれも咄しの杖や夏の旅
寐せ付た子に載せて置く團扇かな
夏籠りも飽なくいへば飯の種
寐付く迄子につかわる、團扇哉
旅人の禮に譽めけり岩清水
井戸替や澄まて遠き貰水
夕立や大夫の位松にまで
小判から先きに出りしけ土用干
身の叡は心から出つ里ね鍋
延竹も腰をか、めし白牡丹
打水のあとやしはらく日の匂い
朝もやの動き出けり柚葉
人群れものけ る威勢やはつ鰹
忠孝は神も見拾す御坂川

虫干や塗ひ小袖を笑ひけり
葉を楯に咲く朝顔や蓝をでも
納まりて飾りし床の兜かな
二親を子二人あうつ團扇かな
すかる蚊に身をまかしけり親の側
蝶一つ抱て夜に入る牡丹かな
花の座も附たま、なりはつ茄子
朝舟の出都合聞くや蠅の中
孫達につれられて行盆かり
夏痩を知るや常頃〳〵る帶
涼しさや松の下陰そよ〳〵風
涼しさや机に轉ふ筆の音
暮さや蚊屋の内まで月のさす
巳か身をすて、來たかよ火取虫
雲の峯とと〳〵孝子の清水汲
爭ひに笑ひの交る田植かな
短夜やはゝくれたような朝の月
短夜や寐起に老の一人り言
富士の雪見て峠越すや夏の旅
雛子や肌の小寒き舟の上
涼しさや万燈の中を走り水
捨やりの庭もてなすや昔の花
母の膳す、しいとこゝろ知し兒
こゝろみの新茶に呼ふや花の友
蠶聞ねて笠の紐解く田植哉
蚤とりや目も草にる親の反

館の香やぬれ手をふりし雀の音
朝起の外の曙けや時鳥
賓人にゐにしをかける團扇かな
夕立のけふのにくさや海の上
聞耳もせわしき虻や氷賣り
別な世へ來た思ひなり涼み船
西は不二東は月よ涼み船
如才なき人や田植の苗配り
湧香の日に新しき清水かな
寐た親を思ふて蚊帳をつりに兒
市中にもあらはと思ふ清水哉
一夜〳〵蚊帳釣る頃のかわり兒
君か爲めうたのまくらや早苗取
母親の心くばりや辻か花
虫干や廣間にこもむ大福帳
一网は客もはづすや朝の蚊帳
寐た夫を團扇てあをき起しけり
こして來た峠は見へす雲の峯
背圓扇や都戻りの咄し種
追從も言わで商ふはつ鰹
雨こぼす雲の際なり夏の月
父母の恵み淺し若乘山
いちのよき處に手せゝら氷店
馬に草くれながら行くく夏野哉
日きりしてあるや新茶の遠り駄
往き戻り柳に當る納涼船

水に影置てそれけりはつ鰹
あら涙を枕に寐たり川からす
遣游し人も心の置所
世は安しとちへ這ても蝸牛
菊の御旅かはれ世界を吹く風に
袷着て不二から先へなかめけり
汲みたての水もぬるひや昨日今日
短か夜を色にも見せす君の側
夕飯の乳になるまで涼みけり
打水や夕日の匂ふ椽の先
枕とりて馬の汗干す木陰哉
短夜や目さとき人に寐を配る
はねさうな取扱や初松魚
大切にすする身拵や袋角
不器用な手には似合わぬ田植哉
憎い蚊も打たれぬ母の寐顔かな
貰ひに崩れか、るや雲の峯
日盛りや動かで消へる山の雲
やみ遣のたすけともなる盆かな
呉か越かと爭ふ雲や時鳥
鍾に秋風へる袈そよき哉
更衣かろきは重き親のおん
閨外す蝿もあろうか黒羽鳥
動くかと竹を見て居る暑さ哉
初瓜や子か叱らる、爪の跡
雪の盞の扇に夏を忘れけり

近けれは親に酌たき清水哉
玉の客たすきを蝦の釣手哉
盆見に暮かゝる日も待遠し
世顔や濕れてしまりし笠の紐
味あふて母に進める海雲哉
薬になりて力の見へし芭蕉哉
九十九度をこもる暑さを暑さ哉
稍から上る蚤や柳の木
虫干や世になき人の物かたり
學ふ窓に光りを殘すはたる哉
蝿先に月は出けり郭公
はな紙もさんし盆の假住居
竹植て庭一はいの月夜哉
座敷から船てもとるや夏の月
暖簾もかはる新茶の看荷哉
貰はうも隠れそうなる牡丹哉
とろみづにきれいな花や杜若
籬越しに美女見るさまや夏の月
ほうふりや何がし殿の池のあと
握る手にあまる盆の光り哉
夕立や向ふの川岸は日傘哉
年とりて出るも田植のさしづ哉
白雨の來て見直すや磯の松
跡へとる年の欲しさや日傘
若竹や雪の世界は知らぬ仲
雪の盞の扇に夏を忘れけり

親あり友と遊く遊はす門す、み
苔にも一と位ある牡丹かな
海つけや流石に名ある牡丹かな
日の本の國を養ふ早苗哉
稲妻や閻をあやなす海の上
開き初めてさかり久しき牡丹哉
松魚賣いつも元氣のよい男
心地よく合す狩中や涼み盛
寐心や百島うたふ杣かあけ
今日來しは今年の乙鳥か顔〳〵し
夕立や水かけ論の中直り
紫陽花や窓に釣らる、雨上り
散りけうの見へす盛りの富貴草
富士山や硯より下たに雲の嶺
夕立や見る間になをる稲の色
添乳して取るに手遊ふな團扇哉
白雨や笠と日傘の行違ひ
背梅や義理ある母に隠し喰ひ
早乙女の留主に帋子や褒々か乳
車井の音絶間なし夏祭り
孝の名の高に涼しき蚊し哉
是程の人にも涼し船の中
破るとも跡から蜘の懸網かな
茂りあふかげに湧出す清水哉
夜は花にかくれて明ける牡丹哉
次かへる子よりも母の笑顔哉

北風にしばし忘れて暑哉
仔の子や友は月斗り焼野原
柳かあと子等か逐い來るつゝじ哉
切り惜む遠や峡のそらならし
驚かぬは氣高き人蚊蚤狩り
にせまきを啼ける蛙哉
植た田に壮子に踏ませ行く暑さ哉
巳が影子に踏ませ行く暑さ哉
二度は來ぬ陰に午寐の心地かな
この熱き夏も知らまし清水草
上けとまのした極楽や夏の舟
庭下駄も日和に輕し更衣
寐返は夜の明て居る四月哉
薬に露をまかせて眠る牡丹哉
御不圖と御免ん蒙る暑さ哉
せみ鳴や子供心のせい〳〵らべ
窮屈な咲きやうてなし白牡丹
鑓きた下女を叱るや土用干
竹の子や親をいたわる垣の外
家もたぬ人は踏むなり蝸牛
知らて行足のさきから蓙哉
よい中を育中合せや涼み臺
世につれて折目細けき扇かな
寐せた子を赤も覗くや蚊帳の外
夢の世も覚れは長き夏書哉
筆先へ輕みの屈く裕かな
寐る母を越して門の涼みかな
蚊は附けど打たれぬ親の寐良かな
降りそうな雲の動かぬ暑かな
せみ鳴や腐き河原も細流れ

夏や雀の聲に起さる、
打つ人の胸も扇の要かな
悪香や念なき想のはこれ口
牛喰ふて居ながら蚤に喰われ廻
涼しさや廿日の月を船て待
盛り場の鎗の魚や初松魚
三度までかへる日もあり夏衣
舞子らが紅も忘れて清水かな
晒井に月影を汲ひ釣瓶哉
雨乞やそれと氣の付く松の香
流る、もおく露もある牡丹かな
庵に蝶の戀る、牡丹かな
團取を自由自在に使ふ蚤
蚓の波中や櫓の音
酒樽も船の枕や夏の月
雨音にそゝられて聞くや郭公
蚤負た宿は忘れん旅日記
我よりも親に添けり竹婦人
蟲ね世に實の海や風薫る
月の出て客のふへけり門涼み
夏菊や親に見せたい子の心
蚊屋一と重外はうるさき憂世哉
月に向く顔はや長き鹿の子哉
宵に負た子には傾ひく日傘哉
入歯てもかひ程うまし沖膾
ら、ひ夜に日脚の延る四月かな

生あかる雨後の草木や蟬の聲
茂りけり花は昔の吉野山
白雨や片川濁る迫落し
美しき月や楢に夏の雨
帷子の輕みに重し親の恩
移るもの影みな青し苔清水
蚊廻りの遠かに老の宵寐かな
分別に開き、し客の扇かな
足る事を人にしらせん古反團扇
蟬啼くや腹にしみこむ水の味
打水や待ては果無く人通り
蚤一ッ喰へにけ行や老の人
行くあとわ日和の空や夏のあめ
落付いて夢も結ばす昼時
陰膳に母が備へる粽かな
火のしよりも母のしつけや初袷
晴て行雨の匂ふや百合の花
杖の手に持添らる、團扇哉
寐ころんた枕に添る團扇かな
竹の子の親は棄てそたてけり
世の塵りを除けて涼しき庵り哉
覚來る水冷〳〵し木下闇
若かへる老の姿や月祭り
極楽も地獄も寺て土用干
起されてさへ覚ぬ夜を時鳥
松かね根にしばし暑さを凌ぎけり

盃をさしてあつかふ扇かな
手もと、きそうな雲非や時鳥
姫百合や秋は此處らそ鹿の聲
水底に鉄の音や燕子花
郭公一人夜ふかす机かな
客に出すお茶にも添し團扇哉
花は眠に忘れぬ耳や郭公
今網てひら打つ魚や沖膾
寐た貝を月の覗くや船の蚊屋
明る戸に來るや松魚の使人
みとか夜や鳥かせかせる明の鐘
人見ても耻る氣のなし竹婦人
母に出す枕に添しうちは哉
涼しさにあすの水汲月夜哉
蟬啼や毎日さがる米直段
暑き旅命を縮く清水かな
暑とは言はすに親の使ひ哉
はたのくも慮外忘れて砂糖水
書のよきものは水なり夏の月
居直りて夕眠りする草の蝶
限りなき雲を根にして五月雨
習ふよりなれて田植の上手哉
夕暮に火を灯つ草の螢かな
子の敵取たく、ろや朝の蚤
炎天やおしき木陰は水の上
のみ一とつお客の前も憚からす

寝て動く浮世のゆめや船の蠅
初茄子や都の町を賣廣め
崩れても又そないけり印地打
玉あせをうちはの風にとられけり
笑わせる話し上手や涼み盛
起きて見つ寝て見つ今日の昇哉
いく度もつくり直して雲の峯
ふみこんだ苔に水あり若楓
喝さした人も來にけりすゝみ盛
寝屋迄も埃にはしかし麥の秋
春の子へ慈悲の片よる日傘哉
奥深き籔へ通ふ青嵐
逃したる呼戻したる益かな
とちらへも吹くや苛田の根なし風
杜宇聲には闇のなかりけり
裸寝も人にしられぬ蚊帳かな
清水から汲て來てある夏の月
吹き込んだ雪の晒しや夏座敷
はこり立つ中や市あり氷水
千傘の上に雨ふるさつきかな
夏の月提て通るや水貰
月の出て光りとらる、益哉
母のみかべす〳〵も暑氣見舞
富士に日のさして降りけり虎が雨
一疋の蚊屋に鳴〳〵蚊が氣にかゝり
都には雑落付す時鳥

機音はきけと家見ぬ若葉哉
白雪の高根余して夏木立
我庵は蟬に明きけり暮にけり
敷てから据りて見るや簟
只青き物に眼の寄る暮かな
景氣よく港に入るや新茶船
仰せ書難に暑さを振へけり
寝た親をそつと覗くや蚊屋の涙
夏は又暑氣はらひじやと名を付て
人の氣も金も花咲けはつ經
一と流れ町を騒かす清水がな
二ッ親の好にきらさす一夜酒
芦の根にひた〳〵水や鳴水鶏
風孕む五月端午や紙の鯉
見らる、も見るも花なり辻か花
單衣きて旅の労れを宿の月
見ふるしたる夜はなし水に夏の月
眼の前に富士山据て涼み哉
戸明れはおなし月夜や郡公
務めよや舜も人なり田草取
ぬれて來て親子すりよる鹿の子哉
蚊に起て嬉しき母の寐顔かな
蟬啼や打ちきらぬ間に乾く水
兒の笑みの手からこぼる、苺かな
益の跡乳房ふくめて敷へけり

掛けたれは眼の冷付くや青雛
わすれたる鍬を盗むや瓜の蔓
夏深き床の禮を開きけり
呉れた子の佛さすや時鳥
村雨のかゝる青田や涼雫
寐せのかし子に寐せらる、畫寐哉
此みの跡先みたしふうちは
水にちる月見てはしの涼み哉
夏は又暑氣はらひじやと名を付て
青〳〵と夕立しはる柳かな
飛ふやふに見せて柳の盛かな
花疲れした眼藥や夏木立
詣らはぬ心そ美くし白ら扇
たへ〳〵をしばし繕ふ扇かな
濕れ手拭き蟬の時雨に乾きけり
二三日に替る青田の景色かな
田も畑も出來揃ふたり雲の峯
水無月や汲み潤したる仲間井戸
更衣大事にせよと親の慈悲
されはとて土産にならぬ清水かな
思ひ出す故郷旅路の暑さ哉
逃るのは一の手にして夏入かな
一と息を木の下につく暑さかな
御扱とて塵も流さぬ小川かな
月一つ丸呑みしたり涼み酒
寝つた子の手から飛出る益かな

鯉はねて闇に跡なし夏の池
大川も涙は清水の雫哉
一輪で庭の明るき牡丹哉
鍋遣ひの眼遣ひ凄し簀り越し
暑中とも思わす通る茂り哉
風の色見せて牡丹の月夜かな
待念のぬけて初音の時鳥
子ならこそ酔人の親に蚊遣り守り
あらといふ間に過いたか時鳥
五月雨や堰の來る酒の樽
住みなれた家のはつかし白牡丹
鳴かぬ間を待た味ある時鳥
水にまて位の付し新茶かな
更る程氣味よし夏の夜の景色
鍛冶の弟にした子悲しむ暑かな
大平の御代の形ちや夏の山
繩追ふや親の野庭に忍ひ足
一とかまと一と脊にまくや蝸牛
無事て來る船の出入や夏の海
君か代を蟬千代千代と暗にけり
神拝む心ろ涼しき鏡哉
扉そ〳〵文は流る、清水かな
杭に干す鵜の羽次や五月晴れ
極楽も地獄も有るや蚊屋一重
眼にあかぬ山川ありて京の夏
世事を去る親も手傳ふ田植かな

麥刈の脊に貧ふ月のあかりかな
蓮の座に乗て蛙のひるね哉
はそもとをそつと切けり初茄子
夏の雨人に待れて降にけり
博學の名も揮きし螢かな
酒よりも内の清水の馳走かな
老も來て涼み居りしや門に杖
可愛さに蚊に叩きけり兒の寐顔
島原へ賃着て來るやあやめ賣り
名石や虫は附かねと土用干
入梅や調子の合ぬ三昧の糸
雲の峯風さい暑き句ひかな
炎天を舟に拵られ往く白帆哉
毛のような雨にも散るや芥子畑
よし切や破れた舟も作わたし
肌を着て巡査に詫る暑さ哉
夕立や案山子の笠をかりて行く
嫁土産貰ふ新茶の香りかな
手枕をそつとはづして枕蚊帳
きくはそで皆眠けり時鳥
親のなす所作見習へよ爲の雛
しり〳〵と空ち、め行夏の月
突き合た尻も田植の仕舞哉
卯の花にさわれは闇も動きけり
夏痩の顔汲上る釣瓶かな

船からも來て涼しかる坐敷哉
川苻をながめて居るや旅の人
六月や雨を脊に小酒盛り
柀喚や井は持なから貰ひ水
斧捨て世の中へ山よ蟷螂
卯の花や散れは流る、水の上
胸の火も二夜はもゆる蚊遣哉
裏かりし雪のしたりや岩清水
親の忌の外に手折れぬ牡丹哉
初孫も出來て目出度幟り哉
器染の袖にはつかし初鰹
百人の母を手引て橋涼み
慈徳を捨ても今日の暑さかな
月となり星と飛ちる螢かな
夜るは戸を明て音きく清水かな
寐入まけしては動かす團扇哉
うつ〳〵と明安き夜に夢のゆの
行儀よき子供見て居る暑さ哉
乞食の手にも觸く螢かな
手傳ふて月に直すや納涼臺
水無月や餅に掲込む雨の音
内へ來た人を知らぬに門す、み
松島は眼先に近し青雛
早稲晩稲皆一色の青田かな
かもわらて海色に咲くゑひす草
川骨や幾年干ぬか池の水

涼しさや女泪男泪の称せる晉
誰か爲に忍ふや閨に飛螢
月影のさゝぬ奥間やはたる程
駄草やまた濕まては一三丁
ぬれなから植し竹早月夜哉
隣り遠くなるや草木の茂りかな
隠居家のお眼さまさせし初茄子
晴れくもり山路に入梅の寒さ哉
車夫の汗干ぬ間に賣るや初鰹
海松かきや千尋に流す笠の影
ひと角に咄しまとまる田草取
落付て足らぬ心の新茶哉
子に着せる機に織りけり母の汗
逝したといふても立つや盆きらい
夕立や自分作りの田を見舞
雲の峯淺間は常の烟りかな
冷麥や客の來てから水賣ひ
纏まつた噺に開く扇かな
ひと掛り足りぬも花よ初茄子
雨の螢草の葉裏をてらしけり
大宮の龍も留主なり避暑時
夕立や晴まに騒ぐせみの群
暑い夜に親の意見の是さかな
すゝなきも小さきも云はす初茄子
かしこまる膝の崩し雲の峯
親も子も干傳ふ里の盆ときに

夕涼や咄の聲きだいところ
短夜や起なておくるいと安なり

みじか夜やはかなき夢を月の一宿
蚊帳の布團もあつき親の恩
傘の乾くひまなし五月雨
水になる小出しの塩や五月雨
さわらせぬ筵筍はかねか土用干
蚤寐番させた甲斐なし寐る丁兒
上手程人間の遠き田植哉
石地藏影なき原に蚤寐かな
旅すれば話の廣し涼納盛
風の夜は草に馴染や舞螢
潜る間は心も開き茅の輪哉
親は手に汗を握るや大矢數
親の日は遂い手のゆるひ繩哉
大の字か風に吹かれて夏座敷
開直す焼なば遠しはと、きす
雲の上湯にもなろふか溜り水
初音かく低ふも鳴す時鳥
郭便も跡見返るや時鳥
夕立に別れて走る其帆片帆
なき親のかたみも今や土用干
蚋の子の巣によくにたる姿哉
畔一つ隔て、競ふ田植哉
家持て來たいそ盛飛傍り
涼しさや翌日へかたむく松の月
芥子時や窮屈そふな籠の鶏
水輪の笑ふて果る夕立かな

そうと焚況の寐顔や夕蚊遣り
冷酒の呑能き頃や夏の月
傘ひも狹き住家や蝸牛
汲程もなくて名高き清水哉
しめられぬを馳走に入梅の黄昏
燒塩にまた温氣戻る五月哉
笠取た心地や入梅の俄晴れ
畳の暑氣川に流して船涼み
今光る我身も元は蛍から
花あやめ晩や小雨のあがり水
一二りん夏の封を切る牡丹哉
水打て景色調ふ小庭哉
露の玉おやうく持や稻の先
今年來し嫁の氣のはる土用干
蚤飛で一座動くや小酒盛り
一醉もわだには隔ぬ時鳥
花嫁もよごれ始めの田植哉
母よりも嫁の上手な田植かな
親鳥はあたりに見へす浮巣哉
火をけしてなくさむ蛍かな
五月雨や入江に細し灯の明り
みじか夜や店の子供ねひるかを
夕日より十日もた、ぬ二十花
珠數なりに人の待居る清水哉
門通る人も立寄る牡丹哉
涼し丈あつき圓扇の情哉
門通る人も立寄る牡丹哉
添乳の汗をふきとる風車
寐直れは寐直る程の暑さかな
立島の跡はにごらぬ清水哉
揚弓の崩れ矢を元川す牡丹哉
生湯がらも尊ふとからん、佛かな
飼當た蠅の沙汰や鬼燈走
蚊に喰れ〳〵でもさす將棊哉
涼しさや殘して雨の行衛哉
和らかに風行かうや青簾
馬は野の草に預けて蚤寐哉
住む人の氣に似た蜂や郭子
見晴して朝茶の味き青田哉
天地の實り植込む田植哉
打水を盛砂はかり除きけり
翡翠や望みは深き淵の底
寐ない眼も覚して行ぬ郭公
腹に子あつて目に付く蟻哉
外へ出て曰ひ〳〵夏の月夜かな
稻妻やぴらりと扨いた大刀
町中や螢一つに人群り
花に來て暑めた山なり朗古鳥
陸しき家内揃ふて田植哉
蚊に喰れ〳〵でもさす將棊哉
色の濃き衣は淋しき暑哉

風筋は親へ譲りて夕涼み

呑ものに幽こたへもある清水哉
昔を包むはと奥床し飛ぶ螢
瀬の音もしばらく寐ふ俄雨
廣かりし音の涼しき夜網哉
笑ふをも知らて蚤寐の顔の墨
不二の夢半分蚤に喰れけり
新茶會や昨日の主今日は客
夕立や奥庭までも稻光り
月なかに鳴け郭公〳〵
釣たま、蚊屋に人なき月夜哉
けし提た手に持替し廻り角
暮れてから又卯の花に暮れに鬼
竹の子が養ふ子無き夫婦哉
二度見れは二度新たなる牡丹哉
乳に足りた兒のつかわせぬ扇哉
金屏の雪の白さや土用干
五月雨や人なつかしき山の家
一睡の夢はやふれて水鶏哉
夕立も宿引するや早泊り
月はまた白根隱れや時鳥
色も香も譽て所望の新茶哉
暑き日や寢ころふ垣の繋牛
敗砂に影置蚤の牡丹かな
葉櫻に來ても人ある上野かな
はめすきて澁の新茶のかはん呑
みしか夜の朝影引や釣燈籠

七重八重花は櫻の味も一夜かな
心迄ぬれ通しなり五月雨
魁た樹に先ある納涼哉
打ちはすゝ手に蠅の來て泊りけり
耳に珠數かけて御堂に蚤寐かな
閻の戸を叩く水雞の夜明かな
家負ふて竪田に暮す蝸牛
只の夜と思わぬ夜なり時鳥
遅さ〳〵ら葉にいそかれて喉に魚
氣樂げな柚の蚤寐や板の上
小雨なる里いそかし、麥の秋
寢入つた間も下には置ぬ團扇哉
裏町迄聞こゆる蛬や初松魚
寐入つた間も下には置ぬ團扇哉
牛曳も下り來る谷や樹の花
はなちたる鵜に太りたる籘哉
留主居して寢つけぬ蚊屋の廣間哉
遊屋根の棟たけ見ゆる若葉哉
出し入れに自由の角や蝸牛
茶屋へ來てつい寢過たり雲の峯
初乳母に母も添寢や蚊屋の中
若竹のゆらり〳〵と延にけり
驚一羽目立て白き青田哉
恩愛の乳房に垂る、玉の汗
恥かしき人來て居し椽の月
座に直る否や團扇の馳走かな
富士の雲幸ひ晴れて衣更

眠ひる子の中て蛬鳴〳〵蚊帳哉
かさしたる手の裏涼し淡路島
月涼し餅もむさぼらぬ下り蜘蛛
士地買ふてうれしさのます田植哉
日盛りや渡し待間のきのせける
あつき夜や枕一とつを持てあます
見へ隠れする人影や夏木立
枝川に纜く江もあり杜若
井戸替も濟て嬉しや雨の音
草を立つ蚤や河の波の上
夕風を通すや蚊帳の裾さはき
眠りても動かして居る扇かな
夕涼みすいた藝者もへたてけり
枝垂までかける清水の長者哉
流れそう見ゆる浮巣の有處
巷に勝て手廣ふ遣ふ扇かな
遊ふ子を叩いてわしるよたち哉
五月雨や積るものならいか斗り
水おとにしはし暑さをしのぎ兒
順證は女かちなり心太
夕立や目を覚す子の鳴きもせす
船に寐た蚤の咄しや木賃宿
倒れては土になる木や閻古鳥
一二行讀ひや書物の土用干
ひかしとはちがふや京の夕涼み
兼好の筆硯もがな五月雨

蚊の群を相手に獨り寢る夜哉
蚊遣して獨りの中の咄し哉
見蕪せは野も賑はしき苗田哉
日のさすや若葉ひらめく池の影
昆はとに見ゆるもあるや繭の絲
船の數やおい出せは又戻り來て
雲先へ群走らせて初松魚
炎天や蹴見眼に舞ふ舟の醉
紫陽花やねれ色なから暎替り
麥秋や煙草火もなき里の家
見所は此處の事なり暎く牡丹
過みけり花以來の川涼み
家の親あつさはいかに夏の旅
こはれしは汚かれし米か御施米
青柳に首なでられて涼み哉
閻に花暎きつ蚤みつ蚊かな
さみだれや田毎にさわく蛙かな
郭公鳴音も高し海の晩
長閑なる春は夢なりねり雲雀
雨にけて傘の下飛ぶ蛍かな
炎天の鰹に蚯蚓の鯨かな
鐘の音も埋れてしく五月雨
初嫁や隔室の戸開る夏の月
撰擬までいわせて聲女の次更
一聲に神る、雲や不如歸
蚓干に花を曳き出す羽織哉

一ト曳は汗の殘る暑さ哉
夏めきしねやへさしこむ月明り
涼しさや人に淋しと云ふ處
洗濯きに暎て氣高し燕子花
持寄の暑さ忘しね芥川
寢せた子の貞迄赤き牡丹かな
あつき日や指もさゝれぬ紅畑ヶ
主從は川を隔て、蚤哉
おり〳〵とや〳〵夏空や蟬の聲
蚋日の崩る、庭の暑さ哉
蛙飛ふ音に蓋する田螺かな
雨の夜や傘の裏にも這ふ蛍
涼しさを人にかりる、團扇かな
とび〳〵に暮行里の蚊遣かな
川一つへだつ咄しや夕納涼
畫の汗拭て親と夕涼み
短夜やなく兒すかしのかり枕
ひら〳〵と舟掛にたまる日傘哉
後くれにと入る日にはさび田植唄
涼さや扇ひらめく夏座敷
夕立やあとに殘りの一つ松
夕立や鳥を守る人は安堵貝
矛めは暉來て鳴〳〵や笠の上
春雪めし花の庇りも茂りかな
宿かりた寺に風呂なし旅の汗
定宿のもてなし涼しかご枕
徳利から出る月影や納涼臺
飛こひて月を動す蛙かな
白雨の一瞬間を松の木影哉
待つ人もまたる、人も暑さかな
濡れなから雨巻て居る田植かな
夕立のあとは涼しき松の月
晝寢した親を起すや氷餅
戸さゝぬに明る山家や夏の月
降さうな雨はかとらぬ暑さ哉
蚊綿をつもへて親の夏着物
子子の身まて世界のうきしづみ
一株の戸口にあまる牡丹哉
寐た親へ幷に持たる團扇哉
持寄の話てあをく團扇かな
涼しさや月のかすりの横手雨
風の出や直段にも似す盛團扇
富士を見ぬ日を算へけり五月雨
斷にも酢の味持ちし梅實哉
いさよくまけてくれたり經實
夕暮やうちは片手に宮參り
川納涼月は柳にかゝれけり
夕立や鳥の脊なにも臨日なた

蚤經に虫いれまいと土用干
蚊屋を出た盤に童の朝寢かな
涼しさは木陰に柚の聲寒哉
拂手にさかふてくるや蚊の力
角あれと億病ものよ蝸牛
人の圏見ても目の行く暑さ哉
すゞしさや鹿粗に出來た山の家
蠅りにもすみきる影や杜若
はつと息あこで蠅追ふ田植哉
暑き日や余所に降る雨浦山し
暑さへ忘る、朝の牡丹哉
そつくりと子は寐入り蚊屋の中
雲のあしながめて乙女早苗哉
二タ親へあをき分けたる團扇哉
親の恩おもひはすゝし田草取
虫子や名所古跡を一廻り
蝸牛家を荷ふて雨にぬれ
入合の鐘は吉野歟はと、きす
早植て泥や谷間の田一枚
賣り物の柚木にうけて夏の月
水色の夜は明ながら暑かな
風筋は親に讓りて涼みかな
柚の香峯にこたへる茂り哉
たくいなき庭の隅やほたるの火
うそこきの揃ふて植る門田哉
早乙女や噂て泣く子を抱き上て

虫干や祖の威功を子の自慢
汐の香にひせる淡路の暑さ哉
初暉は貧島よりもはと、きす
泰山も低し日本の紙幟
蕃御ふて島居を潜る裕かな
今日は今日昭日は翌日也芥子の花
初幟建て、主人の自慢かを
あれ程の暑さはいつこ瀧の音
夕立や知らぬ人とも最合羽
洋館を出抜けて桐の花盛り
てふ〳〵の羽風あふなし芥子の花
雲なき朝や富士詣
船に乘る支度に疊む白傘哉
水打てはや出たかる島や龍の内
坐に耻ちて取らるに蚤を逃し蚊
聲れそうな雲はうそなり五月雨
逢の薬は色も變らす一夜酢
外つ國へ光り輝増す生原哉
眠い眼のはつきり覚て郭公
新らしき扇の音や閨の中
鳥帽着た人かけさすや青簾
二日月夕顔棚にかゝれけり
夏の月まても提け行く水貰ひ
河骨や水に付く花付かぬ花

青梅や只見るさへもういこち
親の土産と急く氷室哉
心地よき盛涼もあらぬ初盛
手にとれは然もあらぬ初盛
鶏の屋根に佩びぬ入梅晴
氷色の線く夜空や時鳥
雨に逢ふ夢や涼みの戻り船
子に愛の增して短かき袷かな
た、ひ手による風の吹〳〵日傘哉
それそこに又それそこに飛ふ蛍
今朝逢た人に又逢ふ滑水かな
夏立や一夜に草の茂る庭
親の手を引てのりけり涼み船
殺さすに數も追ふ親の忌日哉
新らなくてならぬ暑さや田の青み
子を影にして歩行せる暑さ哉
眞心は痒れそうなり竹婦人
笹の葉は色も變らす一夜酢
笹投てはや涼み人となりにけり
水船の上荷や夏の月一つ
蝉暗や來た程先きのある細手
夕〳〵や孫の手を引蚊かり
や、してはそとより風の涼り哉
酒買ふと言わすに叩く水鶏哉
見て居るや釣瓶に登る蝸牛
松風の音信も無し雲の峯
夏山や個はと有る水の味

膳に這ふ蛾もころさす富士の留主
涼しさを持て出るなり夏の月
盛追ふ人も盛に追はれけり
輕う持つ左團扇や子のたひけ
睦ましふ親子並んて田植哉
泄佛や蚤もころさぬ朝心
後ろひき〳〵行く鬼の子哉
涼しさや簡の戻りの洗ひ髪
帷子や三味線抱きし袖の綴
たくみなき顔や背田に高咄し
袖引た手を紛らかす團扇哉
虫干や金屏風ふ大廣間
名は菊と藤と雪とや辻か花
朝夕は二心なり初袷
盛見て留守居にまで乘りおくれ
菅笠を縫ふて戻るや落松葉
紫陽花の花影清き流れ哉
川なりに松風渡る御板哉
松蔭を數物にして蚤寐哉
居眠の手にも團扇の動きけり
避團扇風に假はなかりけり
村雲を鳴き變しけり雨の鶯
孝行の心は知らでさす蚊哉
蚊にさゝれすとに敵を團扇哉
母の旅氣遣ふて居る暑さ哉
苔の戸も住めは都か通し鴨

吉原へ資らる、籠の盛哉
月に手の屆けて戻る田草とり
霜除ける程の日覆や夏の菊
盛追ふ人も盛に追はれけり
輕う持つ左團扇や子のたひけ
睦ましふ親子並んて田植哉
泄佛や蚤もころさぬ朝心
後ろひき〳〵行く鬼の子哉
涼しさや簡の戻りの洗ひ髪
帷子や三味線抱きし袖の綴
たくみなき顔や背田に高咄し
袖引た手を紛らかす團扇哉
虫干や金屏風ふ大廣間
名は菊と藤と雪とや辻か花
朝夕は二心なり初袷
盛見て留守居にまで乘りおくれ
菅笠を縫ふて戻るや落松葉
紫陽花の花影清き流れ哉
川なりに松風渡る御板哉
松蔭を數物にして蚤寐哉
居眠の手にも團扇の動きけり
避團扇風に假はなかりけり
村雲を鳴き變しけり雨の鶯
孝行の心は知らでさす蚊哉
蚊にさゝれすとに敵を團扇哉
母の旅氣遣ふて居る暑さ哉
苔の戸も住めは都か通し鴨

霜除ける程の日覆や夏の菊
涼しさや簡の戻りの洗ひ髪
帷子や三味線抱きし袖の綴
たくみなき顔や背田に高咄し
袖引た手を紛らかす團扇哉
虫干や金屏風ふ大廣間
名は菊と藤と雪とや辻か花
朝夕は二心なり初袷
盛見て留守居にまで乘りおくれ
菅笠を縫ふて戻るや落松葉
紫陽花の花影清き流れ哉
川なりに松風渡る御板哉
松蔭を數物にして蚤寐哉
居眠の手にも團扇の動きけり
避團扇風に假はなかりけり
村雲を鳴き變しけり雨の鶯
孝行の心は知らでさす蚊哉
蚊にさゝれすとに敵を團扇哉
母の旅氣遣ふて居る暑さ哉
苔の戸も住めは都か通し鴨

心太からしの利て涙かな
猫も居る音の聞へて船遊ひ
氏神に通夜の鉦や時鳥
五月雨にぬれてうるさし笠の紐
夕月夜雛もやさしき時鳥
笋や枳殻の垣の中を抜け
旅空や心の重き入梅哉
枝移りして蛙高き蛙かな
登顔や汐待つ船も留守の沙汰
今宵はと待か花なり時鳥
六月や神より貰ふ夜の雨
よい風の袖にもみつる團扇哉
鐘の音のつれたすやうや早苗取
雑子の墜籠の眠りを覚ましけり
今に切る木蔭に柚の盛寐かな
嬉しさもまわらぬ舌や辻か花
風香り御代や鑓の動く度
向きかへて夢のあとたす昼寐哉
うは玉の金砂子なり蚤の火
舳中にきせるの音や夏の月
あちこちに一の字引や飛蚤
義の一字領余る暑さかな
蓮の葉の隙へ狙ふ雨の音

心太からしの利て涙かな
猫も居る音の聞へて船遊ひ
氏神に通夜の鉦や時鳥
五月雨にぬれてうるさし笠の紐
夕月夜雛もやさしき時鳥
笋や枳殻の垣の中を抜け
旅空や心の重き入梅哉
枝移りして蛙高き蛙かな
登顔や汐待つ船も留守の沙汰
今宵はと待か花なり時鳥
六月や神より貰ふ夜の雨
よい風の袖にもみつる團扇哉
鐘の音のつれたすやうや早苗取
雑子の墜籠の眠りを覚ましけり
今に切る木蔭に柚の盛寐かな
嬉しさもまわらぬ舌や辻か花
風香り御代や鑓の動く度
向きかへて夢のあとたす昼寐哉
うは玉の金砂子なり蚤の火
舳中にきせるの音や夏の月
あちこちに一の字引や飛蚤
義の一字領余る暑さかな
蓮の葉の隙へ狙ふ雨の音

五月雨や盛見て留守居にまで乘りおくれ
舞登る菅笠を縫ふて戻るや落松葉
掛香や幾間か奥に琴の音
振向けは月其丸や時鳥
知る道へ出てから暑さ増りけり
旅もとりたゝむ日も都合よき曇かな
起き揃ふ日傘や杜若
端居して妻子を避るあつさかな
盛に蚊のふへて近づく淺かな
栗しみの顔を冷す清水かな
寐心の付は夜明つ竹ふしん
鶺鴒ひや親には孝を盛す人
暑き日や峯の松風みへながら
涼風を呼て寐る夜そ夏の夜半
風運ふ音の勇ましき初輪
松かけを親に直すや涼盛
旅色のよき裏に連ふ團扇哉
夕乳をもらう土産の盛かな
古井戸や蚊に飛ふ魚の音くらし
水汐の泡をなかれてねむの花
涼しいかわけて暑いか富士颪
今咲た花に露ありかきつばた
夕立に洗ひ出しけり翠の月
涼風を引も親への様の袂

殿りをはこらぬかはの通模
袷着て長ふなりけり帯の端
卯の花や夜は閨ながら花明り
涼しさや柳の下に裸か馬
涼しさや稲をさすつて風の來る
ひる寐をは眺めにくるか鯉のひれ
銀には見せて置きたき鍋祭
見ぬ振りで覗く日傘と日傘哉
竹に寝た涼しさかたれ朝雀
一つ山の夜の新しき盛かな
裏なしや鮒の時鳥
窓形に老の登座の蚤豊
寐た家の門を叩いて月涼し
今宵はと待か花なり時鳥
川は中岸の栗しき若葉かな
の實入いのるや田草取
座もなし涼盛
追付て酔に消へ行盛かな
はと、きす春を送りていつこまで
抱籠や頼たやうな雨の音
棚かけて逃る向や茶子の花
短夜や未た喰ひのこる馬の豆
貰われてとちらも嬉しおまり苗
蚊にまでも見放なされる朝寐哉
柚の寐た枕もとから清水哉
汲はともなくて名高き清水哉

ゆれるたひ燃立舟の蚊遣かな
けし散りし今日より孝の始め哉
道細に角力神の花の露
山風に縋れて涼し瀧の糸
堪忍は我か爲めなれと暑さ哉
雨水鶏伏屋に月の洩る夜哉
虫干やつかわぬ弓も家の花
飛と身のかたきかたき蚤と蚋
假橋と名のみ殘るや杜若
栄寶の空は何處の夕立かな
入りかわる友のにぎわさ小出蛙
短夜や火の用心の寐失ひ
出嫁の人も夏野を歩行けり
風呂焚けと老の指圖や此暑さ
あした越す山見に出たり夏の月
門の田や月のさすまて田植唄
貰ふても呉れても嬉しおまり苗
くたびれた足の出て居る紙帳哉
親の手をかりる子供や盛かり
前の夜は誰か寐たものそ旅の蚊屋
五月雨や氣永く持つも身の藁り
蝸牛延て浮雲し角の雨
捨られて拾ふ命や火取虫
此花を誰か見初めしそ燕子花
神の燈の殘りてしめる若葉哉
短夜の中にも閙と月夜哉

傘圓へは片手出しけり初袷
ちらかんの夏を語るや隣同士
五月雨やあてにして訪ふ友に行違
舞登る鳥の行衛や雲の峯
掛香や幾間か奥に琴の音
振向けは月其丸や時鳥
知る道へ出てから暑さ増りけり
旅もとりたゝむ日も都合よき曇かな
起き揃ふ日傘や杜若
端居して妻子を避るあつさかな
盛に蚊のふへて近づく淺かな
栗しみの顔を冷す清水かな
寐心の付は夜明つ竹ふしん
鶺鴒ひや親には孝を盛す人
暑き日や峯の松風みへながら
涼風を呼て寐る夜そ夏の夜半
風運ふ音の勇ましき初輪
松かけを親に直すや涼盛
旅色のよき裏に連ふ團扇哉
夕乳をもらう土産の盛かな
古井戸や蚊に飛ふ魚の音くらし
水汐の泡をなかれてねむの花
涼しいかわけて暑いか富士颪
今咲た花に露ありかきつばた
夕立に洗ひ出しけり翠の月
涼風を引も親への様の袂

水うつて待や神輿子の据ひ處
身をふるうさまわれなり羽抜鳥
卯の花や谷間に見へる隠れ里
衣かへして先踏まん神の庇
二三杯呑て笠ぬく清水哉
夕立の間に逃ふ笠や親のおん
朝顔に魂さる、夏の朝
三光と輝へそる岸や豆廻し
閙の夜の拾ひものなり郭公
珠数て打石はくたけてかんこ鳥
其音に一つ歌わん蓮の雨
蚊に起されて嬉しき親の寐顔かな
河骨の咲くや田毎の餘り水
逃たかと覗くや壁の盛籠
袋は人の要なりけり白扇
山里や牛ひき出して夕す、み
留守するを子の一役や麥の秋
豊顔に鎌拾われし荒れ畑け
夏の日に水乞ふ振りや蔵の鳥
夕乳をもらう土産の盛かな
古井戸や蚊に飛ふ魚の音くらし
水汐の泡をなかれてねむの花
涼しいかわけて暑いか富士颪
今咲た花に露ありかきつばた
夕立に洗ひ出しけり翠の月
涼風を引も親への様の袂

付はかり哦くかけあり夏の月
ず、しさや七十五丈ふうる瀬
いつになき母の笑顔や初松魚
関経の洗れてたうとき牡丹哉
草臥た鶴や蚤ともいはぬ夜
重そふに鳴や五月の雨の犬
短夜や夢からつゝに鶏の聲
二つ來てやみを深める盆かな
打水や庭に涼しき風の生れ
有難や母のめ〳〵みて衣かへ
山里や草木のしいて夏衣
霊借りに寺迄行くや麥の秋
夏菊にそゝくや水の香ながら
作舟も客の所望や行々子
流になる嫁菜もしき田植かな
雨を持つ山の近さや時鳥
影寒し卯の花戦〳〵朝の川
子子や人の上にも浮き沈み
涼人や華染直し暗島
今一ト日降らせとふなき牡丹哉
手元からさも客らしき團扇哉
木雫のはし〳〵として夏の月
けし一重蚊の重みもしられけり
静さて太き〳〵光るはたる哉
抑て出る折戸の狭さき牡丹哉
抑れ〳〵に二の字引てやとよ夢

守は子に手柄譲りし初盆
汗出して冷やりと見せた土俵際
夕顔や朝日のもる、窓の先
水音は遠き山路の暑さかな
蝸の月寐た子の顔を覗き舟
手をとれば濡れても居らす水馬
世辞迄に座を譲りおふ涼かな
手に汲た水にもあるや夏の月
二階から船を招くや夏の月
落れて尚明るき宇治の螢哉
山越へて重み覚ゆる日傘哉
雨の日は親休ませて田草取
水の證言ふて笠きる暑かな
雛子の橋も涼しき溜くづし
五月雨の中にも月日立にけり
夕立や先に越さする峠哉
氷る日は暮やすけれと暑さ哉
夜は舌ケて影を詠めん杜若
白蓮や水晶のやうな花の露
御最負のあつさに報ふ團扇

乳貰ひも共に痩せたる暑さ哉　知らぬ名の星も覚へて門すゝみ
月くるみしぼり上げり青すだれ　閻の戸を鎖ふよふに見る螢哉
葉櫻となりてもわかぬ詠めかな　くらかりに牛曳たして蚊遣哉
昔も散る小雨の果や蓮の花　海邊より月ふき出す蚊遣哉
麥秋や親のさしづを受けぬ内　雨の日は親のはなれぬ浮巣哉
落付の馳走は茶より團扇哉　かき立て、白雲うかせ鳶の水
鴨聲に盥うす聞かぜはと、きす　夜放れの涼しき音や蓮の雨
賣る人も買ふ人も叩く西瓜かな　替て見ても寢られぬ暑さ哉
日をかそゑ老の待けり初蚊帳　世のさまやふまれた花も花盛り
ねはけたはこちの男なり時鳥　明日咲花や涼みの夜商ひ
夕立やそれて氣抜た宮神樂　幾度も廻りては見る牡丹哉
短くて嬉しき孫の袷かな　手から飛ふ螢に顔を見られけり
はと、きす何處て聞ても同し聲　起されて禮言ふ旅の晝寢哉
竹の月涼しさ人に移しけり　夜に戻る子を氣遣ふや單衣
寢かへりも　たせぬ内に明の鐘　若竹やはつ鰹の雨あかり
咲重りするや牡丹の雨あかり　ゆる、度月影崩す蚊帳哉
世の中を出ぬけて涼し不二の山　五月雨の夜も笠とるや主の門
六月や夜るも埃りの立樣子　菊暦の月日はあれと木下闇
日並待碁盤の下の袷哉　蛍ヨリ聞て噂や初かつを　評ヨリ
よき道の有るに山越つゝとし哉　照込んて夕暇する青田哉　題文すきと訪山の木の間や時鳥
月を愛て居なをりもする納涼哉　其蛍かな夏の苦やはと、きす
ふり向た方に鳴くなる閑古鳥　夜水引田から水鶏の叩きけり
昔もせぬ小雨の中や栗の花　枕出す程は夜もなし時鳥
風誘ふ白帆の涼し須磨明石　濡らすよふ溜れて日傘を燒みけり
賣る人は味も知らすやはづ鰹　願ふよも出來ぬ客ある牡丹哉
夜を明したに心なや郭公　汗かいて寐た親あはく團扇かな
案内のふはこに添る花の枝　打水やはつみに烟る日の匂ひ
月の影踏まで門の田植かな　涼しさや水に碎くる月の影
忙しきは人の當なり氷賣　骨身まで碎けてつくせ士武團扇
水鳥も居直る今日の暑さ哉　松風を添へて賣けり心太
負た子に敎へられけり郭公　味も香も見た通りなり心太
閻を得て身の疎させる螢哉　涼しさや月も隙の海の上
歌よりも手元の早い田植かな　霍亂や薬より利く豊の雨
五月雨の夜も笠とるや主の門　空なからそらには聞かに郭公
傍る時も後ろは見せぬ売かな　螢火にあかり貰ふて野道哉
今朝見れはそれ程になし蚤の跡　花のそてきかへて輕き單かな
不意に降る雨や背戸の設け物　帽脫て前髪濕て清水哉
風筋を母にとるなす蚊遣哉　月影は草にもおるに火取虫

水浴た鳥の居並ふ暑さ哉　虎枝や樫身に渡る丸木橋
虫干や孫に昔しの物語り　夕立や罪なき牛に當る鞭
水面の星に紛れて初螢　其螢に枯る立木や閑古鳥
子に引る親の情ケや螢とり　開きたかる人はもふ寐て時鳥
蟬の鳴く方からなをる日和哉　清天やとち向ても秋の秋
親にとて汲ひ味合の清水かな　我田てはのふても染し稻の花
岩清水證に詠歌を流しけり　使者の間の掃除の跡や土用干
打水や打つて替つた風の來る　立あるきする身輕さよ夏衣
己か子は乘せぬ願いや鵜飼船　今も其操をかへす虎か雨
獅子に似た石をうしろに牡丹哉　押掛の客もちろ〳〵若葉哉
子鹿者の勢ひ見せる幟かな　炎天や皆水物の料理店
陸間數歌を揃へて田草取　嫁ゆる葉に包まるや蝸牛
我家を一荷に擔ふ蝸牛　いとい山路を閑古鳥
涼しさや茂れる宿の軒の月　遠山に錦と見もる躑躅かな
登る程心の涼し神路山　蚊は飛んて自らた、く天窓哉
蔭からは姿も見せよ郭公　貞隱す蓋もあらはや鍋祭り
ひすふ手に月のこほる、清水哉　涼しさや月になる迄橋の上
文學ふ窓にも馴れて飛ふ螢　氷室資龍から不二の雫哉
借氣なく切て振舞ふ初茄子　更る程月かさへたかはと、きす
夏菊や折よく喫て一馳走　呼れて啼しの殘る時鳥
蟬啼くや蕗薹敷の鼻いひき　宿帳やとの間聞ても富士詣
涼しさや離れ座敷に青簾　火取虫啼しの花を散らしけり
夕日さし影尚高き芭蕉かな　短夜や雀の崩す不二の夢
螢火に知恵を爭ふ子供哉　雪を見る顔に汗ふく不二詣人
昨日見たま、や溫葉の蝸牛　釣草の川から涼し掛造り
時鳥押へた盃は逃しけり　眼のとゞく丈は詠めし時鳥
叩かても明く天の戸そ江の水　逢ひみての後の一夜は明け安き
日の本を來たる暑さや避く場なし　白雨の逃行く跡や蟬しくれ
出來盛る門田見る〳〵豊寐哉　村雨の晴れし方から蟬の聲

蚊帳持たぬ子は名を殘す肌身哉
岩清水かならず風のうみところ
歸帰て用なき寺に這入りけり
里に出る蛍の數みや郭公
無心して見て行く庭の牡丹哉
子は乳をふくみ流して寢癈哉
風入れる庫に蝶舞ふ土用干
竹の皮夕日を浴て落にけり
口紅の落るも知らて清水哉
鉢に筧の涼しみもあり住造り
雪折れのきつ口包む若葉哉
腰折れも秋の實のりにのす田うへ
影涼し岸の柳のはたるかな
行水の音さへ今日の暑さ哉
螢さも大和魂や宇治の里
中の蚊の外より多し破れ蚊屋
私しのなき御代涼し大扉
追揚し簀を月のかくしけり
鶏の尾を引するや五月雨
うら道は先ふさきけり今年竹
枕して輕く手にとる阿扇かな
勇ましき昔話しや土用干
雨たりて見ゆや清田の夕景色
邪魔になる子まで用あり田植時
雫から流る、谷の清水かな
耳なくは夜は明すまじ郭公
冷しさや耳にはなれぬ松の聲
麥刈に宿かへもする雲雀哉
虫干に寶の小袖見られけり
月に手のと、く迄とる田草哉
琴の音を門からうれし旅戻り
畑ふめと追うにもをしき姫子かな
月引り見所てなしとふ螢
檜へ出て團扇の重し夏の月
閻のけて夜に入る白の牡丹哉
手に結ふ清水は冬や夏もなし
早乙女の小言いひけり苗配り
姉失か脊くらへしたり更衣
き、すて日の明られぬ蚊遣り哉
百姓の心いさひや稻の花
豊顔や露も糸まね唉力
晷さ來て留主にも借りぬ團扇哉
子に日傘かさすはかつい心から
炎天や水も湧になる日の力
大庭に只聞くはかり蟬の聲
月影の来た定らす今年竹
涼しさや松原後とへ走る舟
聞た日は見たよりうれし初牡丹
照り返す日影涼しき白牡丹
葎月の立たあとあり今朝の巻
竹植て座敷涼しふ成りにけり
涼しさや窓へ刻込ひ竹の雨

石檀の數忘れけり閑古鳥
落付て見る氣も長かし籐の花
一渡し越して夜明る蓮見哉
手をふりて逃した蠅や跡戻り
短夜や抜足つこふ親の寢間
冏乞や紳の力の一と盛り
祇園會や京ても足らぬ京の人
福神から上へ暑さの通りけり
涼しさや朝こはれする松の露
短夜や物も思はす夢も見す
夏川やわさと深みを越て行
初茄子先つ亡き母へ手向けり
騒かして人のにくさもぬ夕立哉
針川の圃を縫ひ行く螢かな
初花や見て行人としらぬ人
眼の欲は昨日に遂けて時鳥
草取つた跡に月見る門田哉
朝顔や翌日唉く花を筆いしり
入り水の落口見せる螢かな
子やなかん其子の父も蚊の喰ん
一ト夜さも捨てはおけす蚊屋の穴
仰向けは笠に紐なし夏の月
艸の戸へ戻る夜明の螢かな
牛も舌出して阪越す暑さかな
涼しいと言ふて通りし松六里
炎天やせつたいに出す水なから

夕立のもやふやはねる池の魚
作り人の名も市へ出て初茄子
打水やしはしひかへて通す人
門涼み月と我とに更るさて
母と子に仰き分たる蚊遣哉
鉄の汁秋榮うに拭ひ遣り
帷子も小袖と思ふ暑さ哉
挨拶の済めは重たし薄羽織
けつこふな日和に花いうわさ哉
橋々に花の咲きけり納涼の灯
短夜や夢の中なる明の鐘
自由なる身の水や冷し奈
垣越しに牡丹咲るや島の上
雨風のたるみも見へす田植唄
魚すまぬ池水清し夏の月
夕立や水爭いの拍子ぬけ
水まても持來てたかす新茶かな
長き夜や親に習ひし碁のせめ手
顔ひ足る夏野に雨と日和り哉
つ、み打袖のはすみや風かはる
夜まなひの名は消へすある螢哉
むた渡りするや螢にはし一ッ
替て來て咎められけり紅扇
乞ひ兼て二日見に行牡丹かな
繋かる、牛のあへきや雲の峯
手拭も母のめくみや夏の旅

寢から風の出來けり水の音
道問へは皆仰向けり田植笠
後れけり菖蒲の池は濁り水
嫁はまたはつかし様や田植うた
月清く松靜なり時鳥
清水ある茶見世は人の晷さ哉
蚊遣火の草家に太き煙り哉
五月雨や立たまゝなり庭薄
親の居た跡へ來て寐る鹿の子哉
初夏や蝉の樹となる鳳山
雲の峯崩れて見をや月の山
燈火はきへて見榮よ螢店
うち水や炎天になき風の來る
人の世に放れて白し夏の不二
文坂のもと清水に積みし友の笠
乞雨のありとは見へし雲の峯
乞雨の晴れて飽ます宵の月
す、みおく肌を忘れて脫く暑さ
入日から出掛ける人や夕涼み
夕立やきのふも戌亥又けふも
にけこめは汗にぬれたる夕立哉
酒さめて茶に醉ふころや郭公
夢斗り跡に殘して豊寢起
負た子の手からはい出る螢哉
昼酒はつき合ひ兼て心太
水音を慕ふて行くや夏野邊

夕立後雨持たま、一寝入り
日盛りや蜘に押さる、松の琴
とち向て行かん暇の別れ道
珍らしき寒ひ晩や富士詣
鳥居から遠き社の若葉哉
短か夜やそつと起きたる親の側
橋のひかしを今にはい兎
旅人の笑顔うつるや野の清水
人込みの中や扇の貰ひ風
着せて見て母もよろこぶ袷哉
我日傘人と最合や渡し船
入歯した娘とは聞けす青度とり
雲井から訪れし種か辻か花
乳貰ひに貸して見送る日傘哉
登り坂一足つ、の暑さ哉
腹の女か赤き心や卓月花
岩はしる瀧のひゝきや五月雨
立かへり又尋らん時鳥
其向ふた日に手の届き日傘哉
針置て寝顔のそくや枕蚊帳
狭ふても除ける子はなし蚋の中
見ていれは行計りなり蜆かき
涼しさや蔵かねとても月の松
降る中に日のさす山や蝉の聲
涼風の船の中をさへきりぬ
片照りに人聲かへぬ清水かな

持替て膝に月打扇かな
松を吹風の涼しや庵の庭
海月のはのめくり頃やかはよ花
山船待人も手傳ふ蚊遣り哉
日盛りや酒も及はぬ水の味
朝市の戻り荷替る霧かな
閙より太き蚊遣りの煙り哉
今に切る木陰に柚の聖寐かな
束髪の頭にさすやはらの花
大空に虹の輪商し五月晴
休む間に思わぬ夢や夏木立
花嫁や今年は日立つ日傘哉
短夜や風も知らぬ閙の糊
さて聞く氣になれは蔭かす時鳥
白ふない不二に氣の付く暑さ哉
雲雀なくたけは田もあり東山
麻直りて見れは風あり竹婦人
むつかしき親子なりけり田草とる
一輪に日脚の殘るはたに哉
出て見れは昼程てなし夏の雨
虹消へて風新らしや今年竹
酒の座のよき逃時や飛螢
悟い蚊と云ひとられす親の顔
綿からも當世風の袷哉
輪の子や渡り習ひし糸の橋
綱提けて今から何處へ夏の月

暮は黒に一手さけたり時鳥
松風や笹折と聞く三井の鐘
雲切れや月をうしろ、時鳥
暑さとこ圓扇忘れて橋の上
假橋に假橋添へて川涼み
夏痩の吐息に曇る鏡かな
暑なれはなる程涼し夏の月
うた、寐のたしかならねと時鳥
蝶二つ分れて午を廻しけり
茹り揚た瀧に付て來る小海老哉
船からもうらやまかるや夏笠數
句に誘んた昨日の花を蚊遣かな
登人りのくうちも待る、清水哉
上る手のはつみなき蚊や見い寐顔
一頻り雨に暑さを夜きけり
夏の夜の明けてあるなり雨の中
明る戸にさし込む月や時鳥
水暑て客の長居や心太
親々の思ひ草なり辻か花
持て來て付た様なり岩つゝし
鉄を手に莟だよりに戻りけり
雫する青葉涼しき夏の月
馬つなく松に群なし蟬しくれ
田舎家は茶まて蚊遣りの匂ひ哉
人になる子や祚に轉ふ玉の汗
夕立に見直す畑やうり茄子

一ト つ來し盆にさわく納涼かな
卵の花や雪の岸うつ波かしら
見よかしに門明てある牡丹かな
其中は此處の主か夕涼み
飼寶の群珍らしや五月晴
蜘の巣も風のふくのに困りけり
碑の文字も分らぬ程や苔の花
清水から連れのふへけり夏の旅
涼しさや加茂の川瀬の夕月夜
開緒を晉てさゝれつ庇りの
吹風もともに晉さと成にけり
昨日のと植捉立つ田面かな
寐て足らぬ夜も更しけり夏の月
豊寐にもそつとのそくや親の顔
晴渡る山しかふして夏の月
風は蒸し草もそよかぬ暑さ哉
ちりの世をはなれし蓮の清さ哉
何一つ空にちりなく蝉の聲
かるふ來る蝶もおふなし茶子の花
湖を霧の先や夏座敷
此花の咲や尋し富士詣
亡き親の雀跡遥る扇かな
姉は守妹は姉の夕すゝみ
古壁をそつと覗くや蚊の行衛
猫の子も共に出るなり門涼み
菜の花や風おさまれは蝶のまふ

今雲をはつる、月や子規
家は蚊に渡して出たる日暮哉
廣々と豊寐宿かる御寺かな
雨止んで聲も高木や蝉時雨
日のさして分るや雲の峯境へ
とるふたに戻る早さや飯の蠅
月乗せて下る夜船や時鳥
素人の船頭多し納涼舟
今夜も又明石の浦や夏の月
柳のみやさしきものよ夏木立
降雨に行先くらひ夏野かな
愛敬を隠す日傘の目立けり
骨折て暇出さる、團扇かな
夏草や中をのそけは捨小舟
蚊帳一重親の御恩の界かな
炎天や今日から休ひ渡し舟
花なれは嘸そ白ろかろに梅若葉
大瀧の聞ゆる寺の茂りかな
出て見れはさもなし紙帳あはる風
謝書する内の床しや青簾
行商の立處廻りや麥の秋
習ふより慣たさはきや鶏調引
空も亦高いものなり富士詣
巳か身は後ろ明りの蚤かな
さす月の影を濃乳や竹婦人
料理屑からも芽を出す五月哉

寐た親に惜しき聲なり時鳥
雨戸くる間に光りさす夕立哉
蚊柱を過きていふかる坐頭哉
はつたりと蝉の默るや通り雨
暑き日も人になる子か机
着よこれの垢もなごりや更衣
然れはなをぬる、清水の湧すから
夕立や傘一本に二三人
無烟草の薛にはなさぬ屑かな
とめ耳て聞は果報か子規
溜なから夕立はめて通りけり
背梅や子の缺から二つ三つ
帯刀も今日はゆるし上酒大刀
初瓜を先祝からと祝りけり
水潤れて靜かになりぬ蛙の音
花嫁の手持無沙汰を團扇かな
船人も海見ぬ日あり五月雨
降止て光る木の葉や夏の月
丹精は色に出にけり青田面
世を忍ふ草の戸叩く水鶏かな
船に酔て味はしらねと神輸
夕立や砂に殘りし足の跡
來かゝつてよい川のある夏木立
降らぬ日の傘の重さや枝蛙
大空に廣ける聲やほと、きす
百合花見かけて遠し野山哉

鵜遣の鵜に遣はる、心かな
時鳥ふもいかけなき處より
船寄せて見るや若葉の山景色
先つ親へ見せて買けり初茄子
鳴呼親の里なけくや時鳥
暑き日や敵身一ッの置處
昏れと一枚てよし青芭根
橙は青くなりけりはと、きす
押合ふて居さへ涼し月の船
孝の子の低うを褒めて涼み棚
居殘りの一人涼しや船の中
神風をまねいて來たる白扇
學び子やなくさみならん盤狩
我家に腰かけている暑さかな
植初た田毎に夏の夜月哉
夕立や木の下影は元のまゝ
奥深き山鳩のなく若葉かな
イめはよい風の來る清水かな
幾度も後ふ見返し富士詣
睦しき噺劇なし田草取
昏程は大きくはなし遠の雨
葉櫻や未た咲き殘る花もある
出て見れば門に影置く夏の月
鵜の眞似もするや手柄の咄ふり
待詫て更け行窓や鳴水鷄
青蛙や一聲つゝに暮れる空

なりふりて知れぬ田植の上手下手
思ふこと足らて涼しき草家哉
蟬啼や船からも來し水貰ひ
口上は出ぬのに出るや顔の汗
鳴りなき母の言葉や御扱川
いさきよき明を揃へて田植哉
船の蚤乘合中のさわき哉
よいの茶の手捌や今の時鳥
視の氣をそらさず焚く蚊遣哉
ぬけられて手のひらかゆし蚤哉
闇古鳥鳴くや身に入む瀧の音
岩たゝく水の吟づく茂りかな
岩を垂る水の響きや夏木立
涼しさや青田見て行月明り
日も近ふ照りし思ひや富士詣
茶を取るに左へ移し扇かな
晝顔の繪盞に咲くや賤が原
旭を受けて花の輝く牡丹かな
酔ふた日の舞になつたる晝寢哉
酢から親心汲ひ清水かな
暑き日や晝寢の塩所の定まらす
暑程は大きくはなし遠の雨
若葉して稻荷の鳥居かくしけり
嬉しさを重ねてはしつ鍋祭り
山戻り親に土産の氷室哉
涼しさや靜に見もる賤の家
骨折たいろはらはる、青田哉
蟬鳴や韮木は茶屋の假はしら

この暑さ心ひとつにあまりけり
不二迄も綿着ぬがせし暑さ哉
子を遠てならす青田の水加減
くすふるも親の恩知れ蚊やり哉
便るへき木陰もなくて暑さ哉
海近ふ涼しみのわる夏坐敷
人中を出抜てかさし照扇かな
これ程の月に遊はて火取虫
欲も苦もなき顔ばりの晝寢哉
乘る客も手傳ふ船の蚊遣り哉
涼しさや雲間を洩る、月の顔
夏痩や似たと言はる、親の顔
初音聞て君を思ふや時鳥
涼しさや青田見て行月明り
月暮て四五軒歩行團扇かな
草に影見せた斗りやはつ蚤
笘配る矢はせの船や夏の空
余所なから寐た門おし、夏の月
蓮池や水へはふらぬ雨の音
すゞしさや新した、みに伊ヨ醸
居殘りてよい風になる涼み哉
夕立やあるにかいなき日傘
山戻り親に土産の氷室哉
涼しさや靜に見もる賤の家
骨折たいろはらはる、青田哉
蟬鳴や韮木は茶屋の假はしら

見返るは泣く子の母か田植笠
羽子の友手鞠の友よ蚤かり
涼しさの青田から來る風味哉
朝寐した人見出しけり蚊屋の穴
七丈ケの水の日拵ひや裏見瀧
二重づゝをしまれて散る花牡丹
蠅一つ居ぬも馳走や夏座敷
袷着て余るや帶の折り返し
羽つかいを敎ゆる鷹の暑哉
まつ甲斐のありたけ聞かて時鳥
給圖扇やこゝろ涼しき物計り
草むらに宿る螢の光りかな
豐年をたかへにかたり早苗振
屋敷田を植るは老の仕事哉
もや晴て總のゆるひや杜若
月と日に伸ひて枝なす茂り哉
添見してさゝる情けや蚕の跡
親ともに涼みなからの話哉
子を寐せてから放し遣る蚤哉
初蚊屋にたま〳〵母の朝寐かな
母からのみ添うて來る袷哉
涼しさや金を積ても買へぬ月
旅人の足をと、むる清水哉
歌の圖月に殘して時鳥
人靜ふて暮らす始めや屠蘇祝
一聲は此の谷も啼け郭公

夜涼みや母のゆるすも遠次第
袷天や案山子の笠も傾かす
夢もろき今宵を蚤の盛り哉
扱沙汰のなくて目出度葛湖大刀
暮る、日の雨に淋しき若葉哉
二視をあふく團扇の蚊遣哉
麥秋や今年生れの鼠子が
暮の際を發ふ庭や若楓
鵜遣いの上手を親のなけき哉
神の灯の朝まで殘る若葉哉
身に風をまとい歩行や團扇
旅人のありそふもなき温泉の里の清水哉
伐に出た心牡丹に聽れけり
見送るや花と當の夕日傘
いますこし〳〵とはかり夏の雨
川狩や智恵かして行く旅の人
世の花の詠め始めや福壽艸
あつそふに鳴く蟬の聲
君か代や田植歌聞く城の中
短かふて悦ふ孫の袷かな
月見たと言わぬはかりの蚤寐哉
失せる灯に影も逃すや閑古鳥
唄共に母の敎へる田植かな
ひと聲は待つ身に嬉し時鳥
さきいてた花に戯れ蝶々哉

鷄に座敷ふまる、蚤寐哉
一聲は蚤のあまりか夜るの蝉
雨新る心の外や土用干
首透る暑さ忘れて涼みかな
夕立や傘かふ家もなき在處
田から來る風を枕に蚤寐かな
寐た親の蚊を追て蚊に喰はれ鯰
涼しさや蚤も勝の手の見へてより
雨晴やそらにひろかる蝉の聲
夏の月に二階に我を忘れけり
氣の付て踏足の浮く苔の花
挨拶もせずに肌脫く暑さかな
山越して馬にも臭れる清水哉
思ふ程打れぬ庭や貰ひ水
砂糖水何に移る間もなかりけり
さし櫛も泥のまき給の田植かな
葉隠の昔しを云ふも夕へかな
狹まく居て廣き噂しや涼み臺
遲櫻是も風雅の栞り哉
湯あかりや轉寢涼し瀧の音
柔らかな手にもつれたる早苗取り
山一つ隔て、余所の夕立哉
寐返りて後しうにしたり竹婦人
蝉の聲聞ゞ眠らぬ子の添乳
身の汗も親と引けり蝉時雨
私しのなくて涼しき噺し哉

起されて見れば舟なり夏の月
蚊屋なくて臭猛は幸の名も高く
番の子は影に消けて田草取
短夜やそつと戸明る若世帯
夏痩や帯のすれ迄遖ふ處
すゞしさの座定らぬもかな
夏の不二また雪あるときゝにけり
刈草や蚤となるも亦能に
郭公時くや木意なき母の留主
閻の夜の景色なりけり飛螢
一閑の蚊屋に朝寐の郎哉
短か夜の蚤の勝敗や明る朝
夏旅や水の力て最壹町
撞く鐘も日頃は聞かす麥の秋
濡るゝとも雨磬めなから田植哉
葛水や目鏡はづして退く机
子のような視を持ちけり今年竹
御先祖の軍功見るや土用干
寐た親の顔見て涼む月夜哉
夏草や由來わからぬ墓じるし
夏痩や隣り歩行も旅心
朝風呂や衣更して神詣
罪のない咄しはかりや涼み臺
欠いてゆく程張抜けて首の花
すゞ風に扇落して眠りけり
夕立や富士も用意の笠箕を

子福者の門に賑ふ蝿り哉
孫のとも昔忍へる螢狩り
五月雨や村里しづむ雲中
月影のうこく木の葉の涼し哉
門へ出てきでも忘れぬ團扇哉
畑に鍬置て人なし雲の峯
來る年もをなし暑さや松か影
うた、ねのうつゝでつゝふ團扇哉
隱居せし團扇も出づる暑さ哉
壁に耳持たぬ座敷や夏涼し
暑氣しのぎ我前詠笑顏
雷や只さへこわし山夜みち
二醒は夢てありしか時鳥
にごり江にごらぬ蓮花の心哉
蚊にちから見へぬ五月の雨間哉
雪と見る梶子涼し夕間暮
年ふれる松はまかれて藤の花
休らへば殘涼しき清水哉
鍬倉の海のちらしやはつ松魚
涼しさや前に水音前に月
よい影と休めは下る毛虫かな
若竹や月をしよつて初見舞
窓あけてまでもねられぬあつさ哉
なき親に見せたく思ふ牡丹哉
飯られぬ身にこゝろなき時鳥
子にまよい暗七をたとる蚤狩

打水に心も清し夕景色
寐た親の蚊を拂ひ居る團扇かな
短夜や床に名殘りの夢こゝろ
居處も水にうつりて閑古鳥
やみを縫ふ針ほど見ゆる蚤哉
五月雨の露に名を置く二人哉
刻鈎瓶汲まで戻るやなめくじり
抱乳母に手くた助くる氷賣り
花あやめ其五月雨を思わる、
圓窓にそつとさし込む夏の月
ひた〳〵と水ふむ道のあやめ哉
夜はいつも青田にあけて煙る里
水に影まとめて涼し竹と月
古くとも風は新らし團扇かな
忠と義を思ふ的ふや大矢數
畔道にひとり顏なる初蛙
たいどこに下女いねむるや五月雨
一醒に月をのこして郭公
水かへの喧嘩止めけり夏の雨
暑られて後に主出る牡丹哉
青嵐琴りて白し涙頭
孝行や不孝蚊のさす丸裸
月待つて定めん竹の植處
夕立や水爭ひの水になる
起て出よとばかり叩く水鷄哉
雪の景寐言にも出ぬ蚤かな

文そつと置や蚤寐の枕元
うた、寐の、に夜ふかす郭公
朝晴に照り添ふ色の若葉哉
こわそうにかひせる親の枕蚊や
大海の人目の如き夏の月
短か夜のかやになくれや明の鐘
芥子の種蒔にも風を厭ひけり
夏の虫取りに來た火に取られ
親の思かさねてけふも土用干
涼しさや重荷屆た戻り道
浮草や風待顏て岸傳ひ
鶏の鳴く方は茂りの表て哉
涼むことはすれて通る川邊哉
能く動き能くしつかなる柳かな
光りおは文に殘せし蚤かな
故郷の親もこひしき時鳥
夜はさへて青田の露に寫月
水うつや飛石うつる夏の月
待わびる雀の重さよ時鳥
日の匂ひ草に殘りし夏野哉
轉寐の後ろを守る蚊遣哉
白雨を拾ふたと云ふ山家哉
終夜時斗かそへる新茶かな
虫に灯をとられて師直死そこね
横着に飛んでおとなし小夜蚤
孝知らぬ娘やあつき親心

油手に御禮いた、く團扇哉
月と風我物にして夕すゞみ
笛ならふ口へ風來て涼かな
短夜に勞れ忘れてひと枕
風なみに裾の動くや青簾
三葵かれて祭へる夏の月
親のおんおをりかへすや蹴團扇
帷子や腰に重たし雞ふくろ
身は輕く慈愛は重しころもかへ
見ぬ先にあつさ忘る、瓢の音
草かりの木の根枕にひるね哉
谷川に光りを流す蚤哉
抱て寐た兒に起されし昼寐哉
はづるれば杜取りたし夏座敷
夕顏や窓の内にも花一つ
祖園會や人せり割て月の出る
心よく銅鳥鳴や青簾
辷なくて人に呼はる、扇かな
扇ても午睡の親をあふぎけり
けし咲や何日思案の小首して
墨すりて短冊持ちて杜鵑
發度も親の異見の暑さ哉
乙女子に袂引れて蚤狩り
忠孝の道は繪にあり初鰹
月二つ荷ひ戻るや清水汲
小舟さす棹にもすかる蚤かな

虫干や泪の種に笑ふ種
蚊遣り火の煙りは知らで飛螢
親の恩着たる其身の暑さ哉
鳥さしも知らで餌をつむ親雀
聞く連のある日は鳴かす閑古鳥
細見せて友達招く茂り哉
豐なる國ぶり思ふ田植哉
驚た人に聞く鹿の子かな
はし書や母に暑さの別見舞
桝割の水に移るや雲の峯
痒にたくをして又出るや門涼み
葛水に筆投捨る机かな
猛兒にれもやとられ軒住居
蚊にこまる群も固きしいち隣り
葉を落て露登るや枝蛙
飛ふ蚤の毛織に足を取られけり
蚊遣り焚く下女の手業や糸車
五月雨に星の見ゆるや呉服物
來る人にゆつる夏野の木陰哉
芝はまや馬の火繩とひる顔と
手きわれば人にはまんの新茶哉
ひと株て庭をもちきる牡丹哉
おもひ出す氷りの味や雲の峯
提て行心に重き牡丹哉
加茂川の月に盛みし扇かな
眦しまで消してゆきけり火取虫

日の恩は知れとも今日の暑さ哉
名ばかりて潮はひいかた蟬の聲
涼しさや掃寄せられぬ門の塵
短夜や夢さへ見すに明の鐘
花の香もうつる佛の產湯哉
見た夢を震ひ出しけり朝の蠅
人傳に初音は聞きぬ時鳥
日の地獄すくふ地藏の清水哉
眼のはてもなき松原や薫る風
車夫は能き立場と云よや野の清水
早乙女の馬叱ても笑ひけり
土つけし仁王の顔や田植時
やみの夜に星かと見ゆる螢かな
蝙蝠やあるつりかねもつかぬ寺
はかりとる人の氣輿や夏の月
月に此處雪には其處と竹植る
いつの間に丸めし月や五月雨
涼しさや腹の加減を門歩行
蚊遣火に泣ぬ涙をてはしけり
鶏遣ひやこの世の閻は照せとも
ふき所殖て目出度葛蒲哉
嬉しさや痒入らぬ先の時鳥
蚊帳の月いつか枕にとゝきけり
羽音に動く浮鬼哉
荒廬の羽音に動く浮鬼哉
蓋にも雫か、るや水車

琵琶の湖中にはさみて田植哉
蚤に痒ぬ子に起されて時鳥
手の屆く朝たの木にや夏の山
重りて見ゆる山路の日傘哉
あるものを久し振なり入梅の月
閻へ手を出せは雨なり時鳥
くづれてはまた瀬によるや上り鮎
なかそらに闇の封切る花火かな
手まくらを子にして母も蚤痒哉
葉櫻や月を待乳のか、り船
蚤に痒ぬつかれを駕にもられ鬼
夕立や日傘雨傘川一と重
追かけて人の見にくる牡丹哉
阿親の老ふり嬉し氷餅
梅は熟となりて驚老にけり
涼風や影のすわらぬ水の月
白百合や一重は夏の花らしき
伸る程つぼみの出來る葵かな
旭の匂ひこぼす若葉の雫哉
竹の子や浮雲そふにも伸る丈
笹の葉に乘りて樋潜る螢かな
夏の夜や灯を消す虫に燈す虫
雨晴て梢こぼる、夏の月
瀧近く行は涼しき心かな
葉櫻や最う露は雨の烏
水無月の白妙みたり鯛に塩

夕立にいつか團扇も蚤痒哉
伊達に咲く花のおごりや初松魚
氣のつきた旅をやしのふ清水哉
丁寧にされて興なき涼かな
親よりも太りかちけり今年竹
赤き蚊の這ふたる閨の蒼碧哉
夏痩や味あるものを食いながら
都府樓の跡守草や閑古鳥
和らかな手に摘まゝや紅の花
抱て痒る子はありなから竹婦人
花も葉も實にも名のある櫻哉
かこたらぬ夜明烏や五月闇
余處を降る雨にたゝむや薄羽織
月雪てなし石山の蚤かな
沙風に枕吹かせて蚤痒かな
よくれ蚊もたれぬ親の寢顏哉
にけもけの闇の後やはと、きす
熊本や谷か雨かしした時鳥
田を持たは囉わんものを除う苗
御代〳〵と蝿も祝すや君か御代
君か代の惠み尊し蟬の聲
坂ひとつうね〳〵長し木下闇
封解かぬ扇は風の落み哉
子福者の竹賑わしき蚊帳哉
佛かな生れた日から花の中
寢に戻る蚤はいそかす夏の月

帆を掛た様なる島の轆り哉
待たせたる子は女なりけしの花
伐て遣る心の太き牡丹哉
暫らくは不二より高し雲の峯
短夜や夢の端さへ結ひかね
寢た人の名は笠にあり夏木立
二夕親に能き夢みせて蚊遣哉
心よや親の納涼の余り風
閨涼し月影うつるぬり枕
雨乞や今に殘れる歌の德
涼しさや風の錠卸す鳥
待かねて枕つくれは時鳥
待ときは鳴ぬものかも四手山長
人去れは鳥の來て居る清水哉
背鳶や見ぬふりすれは歩行出し
蚤にうつい引れて出たり蚤狩り
蝿圍爐や人の浪うつ假か雨
燈心の草に火灯す螢哉
夏痩を閨わられて長き咄し哉
ものいわぬもの、親しや竹婦人
蚊の鳴を聞て夜明や惜さ哉
千丈の流れと成るや岩清水
小鳥さへ口張るけふの暑かな
灌佛や甘き文字はる家の口
起されて證言よ旅の豐痒哉
涼しさも次の花なりよしの葛
なでしこにそつと臭れけり化粧水

友をしみして五月雨の一間かな
見掛にもよらぬ風あり瀧廻廊
寢た午の昨中に登る蚤かな
女氣のふとりつめたる田うへ哉
一休の傳山たり土用ほし
日の惠雨の惠みや青田面
時ならぬ雪と思へは花卵の木
瀧れて來て親になめらし鹿の子哉
牛の角動かし蠅のかち哉
扶持を施せて開く扇かな
夏痩や心して見る親の顏
綿ぬきや着丈け伸子の親はさそ
老てさへおしき命を火取虫
風に香を讓りてゆる、牡丹哉
敬もの、外に涼しや草のうへ
蝶も來て法の聲聞く花御堂
釣草やよき見通しの奥座敷
白雨の暑さ洗ふて通りけり
時痒の親を釣り込ひ蚊帳の中
一ト德利明ても暗かす時鳥
起されて證言よ旅の豐痒哉
涼しさも次の花なりよしの葛
なでしこにそつと臭れけり化粧水

短か夜や明ても殘る山の月
産顔もやさしくはなし巢の鶫
よしなきや火串の見へる窓一ッ
日と水の惠みに育つ青田かな
掛小家の柱芽をふく微雨かな
江清の月には近し涼み船
蓮をとる罪か渡しの乘かくれ
貧しさをあかさぬ嫁の蚊遣哉
暮る、日に山くせの付や橋納涼
暮る、日も忘る、蝶や咲牡丹
折鶴を崩して包む盆哉
帷子や背中へまわる日の雫
涼風や畫龍の動く大廣間
くたびれた足に日のさす蚤蟲哉
短く夜を寢た間つきたや間男し
なくさみの手傳も來る田植哉
蔦水や幾間も明て客一人
昇居へて大門開くはたに哉
おわりたら崩れそうなる牡丹哉
明日の事寢て氣配りや麥の秋
しつぱりと柳は殘れて月涼し
父母の心そあふく兒の團扇
踏み脫さし布團かけ、う親の慈悲
若竹や一節つ、に日も伸る
雨合り初時鳥拾ねけり
月の雫雲間に寢て時鳥

青きのを岩き心地や竹婦人
浮雲と見るまて咲し牡丹哉
葉櫻や水汲に出た跡もあり
道問へは皆笠あぐる田植かな
白はへの座敷に屆く日和かな
盤中に蚊の聲するや蚊の家
蚤蟲賣られてつとひ有明や
樂となる苦は面白し田植うた
大田植乙女の笑ふ夢話
庵にたる程は流れてこけ清水
門遊ひして蜻の別る、暑さ哉
蠅追て戸口はいるや送り膳
草の戸やことたらねとも風涼し
白けたる月の端山に時鳥
夜涼や火につられけるい酒呑
松かげのすゞしくゆるや紙帳かな
初松魚褒めて芥子に目はなみた
納涼やまた梅若へ一里半

芝扇露にぬるゝやはたるがり
まねかぬに旅足留る木陰哉
とちらからも來て涼しかる峠哉
涼しさに扇も遊ひ道具かな
夏痩や親になる身の耻かしき
蠅追て戸口はいるや送り膳
門遊ひして蜻の別る、暑さ哉
かき立るともし火しめる五月雨
飮みし茶のみな汗水となりにけり
蟬なくや軒にしられぬ通り雨
寶聲の勢ひ買うや初松魚
月を手にむすび上けたる清水哉
初嫁子暑さこらへて岩田帶
子子や五歩の魂を杓の中
股咬んて嫁動かせう男蚤
錦せんこ、ろもくたく時鳥
世をまとめ心の安し蚊屋の中
なへ戻のなかれ止りや杜若
木や草の葉にはあり鬼夏の風
よい月を余所にして寢る紙帳哉
ねむたさをさます外表の氷賣

白髮にも花咲く人のゆかたかな
尻咬んて人た、せけり蚤力
只聞けは何事もなき時鳥
ふすべても蚊にさわらぬ蚊遣り哉
乘り勝た人の優美や競へ馬
水に点付て涼みの氷り哉
蟬の聲きくよりゆるひ眼蓋哉
最中なり午寢も丁度午后二時
不二垢離や額突心屆く 峯
水車涼し汲む月こはす月
蓙狩下たの褶切て戻りけり
新らしき風も吹くなり夏不立
かき立るともし火しめる五月雨
飮みし茶のみな汗水となりにけり
蟬なくや軒にしられぬ通り雨
寶聲の勢ひ買うや初松魚
月を手にむすび上けたる清水哉
初嫁子暑さこらへて岩田帶
子子や五歩の魂を杓の中
股咬んて嫁動かせう男蚤
錦せんこ、ろもくたく時鳥
世をまとめ心の安し蚊屋の中
なへ戻のなかれ止りや杜若
木や草の葉にはあり鬼夏の風
よい月を余所にして寢る紙帳哉
ねむたさをさます外表の氷賣

富士拳て床几に疊む日傘哉
夕鯨や算へ分ても初交る
旭は花の表にのぼる牡丹かな
日盛や我影さへも笠はかり
あいさつや後にして出す團扇哉
かう〳〵し藤の若葉の青すたれ
不加歸また鳴く聲も初音哉
蝙蝠に亂たる、月の柳哉
夕立や出し扱かれたる一在所
あいさつも半濟にて持團扇
一番手飛車掛て手に持つ團扇哉
牛の耳動かす蠅の力哉
親たちを涼みに出してたく蚊道
血を分けし者にも蚤の憎さ哉
魂かれてふらひ顏やなへの內
耳すめて聞は風なり時鳥
夏の雨貰ふたやうに思ひけり
丸盆にくらへて見たる牡丹哉
二人居て結句氣儘な納涼哉
火は虫かとろうとま、よ夏の月
一ッきて船のかたひく蚤かな
船よんて柳にたまる暑かな
黑てかち白て負くるや五先
夜は池の底に殘りて蓮白し
初盆忌たらぬ子の脇みけり
杜若見るや東寺の塔支度

卯の花の圍を動かすそよき哉
果は蚊の聲となりけり峯の鐘
一ト足の川邊あふなし盆狩
蓮の葉の月落しけり朝嵐
月のもる處をよけてたく蚊遣り
大笑したしをに立つ涼み哉
たつた今いたあとさそう涼かな
水無月や夜明ぬ內の人通り
蝋の月戸さゝぬ御代ぞ嬉しけれ
眞黑な顏か能く縞を遣いけり
隣へかよふ道明り
卯の花や隣へかよふ道明り
からたより心のかるき袷哉
船頭は料理も兼て沖膾
搭た雨の光るや夏の月
ふき立の椽にあとある名めくじり
月さへてひ、く彌やはと、きす
飛盆しりくろましてにけり
見て通る人も田植の唄ご、ろ
寄り添へは親しき風や竹婦人
日あたりのよき門畑や芥子の花
待たぬ鐘指にこたいて時の鳥
月影のかたを枕や蚤
短夜を四年もなしと明しけり
るすならぬ門から歸る夏の月
家貧ふて自由なたひやかたつふり
身に打た鞭も覺へぬ競馬哉

涼しさの增すや兒は寐せ月は出て
富士はまた春の盤りや時鳥
はや明る夜を來て叩く水鷄哉
朝月の入る山もなき青田哉
身の圍をしらす來にけり灯取虫
文中澄みし清みのみよき清水哉
峯作る雲の姿照る夕日哉
せりようて寐ても涼しき夜船哉
提灯を月に照らして涼み船
寶れる日は物もわれす心太
草に風添ふて湧出る清水哉
汗巾昔羽の濕にわすれけり
たゝますい富士をも超さん蝸牛
倫言の胸にこたゆる容かな
あとへ咲く花を見て伐る牡丹哉
涼しさや漂ふ水に動く星
誕生を祝ふやけふの初勝男
右に開辟や左にはと、きす
花一ッ數にそゆるや初茄子
煖冷しや月の蓋ふく笹の影
早乙女や唄のあまりを戶口まで
人の手をかりて笠脫く田植かな
湯掛りの肌ふきさます若葉哉
雛所けは山かけ動く清水哉
廻文半ば後ち消紙ぬけよき茶の輪哉
來て居ても似合ふ鳥なし桐の花

札た提けて人の爲する清水哉
蟲の花いとうて鳴くか時鳥
かなひ子も仮あそひするや盛狩
若葉ふて奇麗なもつと辻か花
道のなき道行山や啼古鳥
一輪に富貴をたもつ牡丹哉
二八に見返へされたる二八哉
提けた手に開くや雨の蓮子花
夜あらしにひまを哭悲り竹婦人
吾が年も夏になりけり菜は春
時を得し苔ゆかしや白牡丹
月ならはもれそも嬉し五月雨
留守の禮いへは蚊のよる戸口かな
朝風や水馬こゆらく水の月
早少女や五尺の影も笠の内
郭公鳴くや倶の海の上
二トッ來て妹迎せる蟲かな
あし原は天しやよろつの田植哉
招かれて庭に汗拭の蟲哉
月涼し船に一夜の棹枕
戀人も離れて坐る涼みかな
和らかな風の涙あり青簾
末廣く世の富仰け御田扇
若竹や眼にも藥と思よ色
蟬鳴や瓦も濡れぬひるの雨
おくれ來た兒に分て遣る蟲哉

蟲火や車胤の事か思はれる
富士山を倒に提る扇子哉
若竹や親にそひかぬ育ちふり
風の蚊の顔に當るや船の中
辻堂の陰しにきはふ夕立哉
石におくはたか硯や時鳥
白鳥となる子子や身の仇み
なんとしてこゝへ來りし夕涼み
蠅に月樂庭は御代や親の恩
拾香に宿る蚯蚓も暑さかな
詠め居る心恥かし蓮の花
蚊遣り火のけひりは薄し夏の月
親竹の枝をまくらや今年竹
牛の脊の苔も洗ふや五月雨
笠越す水の光りや時鳥
夕立や男の姿ましこゝへ來りし夕涼み
手に心あるかと思ふ田植哉
汗の玉しぼりて思へ親の恩
江の水の日日やせて雲の峯
竹植てくつろぐ庭の月夜かな
一醒は月に鳴せた時鳥
長き日に何をかこつや森蟬
汗は皆つやになりけり夏鶯鶏
かけにまたなら小松の暑さ哉
ふる里も今や鴫らんはと、さす
卵やかに母の子雀をあやさけり

花と見て浮世をあだに火取虫
世の外に手作の風や涼臺扇
夕立や架けては流す虹の橋
雨水は別つに清る、清水哉
月を檀にすくうて戻る鶏頭哉
程近ふ開や夜雨の啼蛙
夏の日に布團ふみぬく昼寝哉
更衣や子を持て知る親の恩
日の上鶏暗くや夕立晴れ
叩くのか癖になりけう涼臺扇
御座の間へ誰通せしそ五月雨
月涼し一歩行はあり〳〵かけはうし
夏痩や母に話さぬ禮のたけ
入梅や茶を飲ひ外は所作のなき
蚤火はなまけ者生を叱るなり
子を旅に見送る空や郭公
御代の恩親のあせりを土用干
鬼百合もうつむいている暑さ哉
思ひきや學びの窓に來し蚤
卵の花や通りすくれは元の闇
日黒みや笠の印は遠ひ國
降らぬ日もぬれ色見せて若葉哉
佛的おは防かん爲のにはか雪
さわられて角かくしけり蝸牛

軒にくる蟲の床し雨の宵
数ならぬ處や竹の捨子なる
輕き身の自由自在や水馬
花暎て伸ひ切る蜀黍のたわみ哉
灯と咄一ッの虫にとられけり
若竹や親にまさるも親の恩
枯れて面顔はる挙の團扇かな
聖顔や笠に隠くる、彫法師
かた田舎都にまけぬ蛙聲
身を游うた、めと廣き扇かな
灯は虫にとられて撫る柱かな
白雨や雫のま、に戻し傘
月見せてねぬ子すかすや蚊屋の中
雨の日もうたはよこれぬ田植哉
岩藤や遠めに紛ふ花の瀧
らひね好き懐中眺て涎おは
風戦く程けしきよし青田面
雌なく雨夜や淋し鐘の聲
けふ暎て翌日散るけしの風情哉
鶏の羽風届くか芥子の散る
繋馬こゝわる門の暑さかな
短か夜や野に伏し軒に明す身も
ア、涼し置どころなき蜜草の火
蝙蝠の夜更かしはせぬ遊ひ鬼
木も水も群なき今日の暑かな
西風呂の中で思けり夏の月

す、しさや網代守りしも此處
水草の水にかれたる暑さ哉
蚊なる、間合覚ひて甚寝哉
乳もらいに踏とられけり麥の秋
まい〳〵や廻り〳〵て元の處
飛ぶならば月に譲れや時鳥
度毎の雨に附たか苔の花
雨はしや小野小町ぞ戀しけり
夕立やこれも十日のあめのうち
月に傘さしかけて喧蛙かな
清水まで行く間の遠き暑さ哉
若竹や雀も女夫とまりかね
起されてさへ覚めぬ目を時鳥
夕立を餘所に取れた暑さ哉
花も實もいらぬ暑さや森楓
蚤ひとつ角力取をも起しけり
蚊柱の立つや大工の去んた跡
日に閉て月に明るや夏の庵
六月や暮ても草に日のはめき
波はたり〳〵夜更けて月す、し
苗代に買ひ取らせたり初茄子
短夜や朝た氣の付く華勞れ
水風呂へ飛込ときの心地よき
五月雨や雲五六重八九重
ゆるかせは露散る竹の蓋かな
夕立にこぼる、土の匂ひ哉
汗絞る毎におもふや親の恩
月影の光りをそよく若葉哉

日中の暑さ忘る、夕涼み
白壁に戯ふ庵りの花卵の木
雪を見て遊ふ扇や富士の裾
月と只我とに更けて涼み臺
働けばとまる間もなし蠅一ッ
水音を聞て勇むや夏の旅
風を着て歩行やうなり薄羽織
月に隙出來て鶏冠の宵庭哉
夏痩を母に見らる、指輪かな
眠る眼の燃へて驚く蚊遣り哉
雨乞や温る太皷に勇む聲
掛札の字も識て行蓋かな
銅は焼く瓜は冷して甚寝哉
絹張に蝶の見へすく日傘かな
竹の子に朝々見舞ふ子供哉
寐て居ても折〳〵動く團扇哉
我耳を老に貸たし時鳥
山て見ても居ても立ても暑さ哉

汗かいて寝飽にもある暑さ哉
ふた親のさしつに竹の植工合
一輪て家も名も富ひ牡丹哉
越して來た坂見て通ふ扇かな
待わひて開しは夢かほと、きす
苦と樂のへたて涼しきかや一重
苦は樂の種も勉めよ夕納涼
明か、る赤松山や時鳥
山越せは滴水の音も聞へけり
着せ綿のはしき夜もあり時鳥
待兒ひし夢の汕斷を時鳥
足跡の水を手洗ふ田植かな
老木とは見へぬ若葉のそよきかな
昏めなから馳走に逃る蚊遣り哉
寐太郎は夜の短かきをかこちけり
雨風に光りはかへぬ益哉
世につきぬ御法の花や佛生會
腰かけて飯喰ふ里や麥の秋
子の愛に低ふ釣りけり蚤かこ
凄暖計詠めて過ふ扇かな
樂機や扇れかけたる茶店小家
我身よりともしてしらす蚤かな
耻かしい方へ傾く日傘かな
跡迹を待つ影もなき暑さかな
涼しさや酒の名もまき柳かけ
風筋を親不讓りて蚤寐哉

水音の寐耳に添ふや夏座敷
田に欲の無き程重し夏の痩
暮れて越す渡し待れて時鳥
暑い日はましてつめたき氷かな
名所見る願くるひけり五月雨
大船に里に勝りて夏の菊
今年竹雀の物と成にけり
乳母は子の寐顔まもるや蠅たゝき
貧蔵を開て持出す土用干
露なからつかむや草のはつ蚤
涼しさや甍は照られた草の上
たへかねて柳見に出る暑さ哉
水打て客待つ夏の月夜かな
丸山や京見をろして心太
直なればにこりにそまぬ蓮花草
暇にもまた寐ぬ昏の團扇かな
夕空を見定めて寐る牡丹かな
また花は世に捨られす時鳥
鰹いて拜む手振や柏もち
散る牡丹籍抱へて詠めけり
納涼出た留守の涼しき一人かな
虫干に出るや息子の隠し錢
都合よき雨や田植の水かけん
待は斯ふ聞かる、ものを時鳥
いつの間にはなす團扇や竹の風
今年竹雀の物と成りにけり

道問へは揃ふて向きぬ田植笠
伐て來て筒に思案の牡丹哉
あちらよりこちらへ移る燕かな
草に日のにはひもさめて夏の月
田を植てから低ふ來る嵐かな
窓貞かは蚊に施行する丁稚かな
花と云ふ名のある山も茂りかな
さて巻の行衛問たし子規
膳据て夢ぬる客や夕涼み
能事も聞ぬ覺悟や蝸牛
柳枝のま、に取たし初螢
喞のみか笑ひも茂る田植かな
萬倍に實のれ田草の汗の玉
更るとも思はす更し夏の月
雲の峯富士にた、めて渡海哉
牡丹見や躊着なからの晒足袋
納涼して扇の骨を數へけり
天と地のせき五月の雲り哉
都にも汐風吹や松魚以り
高低は山のうねなり郭公
檜も能も曳いて涼しや下り船
日中も利益の爲に何のその
讀本の折目ぬらすや虎が雨
市跡の風一陣し夏の月
卵の花に追はるゝ閨の一重かな

無邊作に四阿建る牡丹かな
人待と見ゆる木陰の扇かな
水鳥の流れなからも餌の工夫
涼座客の忘れた團扇哉
日に手をおそうてはひる牡丹哉
蚊もおもい捨ねと郭公
宇治川や魁したる蚤狩
蚊屋越しに明日の酒りの噂哉
うた、寐も買われて嫁し更衣
裏門へ田舍見に出る蚤かな
時鳥あとなき月の木の間哉
水に浮月影清し池の蓮
なき人の話し出るや田草取
初茄子夢の數はともらひけり
臭の間は靜かな昏や竹婦人
手細工は子の紙に入らす蚤狩
赤公人指折盆を待ちにけり
竹の子や兒の抱て寐たあな、そう
月の入る迄と舟かる涼かな
週櫻まて葉櫻となりにけり
夕立の待つ甲斐もなし海の上
葛水や何よりもよき門柳
蛍火のもれて鴨立門田かな
重き恩着る身の輕き裕かな
蝙蝠やいつも世話しき昏の月
六月や木昏路は雪の物語り

あふき出し〳〵蚊の話し哉
いそかしき使ひのくるや初鰹
是程の身はつきりとくさわの立つ蚤哉
身は輕くめくみや童き初裕
我國の方へ眼の行く不二詣
森を出て風の爰見る青田かな
炎天や小川てあろふ馬の口
涼しさや澄切る月に水の音
斧の柄の折し所や閑古鳥
ふた目とは見せぬ鳥なり時鳥
綿ぎぬやかへり子に增す二三合
寐心のよき夜となれは明やすし
夕立や降りかしひ日の暑さ哉
身もかろし心もかろし初裕
請合のこゝろも赤き水瓜哉
窮屈な座を出て煽く團扇かな
捨に來た子供見に遣る毛虫哉
世の塵を隣れて濯し蓮の花
草の根を水は洗りて夏の月
川二ッ一ッになるや五月雨
卵のなき寐顔透けるや祝蚊屋
笘はねて聞や夜明の時鳥
涼しさを積んて入來る白帆哉
一二輪見て事の足る牡丹かな
雨の日は柱に見ゆる團扇かな

立蝿く聞も無く暗れて雨涼し
主來れは木にも水打丁稚哉
行過きた座頭に清水敎へけり
寺も山てみとしろ植の日取哉
寐た親に孝忘たらぬ團扇かな

水上に紙捲く音やかきつはた
卯の花や月ほと咲けは明りさす
詰めは散るはかりの橋や杜若
見るものゝ司なりけり白牡丹
天地の惠みを照る田植哉
痩た親のそはや襁て蚊に曝れ
子を告る太鼓の鈍し君かな
親の來て風かなりけり凉臺
窓に耳預けて旅たり郭公
水音の雫もすゐの清水哉
蚊帳一重浮世隔て、氣は安し
枝こしにさす月はなしけゝ哉
更る夜の月も都や郭公
ふさす手に月のかくる、剛扇哉
遠る出た折は水鶏の鳴ぬなり
あせてある子のあさしさや蚊屋内
西國をまたけて橋の納凉かな
縫いあけを干し君るや子の浴衣
五月雨やしめりの戻る鹽俵
曉の雲破りけり不如歸
西瓜實り赤き心や割りて知れ
家までを添て登めけり富貴草
疎れ嫁はまた出刻めの田植哉
日のあつさ惠み忘れて夕凉み
鳴て庭を上るや籠の時鳥
假程風も冷たし團扇哉

扨も暗かり夜と思ひしに子規
富士の雪とけて硯の盤次
かさし癖つ いて日影も扇哉
蠅張やひと齣當てし魚の肉
奥深ふ流れも見ねて夏木立
風に火をとられて凉し船の上
蚊非と云ふ蚊非て折するあやめ哉
夏の月行儀崩して詠めけり
松の葉の落て地にたつ暑哉
隣にも茶の匂いや一夜酒
さへ渡る卵の花垣の夜明かな
蛍一つ取う逃したる痒さ哉
畷田へ影の流る、蛍かな
蚊帳に治まる御代や菖蒲大刀
和らかに日を抱へけり紅の花
世の憂を海へ流して屋形船
伐り兼て手の水切るや杜若
橙の青み戻りて麥の秋
軒の燈は消へた儘なり夏の月
蒼海も元は清水の雫かな
子に迷よ閣は美くし螢狩
苦を去て又何か出來る夕凉
優には厭ひし雨を乞日かな
叮嚀か上手なりけり田草取り
雛面さに蛍をよせて住身哉
凉しさをこぼして行くや通り雨

さて是か世の極樂か舟凉み
二度寢ても日は山にあり棚の藤
卵の子に貸て目出度し藥鍋
夏痩の親の笑顔や沖膾
旅先や心發ム若葉哉
風道を早寐の蚓に取られけり
編笠の姿やさしや柳腰
月凉し様先撫る竹の影
夏の月竹の雫になりにけり
兒の夢を抱かせて出るや門凉み
清水から茶屋の名のたつ峠哉
今年はと斗り年〳〵暑さ哉
一輪に名を發しける牡丹かな
山中に暦はなきか暑さ避け
母の意に任せて捨る繩かな
一日の汗に〳〵さるや笠の紐
蚊遣り火や親の寐顏をまた覗く
凉しさや日影のはしる涙の上
二ッなき色の自慢よ旭のあやめ
古寺や塔は朽てもかきつはた
念佛を兼へと嬉し蓮の飯
青梅や夫れと白齒のかくし喰ひ
粽結ふ中や賑ふ泊り客
蚊柱の崩れ兼たり孝の軒

哀から風の裏見る若葉哉
孝の美を寐物語りに紙帳かな
隅田川に月を抱へて凉みかな
蟬鳴くや今は靜な古戰場
編笠やおろして廻る土藏の錠
握りたる暗を隣のこはしけり
波に寄る磯の藻屑や風薫る
凉しさは書にもかゝれす水の月
凉しさや涙の鼓に松の琴
水底の星に螢の迷ひけり
五月雨の押して崩れつ蟻のあな
五月雨や屋根を取りまく夕顏
初螢ひとつは草の雫かな
默つては事足らぬ世や行々子
寺に寢る浮名は立す竹婦人
敵陣に一醒掛て不如歸
蚊屋に寢ぬ親へ蚊遣りの馳走哉
門迄と親に勸める納凉哉
宵の間は雨に降れて鳴水鷄
母に釣る心の廣さ哉
片袖は顏を隱して虎か雨
發起して月に筆とらせて行ぬ郭公
月に筆とらせて行ぬ郭公
閤の夜を動かして行く螢かな
只は目の覺めぬ夜明や時鳥
紅の花つゝやたすきも絞り染

佛たんて尼となりけり茶子の花
夕月の影ふみにてす田植哉
轉寐の親に蚊遣りの用意哉
舞ふもあり眠る蝶あり牡丹畑
西洋の事も明るや螢の火
汗灸を實にやなさんと田草取
夕立や挨拶なしに傘の客
螢火に付て戻るや小田の道
豐かさの今日より見へて青嵐
卯の花や垣根に殘る閤の雪
子規扨は夢てもなかりけり
靜さの果や牡丹の片崩れ
若竹の中や年貢も知らぬ家
螢かと握れは露の光り哉
行々子鳴や入江の拾小舟
得意揚へ走り込みけり初松魚
白蓮や月かとまかふ閤の池
枝葉咲話に更つ凉み臺
おもたせに笹も添へけり初松魚
凉しさや海見却しの名ある寺
蚊を叩く讃岐の團扇かな
世を渡る心の杖や輪り竿
蚊遣しけり夏羽織
日は用に暑さは人に凌さけり
蚊遣しして親の空寐を守りけり
駒とめて見揚る塔や時鳥
風上に親は進めて夕凉み
湯簟につい て川越す螢かな
落る日の青田に立る光り哉
早く鳴け月は落るぞ時鳥
照らね日も子のさして行く日傘哉
群よりて卯の花こはす雀かな
若竹に月を乘たる夕へ哉
この辭は余所の初音か時鳥
草の根と木の根を絞る滴水宝
朽ぬ名を彫りし石あり苔の花
蚊遣しして親の空寐を守りけり
千てある節の籠や風薫る
夏痩や初て見たる親の思
弘めせぬ聟も來て居る田植かな
苔から向の定まる牡丹かな
魚市のひけ跡風の薫りけり
異國まて薫る傳の御茶かな

五月雨に心ぬらすや川底
すゞさや川邊の月とさし向ひ
開出す君は夜もなし子規
夏の夜に葉毎の月ぞ涼しけれ
稼ぬ客西瓜に花を咲せけり
蚊來て泣子の機嫌直しけり
涼風を資本に業の出茶屋かな
行春を夏へ橋なり膝の棚
暮れ急く草と並んで初螢
蛍問に一里戻るや閑古鳥
苗代や太きう殘る足の跡
月雪も花も一間や土用干
夕立の晴間を行くや鳥のかげ
着て輕き袷に重し母の恩
鵜遣の上手を母のなけきかな
公園の咄し振はし夏の月
露のみをもゆる思ひのはたる哉
一線に花を咲せる競馬哉
肌ならて薄らく緑や竹婦人
抱かへて一夢見たり竹婦人
虫干や匂ひこぼる、花の塵
落人の星もるめるや閑古鳥
蚤わぬ花の宿貧や白牡丹
花散りて夏きになるへや郭公
愛興を笠に着て出る田植哉
漁留の立札古し杜若

慾のない手からこぼる、螢哉
雨乞や風も落付く青田面
日に涸れし汗月に干す納涼臺
叱られた關はこゝらか夏木立
其聲に閻のもれたる水鶏哉
鵜遣ひや物のあはれは知る男
心能く御用はのや藥の日
短かしと思ふ間もなく夜明哉
素咄し際も更て夏の月
蛍聲もやみの底かる花火かな
浮草や浮て見せてもねのしまり
雨乞や内神斷る留守の庵
舟かしく螢一ツのおもみ哉
徒然の物なりひるの竹婦人
吹降りの魁するや雨蛙
六月に戻りすましけり富士の山
蚤躍れて節酒み遊ふ謠本
柳斗り風を持つ日や苔子の花
朝〳〵は經よみなから鶏匠かな
竹植る月は冷たし苔の花
夕立や雷れよたま〳〵玉の龍
草苅の籠遣ふひるの螢かな
孫つた子から瓶を割る智恵もありけん蟬袋
水論の解て流る、夕立かな
短か夜の月山の端に殘りけり
二軒には遣ふにたらぬはつ茄子
晷き日や水影に訴れば虹か刺す
夕顔や漉家の水を落す音
親に先つ晷て告けり初牡丹
一輪を二人して伐る牡丹哉
親の手を取つて是へと鐘
初螢宇治茶に添へて貰ひけり
もとりてはもとの晷さや門涼み
ほろ酔の夢も守るか犬張子
一つ〳〵來てはれてまた散る螢哉
子子や火の要水を大世界
かやり火やしづかのきばの夕晨色
駄を片手や燕子花
捻切た干駄を山下りて青田
水飯や上下崩る、合座敷
富士の陰た、んで戻る日傘哉
夏痩も氣遣ふ母のなさけ哉
はてろびぬ暗から山たり飛螢
生魚に二度立つ市や蝉の聲
押かへる閻や鵜舟のかゞり先
川狩や晷中て結ふ子のねもと
出遣りに蚊の付て來る蚊帳かな
夏座敷水も料理の一ツかな
月晴れて堪すや涼みの面白み

是程の暗にかくれぬ螢かな
蚊に食のす背中の跡や千代の孝
花に眼の醒れは耳に時鳥
はた神にきも潰されてふじなへそ
花に月淀む夜は寒し白牡丹
旅の空不如歸の聲も最とや
誠ある蚊遣りに親のいひきかな
火取虫行燈負けて助けゝり
明渡る月山の端や時鳥
流れてもまたもへよる浮草哉
ひるも蚊屋つるまゝに遣く山家哉
暗のよを名うがはなるはたるかな
黒はへに白帆の橫ふ青海原
三略の巻を枕や閑古鳥
水飯や匙並はつして稼の先
客の座にありて揚はぬ蚊遣哉
麥苅や風折らしき孤松
夕立や落合川の片濁り
着心になれは夜明や夏蒲團
白雨や立場に騒く駕籠車
儉約は常すれはよしはつ松魚
草にやとる雨に螢の光り哉
澤瀉や浮た葉によるの珠
蓍は勝と見据へて遣ふ團子かな
二輪の花に圍持つはたにかな
むら雲を破つて月に時鳥

線の咽を絞りし卵の深瀬かな
涼風や蔭定めは余所を吹く
白雲の樣へ離れて蝉しぐれ
月の夜もはんの子故や螢狩
形代の差もなくて流れけり
新らしき夏とはしたりよろい草
入梅や貸家の札も潮はなれ
炎天や持ては崩るゝ幕手柳
花に出た眼を蒸ふや時鳥
實にも今むかし思ふや虎が雨
珠數乘せて讀て聲る扇子かな
夏痩を親に知らさぬ遣しけり
明けあしき夜にして深し草の露
我宿はいつ過つるや夏の月
見れば月見れは月なり郭公
蝉の聲耳に用ある昼寢哉
行潜る風を馳走や夏座敷
すゞしさやみやこにまさる谷の庵
蝉の香の貫ぬくよふな耳の穴
開かねば扇子も風の苦みかな
烏も夜を安ふ明すや夏木立
蚤ひとつ終い精進を落しけり
短夜や拳公して知る親の恩
行の子に延ひ越されけり芥の塚
夏草や野末に沈む鐘の聲
今既た袋を遣けり蝸牛
あきついやぬれてもどりの大手拍
あの聲は月から出しか郭公
入梅時の雨降りなから水無月
行先で見谷められしはつ袷
常に見る我子見たかる踊哉

一ト葉より此いさはしや木下闇
湯上りのせわしく遣ふ團扇哉
郭公聞自慢して年聞かれ
月落て稻葉に登る露の玉
昭の風の輕さや遠の花
虫干や鉄ふるへは花陽
夕立に阿袖ぬらす合しよ傘
花に手をあて、庭はく牡丹哉
むらさめのはれまに蟬の聲
武の容の土用干にもわく虱
青梅を見て湧き出すや口に水
夕立の名殘り涼しき庭たつみ
搖て知る袖のしめりや木下閨
水出は樋の口のみや雲の峯
見透せは日はまた高し木下閨
夕立や望みてもなし海の上
二ッ燈も赤きこゝろそ盤祭り
不足なしこれも事足る避暑扇
早乙女に植つゝまれて大笑ひ
父母の寫しん掛けたり時鳥
眠りする人も追けり顔の蠅
昇る旭の透影涼し青簾
月に何といたき穴や子規
法なう咲くやうつきの窓かしこ
二ト間は月に殘して客の蚊屋
風一荷にのふて暑し團扇賣
川狩に蒼石の浮ひ裸同士
汲上りのせわしく遣ふ團扇哉
郭公聞自慢して年聞かれ
月落て稻葉に登る露の玉
昭の風の輕さや遠の花
虫干や鉄ふるへは花陽
夕立に阿袖ぬらす合しよ傘
花に手をあて、庭はく牡丹哉
むらさめのはれまに蟬の聲
武の容の土用干にもわく虱
青梅を見て湧き出すや口に水
夕立の名殘り涼しき庭たつみ
搖て知る袖のしめりや木下閨
水出は樋の口のみや雲の峯
見透せは日はまた高し木下閨
夕立や望みてもなし海の上
二ッ燈も赤きこゝろそ盤祭り
不足なしこれも事足る避暑扇
早乙女に植つゝまれて大笑ひ
父母の寫しん掛けたり時鳥
眠りする人も追けり顔の蠅
昇る旭の透影涼し青簾
月に何といたき穴や子規
法なう咲くやうつきの窓かしこ
二ト間は月に殘して客の蚊屋
風一荷にのふて暑し團扇賣

川狩に蒼石の浮ひ裸同士
亡き母も在す心地ぞ土用干
險岨なる岩に角なし苔の花
握る手に、はいの殘るはたる哉
須磨寺や栗花の夢の土用干
蚊やり火やむせてまさらす貰泣
短夜のしる、やくとのあた、まり
夜立する日にも忘れぬ日傘哉
蓙火と掬めは涼し露の玉
二日目の音勇ましき扇哉
さされは迚寢るもおしさや夏の月
夕月や蓙の太る松のやみ
さして行青竹棹や涼み船
花よりも子の所望なり櫻の實
日にぬれて月に乾けり暑さかな
源に落て柳に休む蓙かな
ぬれて響め走りてころぶ夕立哉
炎天やかさ鳴呼涼し親の蔭
蓙火や雨に一トしは輝る木の葉
飛ひしは火にも入るなり蝸牛
白雲の中から出たり氷室守
照り續く日和繪て西瓜かな
臂杖に崔ひ疊みや夕牡丹
蚊遣火や寢る子に膝をかしながら
蝸牛や已か住家を持歩
畳の苦の暑さ捨るや櫚の上
一七日温泉から戻れは青田かな
夕立のして樂になる往來哉
圍にやみかさなる谷や飛螢
涼しさや蚊を驚りの一ッ家
ちひる杖の命や夏神樂
五月雨や圍子も歡の化粧哉
暮る、日をあくるつほみや夏の月
吉野路も淋しくなりて夏木立
中白き西瓜に賣人赤くなる
居直りてきけは逃けりはと、きす
卯の花や通り過れは元の閨
木に蛙うん是じやなと生徒智恵
白雨や戸口をふさく馬の尻
無遠慮か一は へ夏の馳走かな
植あまる苗や流れをかりておく
入れやうとする風はなし火取虫
好き遣れの出來て更るや夜川狩
脊戸門と繪りて凌く暑さ哉
夏羽織疊むやそつと風の添ふ
草刈の鐘に月さす夏座敷
炎天や流れの水も湯と化る哉

蚤に障る虫や卯月の鹽日和
筍や雲ぬきそふな伸工合
追かけて人のにけ込蚊屋の内
短ひ夜時計、進むおもい哉
一トッづ、風を產出す田植かな
湯上りの親にあたへる團扇哉
夕やれは水をくゞるや青あらし
入梅になる規模や柱のふまへ石
寒手てさへ苦になる坂や蟬の聲
手に當たる物を豊寢の枕かな
我影を動かしのひや谷清水
川狩や咄しはそめて指数へ
雲間よりこぼる、鹽や時鳥
花嫁の衣裝自慢や土用干
隣りから來ても晝さの見舞哉
下りて來る蓙に笑顔見られけり
京よりと聞てゆかしき新茶哉
薬さくらや石の業書なつかしき
蚤て迄吳れる嘉例やあやめ賣り
夕立や海からはめく松の聲
市からも市を見に出る夏の月
十分に牡丹咲く日のくもり哉
苔怒哀榮視く清水に浮みけり
早蕨や雪れは晴る、人心
玉ものと兒の守り寢や初蓙
蚤焼した母の繩を遠ふ娘かな
牡丹や不義の富貴はとらぬ主
牡丹見や乳母の数へか行儀よく
來た人に忽寢詫けり蚊屋の内
我も眠りく添乳の團扇かな
追込過てわきへとらる、蓙哉
事足らぬ山家にあまる清水哉
水汲も旭の出ぬ内そなを涼し
發心の異意をきかせ苧子坊主
夏痩せにすゝめる母や牛の乳
短夜や今朝も雀に起数
夕立や落添ふ川の片淵り
日の内も露持そふな牡丹哉
花嫁の衣裝自慢や土用干
隣りから來ても晝さの見舞哉
下りて來る蓙に笑顔見られけり
京よりと聞てゆかしき新茶哉
薬さくらや石の業書なつかしき
蚤て迄吳れる嘉例やあやめ賣り
夕立や海からはめく松の聲
市からも市を見に出る夏の月
十分に牡丹咲く日のくもり哉
苔怒哀榮視く清水に浮みけり
早蕨や雪れは晴る、人心
玉ものと兒の守り寢や初蓙
蚤焼した母の繩を遠ふ娘かな

寢はくれた伽にもならせ竹婦人
見る内に半の渡る若葉哉
雨を呼ふ言葉覺れす枝蛙
二ッ色に香もちりやうそ金銀花
まだ無事な親に見せけり土用干
汲かする麥茶の釜や夏の月
茅の輪越す時は心のあらたまり
加茂川の閨を照かす鵜船哉
笹とれは匂ひ涼しや籠の鮎
水は皆閨に流れて暗く水鶏
腦に付く親の脊扇く扇かな
乳母の手へ疊て渡す日傘哉
挨拶もすまぬに遣ふ扇かな
大股に戸口をまた〳〵植女かな
一と聲を月に殘して杜鵑
聲に眼を配るや閨の時鳥
押分て塚の文字見る茂りかな
蚊屋釣らぬ里涌山し夏の月
傘をさしやふりけり五月雨
爪の火を消て四條の納涼かな
時鳥斷の閨を崩しけり
憎き蚊も敵かれぬ子の寢た笑顔
御醫者から又貰ひしてはつ茄子
嵐山花に名遂げて川納涼
誰れ呼ふとも月に聲あり時鳥
道開へは瀧も数へるあつさ哉

挿るも其日はかりや芥子の花
田中家の裏から超す水鶏哉
施子や机の上のこはれ雨
親思ふ夜半の寐さめや子規
上手ほど手元すなほに田植哉
こつそりと宵寐の母に蚊やり哉
つゐて來て銭ねだる子や心太
野の清水なれど互に會釋かな
悠水も引し加減おる苗田かな
下かる稚名の上げが蝶の花
蚤につけ蚊につけ秋の待れけり
高〳〵と夕日抱へて桐の花
落にさけて顔には汗を流しけり
豊年のとし涙見へて青あらし
一輪て猩應のきは牡丹哉
朝はまた寒し若葉の余り風
形に似す高う飛かふつはめかな
假寐の子ゆへに親は蚊遣哉
蚤追ひの鐘に驚く晝寐哉
日盛りや親に代りて渡し守
住吉の松風添ふや初鰹
船からも呼かわしけり橋涼
水貴に夢遊はして夏の月
寐返れはうなつくよふぞ竹婦人
翌日の道踏み越す夏の月夜かな
卵の花や有明寒き水の音

文案ゆ御代や盛も一ヒの鰹
花さげた犬にかけかん日組哉
水吹いて火を發ふんや螢賣
涼風を市に賣くや扇賣り
灯も多く神の御前の涼みかな
打水や夕につくやう女風の來る
朝日出ぬ先から暑し蝉の聲
鯉刎ねて落す蓮の二重かな
殘がねば戦がせずに月の仔
雨乞や水には富みし里なから
燈火と頼む甲斐なき蚤哉
かたびらや母へ遣たる口上ふり
谷間や淋しき水に杜若
寐る蓮の出來て賑られぬ蚤寐かな
富士晴て扇座ひや鹿擔ぐ
また解かぬ帯紐蚤たとかれけり
杯洗に月のゆれるや夏座敷
欲の世や寺の庭にも金銭花
二輪とは言へぬ牡丹の無心哉
色〳〵の話し包むや柏餅
親なくは肩身めしはひ扇子哉
勝引た大から遣ふ團扇かな
蛍籠の重ふて輕し祭り鍋
虎擔た火の噪はれぬ蚤一つ
夕立や雲にふくれた雨の足
茶を出せは水乞ふ客や夏座敷
傘を肩にあつはせて時鳥
小川には假橋かけて田植かな
車ひく牛の後行くあつさかな
親の居る床へすべれる牡丹哉
風筋は母にゆつりてひる蚊屋
たひ衣更て身おもし母の宮
早乙女や空を擽へて田植かな
春はめた山をわする、若葉哉
雲と水はなれて明る蓮哉

にこらねは師の誠か御萩川
短夜のしるしや牛も眠りけり
むの雲の其先晴れて郭公
月二つ眺めて涼し橋の上
輪迸ひに日傘さしけり馬の上
松虫や薄羽織着て栞の陰
夏菊や親に見せての植所
夏の雨傘の先から降らしけり
ひでる日に暑さも知らず井蛙
迹む世に遅歩なして田植哉
孝行に寐ぬ子は明よ時鳥
いつまても留めたし蚊屋に忍ふ月
犬も舌出してまはるや夏の照り
入る月をしはに戻りぬ納涼連れ
門出れば清き流れや杜若
病び人を思へはやすし薬刈り
區巨燵なからや母の蚊屋始め
夕立を待て喜ふ山田哉
歩てなき母の宵寐や時鳥
蚤がはやみて行く人を花の主
二の辰は余所の初音そ時鳥
花のあと亦一しはの若葉哉
戸もさゝすして月にねる昼かな
鄙の園にかゝりし辰や夜の蝉
汗はとひく、厭すや道のそん
生涯無社會也午睡を笑ひけり

脱かせるも融走の蚊や夏羽織
蚤に寐ぬ子に寐ぬ親の心哉
君か代に光る青田のそよき哉
瀧にらむ不動するとし水下閻
蝿たゝき卑なくぬけてしまひけり
寐た親に風やる嫁の團扇哉
落そうに成て勝けりくらべ馬
めにあまる野邊の廣さや夏の月
大つはに降るや夏野の通り雨
白いのは涼しそふ思ふ扇かな
留守らしうすたれの影やうらわ哉
困る蚊を氣樂に寐るや蚊屋の恩
思ひきや寐さめの里を時鳥
寐た親に傍から遣ふ團扇哉
石打つた家からもらふ粽かな
夏の月話しあつけて寐にもとる
隔なきはなしや蚊帳の内と外
連し子も行儀に直る牡丹哉
限りなき御かけあふくや夏の月
蝸牛や何處そ暮ても巳か宿
形代や翌日は何國の秋の塵
捨さまる線に風吹く青田哉
追て來た盛無事なり瀧つ水
月の出や人の智慧足す火取虫
時鳥夜あかす氣てはなかりしに
あめはれやなを蝉ひとつまた二つ
一夜ても捨てはおけす蚊屋の穴
波お迎も眠丈開き卯月かな

合す手も日傘すはめて神の前
泥に夜のありせは見へす蓮の花
君か代に光る青田のそよき哉
瀧にらむ不動するとし水下閻
蝿たゝき卑なくぬけてしまひけり
寐た親に風やる嫁の團扇哉
落そうに成て勝けりくらべ馬
めにあまる野邊の廣さや夏の月
大つはに降るや夏野の通り雨
白いのは涼しそふ思ふ扇かな
留守らしうすたれの影やうらわ哉
困る蚊を氣樂に寐るや蚊屋の恩
思ひきや寐さめの里を時鳥
寐た親に傍から遣ふ團扇哉
石打つた家からもらふ粽かな
夏の月話しあつけて寐にもとる
隔なきはなしや蚊帳の内と外
連し子も行儀に直る牡丹哉
限りなき御かけあふくや夏の月
蝸牛や何處そ暮ても巳か宿
形代や翌日は何國の秋の塵
捨さまる線に風吹く青田哉
追て來た盛無事なり瀧つ水
月の出や人の智慧足す火取虫
時鳥夜あかす氣てはなかりしに
あめはれやなを蝉ひとつまた二つ
一夜ても捨てはおけす蚊屋の穴
波お迎も眠丈開き卯月かな

岸はたの小笹の中や鳴水鶏
風流な人を迷わす花生武
豊かさを一ト廻り合の田植哉
窓の near 老い凋し暑さ哉
神なりや鳴る時ばかり機をつけ
藤の花潜るや亭へ行き歸り
蚤も蚊屋釣てめて度き産家哉
灯し火の花に狂ふや夏の蝶
並へた枕はづかし蚊屋の内
一りんの牡丹にすわる月の影
涼しさや浮世はなれし竹の月
ひとりある母につかふや氷賣り
夕立の晴れて涼しき松の風
結ふ手に月の龜る、清水かな
親の跡受てかわらぬ田植かな
寂た親に媚きわけたる蚊遣哉
根は岩になる程苔し苔の花
ぐるりから草の道ひ込ひ清水哉
團々と心ゆたけき青田哉
小夜ふけて月ば臑よ時鳥
もうだちや亦百姓をよろこばす
田植歌嫁か上手に唄ひけり
蝸牛雨間に角の長短か
竹馬に乘て見に來た幟かな
田の草や下から上へ流る汗
去ら蕎や六月寒き朝はらけ

葉櫻や日に〳〵はそる松のしん
ねひる兒にまとふ蚊蚊のにくさ哉
秋しらぬ風のやとれる扇かな
風音の徳に成し岩葉かな
此處はかり夏なき里や岩清水
きりはれのつゆをのてすや蜘の糸
夏たびに呑みすてしけり施行水
うつゝにも動く團扇の添乳哉
苔衣着しは誰か碑そかんこ鳥
夕立や昨日尋た家もなし
ひと聲は川のむかふや郭公
ぐつと飲すつとする、はらひね哉
睡る間も手のはなされぬ團扇哉
馬除けて薫り飲らすや茨花
當り箭の的の響や夏木立
戸を明けて内は留守なり蟬のから
有明はりんと、もりて蜀魂
田の水に閻もなき夜やはと、きす
着ぬ噺の一人訪はぬ柴の戸た、く水鶏かな
心よきねひりすごすや蚊帳はしめ
朝がはや手水つかふもひまのなき
雲と見し木の堆し夏の山
子子や腹立よふな淫沈み
また息のある色合や初松魚
はるすきて狩る木曾山の櫻かな

余所に降る雨たゝみ込む扇子哉
呑めは我か心まてすゞ清水哉
山道に呼吸を繼くかな谷の水
菅笠て稼は笑顔を團しけり
夕立や一村づゝに晴れる空
扇く度風の壽く扇かな
田植にも付て行なり簑と笠
能い風を誘ふて出たり夏の月
寐入る子の手より離れて飛螢
帷子やふつくりしたる嫁の乳
冠せたき男もあるよ筑摩鍋
風先や母に居替る納涼み臺
夕立雲よそはつれてせみの聲
すつきりと一間のひろし夏くれ
夢になる時あをき止む團扇かな
さし汐の草に來て立つ蚊かな
碑の文をはう〳〵よますはたる哉
提て來て橋に用なきうちは哉
道連の話もつきる日永哉
橋涼し見上る空と水と月
一ト光り見せて遠退く螢かな
五月雨や殿の古墓の朽る音
目のさめし親へ勸める氷かな
夕立の晴れて扇く迎鯵
床に月流れて涼し夜更哉
張た乳のはと〳〵落る田植哉

像の花は眠にも覺へぬ牡丹哉
我居間を廣く思ふや五月晴
動かせは蚤も蚊の鳴く森かな
涼しさに筆の勞れを忘れけり
曉きや蚤も白ひ池の蝸
事足りて足る事知らぬ暑かな
ぬれてたつ花の平や朝の蝶
てかれ〳〵る蝶もいとふや芥子の花
われか身はいとはす親へ團扇哉
初蚊屋に旅めく一夜二夜かな
とんはうや人を通してもとの石
おのつから家の富知る午景かな
寒いはと吹立逃の清さ哉
開てさい涼し小船の棹の音
取次に出るや豊庭のたらぬ顔
植木屋の籠にもあるや木下闇
琉球をはねて備後へ渡る蚤
花の雫給皿に受けて杜若
空天や陰にもよらて裸ひし
暑き日や川の瀬音は別な物
門先へ出れは遠あり夏の月
行燈を青田へ向けて咄しけり
朝良や隣りの窓も遠慮のふ
一字素直には坐る人なし涼み臺
す、しさやぬれ傘絞る川岸の月
船の灯も見へて涼しき座敷哉

夕がはやわうふかけさす三日の月
花生る影の移るや青簾
手に受て取るや牡丹に下り蜘
我影を子に歩まする暑さかな
川風や螢こはる、竹の閻
又ひとつ巢み殖す接木哉
人を待つ内に蚊の乘る夜船かな
門川や涼みなからの下り船
涼しやと稼鼻へ出て腹つゝみ
夏痩の結ひあまるや帶の丈ケ
きり〳〵す取れて嬉したまのこし
逗入たり出たりする兒や初蚊帳
月に肌もるして涼ひ女かな
子福者の門は目出度し初蚊帳
月の出を待て揚たり冷し瓜
ちら〳〵と蚊に飛ふ魚の暑さかな
圃扇持つ手は寢る人に後れけり
顔に來る雨かそへけりす、み蟲
都から風の便りの團扇かな
鳴き起す鳥の憎さや夏の今朝
物にも障る風なし午時の蟬
かた道は荷も閻となる蚤賣り
うける手のうちを流る、清水哉
笠なからわらすなからの霰庭哉
はと、きす喘や夜船の付た處
おもふ事ある宵にけしの苦かな

見失ふ袖からたちにけり
舌たれて見ている犬や心太
暖迄は風とも知らぬ芥子の花
卯の花や暗の乘りの遣すから
涼しさや閑し河邊を飛戻り
青柳や枯る、と云ふは空の皮
時鳥寢間から筆を取らせけり
若竹のそよ〳〵姿や快よふ
人痩る頃肥出すや夏の山
寢入ても蟬鳴くやふに思ひけり
親へ孝盡して涼し腹の中
ねむたさをしばし忘れて納涼哉
宇治に住ひ親の無事聞く新茶哉
初ときく名に性たされる松魚哉
恭に負て又別に增す暑かな
朝顔をはめ〳〵來るや水貴ひ
寢おしみの癖となりけり夕涼み
丹誠の今やしられて初茄子
しんせつの團扇にさめる黃庭哉
人柄の見へ透く鍋の祭り哉
花嫁の心もきこひ綜かな
一類り風も崩さぬ雲の峯
眠る間も醉をいたわる團扇かな
湖風のもたれて涼し蚊帳の月
蚊遣り火や香のよき方を親の前
庭下駄の音も更けり夏の月

門先や汗流し合ふ月夜さし
咄しまて消へして行ぬ火取虫
よい自子設けて親の安居哉
井戸囲ひは清水敷へる山家哉
短夜や白むともなく明けにけり
水色に夜は明なから暑さかな
濡れ色に夜は明にけり夏の月
遠へ山今朝見出しけり青嵐
草汁て團扇黴かくや夕納涼
夏の月ひそかに竹の雫かな
短夜やさなから寝るも人の前
直寝する鯉魚の姿やはとゝきす
扇日傘や母の日傘の下を経き
へつらはぬ親み振りや竹婦人
沼池にそたて、床のかきつはた
鶏遣や水も寝頃の一盛り
親切は水より高し苔清水
鳥杉から暖に清水の雫哉
さめな子を案事る親や印地打
火をともて母に進ひや夏の風呂
眠た目を眠りて座頭の蚤寐哉
富貴にもはこる色なし白牡丹
はたらきは後にしらる、田草とり
雨の日も暗しや翁老なから
母の日のけふそ切るへき牡丹哉
耐暑の小さき笠や雲の峯

此夏に獨り涼し、家鴨哉
親竹の露は子に捋せけり
初蛍は筆に殘して時鳥
炎天や火を吹きそうな鬼瓦
短夜や白むともなく明けにけり
水色に夜は明なから暑さかな
濡れ色に夜は明にけり夏の月
遠へ山今朝見出しけり青嵐
草汁て團扇黴かくや夕納涼
夏の月ひそかに竹の雫かな
短夜やさなから寝るも人の前
直寝する鯉魚の姿やはとゝきす
扇日傘や母の日傘の下を経き
へつらはぬ親み振りや竹婦人
沼池にそたて、床のかきつはた
鶏遣や水も寝頃の一盛り
親切は水より高し苔清水
鳥杉から暖に清水の雫哉
さめな子を案事る親や印地打
火をともて母に進ひや夏の風呂
眠た目を眠りて座頭の蚤寐哉
富貴にもはこる色なし白牡丹
はたらきは後にしらる、田草とり
雨の日も暗しや翁老なから
母の日のけふそ切るへき牡丹哉
耐暑の小さき笠や雲の峯

木の樵た跡も見へぬや若葉山
岩ばなや根を上にして咲く五月
子を叱り〳〵寐させて蚊遣哉
月もはや親しくなりて今年竹
風と蚊に裏と表の團扇かな
驚の初音にまさる蟬の聲
見る人も氣を張弓や大矢數
吹風は神の恵みか夕涼み
休ませた牛も寝てるや昼寝起
門札に此處ぞと墨ひ日傘哉
あいさつの中から進ふ扇かな
ふと氣付くゆふべ忘れし團扇哉
雨晴れや簀の經しへ風薫る
笛の音に心澄みけり夕納涼
夕立や宿らぬ中に他處の雨
竹の子や親にまさるも親の恩
落されて裏さ身振りや枝蛙
妻にも劣出されけり竹婦人
寐不足の外は苦のなき四月哉
月花も宿る清水の果報かな
親の敎へ實ならぬは無し茄子の花
また星のあるに出て行蓮見哉
日盛りの暑さにしめる釣瓶かな
夏の夜の御經の聲は蛙哉
玉だれに里の名薫る新茶哉
白かねのしら〳〵こはすや朝露

青梅を好ひ乳房の黒みかな
まこもがる人はかへるや水鶏啼〳〵
蚊遣火の馳走に会る泪かな
鏡持の片手て結ふ清水かな
心ある人は悦ふ並木かな
不足なき顔や若葉の雨細き
底すても見へて丹澄む清水哉
苦しみのうちも樂しき暑さかな
二ツ來てとちらも取れぬ蚤哉
雲にした宇枕寐し郭公
蚊屋かして船に寐に行く獨り哉
我家を尻て持行く蝸牛
郭公我も詫しき夜明かな
最ち早く灯の利く床の牡丹哉
五月雨や筏の上の笑顔
夏の夜の星と見まかふ蚤哉
卯の花や雪なら枝も折れんもの
我ものをめづらしがるや土用干
永口の調子も揃ふ枝の蛙
富士さへも隠すなみたや虎か雨
淋しかる親を慰む新茶かな
兒故にか夢にも動く團扇哉
追ふ手からく、りて來たり火取虫
暗の路や忘れて迷ふ蚤狩
湯の湧んだ物から先へ納涼哉
大それた直もあるものよ初鰹

卯の花の動きてやみをはなれけり
白牡丹咲や見力剪が力
葉櫻や櫟の夢借る吉野山
笛の音に明行そらや夏祭り
五月雨の雲から出たる白帆哉
月一ッ庭は儘にはと、きす
茂りかな流石に水の殖る音
おい掃ふ力らつきたり賤の蚊や
冬の恩忘る、夏の布團哉
若竹や雪の重荷は知らぬふり
十日程蚊屋を釣るとや島の家
流れ儘流れて涼し夏の月
夜終ら怨みられけり破れ蚊屋
打水のぬれし方より風の來る
男手にゑみ出る餅や笹ちまき
露路は身の清めなり藥の日
破れたる窓はりかへる若葉哉
蚤に寐ぬ夜から煙草へ馴にけり
ひよつとこの胸毛似合ふや夏神樂
驚の脊にかする夕日や五月晴
拾られて拾ふ命や火取虫
暗かぬ夜は光引きけり時鳥
涼しさや汐先見つ、濱の家
暮ぬ日を惜まぬ旅や蝉の聲
雨霽れや無分別なる夏の月
月計り得意がはなり時鳥

千丈の松をか、へて蟬の聲
今迄はどこへ居て來た時鳥
風一荷擔ふて暑し團扇賣
日に濡れし身を月に干す涼み哉
富士川に水増す照りや雲の峯
思ふ事湯屋の戻りや不如歸
古めきた咄も変る新茶哉
櫓も褪も儘なり月の涼み船
花筒の小さく見ゆる牡丹かな
見た計りても呑めそふな松魚哉
命賭けばなし機づひや沖膾
風さへもたかにには青田哉
神の井の水も冷たし木下闇
山島の踏試しけり苔清水
客と皆座敷を譽めて青田哉
投り出す鮭の頭や五月晴
短夜も尚短きや俳句友
見せたさを半分隠す日傘哉
うまそうな茄子に移る笑顔かな
一ト聲はまた夜の内か時鳥
幾萬の蚊に軍配のうちわ哉
一つづゝ月に異向ふ白牡丹
疑ひの雪や氷室の通さくら